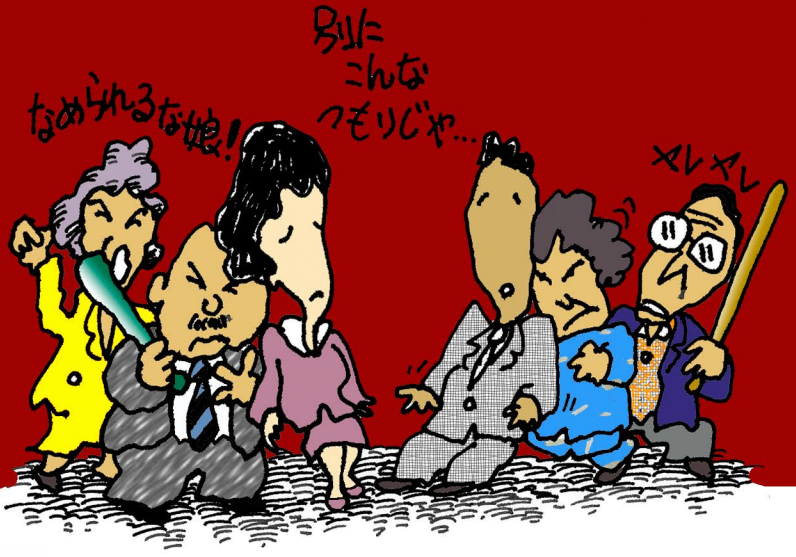
連載専門誌

対人援助学マガジン



Vol. 8 No. 4

第32号

March 2018

対人援助学会

NO. ３２　MOKUJI

目次		002-003
ハチドリの器	見野　大介	004
執筆者@短信	執筆者全員	005-015
知的障害者の労働現場	千葉　晃央	016-021
臨床社会学の方法（19）	中村　正	022-031
ケアマネのシステム視考	木村　晃子	032-033
街場の就活論	団　遊	034-037
カウンセリングのお作法（13）	中島　弘美	038-043
コミュニティ心理学を考える	藤　信子	044-046
蟷螂の斧 「家族理解入門」（2）	団　士郎	047-057
社会的養護の新展開　1	浦田　雅夫	058-059
不登校経験を持つ若者たちのもう一つのキャリアパス	北村　真也	060-062
幼稚園の現場から（31）	鶴谷　主一	063-066
福祉系対人援助職養成の現場から	西川　友理	067-072
境界あれこれ	河岸　由里子	073-075
生殖医療と家族援助	荒木　晃子	076-079
高齢者とのドラマセラピー	尾上　明代	080-084
きもちは言葉をさがしている（30）	水野　スウ	085-092
ノーサイド（27）	中村　周平	093-094
盆踊り漫遊（1）　新連載	竹中　尚文	095-098
それでも遍照金剛いうことにします	三野　宏治	099-105
男は痛い！（25）	國友　万裕	106-113
ひとこまマンガ	三嶋　あゆみ	114
援助職のリカバリー（24）	袴田　洋子	115-117
周旋家日記　23	乾　明紀	118-119
トランスジェンダーをいきる（23）	牛若　孝治	120-122
役場の対人援助論（22）	岡崎　正明	123-127
新版K式発達検査をめぐって	大谷　多加志	128-130
講演会＆ライブな日々	古川　秀明	131-142
養育里親～もうひとつの家族～	坂口　伊都	143-147
周辺からの記憶　―東日本大震災家族応援プロジェクトー（17）	村本　邦子	148-160
病児保育奮闘記（16）	大石　仁美	161-163
対人支援点描（12）	小林　茂	164-166
「あ！萌え」の構造（11）	齋藤　清二	167-173

海の向こうに出てみれば	石田　佳子	174-177
清武システムズ	しすてむ きよたけ	178-183
精神科医の思うこと（7）	松村　奈奈子	184-187
おくのほそみち（7）	奥野　景子	188-193
東成区の昭和　思い出ほろほろメモ	柳　たかを	194-201
お坊さんとケアマネさん（書簡型連載）	木村　vs　竹中	202-205
介護福祉を巡る断章　５	臼井　正樹	206-211
町家合宿　in　京都	山下　桂永子	212-216
そうだ、猫に聞いてみよう	小池　英梨子	217-224
先人の知恵	河岸　由里子	225-229
私の出会った人々　３	関谷　啓子	230-232
うたとかたりの対人援助学　４	鵜野　祐介	233-236
あぁ結婚　５	黒田　長宏	237-241
PBLの風と土　４	山口　洋典	242-247
接骨院に心理学を入れてみた　3-(2)	寺田　弘志	248-251
現代社会を『関係性』という観点から考える	三浦　恵子	252-259
対人援助通訳の実践から	飯田　奈美子	260-265
第二回　マイクロアグレッションと私たち	朴　希沙	266-269
新連載　保育と社会福祉を漫画で学ぶ①	迫　共	270-272
新連載　「余地」―相談業務を楽しむ方法－（1）	杉江　太朗	273-275
編集後記	編集長＆編集員	276-277

ハチドリの器 15

見野 大介

Mino Daisuke









左上：蒼天釉茶盌
右上：ほんのり四角の皿
左下：花器 -呟き-
右下：桃花鳥釉匂玉鉢

第32号 執筆者@短信

杉江　太朗　新連載

皆様初めまして。児童相談所に勤務しながら立命館大学大学院を修了し、今もなお児童相談所にいる杉江太朗と申します。子どもの福祉を守るという指命、メディアからの圧力、様々な責任の擦り付けに耐えつつ、『余地』をテーマに楽しく生きています。対人援助学マガジンに執筆するという『余地』を大切に長く続けたいと思います。よろしくお願いします。

迫　共　新連載

はじめまして、迫　共（さこ　ともや）と申します。大阪の保育園の園長をへて、静岡の大学で保育者養成の教員をしています。対人援助学マガジンの執筆陣には何人か知っている方のお名前があり、自分も機会があればと思っていました。このたび書き手として参加ができてとてもうれしく思っています。今後ともどうぞよろしくお願いします。

これまで保育と社会福祉の関連科目を教えてきました。その中での教材研究として、漫画を使った授業の紹介をさせていただきたいと考えています。

ただいま勤務校では2年生が保育実習に行っており、実習巡回にまわっています。静岡は車社会なので、けっこうな距離を車で行き来します。浜松といえばウナギ。養殖で有名な浜中湖の対岸、湖西市にも行きました。東海道の宿場、白須賀宿から潮見坂という名所があり、新居の関所も通りがかったので見物しました。歴史的なものが多く残っており、観光しながらの実習指導になりました。（実習訪問もちゃんとしています。実習園から「どんな指導をしてるんだ！」と怒られることもしばしば…。）

朴　希沙（Kisa Paku）第二回

私は、とくにかく人と一緒に活動することが好きです。なかでも好きなことのひとつは、読書会です。一人ではなかなか読めない難しい本も、人と一緒だと熱が上がってグングン読めます。内容についても（出来る時は）ビシバシ討論します。もともと地域で友人たちと2つ読書会をしていたのですが、最近はそこに職場の読書会まで加わって、なんと1ヶ月に４つも読書会をしています。だから、ひっきりなしに本を読んでいます。並行して本を読むと、時々混乱することもあるのですが、内容が不思議とリンクしたり新しい視点で見れたりといいところもあります。今日も今から読書会です。私の本業は、もしかしたら読書会に参加する人、なのかもしれません…。

三浦　恵子

7度目の3．11が巡ってくる。今なお多くの方々が苦しい状況に身を置いておられる。私の配偶者の本家も跡形もなく津波に飲まれてしまった。

必要なのは息の長い支援だと折々に実感する。私自身も微力ではあるがいくつかの支援に関わらせていただいている。

世界的に有名なヴァイツゼッカー大統領ドイツ終戦40周年記念演説「荒れ野の40年」の日本語訳では，ドイツ語の「erinnern」に「心に刻む」という訳語が当てられている。（『新版　荒れ野の40年　ヴァイツゼッカー大統領ドイツ終戦
40周年記念演説』リヒャルト・フォン・ヴァイツゼッカー　永井清彦　訳・解説　岩波ブックレット　52ページ）

東日本大震災以降も数々の自然災害等が続いている。渦中にある方の苦しみに思いを致し，「心に刻む」ことこそが支援の在り方を考え，風化をも防ぐ1つの手立てになると思う。（この時期に毎年発刊される岩波ブックレットのタイトルも
「3．11を心に刻んで」である。）

寺田　弘志

このところ、オリンピックや東京マラソンで明るいニュースが続きましたが、
父が逝き、あわただしい日々でした。
32号の投稿をお休みしますと申し上げたのに、締め切りを過ぎて投稿し、
団先生はじめ、編集委員の皆様にはご迷惑をおかけして、済みませんでした。

飯田奈美子

今年の冬は寒さが一段と厳しかったですね。私の住んでいるマンションには温泉がついています（ちょっとした旅館程度の大きさです）。娘も大きくなってきたし（3 歳）今年の冬からマンションの温泉に一緒に入るようになりました。娘は大きなお風呂に大興奮し、毎日温泉に行くようになりました。しかし、娘が温泉に行く一番の理由は、温泉に入っているおばさんたちとおしゃべりをすることなのです。いろんなおばさんたちが娘の相手をしてくださるので、娘は「おばさん大好き！」といって喜んでいます。娘を介して、マンションの人と交流をもてるようになりました。娘に感謝です。

山口洋典

本文にも記したとおり、一年間のデンマーク生活が終わりを迎えています。この1年、多くの人、場所、実践、理論と出会いました。滞在を機に始めさせていただいた連載は、次回5回目から新展開を迎えることになります。また多くの場面で皆さんと共に知見を深めさせていただくことができればと願っています。
（写真、「PBLのはしごモデル」のさらなる活用法を探るリサーチミーティングでの一場面）

関谷　啓子

年末に四条に出た。
最近は夜の繁華街に出かけることも滅多になくなり久しぶりであった。デパートの前の開けた場所で青年が歌っている。
寒風の中でも彼は凍えてなんかいなかった。信号が変わるまで、、、、と思って立ち止まった。
そしていくつかの歌ができた。

立ち止まり 耳傾ける人も無し 師走の四条河原町暮れる

信号の変わるまでと耳傾けるストリートシンガーの激しきギターに

正面をひたと見据えて唄い出す リズム取る足少し震えて

爪痕で擦れたギターとスニーカー 恐るるものなき眼(まなこ)動かず

木枯らしの吹きだまりと化す交差点 背を丸め聴く青年の歌

足元のギターケースは硬貨のみ 我のも混じりて今夜はいかほど

信号が変わり人波動き出す 紛れて歩く耳置いたまま

黒田　長宏

12月半ばに、スマートスピーカーの半額セールがあって、集中して5台も購入してしまった。若干だがボーナスが出て強気だったのもあるが、3千円と6千円の違いは大きい。その後セールはないようなのでタイミングが良かった。というか、その頃やたらメディアからスマートスピーカーの話題が連続して、企業が宣伝を頼んでいたのかも知れないなと思っている。(宣伝効果に乗ったのは、カップヌードル以来である。テレビをみていたら食べたくなってしまい買いにいった。)それからまだ数か月ではあるが、半額セールはしてないようだ。休日に縁側で本を読みながらスマートスピーカーにクラシック音楽をかけさせたらなんとも贅沢な気持ちがする。朝はラジコと連動のラジオを聴いて出勤する。夕食時にセレクトされたその日のニュースを聴いている。口頭で頼めば手のかからないラジオのような感じもするし、「京都タワーは何メートル？」と聞くと「131メートルです」と答えたりする。だが、「対人援助って何？」と聞くと「すみません。お役に立てそうにありません」と答えた。



鵜野祐介

今回シリアの子守唄を紹介しましたが、先日「希望のかなた」というフィンランド映画を観ました。フィンランドのヘルシンキにやって来たシリア人難民の作品です。重いテーマではありますが、彼が勤めることになったレストランで、和食を出せば儲かるだろうとネタの上にワサビをたっぷり載せた寿司を出すところなど、笑える場面もふんだんにあり、おススメです。

臼井　正樹

今回は、二～三年の間、考え続けてきた介護福祉に関することの中心的な部分を書かせていただいた。まだ分かりにくい部分があるかもしれないが、私なりに考えた介護福祉の意義である。これが正しいといえるかどうかは、まだわからないが、少なくともこうした論考の積み上げが必要な分野であり、それが求められている時期でもある。皆さんからご意見をいただき、さらにブラッシュアップできれば幸いである。

山下桂永子

年明け、たぶん 10 数年ぶりにインフルエンザにかかりました。A でした。体調で二日以上仕事を休むのが初めてぐらい、丈夫な人間だったので自分でも驚きましたが、それ以上に驚いたのは、1 週間ひきこもってエアコンをかけつづけたせいか、一人暮らしで電気代が 1 カ月で 1 万円を超えたことでした。じっとしてても生きるってお金がかかるんだなあと思いました。

今回の原稿は、後半が町家合宿とは少し話がそれました。最初は書くつもりはなかったのですが、でも本当はずっと書きたかったことでした。と言ってもやはり思いつくままに書いているので、伝わるかどうかはわかりません。読んでいただければ幸いです。

尾上明代

ごく最近、あるクライエントさんが急に亡くなった。継続クローズドグループの参加者だった。結果的に最後となったセッションでは、その方の現在の人生をドラマ化し、何をどう乗り越えたら良いかを探索した。良い気づきと決心が生まれ、他のメンバーたちにも深い印象を与えた。ドラマの終わりに「神様」への感謝と、他者に捕われない「自分自身の人生」をしっかり歩いて行くことを宣言して下さった。未来の希望もお聞きした。信じられない。ついこの前のことだ・・・。

悲しい知らせを聞いたグループメンバーたちは、泣き崩れたり呆然自失になったりと、当然の反応とは言え、大きな衝撃が広がった。鬱や身体的症状に発展する可能性もあるため、すぐに私はドラマでお別れ会をすることを決めた。当然、目的は二つ、その方の魂を慰めることと、スタッフやメンバーのショックとグリーフのケアである。私は、(親しい人の死と独りで向き合うのではなく)仲間たちがいるこの場で、ショックと悲しみをともに分かち合えて、ともに乗り越えられることは幸運だと思い、それを皆に伝えた。

ちょうど前回のドラマセラピーのときに撮ってあったその方の写真がとても良かったので、それを引き延ばしてテーブルに置き、その前で、その方との思い出のシーンを数々演じて捧げた。このグループは、すでに20回くらいのセッションを重ねているので、演技はリラックスしてできるようになっている。ショックや悲しみに取り込まれているように見えた多くのメンバーも、演技をすることで、少しだけ距離がとれ、表現することに集中できていた。ユーモラスな場面もいくつか出て、思わず笑いも何度か出た。その後、一人ずつお花を手向け、その方に伝えたいことを声に出して写真に話しかけた。その後もいくつかのワークを経て、悲しみは変わらずとも、皆は静かな落ち着きを取り戻し、その死に対してポジティブな意味づけができたように思った。

世間のお葬式やお別れの会で、故人との思い出のシーンを皆で演じて捧げる、というのはあまり聞いたことがない。きっと、そのクライエントさんも喜んで下さっていると思っている。また、突然逝かれて残されてしまった私たちにとっても意義深かった。私自身もこのように送られたいと思った。もちろん、一人一人が別れの感情をどう受けとめていくかが大事なので、送る方法はいろいろあって良い。

この出来事は起きたばかりなので、もう少し時間をかけて、グリーフのプロセスを自他ともに考察する必要があると思う。

小池英梨子

先月の2月22日は「ねこの日」と言われ、全国で色んなイベントが行われていた。動物愛護団体企画のチャリティーイベントもあれば、商業企画もある。「ねこの日」が猫を搾取する日ではなく、猫に感謝する日として浸透したらいいなぁと思った。我が家では、「猫感謝デー」としてお造り用マグロを購入。生刻み、炙り刻み、さらにかつお節とチュールをトッピングして家の猫さまたちに感謝を示しました(￣▽￣)

三野宏治

人に会うたび、少なくない頻度で「体調は大丈夫ですか」とか「具合悪いんですか」等といわれる。自覚は特にない。講義が終わった後など学生にもいわれる。90 分も話していれば、そりゃ疲れる。しかし、施設訪問や現場の PSW の人たちには講義の無い日や講義終了後ずいぶん経ってから会うことが多い。彼らの「具合の悪そうな人」ランキングでは確固他たる地位を築いているようだ。

自覚はしていないが本当は「具合が悪い」のかもしれない。中学 1 年生の中間テストの準備ははかどった。33-4 年経ったいまでも覚えている。これ以降、勉強や仕事がはかどった覚えはない。中学 1 年生の初夏のあの日を標準とすれば、現在など瀕死の状況に等しい。

そういえば思い当たることがある。あとになって「具合が悪かった」と思うときの多くが、トイレを我慢してることが多い。それも無意識に我慢しているようで、用を足すと驚くほど体調がよくなる。そのとき「ああ、具合が悪かったようだ」と気づく。弁当を持参したにもかかわらず、食べずに持ち帰ったこともある。忙しくてではない。食べることを忘れていたのだ。午後になって空腹のせいで具合がわるかった。(あとになって、空腹のせいだと気付いた)水分を取ることも忘れることもある。しかも、糖尿病の治療で利尿効果のあるくすりを飲んでいるため、水分は身体の都合以上に放出される。

私を見て「体調は大丈夫か」と感じた皆さん。優しい言葉をありがとう。しかし、その時、私に必要なのものは優しい言葉ではなく、トイレや食物や飲み物かもしれません。その様に関知していただければ、望外の幸せです。

松村奈奈子

今年の寒波は強かったー。

寒波を楽しまなきゃ！と夫婦で蒜山高原に出かけて雪山の美しさに感動。ついでに、キッズパークで子ども用雪ソリを楽しみました。生まれて初めての雪ソリ、大人でもとっても楽しかったです。来年はスノーシューハイキングしたいなー。

で、そんな寒波のまたある日、京都の北部で仕事をしていると雪が深々と降ってきました。車できていたので「あぁ雪おろしに時間かかっちゃうなー」と凹んでると、窓から笑い声が。おー、窓の外では、なんと若い男性職員が数人で私の車の雪かきをしてくれているではないですか。「ありがとー！！」と思わず窓から叫んじゃいました。フロントガラスにお湯までかけてくれて。いいなぁ、この感じ。おかげで早く帰宅できました。



そんなお礼を兼ねて、先週は居酒屋でその若い職員達と宴会。嘱託仕事で月に2回しか行かないので、あんまり交流が無かったのですが、初めてじっくり話せて面白かったです。

今年の寒波のおかげで、私はわくわく体験をさせてもらいました。

奥野景子

次年度からあんまマッサージ指圧師の専門学校に通うことにした。それに伴い今の職場も離れることになる。大学院に入学した時は、一か月だけ理学療法士という仕事から離れたが、今回はもう少し長い間、理学療法士から離れることになりそうだ。そこにどんな変化が生まれるのかは、今の私にはわからない。でも、自分で何かやってみたいという思いから決めた進学でもある。だから、よくわからないなりに進んでみようと思う。

柳　たかを

【初心を貫く】

平昌冬季オリンピック中に書いております。自分が最初に決意した(初心)を現実の困難にひるみ方向転換してしまうと「最初にあったモチベーション」が弱まる。すると決していい結果にならないと思っている。

「しぶとく諦めない」、繰り返しになりますが、困難にひるんで別案にシフトしようとしても、別のプランでも行き詰まりやすい・・

結果を欲しがるとあせりが出てくる。

そこで少々完成形が変わるのは承知で、とにかく初心貫徹だけを念頭にゴールすること。わからなくなったら時間をおき、でも初心のモチベーションは維持し続ける。

初心も時間とともにだんだん手垢がついて飽きもくるのですが粛々と作業し続ける。

そうやって誕生したもの、、、振り返ってディテールを思い起こせば、どんな結果・成果であっても本人は納得できる気がする。

メダルを取る事がかなわなくても、そこまで努力した時間は神様がくださったもの、作品制作や人生にも言えるように思います。

(追伸)

本誌掲載の「東成区の昭和」ストーリー四コマ連載を中断し、5 回短期連載「ホイラン」が前号で終わりました。

そこでまた「東成区の昭和」を再開致します。未完ですが自分史を脚色し HP で書き継いだものです。

齋藤　清二

総合心理学部も完成まであと2年となり、私個人にとっても学部の専門ゼミを担当するという全く新しい経験をさせてもらえることになり、これまでの経験と乏しい知恵を総動員することで、若い11名の学生さん達の人生のターニングポイントを一緒に通り抜けることの手助けができればと思っている。常に若い諸君と一緒に何かをしている環境は、私にとって新しいエネルギーをもらっている恵まれた状況であると実感している。

この 3 月に、北大路書房から『総合臨床心理学原論ーサイエンスとアートの融合のためにー』という書籍を発行する。この本は、2017 年度に立命館大学総合心理学部の約 240 名に対して行った「心理学概論」の講義内容を教科書としてまとめたものである。私

が大学で教えることのできる年数ももはや限られた回数になりつつあるが、5 年後、10 年後を見据えた、心理専門職教育のあるべき姿に一石を投じることができれば幸せと思っている。

石田佳子

最近、中国語(Mandarin)を学び始めました。「英語が通じる」と言われるマレーシアですが、それは都会やホテルなど一部の地域に限られたことで、田舎やローカルの市場などではマレー語か中国語(地域によって異なる)の必要を痛感するからです。マレー語の方はすでに夫が習得しつつあるため「中国語は私が！」と一念発起した訳ですが、始めてみるとその難しさに悶絶し、初級のテキストと格闘しています。

私もその一人ですが、日本人には外国語の習得に苦手意識を持つ人が少なくないと思います。一方、マレーシア人(特に少数派の中華系やインド系)は、子どもの頃から多言語に触れて育つこともあり、(英語かマレー語を含む)2〜3 ヶ国語を話せる人が多く、(広東語、福建語など中国語の方言を含めると)5〜6 種類の言語が話せる人も珍しくありません。また、周辺諸国からマレーシアに稼ぎに来ている人たちは、生きるために必死で言葉を身につけますから、その習得の速さに驚かされます。英語だけでも敬遠しがちな日本人には「みんな語学の天才か？」と思えるほどなのです。

ところが、彼らと LINE などで文章を交換すると、自在に話し聴き取れるように見える人でも、滅茶苦茶な英語を書いて来ることがあり、読み書く力は意外と弱いことに気づかされます。しかし、彼らは「6〜7 割できれば OK らー！」と明るく受け止める人たちですから、失敗を恐れず堂々と喋るし、喋れば(会話は)上手くなる、という好循環に恵まれるのです。これは「9〜10 割できなければ『できる』と思えない」ため、ルールに囚われて喋ることに尻込みし、苦手意識を持ち易い日本人とは、対照的ではないでしょうか？

例えてみれば、必要に迫られているから“ずた袋”でも何でも使う人と、「バッグを持つなら一流品でなくちゃ駄目」と信じているから何も持たずに過ごす人との違いと言うか。。。語学の習得方法に限らず、自分も含めて日本人(あるいは日本の社会)には、高い要求水準を課すことによって自らを縛ったり、追い込んだりしがちな傾向があるのではないか？と感じている昨今であります。

しすてむ♪きよたけ

小さい規模から事業をスタート。そののち、社会の流れで大きくなり、時にはフォーカスされていく現場は、少なくないだろう。

とくに、2020 年に向けて、動いていなかった場面が動き出すことは必然であろう。そして、どこかがクリアに社会の中に位置付けられていく。世間知らずの僕が言うのもなんだが、多かれ少なかれそうやって社会と人は、動いてきたのだと思うし、今もそうなのでは？と思う。全て否定して要る訳ではないが、そんな時にも動けること、僕が少しでも、何かできる手立てはないだろうか？と思う。

ただ、ほそぼそと始め、今に至る現場の中には、昔からのメンバーだから、仲良くしてるから、遅くまで頑張っている人だから、病気なのに頑張っていから…そんな評価が暗黙の了解のようにある現場もある。僕には、この評価基準が不思議に見える。

これに直面するのは、依頼を受け、入ったところから、気づくことが多い。扱いがたく、そろそろ自分ができることの見定めも要る時期にきたようだ。ただ、入った以上、僕にできることは何だろう？とも思う。

変わらないことの良さもあるが、変わることで変わらないこと、もしくは、変えたくないことの意味も見えることもあると思う。

これまで記載したことは、二極化されているようだが、両方とも興味深い。



この背景には、コミュニケーションやコミュニティは、1 人では成立しないということがある。意見を言うだけの一方発信が、僕には全く面白くないからだろう。

さてさて、今回のエピソード。いつも以上に好き勝手書いた。いや、描いた、だ。人と人は、物理的にすれ違っていることの方が多い。そこを前提に、すれ違っているのだけど、ちょっと残ったことを描いていく。

雑踏を覗いていると思ってもらえるといいかも。

小林茂

去年、臨床宗教師養成研修に参加する機会があり、在宅の終末期医療の現場を研修として観させていただきました。その時にケアワーカーとして働いていた介護職の仕事を垣間見て介護の知識も知っておいたら良いな、と思わされたことがあります。そんなこともあり、過去の実務経験を寄せ集め、実務者研修の学びとスクーリングに通い、1 月末に介護福祉士の試験を受けてきました。結果は、3月末になるようですが、合格していればありがたいです。

しかし、この試験。試験開催場所が、札幌会場ではなく、釧路会場であったのは災難でした。私が住む日高圏域であれば釧路方面に行く電車も路線バスも高速道路もないのです。一度、千歳市か札幌市まで出て、そこから釧路に向かうというルートになります。札幌市であれば1泊2日の日程が、2泊3日で試験を受けに行くことになります。試験会場の割り振りは東京の本部で地図から直線距離で判断し、割り振ったのではないかと思われます。北海道の方に聞けばわかることですが、地方の実情が考慮されない世界は、こんなところにもあったかと思わされる体験でした。

＜温泉紹介＞

☆くしろ湿原パーク「憩の家 かや沼」

場所:北海道川上郡標茶町茅沼

TEL:015−487−2121

営業時間:午前10:00〜午後22:00

(入浴受付21:30まで)

料金:日帰り入浴もできます。

大人450円 小学生200円

釧路湿原国立公園で唯一の天然温泉です。恵まれた泉源環境から天然温泉掛け流しです。無色透明の湯は、飲用も可。5つある湯船は、やや高めの温度設定です。長湯に浸かるのはのぼせてしまい難しいかもしれません。

泉質:ナトリウム − 塩化物温泉

湧き出し口温度:47. 2℃

湧出量:毎分450ℓ

その他:露天風呂、打たせ湯など。

水野スウ

毎年 3 月、イラク開戦の日の前後に、市民が金沢の街なかを歩いて平和の意思表示をする「ピースウォーク金沢」は、今年で 18 年目を迎えます。私も実行委員の一人で、1 月 2 月の北陸の大雪にもめげず何度も集まっては話し合いを重ねている真っ最中。



3 月 21 日のウォークの前に、「全国コッカイオンドク！コンテスト」というこれまでにないイベントパフォーマンスを、金沢の商業施設の一角で開催することになりました。「コッカイオンドク！」というのは国会のやりとりをそのまま音読するアクションのこと。ピースウォークメンバーの書き起こしをきっかけに全国へ広がり、市民が国会を身近に感じられるユニークな活動として、日隅一雄情報流通促進賞の特別賞を受賞しました。それもあってか、今年のピースウォークの取り組みは例年以上にマスコミの注目を集めています。

ゲスト審査員には、「報道特集」キャスターの金平茂紀さん、県内審査員として弁護士さん、舞台プロデューサーでもある茶房店主さん、そしてハンナ・アーレントの研究者で金沢大学教授のお三方。

コンテスト、と銘打ってはあるけれど順位を競うことが目的ではありません。政治家のモノマネの比べっこでも、茶化したり、批判するためのオンドクでもありません。国会で実際に交わされている言葉と自分がどうむきあうのか、その言葉に魂はあるか、何を隠そうとしているか、何を明らかにしようとしているか、そもそも何のための国会か。オンドクする側も見る側も、このパフォーマンスを通してこれまで違うアプローチで国会を擬似体験してもらうという、市民アクションの試みです。

デモ、抗議、批判、集会、といったものから共感は生まれないことを、私自身痛いほど感じています。その意味でも、このコッカイオンドクというフラットなパフォーマンスが、市民活動のあらたな可能性を広げてくれるかもしれないことをひそかに期待しています。

今年のピースウォークのテーマは「アンテナたてよう、わたしの明日のことだもの」です。私自身、自分の中に独りよがりでないアンテナを立てて、今の社会をキャッチしたい、知らず知らずまわりに流されていないか、どんな伝え方でならともに生きる仲間をふやせるのか、それを更新できる私でありたいと思っているので、今年のピースウォークのテーマは、私のテーマでもあるのです。

というわけで、興味おありの方はぜひ春の金沢へ！

ピースウォーク金沢 2018 は、3月 21 日（水・祝）10:15~12:30 全国コッカイオンドク！コンテスト＠金沢香林坊アトリオのアトリオステージ　13:00 いしかわ四高記念公園集合 13:40 ピースウォーク　スタート （詳しくは「ピースウォーク金沢 2018」を検索してみてくださいね）

中島弘美

大阪梅田にあるCONカウンセリングオフィス中島です。家族支援のカウンセリングをする一方で、カウンセリング、社会福祉援助技術、心理学等の授業を担当しています。

2018 年度は、14 年ぶりに人間コミュニケーション論の講義を受け持つことになり、授業の準備をしています。できるだけ体験をして身につけてもらいたいと考えているため、ひとコマ 90 分授業のなかに、個人ワークやグループワークを取り入れ、毎回学んだ内容をシートに記入し提出をします。

最近よく考えていることは、どうしたら、学生さんたちが主体的に学ぶことができるかの工夫です。授業内容の素材そのものだけでなく、どのように伝えるのがよいのかの試行錯誤はちょっと楽しくもあります。それはカウンセリングにおいての対人支援とよく似ているからです。主人公である学生さんやクライエントさんが、どのような状況のなかで、やる気や行動を起こすことができるのか、気付きを促進したり、モチベーションをアップしたりするには、何があればよいのか、思いめぐらします。

もうすぐ春。学生さんとの新しい出会いが待っています。

藤信子

先週末に東京に行く用件があったので、時間を作り東京国立近代美術館に，熊谷守一の没後40周年展を見に行った。美術展はとても面白かったが、今回は別の話。この美術館にいくためには、地下鉄東西線の竹橋駅でおりるのだけれど、多分この駅で降りるのは初めてだった。見終えて半蔵門駅に近いこれまた初めてのホテルに向かうのに、東西線で九段下まで行き、そこで半蔵門線に乗り換えて半蔵門駅についた。後でホテルでもらったウォーキングマップを見ると、東京国立近代美術館から泊まったホテルまでは歩いて1キロメートル程度だったことがわかった。翌朝その日の「3．11大震災を語るグループ」の会場のある錦糸町までは、半蔵門線に乗って20分程度で行けるところだったが、錦糸町に行く途中「水天宮」「清澄白河」など，なじみの無い地名を聞いて、どんな所だろうと思ったけれど、地下鉄では外は見えない。前日に歩ける距離を地下鉄に乗ったことを思い出して、私は東京の街については，いつも行く用事のある場所―スポット－数カ所しか知らないのだと思った。京都ではバスに乗るので、通りの木々の様子などで季節を感じる。そして道を覚えたのもバスに乗ったから覚えられたというのは大きい。地下鉄は便利だけれど、地上の町の様子が見えないため、いつまでもどんな街なのかわかりにくい。この巨大な街で地下鉄が無いと移動は時間がかかるし，不便だろうと思うけれど、便利さのために、街を見て楽しむことを、奪われているようなそんな気がした。

千葉晃央

アイルトン・セナ、ミハエル・シューマッハ、アラン・プロスト、ネルソン・ピケ、ジャン・アレジ…フォーミュラ 1（F－1）を若い時によく観た。彼らはヒーローだった。日本勢がどこまで食い込めるのか？！も楽しみの一つだった。ドライバーとして、鈴木亜久里、中島悟、そしてホンダ、トヨタも参戦し、盛り上げた。速さを競うF－1 の一方、ル・マン 24 時間耐久レースをはじめとする耐久レースもよく観ていた。カラーリング、車体のかっこよさからカルソニック・ニッサンを応援したりした。ザウバー・メルセデスのメカ感の強いデザインと爆音も忘れられない。これらモータースポ

一ツは、バブルの崩壊、環境意識の高まりのなかで急速にメインストリームから外れていったように感じるのは個人の感想かもしれない。その存在意義を問われたのは事実であろう。それでも残った存在意義の一つは、極限の状況下でも、安全に走行する「機械」を作るという技術革新を生みだすこと。その成果として、市販車両に技術が般化される。それがモータースポーツが社会に寄与している一つの側面である。極限状態でも安全なものは、一般の走行では走行における余裕を担保するものである。

私の現場は現在忙しい。作業処理量を念頭に置きながら、様々なところで努力をしている。もちろん働く人に過剰な負担をかけず、残業にならずという制限の中で、である。車のレースにも、エンジンの排気量、ピットインの回数などの制限がある。同様に労働現場にも制限がある。その中で、職員の動きの見直し、休憩時間の確保の仕方、ロスタイムの軽減等で試みる。これらのベースは安全操業である。それが大前提。踏まえての挑戦である。作業をしていると、職場が生き物や細胞のように感じることがある。不測の事態が起こると隣のチームの一部が自動的にフォローに回る、一人の職員が利用者さんの様子を確認に行けば、その持ち場には他の職員が入る。作業に余裕があるときは、そこまで極めなくても回る。しかし、それが当たり前になるとこれら（安全下での）極限を求めた技術は失われてしまう。しかし、何度も言うが大前提は安全である。その上での無駄のない動きである。

鈴木亜久里は「電気系統…」とよくリタイアのコメントを話していた。マシンであればメカニックが原因を突き止めて、原因を排除して、ピットからコースに戻る。職場はメカニックが治すのではない。自分自身が能動的によりよく機能することを試みるのである。その時には、犯人捜しの原因追及型はある程度にとどめ、そこから先は円環的因果律に基づくことが役に立つ。解決志向で明日からどうするかを話す。そこでは状況理解の正しさよりも、改善を志向するモチベーション、意欲の高まりが何よりも求められる。そこはモータースポーツとは絶対的に異なることだ。明日から、またコースに復帰。トラブルによるペースカーも入らず、ベストを尽くすのみである。

中村正

ネパールに出かける。薬物依存症のリハビリの取り組みをすすめるダルクのみなさんについていく。ダルクはグループミーティングを主に多様な回復プログラムを組んでいる。なかでも三重ダルクがアジア諸国にダルクを輸出している。アノニマスグループは欧米的なやり方なのでアジアではまた独自な展開をしたいと考えてのことである。

最近では長編映画『アノニマス・ピープル（無名の人々）ー回復者の顔と声ー』（アメリカで 2000 年頃から始まった新しい回復擁護運動：New Recovery Advocacy Movement を紹介したドキュメンタリー）も作成され、日本でもパレードをするなど、「匿名の人びと」ではなく「無名の人々」として名乗りで、回復にむけたカミングアウトとアクトアウト（行動化）をしている。そのダルクの人々が回復プログラムの支援だけではなく資金援助を受けて就労支援のためのカフェレストランをカトマンズにつくり、回復を自前でできるようにする支援を開始して3年目となる。



制作：依存症からの回復研究会
発行：（社）セレニティ・プログラム
〒236-0017 神奈川県横浜市金沢区西柴４－９－２２
電話／ファックス：　０４５－３４９－３００３
Ｅメール：　serenityprogram@japan.email.ne.jp /
info@kaifukuken.org
注：新しい回復擁護運動（New Recovery Advocacy Movement）は回復のプログラムではなく、様々な回復のプログラムを提供しているグループや施設などにつながりやすくするための、言い換えれば回復しやすい社会を作るための運動です。この運動にアノニマスグループのメンバーが参加するときは、アノニマスの伝統に基づいて自分が属するグループは明かさず、回復した一市民として参加します。
日本ではリカバリーパレード『回復の祭典』が回復擁護運動を繰り広げています。
http://recoveryparade-japan.com/

日本の薬物依存症者たちがアジア型の回復のための取り組みをする国際支援とはなんとも気持ちがいい。その人たちについていくこととした。6 泊できるので、休みをつくってヒマラヤ遊覧飛行もしてはどうかとすすめられた。

牛若孝治

「クレーム」をプラス思考で受け止める

昨年 11 月、マッサージ師として再就職した私に、早くもある患者からクレームがきた。「マッサージの技術がなってない、真心がこもっていない、私の言うことに、、いちいち反論する」等々、それはそれは辛らつな内容だった。技術面はさておき、実際私は彼の言ったことにそんなに反論していなかったのだが、彼にしてみれば、担当したばかりの私のほとんどすべての言動が気に入らなかったのだろう。

私は当初、彼のこのようなクレームに大ショックを受けたものの、こんな風に思った。（確かに開腹手術を受けて大分経つとは言え、腹筋に力が入ってないからマッサージの技術がおぼつかなかったのか。確かに私の言動は、どこか尊大で、そのことが彼に「真心がこもってない」と思わせてしまったのか。いずれにせよ、「ただのクレーム」として片付けるべきではない。この「クレーム」を期に、マッサージ師として新たに身を立て直さなければ）。

その後、私は彼の前で大奮闘した。私の大奮闘振りを知ってか、彼はだんだん怒らなくなり、静かに私に話しかけてくるようになった。

大方、マッサージ師にクレームをつけたら、その後去っていく患者が多い。しかし、彼は私の下を去っていかなかった。クレームをプラス思考で受け止めることを、私は彼から教わった。私は、彼に心から感謝している。

袴田洋子

テレビでオリンピックの試合を見たりして、生活リズムが整いません。いえ、もともと整っていないんですけど。最近見た映画、「スリー・ビルボード」が最高でした。もう一度観たいと思うくらい。多分、観に行くと思います。あと、早く「ゲット・アウト」が観たいです。そうそう、認知症の親父様、2 月 19 日に老人保健施設に入所しました。要介護3。母は、「初めての一人暮らし」を気に入っているようです。昭和 20 年生まれの母は、18 歳で結婚して、22 歳で私を生んで、73 歳で、初めての一人暮らし。元気にいろんなサークルに参加しています。

団遊

春になりました。花粉症です。一昨年のこと、東北のスキー場に春スキーに行くと、そこは一面の杉林。雪が舞い、花粉が舞う、という最悪の状況で、山の植生をきちんと調べず行ったことを後悔したことを思い出します。

ウズベキスタンに行ったときも同じことがありました。旧ソ連、シルクロードの国、とい

うことで期待に胸を膨らませながら飛行機を降りたら、そこは一面の杉の植樹だらけ。瞬間、すぐにでも帰りたくなりました。国の植生をきちんと調べず行ったことを後悔したことを思い出します。

そういえば、一年でこの時期だけ、配っているティッシュを受け取ります。何の広告かは関係なく、この時期はあればあるほどありがたい、と身体が覚えています。ティッシュ配りをするお兄さんも、無駄なことは何一つ言わず「ティッシュをどうぞ」と差し出します。彼らにとっては、業務効率が上がり「早く来い来い、花粉症」でしょう。商品は、必要としている人がいるところに、あれこれウンチクを言わずにさっと差し出す。くしゃみをしながら、商売の基本を改めて見つめ直します。

大石仁美

今の若者は、高価な服は買わないらしい。バッグやアクセサリーもレンタル。その時その場を楽しめばいいので、物を持つことに意味を感じない人が増えているという。考えてみればとても合理的。

でも？？　普段着までレンタルとは。一か月分まとめてレンタルしてクリーニングしないで返却できるというのが受けているらしい。

身に着ける衣類は、自分の身を守るだけでなく、自己表現であり、コミュニケーションの道具だと思っているので、日常的にレンタルで済ますということには違和感が伴う。一生に一度だけの、晴れの日のレンタルとはわけが違う。

私には擦り切れていても、お気に入りで捨てられない服があり、大切な人との思い出が詰まった服もある。どんな時にこの服を買ったのか、誰と一緒に買ったのか、だれに作ってもらったのか、その時どんな気持ちだったのか、眺めているといろいろなことが思い出されて、胸が熱くなる。

そんなことを思う人間はもはや旧人類に分類されるのだろう。

今風の新人類は、風のように、軽く薄く透明で、人とも物とも決して深く繋がらない。短い流行の先端に片足を入れて、すぐ脱ぎ捨てる自由を楽しんでいるらしい。

業者もうまく若者を取り込んで、売れ残って処分するよりも得策なのだろう。

この、人と物との関係は、人間関係の希薄さを象徴しているように思えて仕方がない。

村本邦子

4 月から大阪茨木キャンパスがベースとなるので、3 月には、研究室と京都の家の引越しを抱えている。すご～く気が重い。しかし、人間、切羽詰まっていざとなったら案外何でもできるものだ。それを信じて、この機会に、大阪の自宅も心機一転きれいに片付けようとイメージし始めた。何しろ都心部の小さな空間に多すぎる物をため込んでいるので、一番の課題は捨てることだ。「あったらいいものはいろいろあるが、なくてはならないものはわずかしない」とは、かつてのクライエントさんの名言。残された人生になくてはならないものかどうか、身辺整理と思って動き出すとしよう。

國友万裕

僕は Facebook のハードユーザーで、毎日更新しています。日によっては何度も更新する日もあります。Facebook で繋がっている友達は、この原稿を書いている時点で 265 人なのですが、いいね！ を入れてくれる人は大体多い時でも1記事につき 10 数人。20 人超えることは1年に1、2度です。いいね！を入れる人の顔ぶれも大体は決まっています。他の人たちの記事を見ていても、マメに更新している人の顔ぶれはほとんど決まっていて、少数です。大部分の人はアカウントを持っているだけで更新していない。人の記事を見ているだけの人もいるでしょうし、全く見ていない人もいるでしょう。



しかし、Facebook でつながっておくと便利な時があります。先日、久々に専門学校で教えていた男の子にメッセージをしました。彼とはもうかれこれ 10 年ぐらい会っていません。彼は専門学校の後、大学に編入して、その頃までは学校で顔を見ていたのですが、卒業して、旅行会社に勤務し始めてから、勤務先が台湾になってしまい、いつか会いたいなあと思いつつも、お互い忙しさに流されてきました。ところが、先日の台湾の地震があったので、彼の安否が心配でしたし、久々にメッセージを入れました。するとすぐに返事が来ました。彼の住んでいる地域は大丈夫とのことで、また京都に来た時は連絡しますというメッセージでした。

もう彼はおそらく30 歳過ぎているはずです。早いなあー。それだけ長いこと会っていない人に連絡をとることができるのは Facebook のおかげです。とはいうものの、今の若い人は Facebook よりもインスタグラムやツィッターを活用していますし、ラインは使うけど、SNS はやっていない人も多くて、Facebook の次に新しい SNS がそろそろ出てくるのかなあとも考えています。

僕の Facebook の友達で、家族以外で、一番長い付き合いなのは男性学の伊藤公雄さん。伊藤さんとは 20 代の終わりの頃に知り合いました。それ以前の知り合いの人とは繋がりはありません。これを言うと冷たいみたいですが、それ以前の人とはもう一生繋がらないほうがいいかなあと思っています。特別親しい人もいなかったですし、友達リクエストも来ませんから。20 代の頃までの僕は本当の自分ではなかった。まだ引きこもりから抜け出すきっかけもつかめず、もがいていた頃です。29 歳でやっと非常勤の仕事が見つかり、自立への一歩を踏み出した時に伊藤さんと知り合いました。そこからが僕の本当の人生です。それまでのことは断捨離して、これからの出会いに期待したいと思っています。

北村真也

学びの森　http://manabinomori.co.jp

亀岡市で、もう一つの学び場「学びの森フリースクール」を運営する。またそこで得られた新しい学びの知見をもとに、「ハイスクール」、「ユーススクール」、「放課後等デイサービス」、「探究スクール」をを展開中。

古川秀明

講演会＆ライブをしながら日本中を旅できるのは本当に嬉しくて幸せです。今回は日本とトルコの友情にあらためて感動しました。日本の子ども達にもっとこのエルトゥールル号のお話を知ってもらいたいと思います。世界中がこんなつながり方をしたら素晴らしい

なぁ。

シンガーソングカウンセラー

西川友理

京都西山短期大学で保育士養成をしています。その他にもいくつかの福祉系専門職養成校に出没中。

フェイスブックには日々、たくさんのイベント情報が流れてきます。サロン、自主勉強会、〇〇をしてみようの会…。私が知らなかっただけかもしれませんが、こんなにあるのか!と驚くほど。週末だけではなく、平日の夜などにも、毎日たくさん開催されています。あまりにもたくさんありすぎて、とても全部には参加できません。

またその開催場所も、昔ながらの公民館や貸会議室だけではなく、住みびらき、コワーキングスペース、シェアオフィス等、様々な所で開催されます。公とも私とも違う、コミュニティスペースのような場所がここ 10 年くらいで増えて来たなぁと思います。

こういうイベントに参加すると、会社や学校など、ある組織に属していても、その組織人であるという認識よりも、私個人が今たまたまこの組織に属しているだけで、私自身のミッションや興味対象はこれこれです、とでもいうような、自由度の高いアイデンティティを持った人に沢山出会うなぁと思います。面白い方が多いです。

何かに所属しておけば安心、という生き方が出来ない社会になってきたからか、自分を説明する言葉や考えの手触りを確認する場所を求めているのかもしれない、と思います。インターネットや SNS など、時間的空間的制約を超えて情報拡散できるようになり、ますます個々人のミッションや興味だけでつながることが出来る環境が整いました。

私もそんな会を 2 つ主催しており、また参加者として定期的に通う場もいくつかあります。このような会に参加すればするほどますます、公と私ってそんな明確に分かれるものじゃないでしょ、と強く感じるようになってきています。その傾向は今後さらに広がっていくのだろうなと思います。(この短信、10 年後に読んだらどんな印象を持つんでしょうね…なんとなく、自分で興味があります。)

と、ここまでが、2 月 24 日に入稿した分。

で、翌日 2 月 25 日、編集長こと団士郎先生の退職記念講演を聴講。

見事に本文にダダ被りのテーマ(継続するということ)で「しまった！」と思い、慌ててこの文章を書いています(笑)。でも、講演を聴講したことで、「続けることを目標とする事」ではなく「変わりたくないとこだわる事」に対して苦さがあるのだなと自らを再確認できました。むしろ「続かんようなことは始めないほうがいい」というお言葉。成程。昔『ムーミン谷の夏祭り』で読んだ、スナフキンの「大切なのは、自分のしたい事を自分で知ってるってことだよ」と言うセリフを思い出しました。

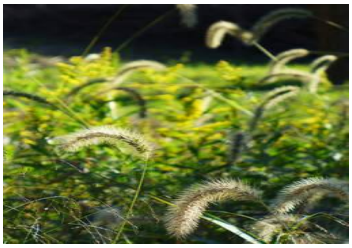
中村周平

前回の連載をお休みしてしまい申し訳ありませんでした。原因となった首の痛みは、現在も少し残っておりますが、日常生活に支障が出ることはなくなりました。

問題となったPCへの入力方法は、視線入力や音声入力を何度か試してみました。視線入力は長時間にわたる使用が目に対する大きな負担になるため、少し断念しています。音声入力に関しては、誤変換が多く、正式な文章には使えませんが、下書きには有効であることがわかりました。しかし、最終的には人的な直接入力をお願いするのが一番ありがたく、それに頼っているのが現状です。もし、良い入力方法があればどなたか教えて頂ければ幸いです。

坂口伊都

我が家に「猫」が来た。それもきょうだいで 2 匹。我が家の犬との相性が悪くて、犬の方は追いかけまわすし、猫は犬を威嚇するしで本当に一緒にやっていけるのかと最初は不安でした。今でも、犬と猫は仲がいいわけではなく、同居人のようにそれぞれで生活を送っています。



猫は、とにかく上へ上へと登る。そして、台の上の物を落として壊す。呼んでも来ない。どこにいるかわからない。犬が喜ぶりんごには見向きもしないのに弁当に入れた鰤の照り焼きを食べてしまう。そして、ねこじゃらしで簡単に釣れる。犬とはまったく別の生物でした。物が壊され、大事な手紙を破かれたりしていますが、まったく腹が立ちません。とにかくかわいい。かわいいから、許せてしまう。すごい奴らです。

「かわいい」と思えるって、すごく大きな事だなと感じています。人間を警戒しながらも危害を加えずに餌をくれるとわかると、真っ直ぐに甘えてきます。この真っ直ぐさや無邪気さを出すことを難しくしてしまうのが人間なのでしょう。時には、正々堂々と主張して甘える動物を見習ってもいいのかも知れませんね(笑)

河岸由里子(臨床心理士)

北海道　かうんせりんぐるうむ　かかし　主宰

公認心理師の国家資格化に伴い、現任者講習があった。平日一日 4 枠(1 枠 1.5 時間)の5日連続か、土日一日 5 枠の 4 日という選択があり、平日 5 日は休めないので、土日コースを選ぶことにした。ところが北海道ではそのコースがない。東京か大阪だが、日程的に合うのが大阪しかなかった。急いで申込、何とかそのコースに入れた。二週にわたって大阪に金土や金土日と泊まって講習を受けた。3 枠目くらいからきつくなってきて、4 枠目は頭がぼーっとし、5 枠目はヨレヨレ。これを繰り返すこと 4 日。最終日の最終講義が終わった時には、放心状態に近かった。ということは、何も頭に残っていないのかもしれない。一緒の列に座っていた仲間は、皆東京や愛知など大阪以外の場所からきていた。一緒の仲間がいたから乗り切れたこともある。講習を終わって会場から出たら、目の前で何やらパンフレットを配っている人がいる。何かと思ったら「国試対策講習」と書いてある。まだ一度も行われていない国家資格試験に対して、どうやって対策を考えようというのか。「何もわからない」という不安に対し、あれやこれやと商売上手なことだ。

それはともかく、5 枠の授業を受けて、ここ 2 年程行っている院の集中講義を 5 枠の三日にしていることについて、ちょっと考え直した方が良いかと反省した。

岡崎正明

今日は羽生くんが 2 大会連続の金メダルを取った。特にまとまったことが思いつかないので、1 日で思ったアレコレを書いてみ

る。

朝は録画してた「セサミストリート×バリバラ」を観る。セサミがマイノリティに力を入れているなんて知らなかった。発達障害の小5の女の子が「みんなと仲良くしたい」と言い、クラスの子が彼女の特性について想像し、声をかけたりしている。そうだよなあ。やっぱりいろいろ気が合わないやつとか、傷ついたり傷つけたりもあるかもだけど、基本『人は善なるもの』として向き合いたいよなあーと、職場の特性のある人思ったりしながら反省するとともに、ちょっとウルっとくる。最近涙もろくていかん。特に子どもモノは破壊力バツグン。

お昼はお好み焼きを食い過ぎた。おかげで例のごとくお腹が不安定。しかし期限が1月に切れて早く使い切りたかった胃腸薬が飲めた。ちょうど良かったかも。なんだそりゃ。

その後羽生くんの演技を見て、「この人こそリアルアイドルなんじゃ？」と思う。作られた歌や踊りの世界でヒーロー化するジャニーズや韓流は、いわばフィクション。だけど彼は現実に、逆境から最高の結果を出して世界一。ドラマかっ。しかもマンガみたいな決めポーズが嫌味なくサマになる。男なのになんだかタカラジェンヌみたいな艶っぽさもある。なんじゃコイツ。本当に3次元？



夕食はオリンピックを意識したわけではないがキムチ鍋。やっぱ冬は鍋。相方が「ピョンヤンだっけ？ピョンチャンだっけ？」。相変わらず自分の興味のない情報は、まったく拾わない人。ピョンヤンだといろいろややこしいことが起きそうだなあ…などと妄想しつつ、シメの麺をすすった。また食べ過ぎた。

見野　大介

生まれて七カ月になる息子もハイハイと掴まり立ちを習得し、機動力がUPしたことで油断できなくなってきました。育児のサポートをしやすいのが在宅勤務の特権やなぁと、日々実感します。見事なまでの親バカモードになりつつありますが、仕事せな話にならんので頑張って気持ちを切り替えて制作しまくってます。

最近、器の制作工程の中で焼成方法を変えました。粘土も釉薬も従来通りでも、焼成方法に変化を与えるだけで以前より深みのある色が出るようになりました。まだまだ改善の余地はあるなぁと、陶芸の無限性を実感すると共に、10月の高島屋京都店での個展までに一定レベルのクオリティまでもっていかなあかん焦りが募る、今日この頃。

浦田雅夫

年度末、落ち着かない日々を過ごしています。さようならとこんにちはが慌ただしく、こころがついていきません。拙著は学校臨床の新展開としてスクールソーシャルワーカーや教育相談のことなどを書いてきましたが一旦終わり、社会的養護の新展開と称して、描かせていただきます。引き続き、よろしくお願いいたします。

団士郎

今回の短信は編集長である私の個人的経験からの一言にさせてもらう。だったら、編集後記に書けば良いようなものだが、長い蓄積経験からの思いなので、ここに書くことにする。

＊

これだけの大所帯になると、いろいろな事情で休載になる方も増えるのはやむを得ない。連載は自由・任意だから基本的に了解である。

その上で、私が40年以上継続して漫画展や冊子発行をしてきた漫画グループ「ぼむ」での経験のことを書いておきたい。

ミニコミブームというのが1970年代に起こって、様々なグループ、集団がミニコミ誌を出していた。漫画にもそういう流れがあって、いくつか創刊された。しかし今、現役で残っている集団は多分「ぼむ」だけである。思い出話と共に酒を飲む昔馴染みの集まりはあるだろうが、基本的に創作者グループは皆消えたと思う。その理由を私は分っていると考える。

それは制作「自由」参加であることが、「怠け・だらしなさ」と連動したからだ。

マンガを描くと決めたら原稿締切りは落とさない。締切は守る。自費出版だからと言って、原稿が集まった時に発行するなんてルーズさを容認しない。忙しかったなんて言い訳は、暇になる日などやってこないことを直視していないことになる。これを貫いたことが「ぼむ」継続に繋がった。

この教訓は他のミニコミ媒体でも実証済みだ。二年前まで私は、「家族心理学会」のニュースレター編集長として10年間、年二回の発行をしてきた。8ページくらいのものとして受け継ぎ、32ページ程の定期刊行物に育てて続け、次期編集長が立候補してくれるのを待ってバトンタッチした。

どれも「継続執筆」というのがひとつのポイントだ。書くと決めたら、次回も必ず締切りは来るのだから、思い立ったとき直ぐ書き始める。新聞記事ではないのだから、締切り間際になって新しいニュースが登場することも少ないだろう。

自分に甘いと、緊急事態による休載が起きやすい。これは人生のルールと同じだ。準備不足のところに、緊急事態は起きやすい。

このマガジンが8年間、年4回の発行日にほぼきちんと発行されていることの意味は新しく参加する人達にも知っておいてもらいたいと思う。そして世界をこういう風に維持していく人々の存在や責任感のありかたを学んでもらわねばならない。

芸術家・作家など特別な才能のある人々の気まぐれや甘えを、自分になぞらせてはならない。先ず、職人の律儀さにならう、これが私の信条である。

大谷多加志

このマガジンが出る頃には確定しているはずなのですが、昨年の12月に博士論文を提出し、3年間の大学院生活が区切りを迎える予定になっています。終わってみればあっという間で、理解できたことよりもはるかに多く、知らなかったことや理解できなかったことがあることに気づき、途方に暮れる思いです。「学びてしかる後に足らざるを知る」という言葉通りの実感です。

一方で、論文を提出したからといって、とくに生活上に変化はありません。相変わらずデータ収集の作業もありますし、書きかけの論文もありますし、仕事も変わりません。論文が終わったらちょっとは楽になるかな？という淡い願望は打ち砕かれたことになりますが、論文を書くための手段としてあれこれ

苦労していたわけではなく、その時々でやりたいこと、やるべきことをこなしてきたに過ぎなかったと、いうことなのでしょう。そのように考えられたことに、少しだけ自分の成長を感じ、嬉しく思っています。

馬渡徳子

昨年二月に重ねて、「今回休稿」させて戴きます。確か昨年は、過労から三度目のギックリ腰で、「ギックリさん」と笑い飛ばすことにしていましたっけ。



今年も、年末から私事が落ち着かず、職場の同僚や職能団体の役員、自主的な研究会等々、全て仲間の皆さんに多大なる公的業務の制限と配慮を戴き、プライベートにシフトできる時間をつくることができ、一日一日を前に進めることができています。本当に、そのような組織や仲間の中に、自分が居る事に、心より感謝しております。

そんな私を支えた、もうひとつの力となった、言霊を三つ!

①生きてるだけで、大体オッケー!
by マギーしろう

②ゆるすと うまれる
楽になる きもち
by「通販生活」掲載

③心
by 袴田洋子

①は、亡父の友人であるご住職が2011 年に、お寺の前にある黒板に日替わりで記載されていたある日の言葉。父は、この言葉に強いインスピレーションを感じたのか、その日から黒板の前に、お花を生けるようになっていました。

②は、2015 年に、義父を交通事故で亡くした報道を観た私の担当患者さんが、見つけて書き写して、そっとプレゼントして下さった言葉。「ゆるす」の対象は、「赦す」が自分自身を。もうひとつが、「時間という薬」で事故のお相手のことを指すのかなと。

その方は、第二次世界大戦の時に、シベリアに抑留され、その後帰国された方で、県内にご生存されておられる数名のお一人だそうです。毎年、社会福祉士や介護支援専門員の実習生や、非常勤講師をさせていただいている金沢大学大学院の留学生を担当すると、その方を家庭訪問し、学生さんに向けた「語り」をお願いしています。

③は、対人援助学マガジンの連載執筆者のお一人である袴田洋子さんを訪ねて東京に伺ったときに、袴田さんのご家族が、全国でもいち早く独立型居宅介護支援事業所を開業された彼女にプレゼントされた素敵な色紙。鶴に、なぞらえた誠に素敵な書画。

人生いろいろですが、 皆様、次号まで、ごきげんよう!!

竹中尚文

私は元気です。今回は、マガジンの原稿を書きかけたところへ『七日参りのお話』の再校が送られて来た。以前にマガジンで連載させてもらったものが、本にしてもらえる。本にしてもらうのだから、急いで校正をしていて、時間がなくなった。木村さんとの往復書簡の原稿に加えて、今回から「盆踊り漫遊」を始めたい。時間の流れと競争をしている。

川﨑二三彦

お知らせ

2 年間に渡って連載してきた「SV・羅針盤のない航海」は、前号をもって第一部を終了しました。

この後、第二部を始める予定ですが、準備に時間が必要ですので、読者の皆さまは今しばらくお待ちください。準備期間中は、それまで連載していた「映画の中の子どもたち」を再開できればと考えていますが、あくまでも現時点の予定です。

それはさておき、近況を報告します。以前にも少し報告したかと思いますが、昨年 1 年間をかけて某メーリングリストで連載したのが「研修講師舞台裏」。私が講師を引き受けた研修について、講師の立場で感想などを書き付けたものですが、引き受けた研修等が種々のものを合わせて年間 50 本を超えたので、連載するのも結構な負担感がありましたが、それだけにいろいろ考えることもありました。

翻って今は、私の職場である子どもの虹情報研修センターでの web 版「ミニ講座」の収録に、またしても膨大な時間を吸い取られています。上映時間で10分から15分程度に小分けしたものを 5 本作成し、全体版で 1 時間程度となる予定のミニ講座ですが、10 数分の準備にまる 1 日かかる。それを映像担当者と打ち合わせしては、再び修正する。おかげで他のことが後回しになり、日々四苦八苦している現状です。ちなみに、今回のテーマは「考えてみよう子どもの権利」。



実は、この原稿を執筆している時点は収録の数日前でして、今日はこれから、もう一度点検と修正に費やさなければなりません。完成のあかつきには、まあ一度ご覧になってください。虹センターの援助機関向けページにアップする予定ですが、援助機関向けページに入るにはパスワードが必要ですので申し添えておきます。

なお、一昨年の夏に、同じ「ミニ講座」欄にアップした動画版「手に取るように家族がわかるジェノグラム・描き方と活用のコツ」は、おかげさまで好評を得、その附属資料として添付していた PDF 版について、ジェノグラムの記号一覧を新たに加えた上で、実は本日、虹センターの研修資料として印刷し、ミニパンフとして製本化しました。今後は、当センターの研修に参加される方に配布することとしていますが、ネットで「ミニ講座」にアクセスしていただければ、引き続きご自身でプリントすることもできますので、今後ともご利用いただければ幸いです。(2018/03/01 記)

荒木晃子

2018 年 1 月、愛犬あんり(ミニチュア・シュナウザー♀)が 14 年余りの犬生を閉じた。従妹の家で生まれ、生後 4 か月足らずで我が家の一員になった頃は、1 kgにも満たない元気な子犬だった。先住犬(こちらもミニチュア・シュナウザー)を亡くし、空席のあった私

の心にあたたかな灯が再び灯ったことを覚えている。

両親が暮らす奈良の実家へ帰るたび、島根県のクリニック(筆者がカウンセラーを務める生殖医療施設)への出張業務にも、あんりを車の後部座席に載せ、可能な限り何処へでも一緒に連れて行った。



2007 年父を看取り、ひとり暮らしが始まると、母は一人娘に「あんりを連れて行かないで」とせがんだ。きっと、父がいない家でのひとり暮らしは寂しく心細かったのだろう。精神科と生殖医療施設の 2 か所でカウンセリング業務をしながら院生でもあった娘には、母の寂しさを埋める時間はそう多くはなかった。以降、あんりは、ひとり暮らしの母を支える大切な存在となった。

数年後、加齢とともに進行性の脳性疾患を持つ母の症状が重症化し、やむなく闘病生活が始まった。母からは、「あんりを頼むね」と託されていた。お見舞いに行くときは必ずあんりを連れて行き、病院の入り口まで母を車椅子に載せ、あんりとの面会を果たした。その時の母の笑顔を今も忘れない。

2013 年母を看取り、それから 5 年後の今年 1 月、あんりを見送った。心臓マッサージを受けているあんりのもとへ駆けつけ、その様子をしばらく見ていた私は、「もう充分です。やめてください。あんりはもう十分に頑張ったのですから。」と獣医に告げた。それは丁度 5 年前、最期を迎えようとした母のベッドサイドで繰り広げられた様子と、まったく同じ光景だった。私はあの時と同じ気持ちで、同じ言葉を発していたことに、最近になって気が付いた。

私にとって、あんりは最後の家族であり、母の忘れ形見でもあった。あんりの最期まで見守ることは、母が娘に遺した“たった一つの願い”をきくことだったのだ。

お母さん。娘はお母さんとの約束を守りましたよ。きっと今頃は、天国であんりと一緒に楽しく暮らしているのでしょうね。今度は娘からのお願いです。「あんりをよろしくお願いします」。合掌

鶴谷圭一

今回は、長年感じてきたピアノ演奏技術のことについて書かせて頂いた。

子ども･子育て新制度が始まって、今後幼児教育・保育を含めた無償化などがすすむと懸念されるのが、幼児教育、保育のサービス業化だ。我が子を教育してもらうためにその園、その先生に託す関係だったのが、預け預けられる関係になってくること。

保育者のスキルが落ちてくれば、尚更それは進むに違いない。

だから、先生はピアノぐらいサラッと弾けてほしいのだ。

木村晃子

2 月下旬、初めて仙台空港に入った。7年前の震災の影響を受けた跡はみられない。

時間があったので、３１１メモリアル交流館にも立ち寄ることができた。当時の様子が語り継がれている。その場で目にすると、これまでとは少し違ったものが心の深いところからこみ上げてきた。

震災の時に、いち早く救助にあたった消防隊員、救急隊員の記録があった。すさまじい状況の中で、大きな役割を果たしていたように見えた、それぞれの人たちは、できる限りを尽くしても尚無念さを持ち続けていたことを知った。人の力では如何ともしがたい状況であっても、その無念さを無駄にしないように次の時代に伝えるべく動きをしている。積み重ねるということは、土台を忘れないことかもしれない。

記憶する。学ぶ。人の知恵を活かせるように生きていく。人間としてのミッションだと感じた。

三嶋　あゆみ

今回のマンガは、電通過労死事件が大きく報道された 2016 年に描いたものです。

同じ広告業で働くまだ1年目の女性が、会社に殺されたことはとてもショックでした。

法律を変えて人の命を奪ってまで儲けたい財界と政府は、彼女の死を軽く受け止めているのだと思います。亡くなった人たちや遺族の痛みとともに、みんなで止めたい。

乾　明紀

前回休載となった周旋家日記ですが、なんとか復活することができました。

さて、今回のテーマは町内会。当初は違うテーマで書き始めていましたが、学生と町内会の活性化に向けた取り組みを、4 月からも継続実施するのでこの内容にしました。学生にも読ませようと思っています。

これまでは「キャリア形成を考える」という中テーマで 12 回ほど書いてきましたが、今回は「シティズンシップを考える」という中テーマにしてみました。次回以降はこの路線で続けていければなと“今”は思っています。

1 工程@1 円～知的障害者の労働現場

32：　安全衛生委員会

千葉　晃央

仕事には危険がついてまわる。それは利用者も職員も同じである。知的障害者の労働現場で、これまで扱ってきた機器も多岐にわたる。工場での作業、メンテナンスでは清掃にまつわる機材、加工作業では様々な工作機械を使う機会もあった。リフトや、トラックも構内にあった。そこでは、どんな時でも安全が求められる。もちろんそこには衛生面での安全も含まれている。

この視点から、施設が行っているサービスを横断的に、安全衛生の視点から再確認する機能を持つのが安全衛生委員会である。この会の設置には、決して忘れてはならない出来事も伴っている。現在、福祉事業所において、この安全衛生委員会を置いているところは少ないだろう。厳密にいえば、私の周辺でも労働安全衛生法が規定する安全衛生委員会の規定と全く同じというわけではない部分もある。現実に労働安全衛生法で義務づけられている安全衛生委員会の設置となる、従業員人数、事業内容など、福祉事業所は対象から外れていることがほとんどとである。しかし、だからやらなくていいわけではない。それでも、あえて安全衛生を実現するために設置しているのである。

脱・最低基準の最高基準化

話は逸れるが、福祉現場の課題としていわれていることの一つは「最低基準の最高基準化」である。職員 1 人につき、利用者何人、利用者一人につき面積何平米以上など法律によって最低基準は決められている。しかし、現実は最低基準以上の環境が整備されていることが少ない。その状況を指摘しているのが「最低基準の最高基準化」である。つまり最低基準をクリアしていたら、それがこの業界の最高基準、最高レベルとなっている状況を指しているのである。

この安全衛生委員会も同様に、対象外だから置かなくていい！で済ますこともできる。労働安全衛生法の対象にならないから、やらなくていいのではなく、自分たちの仕事内容、作業状況、利用者さんの最善の利益を考えて、必要であるという現場の判断で置かれている。これはある意味では挑戦である。

参考に法律を見てみよう。厚生労働省が

定めているのは、労働安全衛生法に基づく、安全委員会、衛生委員会、もしくは両者を一体とした安全衛生委員会の設置である。

よくある製造も運送も清掃も対象！

安全委員会の設置が義務付けられているのは林業、鉱業、建設業、製造業（木材・木製品製造業、化学工業、鉄鋼業、金属製品製造業・輸送用機械器具製造業）、運送業（道路貨物運送業・港湾運送業）、自動車整備業、機械修理業・清掃業では、常時 50 人以上を雇用している事業所としている。上記以外の製造業（物の加工業を含む）、上記以外の運送業、電気業、ガス業、熱供給業、水道業、通信業、各種商品卸売業、家具・建具・じゅう器等卸売業および小売業、各種商品小売業、燃料小売業、旅館業、ゴルフ場業では常時 100 人以上のところとされている。

安全委員会で調査、審議されることは、労働者の危険防止のための基本対策に関すること、労働災害の原因・再発防止対策で、安全に係るものに関すること、その他、労働者の危険防止に関する重要事項とされている。委員は事業者に対して意見を述べることが求められている。安全委員会の委員は、安全に関し経験を有する者等のうち事業者が指名した者で構成するとしている（労働安全衛生法第 17 条）。

すべての業種が対象！

衛生委員会の設置は、すべての業種において常時使用する労働者数が 50 人以上となる場合に、事業者は事業場ごとに衛生委員会を設置しなければなりません。

衛生委員会の調査、審議内容は、労働者の健康障害を防止するための基本対策、労働者の健康保持増進を図るための基本対策、労働災害の原因・再発防止対策で、衛生に係るものに関すること、その他、労働者の健康障害防止・健康保持増進に関する重要事項を調査審議して事業者に対して意見を述べるとされている。

衛生委員会の委員は、当該事業場の労働者で衛生に関し経験を有する者等から事業者が指名した者で構成される（労働安全衛生法第 18 条）。

安全委員会を設置しなければならない事業場では、必ず衛生委員会も設置しなければなりません。安全委員会と衛生委員会のそれぞれの委員会の設置に代えて、それらを一体とする安全衛生委員会を設置することができます。

不当な労働環境を労働者が改善する！

委員会は、毎月 1 回以上開催しなければなりません。委員会における議事の概要は、開催の都度、遅滞なく、一定の方法で労働者に周知させなければならず、委員会の議事のうち重要なものについては、記録を作成して 3 年間保存しなければなりません（労働安全衛生法第 19 条）。

これらの法律に沿って、私の周辺では安全衛生委員会を設置し運営している。事業者側と労働者側の利益が反する場合も、当然想定される。また、そうでなくては、こ

の委員会の意味はない。そのため、法律では委員の選考等に関して労使関係も鑑みた規定も設けられている。関心がある方はぜひ詳しく見ていただきたい。

誰が働いても安全という環境

これまで、こういったことは事故が起こった後の検証のみが行われがちであった。次から気を付けます！、しょうがない、いろいろ言うても結果論や！…で済まさずに、事故の誘因、構造、対処方法、改善事項など当事者を交えて検証と報告書をまとめてきた。どのぐらいの事案で検証を行うのかも判断が求められることである。

高所作業時のヘルメットの未着用、車両運行時の軽微な物的接触事案…など、日常には起こる。そして、検証もする。一方で検証する側、される側の信頼関係を維持しながら、なおかつ報告しやすい文化を作るのには、さらに工夫が必要となる。面倒くさいから、事故があっても報告はやめよう！という職場の集団基準を作りかねない。そのためにも原因追及、責任追及で進めるのは一定なところまでとする。そして、誰が関わっても同じようなことが起こらないためにはどうしたらいいのかについて話し合うための時間をかける。個人のせいだけではない。もしかしたら当事者は自分だったかもしれないのである。そのためには、誰が行っても事故が起きない「環境づくり」こそが必要である。そのために、明日からどうしたらいいのかのアイディア収集とその選定、具体的な実行者、実行時期を決めることが求められる。安全のことなので即日実行が基本である。

更に大切なのは、このように事後のこと



だけでなく、予防的観点からも進めていかなければならない。

古くて新しい手法「講話」

委員会の活動は、地道である。多くの場合は安全を伴った動きを、個人や部署、具体的作業、その運営にも求める。それは時には憎まれ役である。足元の安全のために、道具の置く場所を明確にするための床面の塗装。扉開閉時の危険個所を明確化するための床面の塗装。鋭利な箇所ができた破損個所の補修。調理で異物が混入しないように調理員の頭巾、エプロンの使用方法の見直し。車両が異動する構内での歩行者動線を固定化するためのライン引き。機械故障時の対応方法の明確化…などなどである。日常業務は、役割ごとに運営しているがどうしてもその隙間はできる。業務全般、横断的に見ていくのも安全衛生委員会の独自性である。

講話も有効である。保健（腰痛対策のための荷物の持ち方、インフルエンザ対策、手の洗い方…）、防災（地震時の対処方法、水害時の避難方法…）等のテーマで行っている。利用者さんには伝わりやすい様々な工夫もする。写真や絵、実物、デモンストレーションなど視覚的にも訴える。ある職員はくしゃみで唾液が届く距離分を実際にビニールテープで示したりもしながら実施して、非常にわかりやすく、伝えている。多くの人からとても評価が高かった。時には荷物の持ち方、腰のかがめ方の実演などもある。そして、定期的にし続けることがこの現場でも重要である。人は誰しも忘れてしまう。しかし、安全という願いは永遠である。マンネリにならないように工夫もしながら講話の時間を確保している。

高齢期の労働を可能にする

職員の年齢も、利用者の年齢も高齢化している。若い人口が減り、新しく勤める職員も 20 代ではないことも増えた。福祉事業所が増えて、障害を持つ人を対象にした一般就労実現への取り組みも学校レベル、そして福祉レベルでも充実した。若い世代だけが新規施設利用者になることは減った。他方、ニュースで聴こえてくるのは、労働災害が発生した事案について、その当事者が高齢化しているというものである。これから、ますます安全で働きやすい職場づくりが重要となる。そのためには事業者側も雇用者を守る意識、労働者も職場に対し改善を求める積極的な姿勢が求められている。

安全衛生委員会のよくないパターンの報告では、同じ人ばかりが発言する、委員からの意見が出ないなどが指摘されている。これは私の周辺の福祉事業所においてもあてはまる部分がある。というよりも、社会一般の職場の会議でも似たようなものかもしれない。

酔っぱらいにお金を払うのか？

また、この委員会に、どのくらい時間をかけ続けることができるかが現場に問われている。仕事は気が緩むとルーズになり、簡単に質が落ちる。一度そうなると、元に

戻すのに相当のエネルギーが必要になる。これぐらいでいいんじゃない、きついこと言わんと…、そこまでやりますか！…に押し切られていてはいけない。ここは真剣勝負。パワーゲームも時には意識しておかなくては、安全衛生のところでは特にできるこのもできなくなってしまう。「あぶない！」「ダメです！」で強く指示的に進める様子は常に一定含まれる領域である。みんなで危ないかどうか考えようでは、即応性が失われる。

こうして、継続的に時間をかけるならば成果も求められる。現実的に、安全衛生を進めるやりがいや成果が具体的にあるとよい。時には、心身共に余裕を生むための有給休暇が適宜取得できる雰囲気づくり、サービス残業や過剰労働が発生しないマネジメントの実践などを進めることも多くの労働者の賛同を得られる。実際、人は朝起きてから、14 時間経過すると酔っぱらっているのと同じ状態になるといわれる。職場は、その人に残業手当として給料を払う…。つまり酔っ払いに給料を払うのか？！という指摘がある。そのためにも、その日は切り上げて翌日頑張るということも行いながら、になる。なのでマネジメント役は日夜努力しないといけない。

こうして、時にはリフレッシュできる時間を持てるよう職場全体をマネジメントしたい。仕事人生、職業人生共に両立した人生こそが利用者さんも、そこで働くスタッフも目指すべきところである。

このぐらいでいいという甘え



長く働くスタッフがいると長期的視点で見ることができる。これはメリットである。変化がないようでも、何年前かを思い出すと…と小さな進展にも気づくこともできる。逆にデメリットもある。このぐらいでいいんじゃないかという職員間のなれ合いや談合である。安全面、衛生面も含まれる。これも駆逐しなくてはならない。

これは職員間のいい関係を保持するためのメンテナンス機能だけに振れている状態といえる。そうではなく、本来の事業の目的を達成するタスク機能の喚起が求められる。そのためには、ダラダラ仕事ではなく、メリハリの利いた、計画的な仕事をすることがここでも、求められる。そして、なおかつタスクも達成するのである。その中で、職員も利用者さんも「お互い様」でフォローをしあう関係をいかに構築できるかである。

職員が行う業務に安全衛生がベースにな

ることが利用者さんの利益につながることを意識して進めなくてはならない。そして、利用者さんの安全衛生は、職員以上に大前提となる。それを実現するために安全衛生面をクリアして、仕事をどうデザインするかが我々に求められている。

参考文献：

・『－安全衛生基本シリーズ－　安全衛生委員会の進め方、活かし方 』中央労働災害防止協会　2008

・『How to 産業保健④　生きた安全衛生委員会の運営のために』加藤憲忠　公益財団法人産業医学振興財団　2011

BACK ISSUES

施設というコミュニティ 31　2017 年 12 月

職場づくり 30　2017 年 9 月

健康管理 29　2017 年 6 月

音 28　2017 年 3 月

救世主になりたい援助職 27　2016 年 12 月

事件について 26　2016 年 9 月

クルマ社会と福祉政策 25　2016 年 6 月

施設が求める「障害者像」はあるのか？　24

2016 年 3 月

連絡帳 23　2015 年 12 月

におい 22　2015 年 9 月

作業着 21　2015 年 6 月

食べる 20　2015 年 3 月

通勤 19　2014 年 12 月

クスリの作用、人の作用 18　2014 年 9 月

倫理観でかたづけられる暴力 17　2014 年 6 月

触れる 16　2014 年 3 月

対談企画 「教育と福祉の連携を模索する」2014 年 3 月

情報の格差 15　2013 年 12 月

20 年前のノートから 14　2013 年 9 月

そうじのねらい 13　2013 年 6 月

個別化の暗部 12　2013 年 3 月

グループワークの視点 11　2012 年 12 月

実習生がやってきた！10　2012 年 9 月

月曜日のせいやな 9　2012 年 6 月

所得を決める福祉職？82012 年 3 月

世界とつながる社会福祉現場 7　2011 年 12 月

この現場へのたどり着き方 6　2011 年 9 月

障害を持つ友達と過ごすとは？巻末座談会

2011 年 9 月

旅行がない！5　2011 年 6 月

職員の脳内回路 4　2011 年 3 月

たかがガムテープ、されどガムテープ 3

2010 年 12 月

利用者が仕事上の戦友 2　2010 年 9 月

障害者自立支援法で不景気に！？1　2010 年 6 月

臨床社会学の方法

（20）加害の語りを聴くこと

中村 正

1． 加害の語り方

2018 年 1 月 29 日、NHK 総合「あさイチ」が「DV 加害者の声から考える対策」という特集を組み、そこに呼ばれて解説をした。ずいぶんと以前から取り組みをされている「アウェア」という DV 加害男性向けのプログラムに通う男性たちへのインタビューが紹介され、スタジオで話をしながら進めた。メインキャスターは有働アナウンサーと V6 のイノッチ。そこにゲストのマキタスポーツさんとヤマザキマリさんがからみ、もう一人の解説者の斎藤弁護士と私とで議論がすすんだ。マキタスポーツさんは「共依存」という言葉で DV のある夫婦関係について話し出した。この言葉には違和感があり、被害にあう方にも依存的な面があり、ようするに被害者の落ち度論となりかねない。ところが、自身の親子関係に照らし出して内省し、「言い返せない、やり返せない関係のなかで固定的なロジックを埋め込むという暴力」になると言い換えていたので反論はしなくてすんだ。

そして、イノッチが「男らしさとは何かという具体的なことや具体的な姿を教えられないまま、男らしさを求められる」ということを指摘した。だからそれは虚構のまま各自が勝手な意味を埋め込んでいくことになるという意味ではよい発言だった。たとえば暴力は人を鍛えるというような幻想が入り込む。そんなことは解説する時間はなかったが、聴き手には十分だった。虚構のような幻想や根拠のない思い込みとしての男らしさのこと、関係が対称的ではない中でおこる暴力ということがよく見えてきたかと思い、私の解説もそれなりにこの主旨の議論に即しながらできた。担当ディレクターとは加害の語りの観点からのストーリー化に協力してきたのでそれなりの流れができていた。ただ残念なのは国会中継で切断されてしまい、残りの 20 分が消えてしまった。加害の語りの話をする予定だった部分だ。

その加害の語りは難しい。その一環である謝罪や罪の自覚や内省と洞察がとりわけ難しく、しかも暴力を振るう側には正義の感覚もあり、被害者感もでてきて難度は高い。話題

は大きくなるが、たとえば戦争や虐殺の加害の語りも同じである。「虐待の再現」をしている映画「アクト・オブ・キリング」（ジョシュア・オッペンハイマー監督／共同監督:クリスティーヌ・シン、他匿名希望、 2012 年、デンマーク・ノルウェー・イギリス合作。原題は、The Act of Killing）がある。1965 年、当時のインドネシア大統領・スカルノがスハルトのクーデターにより失脚、その後、右派勢力による「インドネシア共産党員狩り」と称した大虐殺が行われ、100 万人以上が殺害されたといわれている、9 月 30 日事件を追った作品である。当時、虐殺に関わった者たちを取材し、彼らにその時の行動をカメラの前で演じさせて再現するという手法をとったドキュメンタリー映画である。アンワルら虐殺者たちは自慢げに自分のした殺人を語り、ふざけながら笑顔で演じ、虐殺の現場で踊る。加害者の集団は何の反省もせずに国家と一体となっている。被害者役も演じるなかで徐々に事態の重さに気づいていく。最後はその当の加害の本人の気分が悪くなり反吐をはく場面もある。加害の再現が身体反応を引き出している。

あまりにも直接的なドラマ化手法なので賛否はあるが直面する機会がなく、加害とも思わずに過ぎていくことを考えれば映画にするという作業をとおして何かのきっかけとなっていくのだろう。暴力の自覚はこうした強制的な仕掛けがないとすすまなく、圧倒的な沈黙や忘却のなかにある。

「あさイチ」での紹介も同じだが、加害の語りは、それを聴く側の力や引き出す力とも相関し、そして社会の側の意味づけによってそれらが変化していく。さらに、親密な関係性における暴力として社会問題化されてきた経過ではやはり DV 防止法や児童虐待防止法等による介入という仕掛けが奏功していることもある。とはいえ、被害者の救済とともに当の加害者たちをどのように処遇していくのかという点は未可決のままである。しかも、わかりやすい、一方的な加害と被害となる身体的な暴力だけではない関係性に宿る心理−精神的な暴力の全容は多様な言葉をとおして構築していく必要がある。そうした諸相を最近の事例からみていきたい。

2. 加害の語りのための語彙と聴く側の気づきを広げること

認知意味論や社会構成主義の系譜を引用している余裕はないが、言葉 word が世界 world をつくるという視点から事例を凝視すると、問題の見方それ自体の多層性がみえてくる。すでに社会問題として認知がすすむ DV と虐待も、最近の事例を、マタニティ・ハラスメント、マザリングへの暴力、モラルハラスメント、父親の面会交流殺人事件、乳児揺さぶり症候群、代理ミュンヒハウゼン症候群等の言葉からみつめ直してみるとまた異なる心理−社会的様相が浮上し、対人暴力への広い理解が必要だと思うことが多い。あるいはこうした先鋭化されたアイキャッチャーのような言葉ではなく現実を把握するためにも事態を冷静にみつめ対人援助の場面へと再構成していく必要もあるだろう。

筆者のもとにはいろいろな暴力の加害当事者がやってくる。わかりやすく類型化すれば、DV の夫、子ども虐待の父親、体罰教師、ハラスメント教師、傷害罪で保護観察中の男性、親父の厳しい躾から家出して万引きした少年、迷惑防止条例違反（痴漢）の者たちである。また、支援者支援として対人援助専門職への研修や事例検討を引き受けているとそこにも多様な家族の現在がみえてくる。私の関心からすると、共通していることはすべて男性の問題行動や暴力問題に焦点があたる。彼らの加害のナラティブをひきだし、読み解き、認知の再構成、意味づけの変更、行動の修正に結びつける。もちろん私は警察でも検察でもない。そして何よりも対人暴力の多くは刑事事件になっていないので、多くは私的な領域での出来事であり、介入されるような問題ではないと加害者は考えている。だから、動機の形成、加害の自覚、内省や洞察、語りの語彙や文法など、否認、反抗、抵抗だけではなく、言い訳したいこと、説明したいこと、言葉になりにくいことが錯綜していろいろと現れる。そして感情を言葉にすることに苦労する。

また彼らの人生をみると、加害と被害は捻れてつながっているので、聴き手には複眼的な視野がいる。総じて加害者への対応は難しい。加害のナラティブ、通例は事件の物語として存在している。対応するのは取り調べのストーリーである。これを責任と変化のためのストーリーややり直しのためのストーリーとして重層化していく対話にしたい。それはまたカウンセリングではあるのだろうが、そうした「聴く」行為をなんと名付けたらよいのだろうか。広い意味では「傾聴」なのだろうが、加害のナラティブを重層的にひきだし、聴くことはいかにして可能であるのか。被害のナラティブも同じようにトラウマ的体験の語りなので困難を伴うが、加害のナラティブはそれとはまた別様の困難がある。以下のことはそのもっと手前の作業である「言葉の掘り起こし」であるが、虐待する親たちとのグループワーク、個別面談や夫婦面談、時には子どもとの対話から教えられたことである。筆者は大阪府内の児童相談所と連携して脱暴力の機会を提供しており、加害のナラティブの貴重な場となっている「男親塾」を運営している。加害の語りのなかから十分に語彙になっていない背景にある問題を感受する聴く力が、加害者と協働した語彙の創出になるように考察をくわえてみた。

３．マザリングへの暴力–家族をとおして増幅されていくこと

家族システム論からすれば DV と虐待は重なりあっている。その重なりは面前 DV という言葉に象徴されるが、それをとおして暴力はシステム全体に影響を与えている。その焦点のひとつは家族のなかのマザリングへの暴力だといえる。

つまりこうだ。ジェンダー秩序は、子育てや介護、看護など、ケアすることを女性に割り振る。さらにそれは家族をとおした愛着や育ち、関係性、相互作用による身体感覚とし

て体験され、再生産され、日常となっていく。家族内部での関係性を調整することが女性の役割と観念される。女性は愛情供給係となる。家族のメンバーからするとそのケア提供者に依存と甘えが生起する。歪んだ表現として暴力が発現し、愛情という名の下に受容されていくことがある。言葉を換えれば、女性のケアは葛藤を受け止め、癒やし、包み込むことを期待されている。愛と暴力は加害者からすれば近似的なところにある。愛情は境界をこえて対の関係に閉じていく。感情を受け止めるゆりかごのようにして対の関係ができあがる。そこでは喜怒哀楽の暴力を受け止めることも期待されている。端的には家族のなかのケアリングであるが、それはマザリングと重なる。そこには暴力を受け止めるような陰影もできあがる。家族という場におけるケアリングとマザリングはジェンダー化されてクロスされると暴力の甘受となる。

Lorraine Radford and Marianne Hester らはこれを「母としての女性への暴力」として整理している。内容は、父が母を辱める、感情的に母親を批判する、母親失格だと脅す、妻の社交を監視し、社会的孤立を強いる、思い通りの性を強要し、子どもをたくさんつくるなどして生殖の自由を奪う、子どもを同盟にして母をののしる、母に子どものしつけ役を押しつけ、成果がないといって母を叱責する。また、自殺すると脅すことで女性のケア意識に期待する、家事と育児を強いるなどもある。マザリングを理由とする暴力は DV と虐待を関連づける。日本のような家族中心社会ではマザリングをとおして女性への暴力が増幅していく。本来はパートナーシップという水平の関係にあるべき夫婦関係が、マザリングやケアリングをとおして垂直の関係として錯綜していく。家族関係の持続はこの要素をはらんでいる。

マザリングとケアリングが甘えと依存にもとづく暴力を誘発する面をもつことはさらに DV や虐待等の親密な関係性における暴力論として検討されるべきである。さらにジェンダー秩序が関与することも無視できない。マザリングはケアリングと同じ意味をもつがそれは自らの育ちの体験に由来する。女性役割は母役割であり、世話をしてくれた、あるいはしてくれなかったことの体験が重ねられている。家事や育児の分担にかかわる夫婦の分担の時間の指摘があり、極端にその分担割合の少ないことが日本の男性問題の一つとして存在しているが、そのこともこのパートナーシップのあり方に他ならない。具体的なマザリングへの暴力は、妻が病気の時でも食事をつくれということが象徴的である。妻の体調はおかまいなしだ。体調の悪い妻に対して食事を用意することくらいは夫としての当然のことであるのだが、そうはならない。DV のマイルドな形態とすべきだろう。働く妻の場合は子育て（場合によっては介護）と仕事の両立と、くわえて夫の面倒をみることになる。家族のなかの女性の役割がケアに比重を置かれていると、分担しないことそれ自体は妻の負荷となる。パートナーシップが形成されていないと家族をとおして不均衡が再生産されていく（*Mothering Through Domestic Violence*, Lorraine Radford and Marianne

Hester,2006, Jessica Kingsley Pub., London には、「母としての女性への暴力」論が展開されている)。

４．マザリングを奪ったことへの責任–乳児揺さぶり症候群の親たちと

このマザリングをめぐって子ども虐待事件から考えさせられた家族の例を紹介しておきたい。夫婦と子ども二人の核家族である。個人情報保護のために少しかたちをかえてある。40 歳の父親は男親塾の熱心な参加者だった。児童相談所で夫婦面談、妻への面談、拡大家族（父方祖父母）との対話を実施した。4 ヶ月の時、「乳児ゆさぶり症候群」の疑いで警察が関与することになり、夫は取り調べを受けたが不起訴になった。その後は３歳の終わりまで乳児院で治療的に保護されていた。脳血腫と揺さぶりの因果関係は不明だが父親の責任は大きいとして家族再統合の取り組みに積極的に関与してくれた。彼の責任の取り方を焦点に家族として生き直す協働ができた事例である。

こうした事案の場合、家族のやり直しに向けて父と母は協働しなければならないが、心理的障壁がある。それは夫の行為でこうなったことをめぐる夫婦間の葛藤である。事故だとしても母子が会えない事態を作り出したのは父だからである。その出来事は父と息子の二人きりのところで起こった。妻は夫を信じたいし、信じなければならない。一緒になってこの困難を乗り越えなければならない。夫も辛い局面に追い込まれる。若い夫婦にはそうとうにこたえただろう。試練だった。父性を育むことが何よりも大事だが、上の子が保護されていなかったので家族としてのきずなは維持できた。保護されなかった上の子と父の関係性を豊かにすることで彼の親性は育成できるだろう。さらに彼は乳児への接し方や赤ちゃんのからだの特性も親教室に通うことで勉強していた。

ここまでは既存の家庭福祉や児童福祉の枠内で可能だが、父性の涵養やケアにかかわる男性性の課題は既存の枠におさまらない。男親塾では、高葛藤を想定して妻への謝罪や配慮が必要なことを伝えていた。児童福祉の仕組みのなかでの家族再統合事業はこうしたところへは踏み込みにくい。民間（大学の研究と社会実装のプロジェクト）として協力する男親塾と公的機関としての児童相談所が実施する個別の夫婦や個人カウンセリングを並行させることでトータルに家族システムの再構成をめざすこととした。

父は月に二回の男親塾にきちんと参加したくれた。気持ちを語る語彙や家族のエピソードを語る体験を積み重ねた。１年半程の時間である。子どもが保護されてからは３年の時間が経つ。児童相談所は母から先に子どもとの面会をし、のちに父も合流し、自宅への外泊も実施し、徐々に家族の再統合をすすめていた。

夫の責任の範囲として配慮すべきこと確認していった。夫が何に対して謝罪をすべきであるかという点である。虐待や DV があるとマザリングに焦点を当てて考える面がある。

DV の場合は妻の子育ての仕方に問題があるといって妻を非難し、妻に精神的な暴力を加えることがある。子育ては妻の責任だという考えにもとづく責任の追及である。先述したようにマザリングへの暴力あるいはマザリングを利用した暴力である。この夫はそこまで DV との関連はなかったので母性を剥奪してしまったことへの謝罪や内省を深めていくことができると判断して対話の内容を考えた。つまりことの真偽は別にして、夫の過失により男の子を育てる機会を喪失させた、つまり母性を育む機会を奪ったことへの謝罪と内省である。何よりもこの苦難を耐えて二人で家族をやり直そうとしてくれている妻への敬意でもあることからこの家族の再統合の要にある課題として提示した。ペアレンティングとパートナーシップの統合という意味である。マザリングの機会を奪ったことにもなるのでそこへの内省が欲しいと指摘した。マザリングへの暴力論として考察できるである。乳児揺さぶり症候群はえん罪かどうか争点となっているが、その真偽論とは別に子どもの回復とともに父の過失であったとしてとしていかにしてマザリングへの敬意とともに家族再統合課題の協働ができるかどうかが回復にとって重要となることを示してくれた貴重な家族だった。

５．マタニティ・ハラスメント–社会のなかのマザリング・バッシングとの共軛関係

比較的子どもが多い虐待家族に出会うことがある。離婚して再婚した場合は連れ子が多くなることもあるし、これはこれで家族形成の課題がある。実子も多い場合がある。ジェノグラムが拡張していくといえばわかりやすいだろうか。妻が休む間もなく子どもをつくっている家族もある。妊娠している妻への DV もある。これらは生殖をめぐる葛藤が背景にあると推測できる。マザリングへの暴力は多様に見られるべきだろう。さらに社会的にも広くマタニティをめぐっての問題がある。端的な言葉としてはマタニティ・ハラスメントである。

2015 年には「妊娠・出産等を理由とする不利益取扱いに関する解釈通達について」(厚生労働省）が発出された。もちろんそもそも「雇用の分野における男女の均等な機会及び待遇の確保等に関する法律(男女雇用機会均等法)」第 9 条第 3 項や「育児休業、 介護休業等育児又は家族介護を行う労働者の福祉に関する法律(育児・介護休業法)」の第 10 条等では、妊娠・出産、育児休業等を「理由として」解雇等の不利益取扱いを行うことを禁止している。迷惑をかけることへの躊躇がある。

女性への暴力をマザリングへの暴力としてみると家庭内だけではない社会のなかでの暴力も可視化される言葉である（『働く女性とマタニティ・ハラスメント–「労働する身体」と「産む身体」を生きる』杉浦浩美、大月書店、2019 年)。

６．父親による面会交流殺人事件–ストーキングの一類型とファザリング（父性涵養）の問題

このマザリングと対象的なのはファザリングである。父性の問題は男性問題のひとつと

して大きな課題である。社会制度としては離婚後の父子関係を保障するものとして司法が扱う面会交流制度が争点となっている。特に暴力が理由で離婚した後の非監護親との面会が焦点である。「親子断絶防止法」という通称で呼ばれている政策課題や現状認識にかかわり公論となっている（中村正「子どもと別居親の『交流』の意味-良い離婚にするために-」、『離婚紛争の合意による解決支援と子どもの意思の尊重』二宮周平・渡辺惺之編所収/日本加除出版、2014 年）。

争点となっている背景は事件として表面化する事例があるからである。たとえば、兵庫県伊丹市で、面会中の 4 歳の娘が殺され、その父親も首を吊って死亡しているのが発見された。面会時間が終わっても連絡が取れない元妻が心配して、警察に連絡したことから発覚した（面会日に無理心中した事件、2017 年）。2017 年 1 月には長崎県で、面会交流中に子どもを元夫宅に連れて行った元妻が、殺害された事件があったばかりである（2017 年、長崎ストーカー殺人）。

背景にあるのは法改正である。2011 年に民法 766 条が改正され、離婚時に「子どもの利益を最も優先して考慮」すべきとして、親権と養育費とともに面会交流が取り決められることが強化された。長崎事件では、元夫がその後に自殺した事件は、やはり離婚時に元夫に定期的に面会交流をさせる「面会交流」を取り決めていたという（「子の面会」事件招く？元夫と離婚時約束、数回訪問）『西日本新聞』2017 年 2 月 2 日朝刊）。被害者は、夫のストーキングと脅迫メールを警察に相談していたという。

また別の 2017 年の事例。父親が別居している母親に長女を会わせる面会交流の取り決めを破った場合、父親が 1 回あたり 100 万円を母親に支払うよう命じる判決が東京家裁であった。内容は、娘との面会拒否に対して 1 回あたり 100 万円の支払いを命令するというもの（『朝日新聞』2017 年 1 月 21 日付け）。また面会交流を実施していなかった元妻と再婚相手に賠償責任を認めた熊本地裁判決もある。70 万円、30 万円の支払いを命じている（子供への面会拒否、元妻の再婚相手にも賠償命令。熊本地裁『毎日新聞』2017 年 1 月 23 日）。

こうして、面会交流を実施しなければ、間接強制となり、「罰金」となる。暴力や虐待のある離婚後の事例でも、被害者であることの多い、親権をもつ妻が合わせる義務があり、あわせないことは罰となる。暴力や虐待の危険性が別の犯罪に至ることを防ぐ義務があり、ガード付き面接などの措置を講じる諸外国とは異なる家族主義規範に司法が染まっているともいえる。

この問題に対しては子どもの利益をどう実現するのか、親のための面会交流というよりも子どもの健康と発達にとっての面会交流制度にしていく必要がある。暴力を契機とした離婚事例への対応はもちろんのこと、日常的なファザリング、つまり父性の涵養のテーマとしてとらえていくべきだろう。面会させるべきかどうかというよりも、やはり基本は父

性の涵養であるべきだ。親力を鍛えるためのペアレンティング学習への参加の制度が離婚のプロセスでは必要だろう。虐待による介入のあと、DV との重なりが有り離婚へと至る家族の場合の父への対応という固有の課題に男親塾は応答しているが、そうした機会提供の議論もすべきだろう。諸外国では暴力事案の離婚後の面会交流にはガードをつけることが多いが、それは監視付きなので、もっと積極的な父性への働きかけという意味である。面会交流殺人事件という極端な事例ではなにしろ、そのすそ野は広く父の子育て力をつける、つまりケアする力の構築は社会的な課題となっており、とくに離婚家庭だけではないが、まずはこうした契機をとおして父親教育ができればと考える。離婚後のマザリングに対して敵対するようなことではない健康的な離婚後の養育をめぐる関係性の構築が欠如しているとそもそも子どものための交流にはならないだろう。親としての子どもの観察の交換ができる程度には面会交流の過程でのコミュニケーションが求められる。

７．愛なのか暴力なのか

-ケアと暴力の原初形態-

そのコミュニケーションは関係性に根ざすべきである。たとえばこんな女子学生がいた。授業の前に彼氏から携帯メールがあったと相談にきた女子学生。彼から「俺のとっている講義が休講になったのでこれから会いたい」とメー ルがあったという。彼女はこれから始まる私の講義がある。担当しているのは社会病理学という授業だ。デートバイオレンスや DV のことも話した。私にも娘がいるので「そんなやつ、別れてしまえ」といいたいところだが、教壇からそんなことはいえない。教育の対話になるようにこんなことを問うた。「あなたは同じことをしたことがありますか」と。彼女は自分の授業が休講になってもそんなことはしないと答えた。彼は自分の時間を中心に考えているから、そんなことができるのはないかとさらに問いかけた。相手の時間を自由にできると思っているおそれもある。このことを話してくれたのは小さなことのようだけれど、授業で聞いた親密な関係性における暴力の中心にあるコントロール行動とこの出来事が重なり、少しばかりの躊躇をおぼえたからだという。彼の望みに応じるのが愛情かしらと思ったともいう。今までとは異なる視野で恋人の行動をみることができてきたように思った。愛情を供給する側はいつもそれに応じることを愛という名のもとに求められる。だいたいは女性だ。突然のように会いたいといい、出てきてほしいといい、愛情を示してほしいという。時にはセックスしたいと強いられることもある。彼女はいつも相手を尊重しながら行動しているので、おそらく相互の関係の仕方にコントロール行動がある。こうした関係はコミュニケーションそれ自体が非対称である。愛情という名のもとに自分の時間を割くべきだと一方は思い、他方は応答しないと愛情に欠けているのか思ってしまう。これはジェンダーの作用だ。ジェンダーは親密な関係性や訴求し合う関係性にあって愛と拘束・束縛を共存させる。男子と女子では親密さ感覚が異なる。関係性が調子の良いとき、

拘束は愛情のように感じる。そうではないと暴力的にみえてくる。親密な関係性だったからこそ、関係が壊れると憎悪や復讐へと展開する。学校で性の問題を扱うときにはこうした関係性の視点とあわせていくことが大切だ。

８．面前 DV のリアリティ−「アンパンマンが嫌いだ！」という 5 歳の男の子

母子でシェルターに避難したことがあるという母親の DV 被害体験を聞いた。その息子は現在は大学を卒業しているという。母親の被害体験のなかでも心を痛めたのはアンパンマンをみたくないという当時５歳の息子の話だった。「アンパンチ！」というシーンが夫の暴力場面と重なるのだという。子どもたちが好きなアニメをみることができない程に面前で暴力を振るっていたのかと思うと聞いているだけで辛くなった。

さらに妻にはその文脈も辛いのではないかと心の中で思った。しかし、ずいぶんと時間がたったこととはいえ、それ以上質問はできなかった。アンパンマンの暴力は、暴力が行使される際の常として、バイキンマンという悪をやっつける「正義のための暴力」として使われる。暴力を振るう夫も同じような言い方をしていたのだろう。「殴らせるお前が悪い」と。それがバタラー（慢性的に家族に暴力を振るう人、batterer）の常であるからだ。言葉に出さなくとも、殴る男性の「独り言」として心のなかの声がささやく。暴力を正当化するように機能している。男性の暴力を支える信念が垣間見える（アンパンマンの名誉のために一言。アンパンマンは自己犠牲的でもある。少々複雑なつくりになっているが殴る人は都合のよいところだけを真似る）。

この正義の暴力という意味づけは、社会のなかではよくある記号（勧善懲悪物語、テロ対策、暴力で強くなるなど）として流通し、個々人の動機として汲み上げられる。暴力、いじめ、ハラスメント、虐待、体罰などの対人暴力を正当化する説明として作用する動機の語彙となっている。もちろんそれは加害者にとっての正義なので身勝手な正義である。

正義の声は、男性の暴力加害者によくみられる語彙である。彼らは「糺すこと」が好きである。その基準は自らが設定する。警察になりたがるとでもいえようか。コントロール感が満たせるからだろう。他者非難も好む。怒りの火種を至る所からみつけてくる。怒りは自らを活性化させ、エネルギッシュにするてっとり早い感情だからである。合理的にできている。

正義の暴力という意味づけは、国際社会においてテロ戦争が昂じていく過程から、離婚問題で男女間の葛藤がピークに達していく過程、そしてけんかで互いのあら探しが深まっていく過程にいたるまで、実に多様で身近にある。自らの主張が正しいと思い込み、互いに譲らない。しつけのためと称して虐待をくわえる親も子どもをきちんとさせるためにという正義の動機を語る。それほどに正義と暴力は近い領域にある。怒りが暴力を振るわせると思いがち。その前提にはいくつかの留保がいる。怒らせるお前が悪い、この怒りは統

制できないので行動化はやむを得ない、人は感情には責任をもてない、家族や親密な関係性はそうしたものだなどという一連の思考と行動の連鎖が瞬間的にできあがる。

5 歳にして息子は面前 DV を察知する。それをアンパンマンを見たくないというかたちで表現する。子どもへの影響は多面的であるが、その息子、法律学を学び、暴力に対応できる法曹になりたいといっているらしい。認知的な感性も育まれているので暴力の連鎖にはならないのだろうけど、幼い子どもの反応から学ぶべきだろう（『DV にさらされる子どもたち–加害者としての親が家族機能に及ぼす影響』ランディ・バンクロフト、ジェイ・G・シルバーマン、幾島幸子訳、金剛出版、2004 年）。

９．加害の語りのコミュニティの向こう側にあること–アロ・ケアリングのほうへ

そこでなんとか未来を志向するために事後的な対応や暴力・虐待の防止という両面から考えていくことが必要となる。子ども虐待のある家族への介入と支援はすでに筆者は従来抜け落ちていた男性・父親向けのグループワークである男親塾として取り組みをすすめているが、それは単に加害の語りのコミュニティではなく、父性の涵養を社会的に促すためという目的もある。肝心なことは親対策のテーマは子どもの利益がメインであるべきことだ。その限りでの親支援である。親のための家族再統合ではないし、家族システムのなかの最も弱い環を対象化すべきだろう。その上で、社会的養育を意味するアロ・ケアリング allo-caring やアロ・マザリン allo-mathering の概念にならいたい。allo とは「他の」という意味であり、核家族だけに養育を押しつけない社会の形成を意味する。子育てコミュニティのことである。社会全体が責任をもって子どもを育てあげる方策や指針を求めていくことを意味する言葉である。別の機会に紹介していきたい。

なかむらただし（社会病理学／臨床社会学）

ケアマネの、システム視考

～この先、どうなる？　ケアマネでいられるかな～

北海道で働くケアマネジャー

木村　晃子

まさかの展開！

私は、職住近接というのが好きです。きっと、私の生い立ちに関係しているかもしれません。私の父は、田舎町で高校教員をしていました。いつでも、父の勤務する学校の近くに住まいがありました。父は、朝早くから、或いは休日も学校に足を運んでいました。

また、父と買い物などに出掛けると、出先で、教え子やその保護者達と遭遇し、挨拶されている父の姿も目にしていました。そのような、田舎町の良さを感じて育ったことが影響しているのだと思っています。

平成 17 年に、自分の住まう町で、ケアマネジャーの事業所を自分で立ち上げました。自分の住んでいる町だからこそ、この町を良い町にしたいという思いをもっていました。ケアマネジャーとして、支援を展開することは、今の自分の地域環境を良くしていくことに他なりません。高齢者支援をしつつ、いつかこの町で暮らす将来の自分に支援を置き換えながら、日々の仕事に向き合ってきました。ずっと、ずっと、この町で暮らし続ける。当分の間、この町で仕事を続ける。そう思っていました。

ケアマネジャーの仕事は、支援を必要とする高齢者の課題（ニーズ）と、対応する社会資源を結びつける仕事です。社会資源は、制度のサービスだったり、制度外のサービスだったり。地域住民の支え合いだったり。様々な資源を繋ぎ合わせていくのがケアマネジメントです。自分の暮らす町でケアマネジャーの仕事をすると、ある時にはケアマネジャーとして支援を必要とする人に関わります。けれども、ある時には、同じ住民という関係にもなります。ケアマネジャーとしてできないことも、地域住民としてならできる、ということも多々あります。

例えば、朝のごみ捨てという行為があります。ケアマネジャーとしては、ごみ捨てに困難を持った利用者に対して、ごみ捨てができるように支援の体制や協力者を探すことが必要です。住民としてできることは、自分の近隣の人のごみ捨てを代行することも可能です。職住近接であることのメリットはこのようにあると感じています。

職住近接であると、休みの日などに、仕事の関係者と顔を合わせることが、負担に感じるという人もいました。そうかもしれません。けれども、仕事関係の人と顔を合わせたとしても、多少の挨拶程度でその場は終わります。私は、そのようなことに負担はあまり感じることはありませんでした。

このようにして、職住近接で１３年もの間仕事を続けてきました。これからも、続くと思っていました。けれども、諸事情があって、この３月をもって、現職を辞めることになりました。諸事情の詳細は記すことはできません。退職を決めたのは自分自身でしたが、その決定までのプロセスは非常に不本意なものでした。しばらくの間は、喪失感がとても大きかったのは否めません。予期せぬことが時々起こってしまうものだと思いましたが、予期せぬことが起こるのも人生においては、当然のことかもしれません。

さて、ケアマネジャーという仕事を天職に感じていたものの、ついに転職を覚悟しました。何をしていこうかと考えています。これまでの経験からすると、ケアマネジャーとして再就職をすればよいだけなのですが、ふと今まで通りの道を歩むということに疑問を持ちました。ケアマネジャーの仕事は大好きです。でも、そこにこだわらなくてもいいかもしれないと考えるようになりました。これからは、今までの経験を活かしつつ。これからの自分の人生を納得いくように歩んでいこうと思っています。次号では、どんなことを書いているのか、３か月後の自分が楽しみです。

一旦、ケアマネ終了です。

街場の就活論 vol.32

～新卒採用とキャリアに関するハナシ～

団 遊（だん あそぶ）

【作業的な色合いが強い仕事について】

人手不足

最近、サービス業をしている友だちからたびたび、「アルバイトが集まらない」という話を聞かされる。シフトが全くまわらないのだそうだ。コールセンターを請け負う会社の友人も、同じように「人が集まればもっと仕事を引き受けられるのに」と残念そうな顔をする。こちらは社員募集だが人が集まらないのだそうだ。食品工場に人材を派遣する会社の社長は、登録者を増やすのに躍起だ。自宅まで送迎をするなど工夫を凝らしていたが、それもこれも、人が集まらないからである。新聞やニュースを見ていると、日本は労働力不足だと繰り返されている。果たして本当なのだろうか。内閣府の発表を元にすると、ニートの数はここ最近それほど減っていはいない。若年層のニートは若干減っているが、30 歳近辺のニートの数は変わらないそうだ。労働力不足だというニュースを見ながら働かないことを選ぶ人が依然として一定数いるということだ。

企業誘致の今・昔

以前は企業誘致といえば、土地を用意して、税金面を含めた優遇措置を用意しメーカーの工場を建ててもらうことが王道だった。理由は、工場は大きな雇用を生むからだ。誘致を成し遂げるために、知事をはじめとした自治体役人は企業を訪問し PR を繰り返す。しかし最近はどうも事情が変わってきている面もあるようだ。ぼくは今、関東近郊のとある県が主導する、リモートワークを推進するプロジェクトに関わっている。リモートワークとは、会社以外の場所で遠隔で仕事を行う勤務形態を指すが（テレワークと呼ばれたりもする）、その拠点に「とある県」はなりたいと考え、環境を整備しつつ、首都圏の企業に「お

試しリモートワーク」をしてもらうことで実績を積み、改善を重ねている。その県も、以前は積極的にメーカーなどの工場誘致を進めてきた。しかし、最近はこう言った形で、ホワイトカラーの雇用創出に尽力している。理由は「苦労の末に誘致を成し遂げても、工場には働き手が集まらないから」だそうだ。その傾向は、年代を問わないという。

せっかくお願いして来てもらったのに「人が集まりません」では申し訳が立たない。メーカー側も、進出したものの人の募集コストばかりがかかるようでは、ほとんど意味がない。その結果、働いている人の多くが外国人というケースも少なくなく、そうなると今度は治安面での漠然とした不安（根拠はない）が蔓延するという別の問題が起こることもある。もといメーカーからすると、そんな目にあってまで工場を地方に出す意味はなく、結果的に人件費も低く抑えられ、現地の人にマネジメントまで任せることができる海外に進出する。「日本の工場が海外に出ていってしまう」という面だけを見て、メーカーが“日本を捨てる”と言う人もいるが、一方ではこのような事情もあるように思う。ちなみに、そのとある県の生活保護受給世帯数は増える一方だそうだ。

サービス業を担うのは外国人ばかり

先日、名古屋でベトナム人の労働者を斡旋する会社の社長ほか数名と面談をする機会があった。その席には、飲食店のオーナーと、工務店の社長も同席しており、一緒に話を聞いた。飲食店、工務店ともに人手不足が顕著で、ふたりとも、ベトナムの職業訓練校に訪問済みである。揃ってベトナム人労働者の雇用に積極的で、雇用条件の詳細をその場で確認・詰めていた。賃金は日本人と基本的に変わらない、就労ビザの手配や、日本での生活のフォローアップは斡旋会社が行う。以前は法制上雇用できる期間が 3 年までであったのが、現在は 5 年になった。現場感的にはこの 2 年が大きく、3 年だと「仕事を覚えた頃に帰られてしまう」という印象があったが、5 年に延長されたことで、がぜん雇用機運が高まったようだ。

飲食店の場合は厨房や接客、工務店の場合は大工や現場監督が不足しがちな人材だ。飲食店のオーナーと工務店の社長はこれまで色々な求人募集を行い、年齢を問わず新規雇用を続けてきた。しかし、続かない。すぐ辞めてしまう。突然来ない。連絡が途絶えることは日常的にあり、疲弊していた。そんな状況に斡旋会社の社長は言う。「ベトナム人はそんなことはありませんからご安心ください。そもそも働く動機づけが違います。彼らは稼ぎたいのです。国に仕送りもしたいし、日本で働くことに憧れを持っています。仕事を覚えるスピードも早いし、現地で十分な日本語教育も受けています。そもそも、ベトナムで日本に来るために相当な教育投資をしていますから、辞めるなんてありえません」。実際にベトナム人を雇用しているという社長は、その通りだと頷いた。「職場の上司からもベトナム

人は熱心で仕事を覚えようという姿勢が日本人と全然違うと評判です。もはや日本人を雇う意味がほとんどありません」。

コンビニバイトをめぐる思惑

「今、人間がやっている仕事は、いつかAIに奪われる」。そんな言い方をする人が増えた。この言葉には、働く場の縮小への危機感も含まれていると思う。でも、「今まで日本人がやっていた仕事を、外国人に奪われた」という言い方をする人はほとんどいない（言えば別の問題が浮上するからという面もあるだろうが)。私が講師をしている大学は、留学生と日本人学生が半分づつという学校だが、留学生にコンビニバイトは大人気だ。最近は業務量も増え、覚えることも多いようだが、それでも「比較的ラクで時給がよく、それほど疲れないから」というのが理由だ。留学生にとってアルバイトで重要なのはいかに効率よくお金を稼ぐかであり、エネルギーは極力学業に注ぎたいと思っている。一方で日本人学生にはコンビニバイトは不評だ。「学ぶことが少なく、成長できない」からだという。確かに時給は大事だが、同じくらい大事なものがあるというワケだ。最近は高校生の時分からキャリア教育が施され、「成長」への信念というか、強迫観念を持っているような学生も少なくない。たかがバイト、されどバイト。一定の時間を費やす以上、「より成長につながる時間」にしたいのだろう。

誰もが社長になれるわけではない

「タレントマネジメント」という言葉が一般的になり、企業は将来経営を担うであろう人材と、そうでない人材を分けてマネジメントする傾向が強まっている。新卒一括採用で、ある時期までは全員が社長になる可能性がある、と考えて配置と育成を繰り返すスタイルを改め、欧米にならって、早々に積極的に育てる層と、そうでない層を分けて考える。ひと昔前は、40歳を過ぎてからの異動を見て「自分の未来はここまでか」と現実を知る人はいたが、今は早い会社だと入社数年後にそのことを明確にして本人に伝える。上のクラスに入れた人はモチベーションが俄然高まるが、入れなかった人は、やはりがっかりする。たまたま、その会社の中で上のクラスに入れなかったに過ぎないのだが、本人にとっては「出世の道が閉ざされた」と絶望的な気分にもなる。その絶望感を引きずって「ここではないどこか」探しの転職活動を始めるので、次がなかなか決まらない。キャリア的貧困生活のスタートである。

法定雇用率のクリアに向け職域開発に取り組む企業

障がい者の雇用に関して、法定雇用率がどんどん上がっており（2018年4月には2.2%

に)、雇用機運が高まっている。障がい者の転職市場も拡大しているが、ネックは職域開発が思うように進まない点だ。雇用しても、やってもらうことが見当たらない。名刺を作ったり、データを整理したりといったバックオフィスワークも、量に限界がある。まして、それらの AI に奪われる業務の最右翼といっていい。そのため、どの企業も障がい者の職域開発に熱心だ。

就職活動をスタートする 19 卒業生

今年も 3 月 1 日に就職活動のナビサイトが OPEN し、多くの大学生が就職活動になだれ込む。幸いなことに、今は売り手市場。以前ほど、就職先探しに困ることはなくなった。みんな、それぞれの志望企業や業界を目指し、進んでいく。一方で、多くの雇用の受け皿になっていた作業的な色合いが強い仕事は、日本から姿を消しつつあり、残っているのは高度な仕事ばかりになってきている。一度ドロップすると負の連鎖が始まるというのは、色々な分野で言われることだが、働き方は多様化しているように見えて、本質的な意味での働き方はますます硬直化しているように見えなくもない。以前この連載でも書いたことがあるが、私の授業に出ているある学生が「障がい者手帳を取ってくれれば障がい者枠で採用するけれど、考えてみないか？」と某企業から誘いを受けた。そういった既往歴のある子で、面接でそのことをきちんと伝えた故であった。

文／だん・あそぶ
「人の成長に資する場づくり」をポリシーに、業態様々な 6 つの会社を経営する一方で、「社会課題を創造的に解決する」をモットーに様々なプロジェクトを手がける。元は雑誌の編集者。立命館アジア太平洋大学では「街場のキャリア論」と題して、インターンシップを軸（実習）にそれぞれの人生のビジョンを考えるキャリアの授業を展開している。
団遊の組織論；https://corp.netprotections.com/thinkabout/1536/
団遊の採用論；https://job.cinra.net/special/asoblock/
仕事を辞めたくなったときに；https://goo.gl/bFQdpC

カウンセリングのお作法　第十四回

CON(こん)カウンセリンオフィス中島　中島(みずとり)弘美

『うまく聴く』のなかみ

前回、支援を必要としている人の話を聴くときは、無視せず説教をせず、関心を持って耳を傾けて待つのが大切という内容でした。

今回は、その続きで話し手が話しやすいと感じてもらうような聴き手の反応の仕方について考えます。ポイントは『うまく聴く』です。

「受験に失敗したらどうしよう」

大学受験を控えている高校三年生の女の子が不安を口にもらしたとき、聴き手であるあなたはならどうしますか？

受験に受かるようにという願いがあふれて、その思いから、きっと大丈夫に違いない、精いっぱい勉強しているから、心配しなくてもいいよと、励ましたくなります。

はたしてその態度は、話し手からするとどのように感じるのでしょうか。

励まされると逆効果？

受験に対して少しでも自信があるとき、他者からの言葉かけは、あまり気にならないかもしれませんが、敏感になっている状態のときに、たやすく大丈夫だよ、がんばれという言葉をかけられると、他人事に感じられ、かえってつらい思いをすることがあります。

また、それらのことばが負担になり、いらだちを引き起こすことにつながりかねません。これ以上何をがんばれというのだという感情です。

黙って見守る応援団

さらに、でもね受験はだれでも経験することだからなんとかなるよ、などと、伝えようとすると、話し手は固まってしまうこともあるでしょう。「でも」や「けど」などの反対語で始まる話は、そのあとに説得がはじまるのを瞬時に感じ取るため、話し手は、私の気持ちをわかってくれていないと感じて、それ以上語れなくなります。

聴き手は、主人公である話し手の話をしっかりきいて、みて、感じて、黙って見守る応援団です。話し手が話したいこと、話しながら感じることを表現できるように見守りながら、話し手を応援します。

聴き手は見守る応援団



「受験に失敗したらどうしよう、、、」



「受験に失敗したらどうしようって思っているのですね」



『うまく聴く』のなかみ



聴き手は理解型の対応

ターミナルケアアンケート

鷲田清一著「聴く」ことの力―臨床哲学試論（一九九九年）の中で、あるアンケートに触れています。「わたしはもうだめなのではないでしょか?」という患者のことばに対して、ターミナルケアにかかわる職員はどうこたえるかです。その問いは、五つ。

(1) 「そんなこと言わないでもっとがんばりなさいよ」と励ます

(2) 「そんなこと心配しないでいいんですよ」と答える

(3) 「どうしてそんな気持ちになるの」と聞き返す

(4) 「これだけ痛みがあると、そんな気持ちにもなるね」と同情を示す

(5) 「もうだめなんだ…とそんな気がするんですね」と返す

このアンケートは、ターミナルケアの研究者、柏木哲夫・岡安大仁によって作成されたものです。調査では、精神科医を除く医師と医学生のほとんどが(1)を、看護師と看護学生の多くが(3)を選び、精神科医の多くが選んだのは、(5)でした。この対応は、解答というわけではなく、患者の言葉を確かに受け止めましたという応答であると、中川米造が『医療クリニック』のなかで記しています。

あなたのことばを確かにうけとめました

終末期にある患者さんからこれらの言葉を話されると、医療従事者はなにもできなくなってしまうのではないかと考えます。が、しっかりとその思いを受けとめることが役目です。理解型の対応ともいいます。

カウンセリングではキーワードのくりかえし技法と呼ばれ、支援を必要としている人が話した大切であろうと思われる言葉をそのままくりかえすことです。そのときにはできるだけ聴き手の言葉ははさみません。

また、対人支援理論バイステックの七原則に当てはめると、受容にあたります。ありのままを受けとめることです。

表現されたことばをくりかえすことは、一見簡単な作業のようですが、その言葉がどのような思いのなかから生まれてきたのかを想像しながら、受け止めます。

ターミナルケアの患者さんと医療従事者の対応

患者「わたしはもうだめなのではないでしょうか」という患者のことばに対して、医療従事者であるあなたは、どのように答えますかというアンケート

設問は五つ

⑴ 「そんなこと言わないでもっとがんばりなさいよ」と励ます

⑵ 「そんなこと心配しないでいいんですよ」と答える

⑶ 「どうしてそんな気持ちになるの?」と聞き返す

⑷ 「これだけ痛みがあると、そんな気持ちにもなるね」と同情を示す

⑸ 「もうだめなんだ…とそんな気がするんですね」と返す

鷲田清一著(1999)「聴く」ことの力―臨床哲学試論





⑴励まし型　⑵説得型　⑶調査型　⑷支持型　⑸理解型

自分の話を聴いてもらったという感じがするのは

⑸理解型の対応であると考えられています



ＣＯＮ子さん　心理カウンセラー

『うまく聴く』のなかみ



聴き上手は、うなずく　まとめる　くりかえす

自分の反応の仕方

みなさんは、自分自身の聴き手リアクションについて自覚されているでしょうか。

前のアンケートの設問のうち⑴～⑸のどれを選びますか。ひとつでなくても複数でもかまいません。選んでみてください。

元気がない人がいたら、すぐがんばれといったり、心配ないよといったり、どうしたのとたずねたり、わかるわ～といったり、いつもキーワードのくりかえしばかりだったり、自分の反応の仕方についてのパターンを理解しておくと、客観的な対応につながります。

それぞれは、⑴励まし型　⑵説得型　⑶調査型　⑷支持型　⑸理解型です。

どの対応の仕方が多いでしょうか。毎回理解型の⑸を選ぶ人がいるかもしれません。

ひとつの対応が正解とはいいきれず、いろいろなリアクションを状況に応じてできることも大切であると考えるので、選ばなかった対応についても確認する必要があると考えます。

うなずく、まとめる、くりかえす

困っていたり、悩んでいたりする人の話を聴くときには、すぐに手助けしたい、積極的にかかわりをしなくちゃと、あせりますが、何を伝えたいと思っているのかを第一に理解します。

そのためには、話を聴きながら、肯首うなずくことです。つぎに、重要なポイントとなる単語がでてきたら、その単語そのものをくりかえします。キーワードのくりかえしによって、話し手は、話を聴いてもらっていると感じます。

まとめる

そして、話し手の話がひと区切りついたときに、まとめます。

『模擬試験のC判定は、思っていたよりも悪くてショックで、大学受験のことを考えていると不安で仕方がないのですね』

そのことで、話し手は聴き手が何を理解したのかが明確になり、お互いの関係に信頼感が築かれていきます。

うなずく、くりかえす、まとめるの三つの頭文字をとって、うまくきくです！

聴き上手はうまくきく

うなずく
まとめる
くりかえす





話し手の話を聴いてうなずき、大切なことばをくりかえす、まとめる

話し手の話す内容や話している様子をみて、うなずき、大切なことばをくり返しながら、『模擬試験のＣ判定は思っていたよりも悪くてショックで、受験に失敗したらどうしようとおもっているのですね』とまとめる



難病の
訪問カウンセリング（２）

藤　信子

保健所の難病チームの仕事として、訪問カウンセリングを行うと言っても、事業を導入した当時のＡ保健所で、月２回という仕事だった。それから他の保健所でも，同事業―「ハートの訪問」―を導入していくが、頻度としては同じようである。後に私の都合もあり、Ｂ保健所に行くことにしたが、そこでは（予算の関係で）年５回となっているので、一人の患者の話を継続して聞くことは出来にくい。そこで疾病の社会受容のことを考えながら、「ケアする人たちのネットワークによる受容」を考えようと思った。具体的には難病の人が疾病を抱えながら療養生活を送ることをサポートする保健師が、患者・家族との間で、話が進みにくいと感じる場合に、心理士が訪問して、問題をアセスメントして保健所や、様々なサービスの利用についての患者・家族の思

いを聞いて，どのような次のケアにつなげられるかを考えることを、訪問カウンセリングの目標にした。

家庭を訪問し、心理療法の技法に沿いながら、現在不自由していること、困ることなど具体的な生活の状況を聞き、その具体的な話からわかってくる本人の心理的な状況を考える。また病前の仕事、趣味，対人関係などを知ることで、閉じこもりがちな現在の療養生活が広がる手がかりを一緒に考えた。患者によっては、病気に辛さを家族に怒りをぶつけることで，表す場合もあるが、そういう場合はその怒りを受け止めて，家族も辛いだろうから，保健所の担当者にそのことを話して受け止めてもらいましょう、と話したこともある。怒りはもっともだし、この場合家族を支えることが必要だと思った。また発病に伴う鬱状態などの精神状態に対する理解と対処について話し合った。

そのような中で，疾病受容がなかなか進まないように見える場合は、次のようなことあった。(a)経済的な不安があったり、社会的なサポートが乏しい場合、疾病について考える余裕は無く、問題がことばにならないようだった。このような場合は、安心した療養環境をどのように作れるのか、と考えることになるが、具体的な対策を考え着くことは難しかった。(b)発病したことに対する苦悩，怒りが強く、疾病に関してなかなかことばに出せない様子がうかがえる。このような場合は、今の生活について，ゆっくりと聞くことで、状況を援助者が理解していく中で、患者の気持ちを受け止めるように努力するように努めた。(c)非現実的と見られる生活観、民間療法に頼るなど､疾病を理解したくない気持ちの中で、話すことばがいろいろと変わることがある。ピアグループなど、誰かは患者の話を聞いてくれる人，場所が必要だと感じた。

難病の患者会への参加は､患者にとっても、家族にとっても、情報を得るという道具的サポートになったり、この病気は自分一人だけでは無いという情緒的サポートが得られる。しかし人によっては、病気の進行した人を見て、将来の自分の姿を見るようで辛いということもある。そのような意味では、患者会への参加も、疾病受容のステップだと言えるだろう。患者会参加を勧めるのは、難病の辛さは、病気の状態が継続し、治ることは現在の段階では考えられないという辛さに加え、有病率が低いので、周りに自分と同じ病気の人がいないことも大きいため、孤立感が強くなるためである。「この病気の人は市内に何人くらいいるんですか？」と聞かれることもあった。最近英国で，孤独担当大臣が設置されたが、辛い体験の中で孤立することは，心身に良くない影響を与える。体験を分かち合い、この辛さは「私だけのものではない」と感じることが、考えを次に進めることにつながると思うからである。また患者会に参加することで、会での役割を得ることもあり、そのよ

うなことも，次の療養生活を考えることになった人もある。病気で身体が動きにくくても、家族の中での役割をとるように工夫したり，新しい役割を見つけることは必要だと思うことは，家族には伝える。

支援者のチームのメンバー、ケアマネージャー、訪問看護師、ヘルパー、理学療法士等と話す機会がある時は、難病の身体ケアのために、患者・家族の話を聞くことは、心理的ケアになることを話すようにしている。外出がままならない患者にとっては、身体のケアに訪問してくれるスタッフと話すことは，大事な機会である。話をすることで，患者・家族は自分の考えを探していくことができるようになる。そのためには、聞く方は自分の意見は言わずに、できるだけ話を受け止めるようにしたほうが、患者・家族にとっては、自分の考えを探しやすいということを伝えている。また話を聞くときに、怒りが表現されたり、辛すぎる話が出る時には、怒りは出す方が良いので、聞けるなら聞いて受け止めた方が良いが、辛すぎる話は体調を悪くする可能性もあり、また辛いことを話したことで話を続ける気持が消える場合もあるので、「あまりいっぺんに話されないほうが良いと思いますよ」など言って止めるほうがいいことも伝える。そして自分の役割の範囲でないことで意見を求められる場合は、それに答えるのは自分の役割ではないことを明確に言うようにすること、これは不親切ではなく、チームの役割を理解してもらうことで、患者・家族が療養生活を考えることに役立ててもらうためである。そして守秘性の守れる場でのチームの意見交換で，支援者の疲労，悩みを分かち合うことが必要であること、この場合、良い答を求めるのではなく、自分の気持の風通しを良くすることを目的とした方が良いだろう、ということを話している。このようなことを伝えながら「ケアする人のネットワーク」が機能するようにと考えている。

続・家族理解入門

家族の構造理解・応用編

2018/3/15 版

私の連載、全体のマップ

「蟷螂の斧」と題した連載のここまでを整理しておいて、今後の連載を始めたい。先ず創刊号から開始したのは蟷螂の斧―社会システム変化への介入― part1　1990年児童相談所内外事情、これを12回続けた。その後、part2として「KISWEC家族療法訓練」のドキュメントを連載しようとした。これは既刊「「ヒトクセある心理臨床家の作り方」金剛出版の最終章、「家族療法」の続きのつもりだった。しかし開始早々に、いま書くことでもないかなぁと挫折した。そして「様々なシステムと私」と題して日誌をベースの文章を二回書いた。その後、「蟷螂の斧　第二部　トークライブ2001」を5回プラス番外編１回を掲載したところで、ずっと連載したいと思い、どんな形が良いかを思案していた「続/家族理解入門-家族の構造理解/応用編」（今回再開するもの）の連載を開始した。これは10年ほど前、季刊「そだちと臨床」誌に連載したものを、今の時代と既刊本「家族理解入門」につなげて校正しようとしたものだった。

しかし、これが自分でも意外だったが続かなかった。そして連載はまたトークライブ2001に戻って、6，7回と掲載した。この後、「蟷螂の斧　次の一歩　社会システムを変える」と題して、家族心理臨床を取り巻くより大きなシステムへの介入の試みについて6回連載した。

そして今回から、再び「続/家族理解入門-家族の構造理解/応用編」を第二回から開始する。私的にはこれらはすべて繋がった連載なのだが、読者にはひょっとするとバラバラに見えているかもしれない。

当たり前のことだが今、私が認識できる世界は、私を通じて私に自覚されている。私自身が今日社会を形成する一部である事実から、どこを切りとっても、現在というシステムの一面を語っているのは確かだ。そんな切り口の一つとして「家族の構造」に関心が向いて三〇年以上になった。

面白いものは「これ、面白いぞー！」と伝えるのが私の流儀である。そんなわけで、これからも、さざ波を立てながら、大きなうねりの時代の中、連載は続く。当面は今回再開する「続/家族理解入門-家族の構造理解/応用編」。ぜひ既刊本「家族理解入門」と併せ読んでいただければと思っている。

二　世代の溝

家族の境界と社会

「構造」とか「境界」などといったところで、当然の　　事ながら理解、説明用の仮説で、そのような実態

物があるわけではない。だからこういうことを思いつく人は偉いなぁと思う。「何の感想だ？」と怪訝に思う人もあるに違いないが、考えてみればいい。

雑多なアイデア、思いつきなら、凡人にもないわけではない。流行語と同じように、現れて、もて囃されて、あっという間に消えてゆく専門用語もたくさんある。そんな中で、時代を超えて長く生き残ってゆくキーワードに出会うとつくづく感心してしまう。

誰もが見ているものの中から見つけ出された法則が、それを知る（意識的に自覚する）ことで対象の理解や扱いが万人に容易になるなんて、ほんとうに凄いと思う。自然科学界における様々な法則の発見に等しい、そんな感じだ。

とくに家族などというそれ自体が、時代や社会形態と共に刻々変化する規定しにくいものについて、分かりやすい枠組みを明示するなど、並の技ではないと思った。

*

そこで第一回（本マガジン第22号47ページから。バックナンバーご参照ください。）に続いて「境界」について書くが、とくに内外の境界、このテーマで書くべき事が尽きないのはある意味、不幸なことである。なぜならば出身家族（原家族）と現在の自分の家族の「境界」線など、ことさら話題にならないのが一番だからだ。

そうはいっても、少子高齢化社会の現実を見れば、要介護状態で一人暮らしになった上世代に、下の世代が否応なく巻き込まれ、自分たちの生活に少なからぬ影響を受けている現実の存在は事実だ。何しろ一組の夫婦に四人の親の老後リスク対応が被ってくる可能性の状況である。さらに社会は経済的理由から、じわじわと自助努力、自己責任を迫ってきている。

そしてこれと背中合わせに、経済力のある上世代が子ども世代の分離独立に影を落としている場合もある。

*

ここに書いていることが、二〇一八年の日本社会と強くつながっていることは自覚しておく必要がある。

家族は普遍的なようで、実は非常に流動的だ。同じ時代にあっても、国によって民族によって、社会体制によって、その語られ方は大きく異なる。

今、近くで大きな特徴を抱えて見えるのは中国の家族の現在である。1980 年代、1990 年代と「一人っ子政策」をとってきた国の根幹人口政策が 2010 年代に変わった。しかしそう簡単に人々の意識や習慣が変わることはなく、子どもは増えない。

一方で、一人っ子で育った人達の『小皇帝』などと言われた側面ではなく、誰もが一人っ子であり、高齢化社会を迎えた中国において、膨大になった高齢者福祉にはなかなか手の及ばない現実は、社会体制も、市民生活も、大きく圧迫し始めている。

中国の三世代は、子育ての爺婆世代、賃金労働の両親世代の分業で時代を乗り越えてきた。ここでは日本社会で考える世代間境界のことなど問題にならない。今が経済的に上手くいくかどうかが、家族の大きな分かれ目である。

日本社会と類似の問題は当然存在するが、それを社会の課題として語るかどうかには、国情の違いが大きい。

だから私たちの社会が話題にしていることも、状況が変化するとコロッと変わってしまう類いのものである。あまり、ムキになって今の日本の言説や国民感情を持ち上げすぎると、ひどい目に遭うのは私たち自身だ。我々は自分の言っていることも含めて、もっと用心深く、懐疑的であらねばならない。

次男の忠誠

「忠誠心」というのは内外の境界を考える上で、目安にし易い概念の一つである。誰でもそうだろうが、人は少なからず出身家族の影響を受けて生きている。

具体的な拘束や反発から、心情的な不自由さ、自分でも受け容れたくないと思いながらも解放され

ない習慣など、注意して探せば誰にも多少は存在する。当然の事ながらそこには、ポジティヴなものとネガティヴなものが混在している。

ある家族の面接をしていた時のことだ。主訴は小学校六年生の娘の不登校。しかし面接のちょっとしたきっかけから、話題がドンドン拡がったのは父親の実家との関係だった。

父親は地方の名家と称する一家の出身で、三人兄妹の末子で、兄と姉がある。長子相続で兄が跡を取り、姉は豪華な花嫁支度をしてもらって嫁いだ。末っ子で次男の父親は、大学入学と共に地元を離れ、そのまま卒業、就職、結婚の道をたどった。

妻にしてみれば、ことさら夫の実家の世話になったわけでも、格別な支えをもらったわけでもないから、クールに関係を捉えていた。しかし夫は違った。大学まで出してもらったという意識は、妻のような都会のサラリーマン家庭育ちには理解しがたいことだった。それが実家の慶弔行事がきっかけで顕在化し始めた。

夫の母（父方祖母）の喜寿の祝いにみんなが集まると知らされた日程は、妻が仕事の関係で休暇を取るのが一番難しい年度末だった。しばらくもめた結果、夫だけが出席することになった。ところがそれに際して用意しようとした祝いの品の法外さに妻は絶句した。

「お祝いする気持ちは同じだから言いにくいのだけれど、世帯のことを考えたら、程度はわきまえてもらわないと・・・」

しかしこの点で夫は思いの外かたくなだった。結局、「ではご自由に！」ということになって、妻はあずかり知らぬ事となってしまった。夫婦の間にわだかまりは残った。妻には、私の両親にも同じようにしてくれるのか・・・という気持ちが生まれた。

しかしこれが前例となって、事態は更に発展した。最初の祝いで、実家の兄や姉、そして母からも、「大したものだ。さすが京都に長年暮らしている人のすることはあか抜けている」とか何とか言われて舞い上がったんでしょう、とは妻の言い草だが、確かにそういう傾向に拍車がかかった。

それ以降、お中元、お歳暮、母の誕生日にちょっとしたプレゼント（妻に言わせると貢ぎ物）をと、エスカレートしていった。

無理して購入した一戸建てのローンを抱えながらの親子四人の暮らしは慎ましやかなものだった。子ども達の学費など、今からお金はいくらでも要る。そんな中で夫が、家では誰も口にしたことがない京銘菓や漬け物を、季節ごとにせっせと送り届けている。そしてたまに帰省するとなったら、大騒ぎで手土産を用意する。反比例するように妻の足は遠のいていった。この不満が妻の口からあふれて、とどまることがなかった。

古典芸能や伝統産業などの世界には「家」や「血」を強調するものも少なくない。しかし現在、大抵のことがサラリーマン小市民社会に埋没した感がある。そんな中に、時々こういった忠誠心を求める関係と、それに応えたがる心情が潜んでいる。

もっとも、多くのくの場合、裏側にギヴ アンド テイクの暗黙の約束事が成立していたりするから分かりやすい。しかしこの一家のように、父親の行動のバランスの悪さに、家族一同の気持ちが引いてしまっている忠誠心も存在する。

こんな中で、娘の不登校問題への対応が求められていた。私は「でもまぁ、こうしてお嬢さんのために、面接にも同行しておられるのだから・・・」と父親の努力も評価しようとした。しかし、「この人は娘が不登校になっていることを、お兄さん夫婦やおばあちゃんに言うかどうかを悩んでいるのです。娘のことを父親として心配しているわけではありません」と母は言い放った。

利害の一致

結果としてではあるが、子どもの症状が親の支えになっている場合が少なくない。親の葛藤状況への反応として、子どもが症状を示したり、親のどちらかに取り込まれる形で安定装置の役割を果たしてしまうこともよくある。

時々話題になる『ミュンヒハウゼン症候群』（周囲の関心を引き寄せるために虚偽の話を

したり、自らの体を傷付けたり、病気を装ったりする症例）や、特に児童虐待の現場で話題になる『代理ミュンヒハウゼン症候群』（子どもを傷つけておいて、それを献身的に世話をする母として注目を惹く）など、親子の関係病理に目を向けると、これらもけっして希ではない。

離婚が多発する昨今、夫婦関係は簡単に崩れる。そして日本の現状では、多くの子どもは母親に引き取られて暮らすことになる。現実の生活を考えた選択だとは思う。ただ、この背景に世代間境界を引き損なった母子関係が隠されていたりすることもある。

内外であり世代間

夫婦それぞれの実家と現在の世帯間の問題は、内外の境界問題であると同時に世代間境界の話でもある。

親の側が子どもを手放せない。自立援助ができない。母子密着なんて言葉が一般的認識として蔓延しているのも事実である。

私の友人にも、嫁いだ娘の離婚希望を積極的に応援して、引き戻してしまったとしか思えない親子がある。いったいなぜ、こんなに多くの子ども達が親元から離れられなくなってしまっているのだろう。これが近年、わが国でますます大きな課題になっているものである。

実はここには大きく夫婦・カップルの問題が影響していると思うのだが、そのことは次章の「サブシステム」のところで述べる。

後出のマンガに描いたように、家族関係世界は、メンバーそれぞれが思いもかけない役割を果たしてきているものである。うっかりすると、稼ぎの多い人やしっかり者順に重要なメンバーであるかのごとく思ってしまうが、家族は会社や商店のように、利益を中心に整理されたような分かりやすい小集団ではない。

関係世界の複雑さは本当に不思議なことを作り出している。その一つの典型であるひきこもり現象を、思春期・青年期の個人の心性の問題として語ることに、私はあまり同意していない。

無論、特殊な状態を抱えることになる人があるのは承知している。病気の存在も否定するわけではない。滅多にないトラブルに巻き込まれる人がある事も承知している。

しかし承服しがたいのは、そんな人が大勢いると突然、私達の社会が簡単に認識してしまっていることだ。

「うちのクラスには、ＡＤＨＤとアスペルガー併せて少なくとも七人、軽度発達障害の子がいます」と興奮気味に語る教員の付和雷同性に、私はあきれてしまう。

多くの人間の行動は状況に支配されている。時代の動向や社会環境の変化、対応力によって、出現する問題が千差万別になるのは周知のことである。だから、同じ時代を生きていても、世界各地の人々の身の上に起きる事態は随分異なっている。グローバルに起きていることもあるが、ドメスティックに起きていることも多い。

パートナーは

ある新聞のコラムに「世代間境界」と題してこんな事を書いたことがある。

＊

親の世代と子どもの世代、ここには境界が引かれている。いや、引いておくべきだという方が良いかもしれない。これができずに起きた問題を見てみる。

父親は優秀な技術系のサラリーマン。妻も学生時代から続けている趣味を生かして、ちょっとした仕事を始めていた。とはいっても生計の担い手は夫で、基本的には専業主婦のスタイルだった。

大企業サラリーマンの夫に、転勤の話がもちあがった。小学校高学年と低学年の二人の息子と両親の核家族に転機が訪れた。

中高生になった子ども達の学校問題や、妻の就労が大きな比重を占める家庭の場合ならと

もかく、この一家の場合、常識的な決断は夫の転勤に伴う転居ではないかと思った。

しかし実際は違った結論が出された。夫が単身赴任することになったのだ。妻が自分のしていることを一時手放すことになってしまうのを躊躇したのである。子ども達は単純に、友達と別れることや、見知らぬ土地への引っ越しに消極的だっただけだ。

夫の中にも、家族がバラバラになる事への懸念と天秤にかけた、新しい土地で仕事一本に集中することで得られる充実感への思いがあったのだろう。そうすれば、２，３年でまた戻ってこれるかもしれない。

家族内では、そうもめることもなく、単身赴任が決まった。一時の単身赴任を命じたつもりはなかった会社の方が意外感を持ったかもしれない。しかしそれは個別の家族の選択であり、会社が口を挟むことではなかった。

そしてバタバタと月日が過ぎた。はじめは頻繁だった連絡も、何かあったときには･･･と間遠になっていった。近年ならメール、スカイプということになるのだろうが、当時、国際電話だけではなく、遠距離の通話料は著しく高かった。

しかし今なら頻繁にメールやネット電話の交換がされているだろうと云えるかどうか、そこに確信はない。コストの話は実は、言い訳でしかなかったのではないだろうか。

近くではなかったので、月一度くらいはと考えていた帰宅も、バカにならない交通費に、会社の出張があった時に合せてと、状況任せになっていった。

こんな中で母親は、家族の日々の細々したことを長男に相談するようになっていった。意識しているわけではなく、自然のなりゆきだった。しっかり者の長男は、いろいろ聞かされることで、それなりに母を支える役割を果たせるようになった。今では、家庭の細かい事情は、夫より長男との方がツーカーの関係になってしまっている。そんな中、弟の問題で来談することになった。

この場合、相談の中味がなんであるかより、兄が母親と一緒に弟のことを心配し、意見を言っているのが問題だった。兄も子どもであって保護者ではない。

これが世代間境界の侵犯である。母親が弟のことで、つい兄に相談を持ちかけてしまっている、これが家族の問題だ。だから父親を、単身赴任先から面談の場に来てもらう、これが解決に向けた第一歩になった。

おわりに

総合的判断はしばしば過つ。家族が課題を抱えた時、人はあれこれ総合的に考えて結論を出そうとするように思う。しかしこの考え方はたいして正しくない。

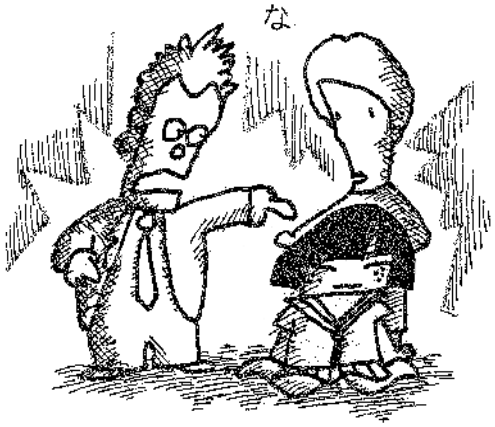
もし家族が事業や仕事であるなら、この判断は正しいだろう。不登校の子に、単位制高校への転校や、高卒認定（旧大検）予備校入学など、多額の金銭を費やすのは失格の事業主だろう。

しかし「家族」は、機能は果たしているが仕事ではない。目的に向けて一直線に進もうとする成果追求型の集団ではない。親はそうではなく居られるから親なのだ。親子関係、夫婦関係、嫁姑の関係などは、不合理さに充ちている。そしてだから強いとも言えると思う。

少々飛躍するかもしれないが、離婚が増えて呪縛から逃れた女性達が、必ずしも幸せなその後を手にしているとは言えない要因のひとつは、不合理さの扱い下手ではないだろうか。

家族生活のマネージメント目標は、何も問題のない状況をつくることでも、全勝することでもない。さまざまな課題を引き受けながら、トータルで五十一勝四十九敗の勝ち越しなら、先ずは良しと考えられる事である。

家族にはいろいろなことが起こる



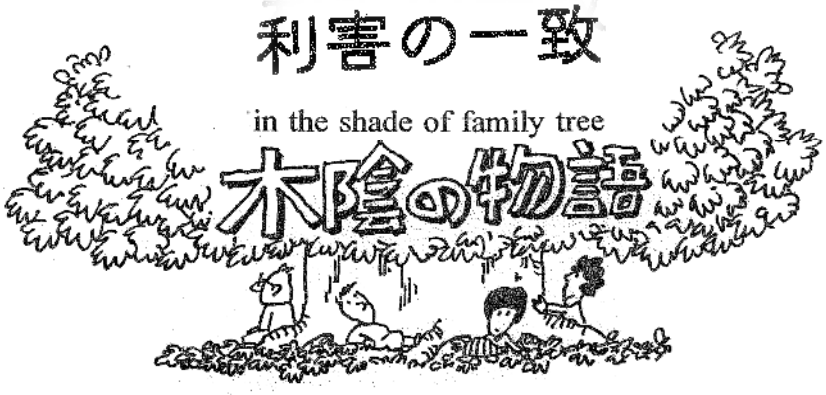
だがその多くは予想のつかないことではない



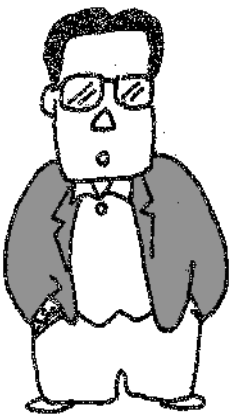
利害の一致

in the shade of family tree

木陰の物語



既に起きてしまったことにも同じことがいえる



こんな家族に会ったことがある。父親が37歳、母親は38歳、子どもが四人いる



長女7歳、二女5歳、三女3歳、
長男2歳

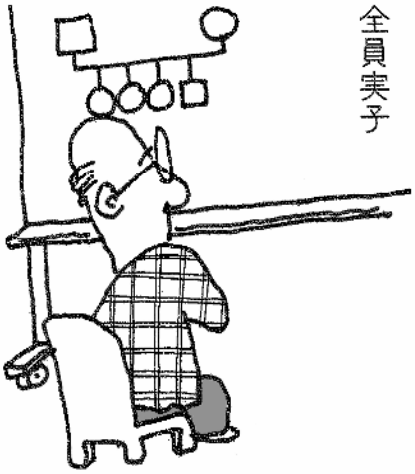


少子化対策にあれこれ国の政策が
動き始めているこのご時世に4人
である

「三人続けて女の子か…、よほ
ど男の子がほしかったのだろう
か」、そう思った。
跡継ぎなんて
古めかしい言葉が
頭をよぎった



同僚と少し考えてみた。全員実子
なのだろうか?
もしそうなら、
三十歳を過ぎてから
四人生んだことになる。
これはずいぶん希な
選択のように思われる



もし子連れの再婚だとしたら、
誰が誰の連れ子の可能性が
あるだろうか?



兄が引き継いだ
郷里の家業を、
弟にも
手伝って欲しいと
兄が求めている
という連絡が
両親からあった



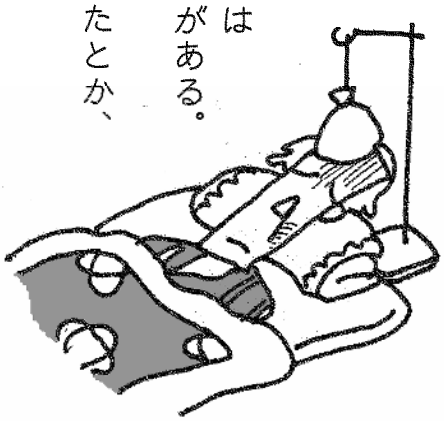
住むところも仕事も用意するから、戻ってこないかという



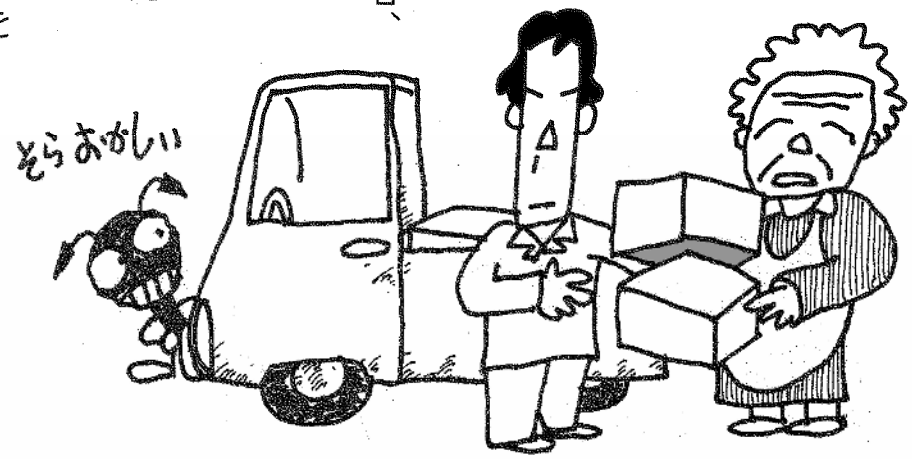
夫の転職に妻の退職、
そして転居。
大きな決断だった



多くの場合、
こういう決断には
何か特別な理由がある。
たとえば両親の
どちらかが倒れたとか、
兄の病気とか



しかし彼らの場合、
そんな理由は
何もなかった。
おそらく両親が
次男も
引き戻したかった
のである。
兄は自分が説明に
使われていることを
知らなかった



そして夫婦は
夫の故郷に戻って
兄と共に
家業を
手伝うことに
なった



妻は専業主婦になり、それをきっ
かけに子どもを生んだ



今、この第一子が
学校に行けなくて
母親が悩んでいる。
まだ二年生である

七歳の子は生まれてすぐに
次々下ができて、
どんどんお姉ちゃんに
ならなければ
ならなかった





さらに四人目は
男の子。
一家の関心は
そこに集中した

そんなタイミングで、学校にゆかねばならない長女が、赤ちゃん返りするようにぐずぐず言い始めた。分かりやすい話である





しかしすぐにその解釈に飛びついてしまわないで、別の角度から考えてみた

見知らぬ土地、夫の家族兄弟の暮らす地域で、母親の孤独感はどんなものだったろう。次々に子どもを産んだのは、絶対的な自分の味方がほしかったのではないのか



職住接近で何もかも一緒の毎日は、母には耐え難い日々だったかもしれない。子育て、家事に加えて、家業手伝いの重なるしんどさ。それを訴えることさえできない暮らし



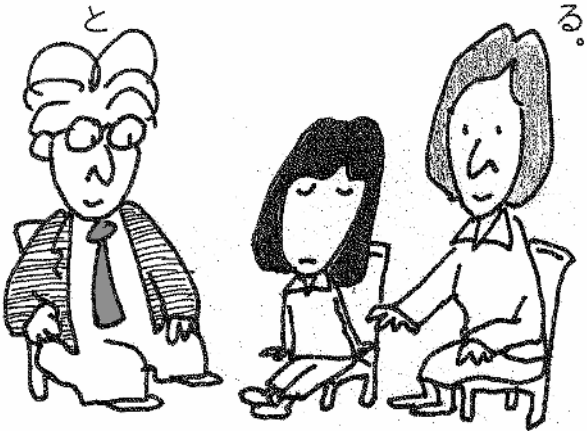
こんな状況で長女の問題が起きた。それは母親に新たな負担を強いるかに見える

しかし、「子どものことで相談に・・」と言えば、家業を置いて出かけることに反対する者はない



私のなかには、こんなかたちで母親孝行する子どもの記憶が少なからずある。誰も意識しているわけではないが、結果的にそうだった。

母親は一日も早く何とかしてやりたいと願ったが、経験的にこういう相談はあまり早々と解決してあげない方が良かった



社会的養護の新展開１

―　社会的養護を終えた若者の自己表現から　―

浦田　雅夫

京都造形芸術大学

昨年の 11 月、京都木屋町にある Modern Times で、映画「チョコレートケーキと法隆寺」の上映、同映画監督である向井啓太さんと、シンガーソングライター中西健さんのトークショーを見た。「チョコレートケーキと法隆寺」は、前から見たいと思っていたけれどなかなか見る機会を逸していたので好機だった。それに、チョコレートケーキとコーヒーも付いてくるというのにひかれたが、何よりもこのチョコレートのおいしさにまた驚いた。しかし、そのおいしかったチョコレートとは裏腹に、上映後すぐに、そうか、「チョコレートケーキ」は、向井さんにとって嫌な思い出、不味い思い出だったのかと、その意味を知る。

施設では毎月誰かの誕生日が開かれる。その時、決まって不味いチョコレートケーキが出ていたのだという。施設の仲間より一足先に小学校卒業を機に児童養護施設を退所した向井さん。「サバイバーズ・ギルト」というと大げさに聞こえるかもしれないが、ある種の罪悪感を抱えながら、施設を後にしたものの「希望の楽園」はそこ（家庭）にはなく、苦労されてきた軌跡が感じられる。施設・小学校時代の仲間との生活、親、そして自分自身と向き合う素晴らしい作品だった。そして、何よりも、そのあとの中西健さんとのトークもよかった。向井さん同様、中西さんも児童養護施設で生活してきた当事者で、作歌兼歌手として自己表現を続けておられる。私はまるで太陽（中西さん）と月（向井さん）のような雰囲気を醸し出すふたりに共感して、すぐに、次回のメヌエット（施設退所後のアフターケア支援団体）のイベントに参加していただけないだろうかと思った。そして、ついに、今年の１月にそれは実現した。

１ 月のイベントでは、メヌエットを利用してくれている浦上さん（写真：マイクをもつ手前の方）も参加してのトークが実現。



向井さんの作品は、見る人によっては「施設での生活ってひどいな」と感じ、「なんだこの施設批判の映画は！」と怒り出す人がいるのではないかと思う場面もある。浦上さんは映画を見た感想を「僕のいた施設は、すごい恵まれていたんやなと思いました。」と語った。

単純に社会的養護の「退所児童」といっても、現在の年齢、入所していた理由、在籍期間、現在の家族との関係など、それぞれの個別性が相当にある。いつの時代でも施設間を超えて、「施設のあるある」は一定確かにあるが、「そうだったの」「うちと全然違う」ということがいっそう多くなったきがする。特に、この１０年ほどの間に施設ではケア単位の小規模化はどんどん進み、職員配置基準や施設内虐待の禁止などの法定化により生活形態やケアのなかみが大きく変化してきている。



リハーサル中の中西健さん

「証」

限られた時の中で　何ができるだろう
限られたこの体で　何が守れるだろう
誰でも不平等に生まれてきて
不平等に育てられて
それぞれの道をゆく
小さな小さな愛に気付き
大きな大きな勇気に変わる
咲いた花決して枯らさぬように
いつまでも燃やすこの命

（歌詞の一部を本人の了解のもと掲載）

社会的養護とは、保護者のない児童や、保護者に監護させることが適当でない児童を、公的責任で社会的に養育し、保護するとともに、養育に大きな困難を抱える家庭への支援を行うこととされ、これまで児童養護施設などでの施設養護がその中心を担ってきた。しかし、近年、国は里親やファミリーホームなどでの養育へと大きくシフトチェンジを図っている。今後はこういった動向や、社会的養護を終えた若者たちについて発信していきたい。



「チョコレートケーキと法隆寺」（監督：向井啓太、制作：慶応義塾大学　藤田修平研究室 / 59 分 / カラー ）

学校臨床の新展開をひとまず終え、社会的養護の新展開へ　つづく

第２章　物語としてのキャリア

―森の語り場―

北村　真也



4. 機会開発という考え方

こんな生徒がいました。私立中学に通っていた彼女は、先生との折り合いが合わなくなったことがきっかけで、学校へ行けなくなりました。どこにも行くところがないので毎日家にいて、しかたがなくやり始めたことが、絵を描くということでした。最初は漫画のイラストから始めて、やがて外国人の映画スターのデッサン、それから外国の絵本のイラストへと、どんどんその対象は変わっていきました。そして知誠館にやってきた時は、かなりの腕前になっていたのです。

知誠館に通い始めた彼女には、少し変わったところがありました。それは教科の学習の場面で、先生の説明は聞いているもののどこか上の空。ふと目を離すとノートにはなにやらイラストのスケッチが…。彼女にとっては、絵を描くことがいつもメインの文脈で、教科の学習はサブの文脈。そんな感覚を私たちはいつも彼女に対して抱いていたのです。そしてそれは、学習の時だけではありませんでした。学習以外で彼女と話している時も同じでした。やはりスケッチブックを手から離そうとはしないのです。実際、彼女の絵は、周りの誰もを唸らせるだけの作品でもありました。プロとしてやっていけるのではないかと、いろいろな人に言われることもありました。そして彼女は一旦描き始めると、食事もとらずに没頭するのだそうです。その集中力は、半端なものではありませんでした。

私たちは、そんな彼女の作品を一度芸術大学の先生に見てもらうことを考えました。彼女の才能やその作品の完成度を判断してもらいたいと思ったのです。すると先生は彼女の才能を大変高く評価し、「今すぐにでも大学に来てもらいたいくらいです」というコトバを投げかけてくれました。自信をつけた彼女は、その後芸術コースを持った高校へと進学を希望し、ストレートに芸術大学への進路を目指すことになりました。

彼女は学校へ行けなくなったことで、自分の新たな才能に気づかされていったのです。それは学校へ行っている時は、予感さえなかったものでした。不登校というのは確かに当事者である本人にとっても家族にとっても、大変ショッキングなことです。しかし、そうなって初めて気がつくこともあるということを、彼女は私たちに教えて

くれたのです。

また知誠館で毎年行われる卒業式の場面では、「不登校になってよかった」という声をよく耳にします。当事者である若者たちにとっても、あるいは一緒に苦しんできた親たちにとっても、学校に行かなくなったことで見えなくなる世界があるように、学校へ行かなくなることで初めて見えてくる世界がある。そういったことを、あらためて気づかされるのです。

多くの不登校やひきこもりの当事者である若者たちは、自分が学校へ行っていないことに対して後ろめたい感情を持っています。そこには問題を持った私がいて、親に心配をかけている自分自身を否定している私がいるのです。中には親と葛藤を繰り返している若者たちもいるでしょうが、その葛藤を繰り返せば繰り返すほど、彼らは自分自身を責め続けるのです。彼らにとっても、親たちにとっても、不登校やひきこもりは否定されるべき問題行動なのです。

ところがこれらの問題行動が、何らかのきっかけで、若者たちが大きく変わるためのかけがえのない経験となることがあります。まさに問題があるからこそ気づけたり、問題があるからこそ変容を生じさせることができる。そんな機会が存在するのです。こうした考え方を私たちは、「機会開発」*opportunity development*と呼んでいます。機会開発の考え方では、たとえ失敗や問題であっても、あらゆる経験を自分の学びとして取り込みます。不登校やひきこもりの経験を持つ若者は、学校や友達関係、あるいは家庭の中で何かしらうまくいかなかった経験を持っていることが多いです。そしてその経験の中で勇気をくじかれ、やる気をなくしたり自信を失ったりしているのです。うまくいかない状況は、その人を自ずと立ち止まらせます。しかし多くの場合は、その壁を越えることはできずに、何かに依存したり何かに逃避したり、何か責任転嫁することになっています。ところが機会開発の考え方では、問題そのものを変容の機会として捉えるのです。

問題そのものが変容の機会となっていく。そのためには、当事者である若者たちの認知、あるいはバイアスそのものを一旦外して、新しいものへと更新しなければなりません。そしてそこには、自分とは違った視点、あるいは俯瞰性を持った視点が必要となります。そしてそれを足掛かりとして、今まで自分自身を支配してきたフレームの存在に気付く必要があるのです。このことは閉塞的な状況に対して、その振り返りをおこなうことへとつながり、さらには、閉塞的な状況を突破するために新たな視野を手に入れることにつながっていくのです。

さらに問題を変容への機会へと置き換えていくためには、コトバの存在が必要不可欠です。若者が自分のコトバを使い、自分のこれまでの経験を問題から機会へと変換していく過程が、とても大事になってくるのです。そしてそのためには、彼らが借り物のコトバではなく、自分のコトバを手に入れていることがその前提となるのです。「自分のコトバとは何か」。その問いがさらに重要になるのかもしれません。

この章では、若者たちがライフストーリーを語るというセッションの場面を取り上げました。これは彼らが、「辛く苦しい過去」の中にしまいこんできた自分自身と向き合う作業であり、その作業を通して今の自分自身を見つめる場面です。つまりここでは彼らの過去が窓となり鏡となって、過去の自分と現在の自分が出会っていくことになるのです。これは対象化と呼ばれ、過去の自分自身を現在の自分自身が見つめ、コトバに置き換える作業を通して、変容を遂げた現在の自分自身がより明確に認識されていくのです。

またこの語りの場は、仲間たちとより深く出会っていく過程でもありました。出会いは感動を呼び、感動は新たな出会いを生みます。感動は、出会った両者に共通の要素が存在していることの証明であり、他人事が自分事へと変わっていく過程でもあるのです。従ってこの森の語り場に参加している若者たちにとっても、対話型の双方向のやり取りを通して自分の思考そのものがどんどん更新されていく、まさに変容の過程を経験しているように思います。

「機会開発」という考え方は、若者たちの変容を前提としています。そこに変容が生じた時、彼らの問題が未来への機会へと置換されていくのです。そしてその変容が生じるためには、自分とは違った視点を持つ他者の存在、そしてそんな他者とある一定以上の深さで出会うためのある意図（アフォーダンス）を備えた場の存在、さらには変容した自分自身を認識していくための過去の自分への対象化とそれを表現する自分のコトバの存在、そんな条件が必要となっていくと考えます。

繰り返しになりますが、知誠館の最大の使命は、不登校やひきこもりの若者たちの変容を促すことです。このことは、そのままの彼らの状況を尊重するのではなく、より積極的に彼らの人生が活性化していくことを期待するものです。だからこそ、その変容の可能性をどこまでもあきらめないのです。私たちは、不登校やひきこもり経験を持つ若者たちを、従来の価値観の中に縛っておくことに対してとても懐疑的に考えています。そうではなく、彼らの現状に寄り添いながらも、そこから生じていく変容の新芽を大事に育てながら、もう一度その人生の物語を再構築して、新しい物語の可能性を見出していく。まさに物語としてのキャリアを経験してもらうことに尽きないように思います。そしてこのことこそが、ドイツの社会教育が目指すベルーフ（天職）*Beruf* の獲得へとつながっていくのだと思うのです。



『幼稚園の現場から』
32・幼稚園の音楽活動その３（コード奏法）

原町幼稚園園長　鶴谷主一（静岡県沼津市）

ピアノの苦手な先生急増！

幼稚園の先生というとピアノを弾いたり歌を歌っているイメージがあると思いますが、最近は弾けない先生多くなってきました。

保育士資格や幼稚園教員免許を取得する際には器楽演奏（ピアノ）の単位は必要ですが、そのハードルは年々低くなってきています。

最近の保育士不足、教員不足の影響もあり、保育園はもともと無いところが多いのですが、**幼稚園でも採用試験からピアノ伴奏を外さないと学生が集まらない**という悩みもあります。

私が原因の一つだと思っているのは、昭和の時代には女子の筆頭だったピアノのお稽古は激減し、幼稚園児の習い事は、体操教室やスイミングなどの身体系が主流になっています。

そして幼児教育系の大学・短大等（以下養成校）に入学してはじめて鍵盤にさわる人が多いからだと思っています。

そんな事情もあって各幼稚園の先生の演奏技術もじわじわと落ちてきて、保育園に至っては**保育室から歌声が消えるというような事態も起こってきているのです。**

もちろん、ピアノに限らず音源（既製の音源や伴奏を録音するなど）を使っていくことで、ある程度のレベルは保てると思いますが、子どもたちの豊かな音楽体験を担保するためには、その場で保育者が弾くということが大きな意味を持つことは言うまでもありません。ピアノに限らずギターなど、伴奏しながら歌える楽器なら同様の効果を得ることができることは頭に置きつつ、今回はピアノの演奏技術の習得について考えていきます。



養成校での実態

養成校ではピアノ技術の単位を取らなければなりません。それはどのような過程で行われているのでしょうか？

私の園で、試験的に「ピアノが苦手な学生集まれ！」というワークショップを開催したところ４大に通う３年生が集まってくれました。一様にピアノが苦手、**ピアノのことを考えるとお腹が痛くなる。もう考えたくない！**とかなりの苦手意識を持っていました。

学校ではどんな授業を受けているのか尋ねたところ「指定の曲を渡されて、できるまでひたすら一年間その曲をやっている。」という驚く話も聞きました。これでは苦手意識が積み重なって、ますます鍵盤に向き合う意欲は無くなっていくだろうと想像します。

文科省が改定してくれないとどうにもならないかもしれませんが、ピアノ実技の課程がクラシックピアノをベースとして組まれていて、学生に教授する側の先生方もクラシックピアノ出身の方が多い。その中で伝統のように行われてきた授業が**学生のピアノアレルギーを生み、ひいては保育の質を下げている根本的な原因があると考えます。**

幼い頃にピアノを習った人なら、いきなり“バイエル”などの教則本を渡されても苦にならないでしょうが、初めての人には譜面も読めないところから一つ一つの音を追っていくなど、ピアノへの抵抗感も大きくなるってもんです。しかもやってて楽しくない。

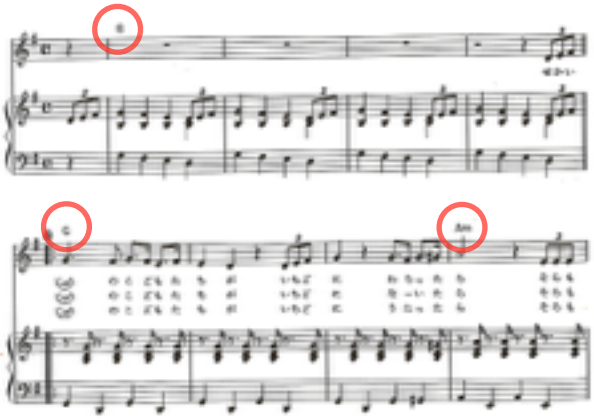
「小さい頃に習っていなかった」ということを前提に新しいカリキュラムを組んでほしいのです。やりようによっては**４年間もピアノに向き合えば、ある程度現場で使えるスキルを身につけることができる！**と私は考えます。ピアノ演奏はできなくても、歌の伴奏はできます！その方法を提案します。

コード奏法をオススメ！

養成校の先生方も、学生も意外と知らないのが「コード奏法」です。ピアノでつまずいている方は、ぜひ知って頂きたい！

次の楽譜は中川ひろたか氏の「世界中の子どもたちが」という曲の３段譜といって、上段がメロディー、中断下段が伴奏という構成になっている私たちがよく使う楽譜です。音符♪を見ると複雑に動いていますので、苦手な人が見たら「うわ～無理」と思いがちですが、上段の上に書いてあるGとAmというアルファベットが『コード記号』です。

前奏から歌い出しまでGとAmのたった２種類しか使われていません。



Gが書いてある小節はずっとGのコードでリズムを刻んでいれば体裁は保ててるので、Amが出てくるまでは、それをキープすれば良いのです。たくさんある♪は無視しても歌はうたえます。そんなところからスタートすれば苦手な人も取りかかりやすいでしょ？

鍵盤のきほん

基本を押さえておきます。

鍵盤は12個の音が１セットで、まん中を基本とすると、１セット上をオクターブ上、下をオクターブ下と決めてあります。ピアノの鍵盤を見るとずらーっとたくさんあるので目眩がしそうですが、12個の音のセットが並んでいるだけのことです。

12個の音はドレミファソラシと名前が付いているのは知っていますか？あれ？７個だ。あと５個は？ピアノの黒い鍵盤です。これは白い鍵盤の間にあるので、たとえばドとレの間だったら、ドの半音上という意味でド♯（シャープ）を付けても、レの半音下という意味でレ♭（フラット）を付けて表します。どっちでも音は同じですが、和音の構成によって使い分けをします。

日本語ではドレミファソラシという音名に英語では　ＣＤＥＦ　ＧＡＢという記号がついています。「ドを弾いて！」というかわりに「Ｃお願い！」でも同じ意味です。

コードを使うためには、かけ算の九九と同じように覚え込んじゃうことが必要です。

まず、この**ＣＤＥＦＧＡＢ**をスラスラと言えるように覚えて下さい。



補足しておきますと、ハ長調とかト長調という言い方は、昔のハニホヘ･･･が残ったもので、現代だったらド長調、ソ長調と改定してくれれば分かりやすかったんですが、初めての方には分かりにくくなってますね。覚えるしかありません。

コードの法則を覚える

さっき覚えたＣＤＥＦＧＡＢは単音を表していましたが、コードは和音の塊に名前を付けたものになります。

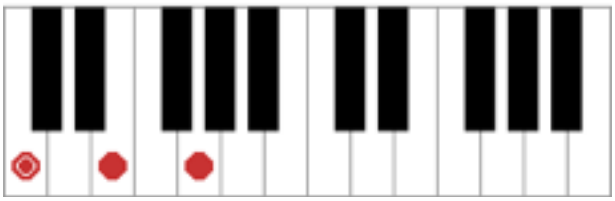
ベースになる音から、最低３音を加えた和音、たとえばＣ（ド）をルートとすればＥとＧを加えて「Ｃのコード」になります。

Ｃはドという単音を表しながら、Ｃコードという意味の、二つを表すことになります。

▶コードはルートの音（１番目）に３番目と５番目の音が重なって基本３和音でできています。
通常白鍵だけを数えて《1−3−5》と言ってますが、黒鍵を入れるとルート（１番目）から数えて３番目は５つ上、５番目は８つ上の音のことになります。→《1−8−5》

▶次の図はＣメジャーコード（明るい感じの和音）よくご存じのドミソの和音です。

C



▶コードは１つの曲に何個か出てきますが、幼稚園で使う曲はなるべく黒鍵を使わないＣメジャーが多いので、最初に覚えるコードはＣ、Ｆ、Ｇの３つが良いでしょう。弾いてみると分かりますが、お辞儀の音です。

▶基本のコードを示しておきます。

↓ルートの音=コード名

Ｃ＝（ド　＋ミ　＋ソ）

Ｄ＝（レ　＋ファ＋ラ）

Ｅ＝（ミ　＋ソ♯＋シ）

Ｆ＝（ファ＋ラ　＋ド）

Ｇ＝（ソ　＋シ　＋レ）

Ａ＝（ラ　＋ド♯＋ミ）

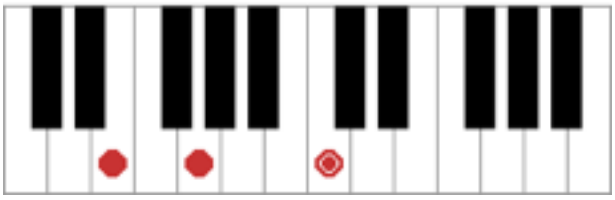
Ｂ＝（シ　＋レ♯+ファ♯）

▷これらはメジャーコード（明るい響き）と言います。半音を数えてみると１+5+8の法則で積み上がっていることが分かります。

▶次に**転回形**を覚えましょう。

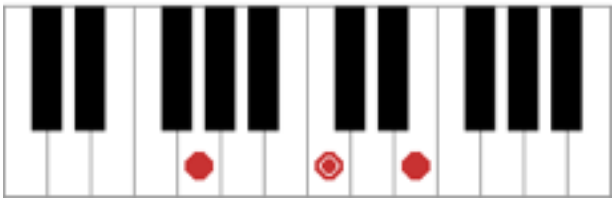
コードの基本の３音は、どのオクターブ位置で押さえても同じ和音になり、コードとして成り立ちます。なので、次のように押さえてもＯＫ！メロディーとバッティングしないように、弾きやすいように使い分けます。これを転回と言います。

C



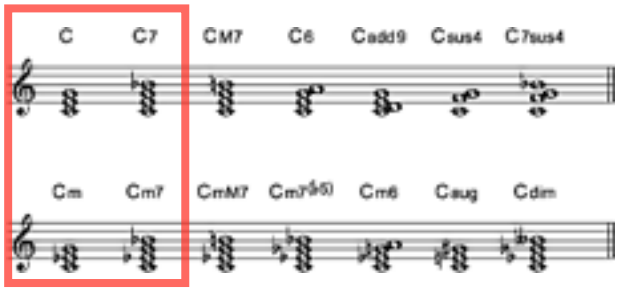
※第２転回=ミソドで押さえる

C



※第３転回=ソドミで押さえる

コードには種類がある

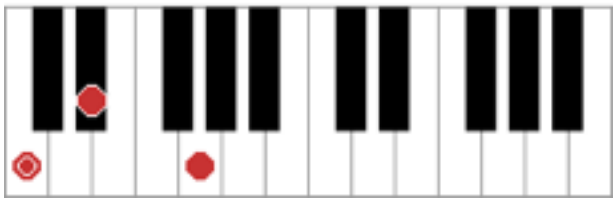


上の表でコードの種類は14パターン。ルートはＣですが加える音によって名前が変わってきます。12個の音×14=168！そんなに覚えられませんよね。覚える必要はありません、たいてい使うのはＣ、Ｃ7、Ｃｍ（マイナー）ぐらいです。

▶コードに書いてある数字7、6、9は、ルートに対して何番目の音を加えるかということを表しているだけです。♭が付いていると付いている音を半音下げる意味、♯は半音上げる意味、♮は元に戻す記号です。

▶ｍはマイナー（寂しい響き）コードの意味で、３番目の音を半音下げるという意味で、《1−♭3−5》もしくは《1−4−8》と数えれば押さえる場所が分かります。が、聞いてみて寂しげな響きが出ればＯＫでしょう。

Cm



コードはいろいろ使える

ここまで**「コードってそんなにムズカシイもんじゃないよ！」**って言いたかったのです。（紙面で伝えるのもなかなか難しいですね）そして、コードを覚えれば保育現場で使うピアノ伴奏もグッと楽になるよ！ということを強調しておきたいです。

　ピアノに自信が無いから幼稚園の先生はあきらめます、という残念な声を減らしたいし、

逆に開き直って「弾けなくても保育はできる」というのも違うと思います。
　最初に書いたように、子どもたちの豊かな音楽体験、情操教育の環境を用意してあげるのは保育者の義務だと思うからです。

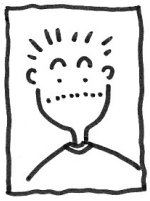
　さらに保育現場では、歌の伴奏だけでなく、一日のいろんな場面でも音楽を使います。
　私の園では、毎月の誕生会で即興劇を行いますが、新卒の先生は、ピアノの音を効果音として使うことを初めて経験します。決まった曲だけでなく、ＢＧＭ・効果音として電子ピアノを弾きます。
　明るい場面ではメジャーコード、暗い場面ではマイナーコード、緊張感のある場面ではセブンスコードやディミニッシュコード、クライマックスの乱闘シーンはげんこつで鍵盤を叩いたり、グリッサンドを使ったり、多様に弾き分けています。
　採用試験の時にピアノが苦手でたどたどしく弾いていた先生も１～２年の現場を経験すると見違えるように弾けるようになります！
　苦手意識に縛られずに、鍵盤楽器という道具を操れるようになってほしいという願いを込めて、「コード奏法」をオススメしました。



▶参考になるサイトがいくつかあります。わかりやすいサイトを活用してみて下さい。
検索→〔ピアノ　コード〕

コードネーム奏法振興会
http://pianochord.info/

ピアノコードの覚え方
http://www.piano-c.com/about_piano_chord/howtolearn.html



原町幼稚園　園長　鶴谷主一（57）
1960年生まれ
1979年　都農聖愛幼稚園（宮崎県実家にて助手勤務）
1984年　彰栄保育専門学校にて免許・資格取得
同年　　葛飾みどり幼稚園に教員として勤務
1989年　オイスカ香港日本語幼稚園に主任として勤務
1991年　原町幼稚園（妻の実家）に勤務
2002年　原町幼稚園園長として勤務→現在
ＨＰ：http://www.haramachi-ki.jp/
MAIL：office@haramachi-ki.jp
Twitter：@haramachikinder

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「幼稚園の現場から」ラインナップ

第１号　エピソード（2010.06）
第２号　園児募集の時期（2010.10）
第３号　幼保一体化第（2010.12）
第４号　障害児の入園について（2011.03）
第５号　幼稚園の求活（2011.06）
第６号　幼稚園の夏休み（2011.09）
第７号　怪我の対応（2011.12）
第８号　どうする保護者会？（2012.03）
第９号　おやこんぼ（2012.06）
第10号　これは、いじめ？（2012.09）
第11号　イブニング保育（2012.12）
第12号　ことばのカリキュラム（2013.03）
第13号　日除けの作り方（2013.06）
第14号　避難訓練（2013.09）
第15号　子ども子育て支援新制度を考える
第16号　教育実習について（2014.03）
第17号　自由参観（2014.06）
第18号　保護者アナログゲーム大会（2014.09）
第19号　こんな誕生会はいかが？（2014.12）
第20号　ＩＴと幼児教育（2015.03）
第21号　楽しく運動能力アップ（2015.06）
第22号　〔休載〕
第23号　大量に焼き芋を焼く（2015.12）
第24号　お話あそび会その１（発表会の意味）
第25号　お話あそび会その２（取り組み実践）
第26号　お話あそび会その３（保護者へ伝える）
第27号　おもちゃのかえっこ（2016.12）
第28号　月刊園便り「はらっぱ」（2017.03）
第29号　石ころギャラリー（2017.06）
第30号　幼稚園の音楽教育（その1・発表会）
第31号　幼稚園の音楽教育（その2・こどものうた）
第32号　幼稚園の音楽教育（その3・コード奏法）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

福祉系対人援助職養成の現場から㉜

西川　友理

○○さえなければ…

「どう？実習はどんな調子？」

　福祉施設や幼稚園で実習中の学生のもとに指導に行き、こう問いかけると、以下の言葉が返ってきます。

「楽しいですよ！実習日誌さえ無かったらね。」

「子どもと一緒に居るのは楽しいんですけど、でも、実習日誌が…。」

「一日疲れて帰ってくるでしょ？その後、実習日誌の記録を書かなアカンとなるともう…気が滅入ります。」

　実習日誌・実習記録指導担当の私は、いつも苦笑いです。

実習日誌や記録は何のために？

社会福祉士実習や保育実習などの実習に行く前の学生達に、実習記録の書き方を教えています。

教える内容は、記録の書式、観察した事実と頭で考えた考察を明確に分けること、自分の感情をどう処理して文章に落とし込むか、記録に適した言葉の使い方等、意外と多岐にわたります。

しかし、それらを教える前にまず専門職は記録を何のために書くのか、記録に残すことそのものの意味を考える時間を作るようにしています。

記録は、仕事をする上で、同僚との情報共有に使えます。職場の外部の関係機関・施設との連携にも欠かせません。また、自分自身の実践を振り返るのにも使えます。誰かからスーパーバイズやコンサルテーションを受ける際の資料になります。時には、何らかの研究の第一次資料として使われるもしれません。極端な話ですが、何らかの訴訟が起こった際には、証拠にもなります。

記録を残す意味は何か。それは一言で言って、「積み重ねた記録は、後から必ず何かや誰かの役に立つから」です。

○回目記念！

数年前から、社会福祉にまつわる仕事をする人たちの勉強会を定期的に開催しています。規模は小さく、場所もその都度変わりますが、40 人程度のメーリングリストと口コミだけで、細々と実施しています。

回数を重ねていくにつれ、何となくこの勉強会の文化が出来てきました。継続的に参加してくださる方もいらっしゃいます。主催である私の力が足りない部分については、参加者の皆様が補ってくださったり、困った時には誰からともなく問題解決につながるアイディアが出てきたり、それぞれのメンバーの、この会の中での役割分担が何となく出来たりと面白い集団力動も生まれてきます。

毎回、開始前には「うまくいくかしら」と緊張するのですが、なんとか毎回十数名の参加者が集まり、結構楽しく充実して学んでくださっているようです。

この勉強会の開催が先日、10 回を超えました。これについて、もっと喜びや達成感があるかと思ったのですが、そうでもないのです。

もちろん、一所懸命に取り組んでいないというわけではありません。毎回毎回、実施後には様々な反省が残り、より良いものにするにはどうすればいいか考え、それなりに悩みつつ、なんとか開催しています。

ショッピングモールで「○周年記念セール！」が開催されたり、テレビ番組で「記念すべき第○回目の放送です！」というセリフを聞いたり、学生が「○○くんと付き合って○年○カ月記念♪」と SNS に書いたりするのを目にしていると、記念日や記念回というのは、もっと盛り上がる気分になるものなのだろうと思っていたのですが、全くそんなことはなく、ただ淡々と 10 回目を実施し、11 回目も済んで、今 12 回目実施の準備をしています。

「今日一日」の積み重ね

アルコール依存症の自助グループである AA（アルコホリックアノニマス）には「One day at a time」、今日一日、という言葉があります。

薬物依存やアルコール依存の自助グループにいらっしゃる方と話をすると、

「平成〇年〇月〇日から飲んでいない！」

という言い方をする方があまりいないなと思います。それよりも、

「〇年〇カ月間、クリーン（お酒や薬物を使用しない状態）で過ごせています。」

という言い方をされる印象があります。

もっと言えば、もう絶対お酒を飲まない！とか、クスリに手を出さない！という感覚よりも「今日一日、クリーンな日を過ごす」事を重視していらっしゃるようです。

そして、クリーンな「今日一日」が少しずつ積み重なっていく、という日々を過ごしていらっしゃるように感じます。

目の前にある同じものを、こつこつと積み重ね、ふと目を上げて振り返ると、思わぬ遠いところまで来ている。とりあえず１つ、とりあえず１回、とりあえず今日一日。

そうやって積み重なっていくものは、他者から見た時に、あるいは他者から見た時のように客観的に見た時に、強い説得力を感じます。

しかし、自分が「とりあえず１つ、とりあえず１回、とりあえず今日一日」を続けている最中は、目の前しか見えません。

きちんと積み重ねていくという事は、こういう事なのかもしれないと感じつつあります。

積み重ねることそのものを目標にしない

ところが、今目の前にあるものを積み重ねることそのもの、つまり継続することそのものを目標としてしまうと、とたんに何のために「それ」を行っていたのか、そもそもの目標を見失ってしまうように感じます。

何かが始まって、それがうまくまわりはじめると、出来ればそれは同じような形で続いてほしい、という気持ちが生まれます。状況が変わらない方が、ストレスや労力が少ないからです。

確かに物事が変化する時はどんな時でもストレスが大きく、変化することは怖さを伴います。しかし、何らかの流動性がないと物事は腐ってしまいます。

特にある組織や、ある事業、ある生活習慣がなくなるというのは大変大きな変化であり、周囲に与える影響も大きいでしょう。しかし、それがなくなる事で別の新しいものが生まれることは往々にしてあります。

経験、作品、回数、日数、期間、業績など、「何かを積み重ねる」ことを目標にすると、「何か」よりも「積み重ねる」ことに意味を持たせようとしてしまいがちです。そこには執着のようなものが

生まれ、自由度が制限されます。

それよりも、その「何か」の意味を大切にすることで、やがて気付けば「積み重なっている」という状態の方が、健康的な積み重なり方をする気がします。執着というより、成長があります。

「何か」の意味を大切にしていれば、「意味」を活かすためにそれまで行ってきた行動を大きく変えたり、時には一見「積み重なり」がなくなったように見えても、形を変えて不思議に意味が続いて行ったりと、その自由さを許容できるようになるのではないでしょうか。

「何を大事にするか」を中心に置くこと

数年前に『驚きの介護民俗学』という本を人から勧められて読んだのですが、これが大変面白かったのです。

著者は静岡県沼津市のデイサービス「すまいるほーむ」の管理者・生活相談員で、元大学准教授の六車由美さん。六車さんは民俗学がご専門で、2003 年、33 歳の時に著書『神、人を喰う―人身御供の民俗学―』で第２５回サントリー学芸賞（思想・歴史部門）を受賞し、精力的に研究活動をされた方なのですが、ご自身の思うような働き方が出来ず、周囲の期待に応えきれないとお考えになり、大学を辞められました。いったん数か月間はひきこもった生活をされていたようですが、雇用保険の手続きにハローワークに訪れた際、ヘルパー2 級の資格が取得できることを知り、資格を取得、翌年の 2009 年から特別養護老人ホームのヘルパーとして働き始めたとのことです。すると、介護現場で利用者が見せる仕草やのつぶやく言葉に大変興味を持たれ、やがてそれらを記録するようになりました。1 年間かけて集めたその記録と、これにまつわる考察を本にされたものが『驚きの介護民俗学』です。

あまりに面白くて著者についてもっと知りたいと思い、インターネットで調べました。そして、すぐに六車さんのホームページを見つけました。その「研究テーマ」のコーナーにはこうありました。

「…自然のなかで生きる人の営みについて考える。また、学生とともに民俗映像の制作を行うことを通して、若い世代が伝統や民俗にかかわっていくための新たな可能性を模索している。（中略）上記については、今後もテーマとして持ち続けるが、現在は、高齢者介護の現場にて、「介護民俗学」を提唱している。」

この一節を読んだ時、私は著書を読んだ時と同じ位、感動しました。

大学とデイサービス、活動している現場は昔と今では全然違いますが、六車さんの中では何も変わっていません。「人の営み」に対するリスペクトと「研究者であること」がずっと続いています。

「何か」の意味を「積み重ねる」とは、こういう事なのだと思います。

もともと私は、保育士等の対人援助職を目指す学生に対して、

「資格は目的じゃなくて、手段だと思うよ。『社会福祉士になりたい』『保育士になりたい』のは何を成したいためなのか、何を大事にしたいのか、という事を考えてみよう。多分そちらの方が目的

だと思うよ。目的を見据えたら、もしかしたら資格なんていらないかもしれないよ。」

と、折に触れ伝えてきました。資格取得率を上げないといけない専門職の養成校教員としてはあまりいい言葉ではないのかもしれませんが、この六車さんの一節に出会って、ますます「どんなことして生きていくにしろ、自分は何を大事にしたいのか、わかっていれば大丈夫」と、自信をもって学生に言えるようになりました。

「『大事にしたいこと』が大事に出来るって自分で分かっているなら、例えば…そうね、ブラジルで花屋になっても幸せやと思うで。」

と冗談のように言っています。

記録＝積み重ねの客観化

そして続いている何かを「記録」することは、その積み重ねに、他者に対する説得力を持たせます。淡々と積み重ねた結果は、冷静なデータになり、1つひとつ冷静に積み重ねたデータは、新しいシステムを作る時の手触りのある根拠になります。

たった2年間だけど…

保育者養成校の短期大学で働き始めた3年前から、私はこのような取り組みをしています。

まず1年生の最初に、

「どんな保育者になりたいか」

「そう思ったのはどんな体験があったためか」

「その体験からなぜそう感じたのか」

「それを満たすために、これから何をする必要があると思うか」

という 4 つの質問が書いてある用紙を配布し、回答してもらいます。

1年生の7月頃、また同じ質問用紙に取り組みます。続いて、実習直前である1年生の 12 月、最初の2つの実習を経た2年生の6月、最後の実習を経て 10 月にも同じ質問用紙に回答します。そして卒業直前の 1 月にも同じように回答し、この時、今までの回答用紙全てを見返す時間を作ります。

「うわぁ、最初の頃はこんな事を書いてたんなぁ！」

「あっ、これ実習でめっちゃヘコんだ後やったからねぇ、こう思っていたねぇ…。」

「たった2年間やけど、考えって変わるもんなんやなぁ…」

それぞれ自分の書いた記録を見返して、じっくり味わいます。そしてその場で、学生たちは半年後の社会人になった自分、あるいは進学する学生の場合は大学3年生の自分にあてて、手紙を書きます。

在学中の2年間、たった5回の取り組みですが、これを通して、学生が記録の意味と積み重ねの説得力に気付くきっかけになればと思っています。

積み重ねを記録する意味

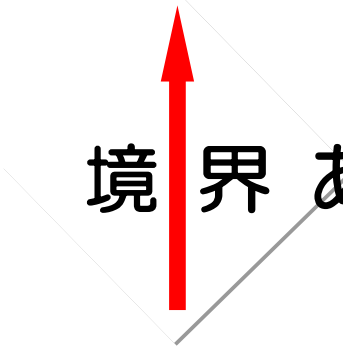
今年、その取り組みをしていた時、あ

る学生が言いました。
「そうそう、記録と言えば…先生、A 施設の実習中に見学させていただいた事例検討会、すごかったんですよ。」
「何かの出来事に対して、どんな時に何があったか、その後どうなったか、その時の子どものセリフや行動、職員の返した言葉や行動、そういうのを全部記録して、それをもとに皆で話し合っていらっしゃって…。」
「それがあると、ちゃんと子どもの行動の意味をみんなで振り返れて、しっかり考えることが出来て…」
「で、そういう事例検討会を、毎月やってらっしゃるんですって。」
「私、記録って面倒くさいなぁと思っていたんですけど。ていうか、いまでも実習日誌を書くのは正直しんどいんですけど、なんか、記録するっていうのは、それだけで支援そのものなんやなぁって思いました。」

積み重ねた意味は、説得力を持ちます。
日々の授業が、そして学校生活が、学生にとって「保育者としての学び」という意味の積み重ねになるように、考えていきたいと思っています。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

六車由美のページ
http://muguyumi.a.la9.jp/
六車由実『驚きの介護民俗学』（シリーズケアをひらく）　医学書院　2012 年



境界あれこれ

7

～　男と女　～

かうんせりんぐるうむ　かかし

河岸由里子

はじめに

境界について色々考えているのだが、次に何をと思ったときに思い浮かばないこともある。今回は人からヒントをもらったので、男女について考えてみようと思う。

男女の違いのそもそも

生物学的には、遺伝子情報からして男女の違いは歴然とある。それは周知の事実であるが、両性具有というケースも稀に見られ、その場合どちらの性で生きていくか迷う。知人のお子さんが、男の子として生まれたと思っていたら、両性具有とわかり、最初は男の子として育てられていたが、その後女の子に名前も変え、女の子として育てられていった。きっとお子さんも家族もたくさん悩まれたことと思う。

そもそも男と女に分かれているのは何故だろう？もっと戻って雌雄別個体になったのはなぜか。原始的な生物から考えねばならない。

このことは、進化の過程で、別個体であることが様々な情報を取り込みやすく、子孫が環境に適応しやすく、子孫繁栄に繋がるからと言われている。

別個体同士の組み合わせによって可能性を広げていくということは分かりやすいが、その際になぜ別性になって行ったのだろう？

鳥では、親鳥が交互に卵をあたためたり、餌をとりに行ったり、ひなを育てることもあるが、卵を産むのは雌である。この点については、子どもがどのような状態で生まれてくるかにもよるだろう。子どもが未熟で、守られて行かねばならない状況であれば、守ったり育てたりする役割と、その親子を守る役割という役割分担の問題もあったであろう。

雌雄同体であれば、相手を探さなくてよく合理的に思えるが、それでは遺伝子の多様性が望めない。そんなことから雌雄を別個体としていくことが一番合理的だったのだろうが、役割について、特別な生物を除き、雌雄双方に卵を産む機能を与えることはなかった。どちらかに卵を、どちらかに精子をとわけ、卵を育てる機能を片方に与えたことで、雌雄が分離されたことになる。

生命の進化の過程で、こうして分けられたのであれば、そのまま進化していった時に、再び雌雄が同化することは考えられるのだろうか？その点を考え始めると又別の話になりそうなので、そのことは今後の進化論に任せるとして、今現在の男女の違いについて考えてみたい。

男女の違いの今

対人援助の仕事をしていると、男性性とか女性性とか、或いは父性とか母性とか、男・女に関わる話が出ることも多い。あの人は男っぽくないとか、女らしいとか。或いは子どもは男の子が欲しいとか女の子が欲しいとか。人は男・女に結構こだわっているのかもしれない。

中国で一人っ子政策が行われていた時代には、女の子は捨てられたり、堕胎されたりしたというニュースもあった。日本でも家を継ぐことを考えると、男子の誕生が喜ばれる傾向は今でもある。女子ばかり生まれてしまうと、養子をとったり、婿養子をとったりする家も今でもある。

一方で、男の子として生まれても、女性として生きる、いわゆる性同一性障害の人たちも多く見受けられるようになった。以前はひっそりと、自分の気持ちを隠しながら生きていたが、今はオープンになってきたし、性転換手術もなされるようになった。

更に、同性同士の婚姻も認められ、そこに人種の違う養子を迎えて家族をなしている家も、特に海外では多い。日本でも同性婚を認める方向になってきている。

こうなると、男であることと女であることの意味は余りないのかもしれない。生殖行動を考えず、自らの遺伝子を持つ子孫を残すことにこだわらなければ、家族や夫婦という考え方に男女は関係ないだろう。

また、一方で草食系男子、肉食系女子という言葉が流行ったころから、なんとなく、男女差が無くなってきたと感じられもする。

色々なことに女性が進出し、職業においても男女差が減ってきた。男性の看護師、保育士、幼稚園教諭など、全般的にその差が無くなり、男女平等参画という考え方の元で、いずれ女性の総理大臣も出るだろう。もちろん、女人禁制や男子禁制のものもまだある。歌舞伎や宝塚などがその例である。

女性の特権だったようなリストカットや摂食障害も、最近では男子に増えてきている。

生物学的には男女の違いはあるが、精神的にはその境界は曖昧になってきているように思う。このまま進んでいけば、身体的な特徴もあまり大差なくなっていくのかもしれない。例えば未来には子宮の機能を持つカプセルが作られ、そこで人工的に人間が作られて行くことになるのでは、と考えている人もいるだろう。実際そのような未来を想像して、SF 映画が作られている。バイオハザードのアリスが現実にな

る可能性も、ゼロではない。

男女に分かれる必要性が無くなれば、生物学的な違いもなくなっていくだろう。それが本当に良いことなのかどうかは、今の段階では何とも言えないが、男と女の境界がこのまま曖昧になっていくのであれば、それも進化なのかもしれない。

もし、男女がわかれている必要があるなら、今一度、男女の境界をはっきりさせねばならないのかもしれない。それは差別ではなく、同等の扱いを守りつつ、女性の性、男性の性を大事にし、尊重していくことではないだろうか。DV も圧倒的に男性からの DV が多いが、それは生物学的に力では女性の方が弱いということがあった。しかし昨今女性からの DV も増えているし、力の強い、体格も立派な女性も増えているのだから、体格や力による境界ではなく、別の何か、恐らく、絶対的に異なる点によるべきで、それはすなわち、性器の違いが基点となるのではないかと思う。但し、性同一性障害については例外的に考えるべきであろうし、同性愛や同性婚は個人の自由として認めるべきで、これを境界で切り離すべきではない。

まとめとして

人間が誕生して 20 万、その進化の過程で、男女差が無くなっていくということは、恐らく人間が子孫を増やせないという危険性にさらされなくなったこととも大きく影響しているのではないだろうか。医療の発達や科学の発達によって、動物界の頂点に立ち、安心安全で快適な生活をおくっている人間にとっては、環境適応を考えて、遺伝子の混合を多く試みる必要が薄れてきたと言えないか。となると、男女の境界自体今後意味がなくなっていくのではと思える。

男女の境界があることが今後例外的にとらえられるのか、それとも境界があることが当然とされるのか、５０年、１００年後の人間の様子はどうなのか、見てみたいものだ。

しかしながら、今の段階では、男女の差はある。従って男女の境界もある。男湯に女性が入ることはできないのもその一つである。海外の飲食店などで、トイレが混んでいたりすると、女性が男性トイレに入ることは、時折見かけるものの、逆はない。それは、犯罪を起こしやすい男性側を規制しているためであろう。

結局男女の性の問題については、堅く境界を引かねばならないときもあるが、そこまで必要のないこともある。性別や国籍などを超えて個人を尊重するダイバーシティの思想も広がりつつある昨今、それぞれの環境において必要性を見直していけば、身近な多くの場面で男女の境界は排除されていくのかもしれない。

対人援助学マガジン第 32 号

生殖医療と家族援助

家族形成のための支援カウンセリング

～卵子ドナーが“子どもに伝えたい”こと～

荒木晃子

「子どもの出自を問う」ことへの異議

前号では、「子どもの出自を問う」ことに関する筆者の持論を展開した。

子どもには「出自を知る権利」がある。しかし、如何に言論の自由があるとはいえ、他者から「子どもの出自」を「問う＝問題提起する」言動には問題があるのではないかという指摘である。以下にその根拠につながる一例をあげ検討する。

子どもが生まれるには、女性の妊娠が前提となり、妊娠に至る経緯には様々なプロセスが考えられる。例えば、a)異性間で合意した性交渉の結果として妊娠、b)いずれかの同意を欠いた妊娠、c)性暴力被害の結果としての“望まない妊娠”、d)性知識のない性交渉の結果、あるいは e)想定外の“予期せぬ妊娠”などがある。これらの妊娠を医学的に捉えるといずれも「自然妊娠」であるので、出産に至る/至らないは別として、どこかの時点で産科婦人科領域の対応が必要となるが、少なくとも生殖医療との接点はない。一方で、医学的には「自然妊娠」に至る行為であっても、その「行為」そのものを法的に捉えると、決して合法とは言えない別の側面が見えてくる。a)、d)、e)に法的な問題は生じず、b)、c)は、性犯罪に抵触するのである。たとえ自然に妊娠した結果生まれた子どもであっても、妊娠に至る行為（性交渉）に**二者間の合意**があったか否かで、妊娠に至る行為が違法行為と判断されることになる。つまり、妊娠に至る二者間の行為は、結果として生まれた子どもには何ら影響しないことが原則にある。「子どもの出自」が、決してその子の不利益とならないよう定めているのだ。この原則を踏まえたうえで、a)～e)までの「自然妊娠に至る行為」と、生殖医療で妊娠に至るケースでは、どのような違いがあるかを考察する。

自然妊娠 VS 生殖医療

はじめに、法的な問題が生じない a)、d)、e)について考察する。a)の「異性間で合意した性交渉」、「その結果としての妊娠（自然妊娠）」の２つの条件のうちのいずれか、または両方に問題を抱える個人、カップルは、生殖医療を選択する可能性が大きい。互いの合意はあっても性交渉に至らないセックスレス現象や、性交渉に問題はなくても結果として妊娠に至らない不妊現象に悩むカップルは、生殖医療技術で改善を目指す治療の対象患者となりうる。d)性知識のない性交渉の結果は、“予期せぬ妊娠”以外にも、反対に、自然妊娠に至らない＝不妊現象という結果につながる場合もある。確かに、現在の日本の公教育課程には、妊娠する/妊娠しない以外にも、性に関する情報教

育の不足を指摘する声もある。実際に、医療現場を訪れるカップルの中には、性交渉の基本的な知識の欠如が不妊原因となっているケースも見受けられる。e)は d)の対象にある現象である。なかには、妊娠に関する知識はあっても、妊娠可能な排卵日を避けたつもりの性交渉で妊娠に至る場合もある。ここには、妊娠に関する正確な知識を習得できていないなど、妊娠をコントロールする難しさも一因となっている。このように、a)、d)、e)の自然妊娠と比較すると、生殖医療は、自然に妊娠することがかなわない個人またはカップルの意思に沿いつつ、自然を補う形で妊娠を目指す医療であるといえるのではないだろうか。

次に、性犯罪に抵触するケースとなる b)、c)を考察する。b)いずれかの同意を欠いた妊娠、c)性暴力被害の結果として“望まない妊娠”の2つの自然妊娠に共通する法的問題は、性交渉もしくは妊娠に関して、二者間の合意が得られていないという点にある。特に、c)に関しては、(論外ともいえるが)性暴力被害や性的虐待の結果として妊娠に至るのであるから、この場合の被害者は女性に限定される。逆に、異性間の性暴力、性的虐待の被害者が男性の場合は、妊娠した女性は加害者であるため、性被害の結果の妊娠とはならない。いずれにしても、性暴力により人間としての尊厳、人権を踏みにじられた性行為は、時に「沈黙の殺人」とも呼ばれ、被害者のその後の人生に大きな影を落とす重大な犯罪である。さらに、女性被害者が結果として“望まない妊娠”に至るケースでは、胎内に宿る小さな命の選択を迫られることにもつながりかねず、さらに二次的な被害が生じる場合もある。

次に、二者間の合意を欠いた b)による自然妊娠を考察してみよう。性交渉に双方の合意はあるが、結果として妊娠したことへの、男性の同意が得られずひとりで悩む女性は後を絶たない。b)はc)とは異なり、性交渉に関して法に抵触することはないものの、結果、女性が妊娠/出産に至った場合は、当然ながら男性にも生まれた子どもに対する親としての法的責任が問われることになる。過去にも同様の事例が多く発生し、大きな社会問題となってきた経緯もあり、現在では、妊娠したことを誰にも相談できずひとりで悩む女性を救済するための相談窓口、保護施設等が社会に準備されつつある。男性が、性交渉のみを目的に関係を持った結果、女性が妊娠/出産に至ったケースは少なくない。男性が、親としての法的責任を回避しようとするこのような事案は、少なくとも生殖医療の利用で子どもを持ちたいと通院するカップルの二者関係で生じる可能性は極めて低く、長年、生殖医療現場に身を置く筆者にも未だ経験がない。ただし、例外として、昨年(2017年)関西の生殖医療施設で起きた、「別居後、凍結受精卵で出産した元妻との間で、生まれた子どもの親子関係をめぐり、離婚した元夫が提訴した事例」は記憶に新しい。確かに、自然妊娠、生殖医療による妊娠のいずれにも、子どもをめぐる関係性のトラブルは起こり得る。しかし、法的な問題が生じた要因の根源は、子どもの親となるべき二者関係、もしくは、凍結受精卵の移植時に両者の同意を得ずに妊娠を補助した医師にあるのであって、生まれた子どもに要因がないことだけは確かである。

大切な他者

もし、妊娠のメカニズムに他者がかかわるとすれば、その存在と行為を、“生まれた子ども”はどう捉えればよいのだろう。

自然妊娠を望めない二者が子どもを迎えることを希望し、生殖医療技術で妊娠することを目的に、生殖医療の介入を求めた時点で、すでに妊娠という行為に医療者という他者とのかかわりが生じることになる。このことは、生殖を補助する医療で妊娠する＝生殖医療で子どもが生まれることを前提に、二者関係に医療が介入するのであるから、**医師と患者（妊娠に同意する二者）間の同意は必須**である。ただし、この場合の介入とは、国家資格を有する医師、看護師及び胚培養士に、生殖を補助する医療行為を有償で委任する契約関係であるため、生まれた子どもとの関係が生じることはない。

では、精子、卵子等を提供するドナーとの関係はどう捉えればよいのであろう。まず、妊娠のメカニズムを簡単に確認しよう。

妊娠の成立には、「男性が射精した**精子**と女性の卵巣から排卵した**卵子**が、卵管で出会って授精し、受精卵が分割しながら子宮にたどり着いて、子宮内膜に着床する」という複雑で、場合によっては医療技術を駆使しても改善が不可能な箇所を含む一連のプロセスがある。これらのプロセスを全て問題なくクリアすれば、妊娠に至る。例え、「」内の罫線のどの個所に問題があっても妊娠には至らない。なかでも、精子と卵子との出会いは重要で、受精卵は子どもの誕生に不可欠な生命の萌芽となる。つまり、妊娠のメカニズムに介入した精子、卵子の提供者と子どもとは、医学的には遺伝上の関係が生じることになる。しかし、現行の民法上の親子関係は、法的婚姻関係にある受療対象者が生殖医療技術を利用し妊娠した場合、子どもを出産した女性と法律上のパートナーの双方が子どもの親と認められるとあるため、提供者と子どもとの親子関係は成立しない。事実婚カップルのケースでは、男性は、女性パートナーが産んだ子どもを認知することで、戸籍上の嫡出子として認められる。他にも、女性カップル、トランスジェンダーのカップルのケースでは、一方のパートナーが子どもを出産したのち、他方のパートナーが子どもと普通養子縁組の手続きをするなどして、子どもとの関係を持つことも可能である。このことは、医学的には遺伝上の関係が認められても、法律上の親子関係は成立しえないことを証明するものである。つまり、精子、卵子の提供者は、遺伝上の関係はあるものの、法的親子関係は認められないことを意味する。

では、法的には親子関係が認められない精子、卵子の提供ドナーと、（遺伝的つながりのある）子どもとの関係を、果たしてどう捉えればよいのだろう。次に、検証してみたい。

まずは、他人ごと・・

社会には、生殖の補助を目的とした医療技術、その技術を駆使する/応用する生殖専門医、生殖医療を統括する医学会等に対し、生命倫理学や法学など多角的な視点から異議を唱える論者らが、「生殖医療技術やゲノム情報・編集を利用して子どもを“つくる”ことをどこまで容認するか」の議論がある。それは「自然妊娠が望めないカップルが、生殖医療で子どもを迎えることをどこまで認めるか」と同意義ではないはずだ。しかしながら、「生殖医療で子どもを“つくる”ことをどこまで容認するか」という表現は、どこの誰に向かって発信されたメッセージなのだろうか疑問に思う。先進医療の科学者、生殖の専門医、生殖医学領域を統括できない医師会・医学会に向けてなのか。それとも、配偶子提供で既に生まれた子どもたち、子どもの親である不妊カップル、

さらには、利他的精神により無償で自己卵子の提供を申し出たドナーへ向けたメッセージと受け取られはしないかと、気が気でならない。とりわけ、卵子提供、精子提供、代理出産など子どもを養育する親以外に、子どもの誕生に深く関与する“もうひとりの他者”が関わる生殖医療に対しては、さらに厳しいコメントが多く見受けられるように思う。子どもに直接かかわることのない他者が、その子の出自に関して厳しい評価を公言することは、結果として、生まれた子どもの成長にどのように影響するかを考えたことがあるのだろうか。

前号の「評価が児に与える影響」で既述した、不妊治療で生まれた子どもが成長し、「私は体外受精で生まれてきても良かったのでしょうか？」と筆者に質問票を提出せざるを得ない原因をつくったのは、生殖医療を容認しているとはいいがたい、常に批判的な視点で生殖医療を監視する一部の論者ではなかったのか。「どうしても自分で産みたかった」と返答した実母の医療行為を肯定的に捉えたい、体外受精で生まれても何ら後ろめたく感じることはないと、親以外の誰かに言ってほしかったのではないのか。以来、その質問票を手に取るたびに浮かぶ、じくちたる思いと背中合わせに、次世代を担う青年にそのような疑念を浮かばせる原因となった（と筆者は考える）、「生殖医療への厳しい評価」に激しい憤りを覚えている。

子どもの誕生を喜ぶ“もうひとり”のひと

親が、例えどのような自然妊娠のプロセスもしくは、生殖医療技術で妊娠/出産したとしても、子どもの誕生までの真実を、愛情と共に本人に伝えることが重要であることは、言うまでもない。子どもにとって大切なのは、現在も、これまでも、そしてこれからも、自分は愛されていると感じること。生まれてきてよかったと思えることである。

自然妊娠には、不本意に妊娠するケースがあるが、生殖医療で妊娠に至るケースに、不本意な妊娠は（よほどの事態が発生しない限り）考えにくい。理由は、生殖医療の受療者は、挙児希望を前提に妊娠を望み、主体的に医療施設へ通院するのが原則となるからだ。つまりは、“生殖医療で生まれる”ということは、親は生まれる前から子どもの誕生を願っていた、つまりは、生殖医療で生まれたということは、親から望まれてこの世に生を受けたという証となるからである。

では、法的関係はないものの、遺伝的関係のある自己卵子を提供したドナーは、子どもとの関係をどのように捉えているのだろうか。

前号では、「仮定として、やがて成長した子どもがこの世論を知り、『親が自分を産むためにドナー女性を犠牲にし、その身体を傷つけた。選択した治療のせいで、親が世論の批判を浴び、結果、自分が生まれたことが問題になった』と感じることがあるとすれば、その子は自分の存在そのものを肯定的にとらえることが困難になり、その人格形成に揺らぎが生じはしないかと、老婆心ながら不安を覚える。加えて、そのことが、如いては様々な生殖医療で生まれた大勢の子ども達の出自、真実告知に大きく影響する重要な課題ともなりうることを、筆者はおおいに危惧している。」と記述した。

次号では、卵子提供で生まれた子どもへの思いを筆者に託した「卵子ドナーのメッセージ」を紹介したい。

高齢者とのドラマセラピー

尾上 明代

４．“認知症”高齢者のアドボケイトとして

前号では、高齢者施設のデイサービスにおける、全員で行なうセッションの様子を記述した。短時間（１５－２０分）で、しかも状態が様々な方々が混在する全員に実施するには、ワーク内容の選択に限界があるが、毎回工夫をしながら、頭、身体、感情に働きかけるゲームやミニドラマをおこなっている。そしてその後に希望者を募り、少人数での１時間のドラマセラピー（この後半プログラムを、プロパーという意味で、私たちは「本セッション」と呼んでいる。）という構成で実施している。今号では、この構成になって初めての本セッションの様子を紹介する。

利用者９名、職員１名、トレーニー（ドラマセラピーの実習生）２名と私が、広間から少し離れたこじんまりした部屋に移った。

相互交流のために

まず、ものさしゲームから始めた。これは、部屋の床の中央に長いものさしが置いてあると想定し、私が質問した内容に対して、その「ものさしの目盛り」上をあちこち移動して並ぶことで答える、というゲームである。質問の中身を工夫することで、いつも同じ場所で時を過ごしていながら、あまり会話のないように見える方々に、相互交流をしつつお互いを知ってもらうことが容易に可能になる。また、身体的に不活発な人にも、ゲームに集中しながら、知らず知らずに動いてもらうことも隠れた目的である。誕生日を聞くと、このグループは９月生まれが多いということがわかったり、偶然、誕生日が同じ人が見つかって盛り上がった。起床時間を聞くと「４時半！」と言う早起きの方がいて、隣同士で「あら、いつも寝るの早いの？」「ええ、そうですねぇ」などと会話が生まれた。「眠れなかったのよ〜」と訴える方もいた。どのような対象者にも使える非常に良いツールである。

架空を楽しむ

次に一つの大きな円になって椅子に座り、名字ではなく下の名前を書いた名札をつけていただく。「名札の名前が見えない」と言う方がいるたび、お互いに自分の名前をはっきり伝え、呼びながら架空の見えないボールを投げ合った。それぞれが、ボールの大きさを変えたり、投げ方を変えたりし、その場の雰囲気はすぐになごんだ。皆の名前と架空のボールに慣れてきたら、私がさまざまな見えないものを次々と出していき、皆さんはそれぞれに自由に関わって隣の人に回してもらう。「傷ついた小鳥」を回したときは、一人一人が、かわいいかわいいと撫でたり、くちばしでチュンチュン遊んだり、表情をうっとりさせたり、また、鳥が嫌いな人はすぐ隣の人に渡したりと、あたかもそこに本当の小鳥がいるというイメージをもち、それを楽しむことができていた。そこで私は「皆さんのエネルギーで、少しずつ小鳥が元気になってきている気がしませんか？」と声をかけ、最後に「外に逃してあげましょう」と窓を開けるアクションした。小鳥が乗った両手をそっと高くあげると、全員が同じ方向へ視線を向け、元気になった小鳥が空に向かって飛んでいくところを見守った。本当に見ているようだった。「りんご」や「バラ」のときは、「良いいおい」「ほんとうに香りがするわ」という声も聞かれた。「子犬」を散歩させてドアの外に連れ出してくれたり、「納豆」をそのまま手で渡すところでは、職員さんの背中にべちょっとつけたりと、プレイフルなシーンがたくさん創り出された。このワークは、どのような対象者や年齢のグループでも、ときどき行なうが、この施設の高齢者たちも、全く同じように想像力

で架空のものを見て、自分の対応やアクションを創造していることがよくわかった。ちょうど最後に受け取る番になったＹ男さんは、1000 万円の指輪を「ガラス玉だよ！」と言うなどウィットに富んだ答えで、皆をうならせた。

思い込み

トレーニーは、このワークで「思いのほか最初から皆さんがすぐに反応して驚いた。自分の思いこみでは、もう少し恥ずかしがったりして戸惑うのでは、と思っていた」と言う。施設からの情報としてＹ男さんが認知症の進んだ方とお聞きしたことに、彼女は一番驚いたと言うが、職員自身も、その方が 10 人以上の人の手を経るイメージを保持して最後に自分のところでクリエイティブな才能を発揮したことや、ふだん居眠りしている方が表情豊かに自己表現されていたことに驚き感動していた様子だった。

Ｙ男さんは、通常は無表情でほとんど何も話さないため、このような才能は認知されず埋もれたままだったのだ。2 回目のセッションで「生きた鮭」を回したときも、Ｙ男さんはキレ味のよさそうな包丁を取り出して鮭をさばき、他の参加者に振る舞った。皆さんはおいしそうに鮭のお刺身を食べた。このワークでは、毎回必ず食べ物を入れて、一緒に「食事をする」ひとときを分かち合っている。これ以後、つい最近までの 3 年半の間、Ｙ男さんは「僕はひとり暮らしで寂しいので、皆さんとこうして時を過ごすのは、本当に嬉しいなあ！」と毎回話して下さることとなった。実は最近、大変残念ながら、事情で他施設に移られたことを聞いた。急な決定だったため、Ｙ男さんに挨拶ができなかったことが、悲しかった。彼のことは、次号でもう少し記述、考察する予定である。

認知症というラベル

本セッション初回のトレーニーたちの日誌には以下のように記されていた。

参加者一人一人が帰るとき「いや～楽しかったあ～」と口ぐちに言ってくださったことも成功だった証しだが、認知症だからここまでは出来ない、と思いこんでいた方々から、全員セッションの雰囲気からは想像もできないくらい、積極的でクリエイティブな即興が生まれ始めてきて、ドラマセラピーが生み出す場に可能性を感じた。

お互いに会話もなく TV を見ていた方たちが、和気あいあいと活気が生まれて（元いた大広間へ）戻っていかれる姿は同じ人たちとは思えなかった。職員さん達は、利用者さん達

の普段ない自己開示や自己表現を見ることによって、利用者さんへのリスペクト感が増したり、関わり方の幅や深みを増やすことが出来る。

「認知症」というラベルが、人のほんの一面を画一的に見てしまうことに大きな役を買っていることを、しっかり意識する必要がある。これは、社会に暮らす誰にも当てはまることだ。私たちが提供するセッションの目的は、認知機能を少しでもあげるとか、参加者同士、より良い時間を過ごしてもらうということだけではない。同じく重要な目的は、皆さんの多側面を現場の援助職者に示すことである。まさにアドボケイトする活動だと言えるだろう。これが、私がすべてのセラピー現場（児童養護施設、精神科クリニック、依存症中間施設など）で、その施設の職員たちにも一緒に活動してもらう大きな理由の一つである。

多面性を表現する場

この施設でも、参加者をふだん良く知る職員たちに、毎回交代でセッションに参加していただいている。彼ら彼女らは、いつも本当に良いケアを提供しているプロであり、認知症というラベルではなく、ひとりを全人的に見て関わりをもっていると感じる。それでも、セッション後のシェアリングでは、誰もが必ず利用者たちの知らなかった側面について驚きのコメントをするのである。どういうことだろうか。

これはドラマセラピーの場のなせる技であると思う。さまざまな役を演じることで、その人が多面的に見えるのである。高齢者に限らず、そもそも人間は誰もが多面的な存在であるが、特定の側面や役割が固定的に表現されている人も少なくない。職場などの場で、一つまたは少ない側面のみを他者に見せることは、社会的にも要請されることが多いので、ごく普通とも言える。であるから、種々の役を演じるドラマという活動の中では、他者や、ときには自分自身にとっても新たな側面、隠れていた側面が出現することは、納得していただけるだろう。

ただ、そのようなことを起こすためには、さまざまな表現を許す場を作る必要がある。どの人の発言や行動も基本的にはすべて受け入れるというセラピストのスタンスが重要なのだ。これは、セラピーでは珍しくないスタンスとは言え、ドラマセラピーでは、身体、感情、言葉を同時に使ってのセッション進行が多いため、実際にセラピストが自分の態度や言葉という具体的な表現に落とし込んで、真に実践するのは難しい。即興ドラマではあらゆることが起きうるし、多数の参加者同士の相互作用も複雑に絡むからである。しかし、そのような対応がうまくできれば、参加者の中の「新しい」役のレパートリーは確実に拡大する。さらに重要な要素は、ドラマや遊びという同じ土俵に立てるところだからこそ築

ける平等な関係性である。例えば高齢者施設の場合では、利用者、職員、セラピストたちが、援助・被援助という非対称の関係から自由になることだと言える。このことは、トレーニーも気づいていた。

（セッションでは）創造の世界で遊ぶヨコの関係になる。今、認知症だとかアルコール依存症だとかのアイデンティティーを脱ぎ、ただの人となる。そこには、今できることが減ったとか、若いころのように仕事や家人のお世話など貢献できることが少ないなどは関係なく、夢もあったし、得意なこと好きなこともあったし、経験も豊富な一人のひととして、全員が平等に尊厳を与えられている場がある気がした。

初回の本セッションの最後には、別人になるワークをおこなった。ペアになって練習後、グループの前で「自己紹介」をしていただく。そこにいた皆さんは、たちまちさまざまな職業を選択した。書家、フラワーアートの先生、画家、体育の先生、宮大工、エンジニア、外科医など、バラエティーに富んでいる。自分が好きなことや過去の希望、価値観や思いが表現されている。タクシー運転手になったK夫さんは、その理由を「10年前に免許を取り辞めてしまったが、車が好きなので」と語った。長年、対人援助職として責任あるポジションでお仕事をされてきたT子さんは、低い太い声で「拙者は・・・」と話し始めた。昔のお侍さんになったようだ。理由は「男になりたかった！男は女より強いでしょ。」ということで、その後もよく男性の役をしていた。イキイキと参加して下さるので、毎回、本セッションにお誘いするのだが、そのたびに「え、何をするの？怖いわ」とおっしゃり、始まると「私、こんなのするの初めてよ！」と驚く。ときどき、「早く天国に行って、お父さんとお母さんに会いたい！」と悲しそうな表情を見せることもある。そして、いつもセッションが終わるころになると、私たちセラピストに「拙者は、お二人にお会いできて嬉しかったですぞ！ありがとう、ありがとう。」と笑顔で帰って行かれるのだった。

ともあれ、初回のセッションは終わった。たった1時間前までは、この方々がどのような思いや好みをもっているのか、どのような想像力・創造力があるのかは誰も知らなかった。一人一人が、色彩ある豊かな人であるという当たり前のことを改めて思った。そしてこれが、人に出会う、ということなのだ。

（次号に続く）

＊　セッション内容の記述は、主に嶌村麗子さん、川添真紀子さんのジャーナルを元にしている。

きもちは、言葉をさがしている

「紅茶の時間」とその周辺

第 31 話

水野　ス ウ

臼杵（うすき）へ

今年の2月1日から4日まで、大分・臼杵の3つの場所でお話をさせてもらってきました。

この旅で私が感じ取ったキーワードは、「個人」です。個人からはじまる、一人ではじめる、自分で考える、「個」を持った自分／わたし／あなた、一人と一人とがつながっていく――。

そんな臼杵への旅の物語は、昨年（2017年）の秋、臼杵市の奥田ふみ子さんという方から突然、お電話をいただいたところからはじまります。まったく存じ上げない方でした。「9条の会・うすき」で話してほしいこと、「元気力ネットワーク・うすき」という集まりでも話してほしいこと。ついては、この日からこの日まであいていますか、ということで日程をたしかめ、臼杵へ行くことが決まりました。

その後、ウエムラブレッドというパン屋さんでも話してください、と追加のご注文があり、出前の場がふえました。とはいえ、このパン屋さんにも心当たりはありません。一体どんな人だろう、と思っていたらほどなく、パン屋さん本人からお電話あり。

「スウさ～ん、ウエムラタカコです。4年前に名古屋のカフェでお話きいて、その翌年紅茶の時間を家族で訪ねて、今は臼杵でパン屋しています」

あ、あの時の上村さん！　そうなんだ、今は臼杵にいらっしゃるんだね。

パン屋さんからの呼びかけ文

臼杵に移りすんで1年半の上村貴子さん、事前に読ませてもらった彼女の、おはなし会呼びかけ文はこんな風でした。

「さて今回、石川県津幡町より来てくださる水野スウさんと私たちウエムラの出会いは2014年3月。愛知県名古屋市千種区のオーガニックカフェ

空色曲玉さんで開催されたスウさんのお話会です。

その時は、どんな方でどんなお話しをされるのか全く知らずカフェへ行きました。それで席に着いてお茶を飲みながら、ふわ〜っと耳を傾けているうちにいつのまにか頷いている自分。そしてまた涙も流れていた自分。

それから約1年後、名古屋からスウさんの住む石川県津幡町へ家族と共に行きました。スウさんを囲む空気を感じてみたかったからです。そして、そこで34年続く「紅茶の時間」に参加しました。

そこでもやっぱりいつのまにかフムフム頷いていました。それから今日になるまでずっとそのフムフムは続いています。

そのフムフムは毎日の生活の至る所にヒントがあるみたいでたまにちらりと登場します。わたしがわたしを大事にする、無理をしないし、卑下しない。わたしのことどんな風に伝えたらいいかな…わからない。どうしよう。でもね、「だいじょうぶよ」ってスウさんなら言ってくれそう！なんて淡い期待を永らく勝手に思いながら今回の再会です。

当日、どんな風になるのかは来てからのお楽しみです。もちろんウエムラも参加します」

なんてユニークな呼びかけ文！　最後にちょこんと、私が書いた本の題名が記されている以外は、私がどんな人で、この日一体どんなことをするのかがまったく書いてありません。最初から最後まで、上村さん自身のきもちを主語にして書かれていて、うわ〜なんて「私メッセージ」ですてきな呼びかけ文だろう！と、私は惚れ惚れしてしまったのでした。

ウエムラブレッドさんで

2月2日、めずらしく大分に雪が降った朝。うっすら雪のつもった坂道をのぼった先に、古民家を改造したウエムラブレッドさんがありました。

入ってすぐの土間がパン屋さんスペース。パンの香ばしい匂いがたちこめる小さな空間で、上村さんがパンを売っていました。

ご夫婦で朝早くからパンを焼き、午前中に夫さんが配達に行く。その間は貴子さんが一人でお店に立つので、おはなし会のスタートは12時からです。

おはなし会の会場は、パン屋さんの土間の壁をぶちぬいた畳の間。実はこの壁をこわしたのもつい最近のことだそうです。この日のおはなし会が畳の間のお披露目、こけら落としのイベントだったのですって。

その部屋が、なじみのお客さんをはじめ、お店に来たのはこの日が初めてという人、あわせて15人で満員御礼となりました。

ドイツパンのランチをしながら、紅茶の時間の話、きもちはいつだってそれにぴったりの言葉を探していること、誰でも身の丈に認めてもらいたいと願って生きていること、コミュニケーションはきもちのキャッチボールだよね、のワークショップや、ちいさなうれしいを互いに聴きあう「しあわせまわし」のワーク、「ほめ言葉のシャワー」のワーク、そして、あなたはほかの誰ともとりかえがきかない、と謳う憲法13条のこと、最後に「13条のうた」。

みなさんとのふりかえりシェアリングタイムも持って、予定通りぴったり3時に終了。

ふりかえりの時、若いお母さんが、「ここにきてすぐ、私、ここにいていいんだ、受け入れられてるんだ、って思わせてもらった」と言ってくれたこと、とてもうれしかったです。それこそいつ



も、おはなし会に参加する人たちに私が感じてもらいたいきもちでしたから。

自分の存在がそのままで認められている、と感じられること。それって、まさに13条が言葉にしている、ほかの誰でもない「個」の人として、あなたは大切な存在だよ、という「個人の尊重」に通じるきもちです。そこにいる誰かがそのように感じられるって、その場が13条的な場であることの目安の一つかもしれません。

賭けだった？　呼びかけ文

終わってからの放課後タイムで、上村さんが、あの呼びかけ文、実は賭けだったの、と打ち明けてくれました。

スウさんは最近、憲法のことをよく発信しているでしょ、スウさんにそういう話もしてほしいきもちはあるけど、なんだ、憲法のことやってる人か、憲法の話か、じゃ行くのやめようか、みたいにスウさんのことを「枠」だけでとらえてほしくなかった。

それに、すでに憲法に関心を持って活動している人ばかりでこの空間が埋まるのも、何か違う気がする。だから、スウさんが何をしている人かよりも、ただ自分がスウさんと出会って感じたきもちをそのまま書こうって、それであんな呼びかけ文になったんです、と。

ああ、そのきもち、わかるなあ。本当は、憲法の○○さん、も、原発の△△さん、も存在しないのに、どの団体に属しているかを見て、簡単にラベル貼りをしてわかった気になっちゃうってこと、確かにあるよね。人って、何か一つの所属とか肩書きだけでできているわけじゃないのにね。

彼女の中では、この文章に何かを感じた人が来てくれたらいい、というきもちと、この呼びかけで一体何人の人が来てくれるだろう、と不安に思うきもちがないまぜだったのかもしれません。それで出てきたのが「賭け」という言葉だったのでしょう。

この日集まってくれた方たちの顔ぶれは、30代から60代まで様ざまでした。0歳の子のお母さんも、赤ちゃんをいろんな人にあやしてもらいながら参加。大分市でカフェを開いている方は、お店をお休みにして来てくださったといいます。

上村さんが、個人の体験ときもちを言葉にし、それをキャッチした個人が、一人、また一人と足を運んでくださった。それも決して便利とはいえない場所にあるウエムラブレッドさんを、探し探し。

美味しいドイツパンと、あたたかい薪ストーブ。こんな暮らしのある場で、個人と個人がたしかに出逢い、自由にきもちを分かち合える。ああ、こんな場が今とっても大事。この先、「個人」の存在がだんだん押しつぶされそうな社会になっていく予感のある私にとって、なおのこと、こういう場を貴重だと感じました。

元気力ネットワークへ

今回の仕掛け人、奥田ふみ子さんのことは、臼杵に行ってから少しずつ知っていきました。彼女のもとの職業はバスガイドさんで、4人の子のお母さんであること。主婦をしていた時に大分のグリーンコープ生協おおいたに関わり、理事長をつとめたこと。その後、仲間から推されて市民派候補として立候補し、現在は臼杵市の市議会議員さんであること、などなど。

そして、私がお話をすることになっている元気力ネットワーク・うすきは、奥田さんが代表をつとめる会で、自分たちのまちを、「ずっと住みたいまちに」という思いで集まった人たちが、子育てカフェや子ども食堂を開いたり、仲間を市議会に送ったりと、さまざまな活動をしているようです。ちなみに、元気力、のネーミングは、原子力へのカウンターを意識しての名づけだとか。

3日の午前にうかがった元気力ネットワーク・うすきの事務所は、築100年の古民家でした。ペ

レットストーブが赤々と燃えています。

この日は総会だったので、まずは活動報告や収支報告。続けて、奥田さんが市議としてのご自分の一年のふりかえり――目標を立てて、できたこと、目指したけれどもできなかったこと、をふだん着の自分の言葉で正直に語っていました。レジメを見ないでも内容がよくわかり、とてもきもちが良い。決まり文句の使い回しばかりの政治家さんの話がまるで胸に響いてこないのと、対照的です。2ヶ月後に市議選があることもこの日知りましたが、そんなことも事前に私には一切言わない奥田さんの潔さ。市議であるまえに彼女個人のすてきさを感じました。

元気力ネットも紅茶も12条

総会後、私の話を１時間ほど。市民と政治の距離がどんなふうに近づいて行ったのかを、紅茶の時間という個人的な視点からお話させてもらいました。

子育て井戸端のようにしてはじまった紅茶の時間だったけれど、実にいろんな人が来て、いろんなこと教えてくれたことで、それまで私に見えていなかったさまざまな社会問題に少しずつ目が開かれていったこと。政治って遠い世界とばかり思っていたけど、実はこの私も自分が住んでる社会を構成しているひとかけらだった。そう気づきはじめたら、政治と私って、おおいに関係があるってわかってきたこと。

その気づきの過程に起きた最初の大きな出来事が、私の場合はチェルノブイリ原発事故でした。原子力発電のことを知って震え上がり、子育て仲間と勉強をはじめたら、紅茶の場から去っていく人、留まる人、新たに来る人、と仲間の入れ替わりが自然に起きたこと。以来、社会のこと、ふつうに話そうよ、暮らしのことだもの、という想いを紅茶の時間の仲間たちと共有できるようになったこと。

改憲の動きへの危機感から憲法を学び、私が憲法かふぇの出前によくいくようになってからは、毎週の何気ない紅茶の時間の中でもごくふつうに、憲法とか安保とか選挙といったワードがでてきて、今では毎週、気になる社会のあれこれを語りあう「草かふぇ」という時間も持っていること。

それは憲法的にみれば、私たちの自由と権利は私たち自身の不断の努力によってこれを保たねばならない、と書かれている12条をし続けていることでもあります。

そして、元気力ネットワークのみなさんが、奥田さんを議会に送り出すだけでなく、一緒に子ども食堂を開いたり、彼女が質問する日に誰か必ず市議会に傍聴に行ったり、そうやって一人ひとりが動いていることが、自分のまちをもっと住みたいまちにしていくための12条の実践であること、などなど。

総会のあとはみなさんの持ち寄りお昼ご飯をご一緒に。ランチしながら、臼杵市内外から集まったみなさんの、一言ずつのふりかえりをお聞きしました。

気づけば、あれ？　昨日会ったお母さんが今日も来ている。そう、「私ここにいていいんだと思った」と言ってくれた若いお母さんが、この日は幼いお子さんを連れて参加。元気力ネットワークにきたのはこの日がはじめてだそうです。

「思いを言葉にするって普段できないけど、昨日は自然に言葉がでてきて、言葉にするってきもちいいって思いました。自分にも何かできるのかな。考えて行動するってことがそれかな」

この日みえていた助産師さん。私は戦争を知っているからね、絶対に戦争は嫌なんです、と目に涙をうかべてお話されました。４人の子育てできたの、この先生のおかげなの！と奥田さんがすかさず感謝の言葉を飛ばします。90歳の現役助産師さんは、今からおっぱいケアの予約があるので失礼しますね、と急いで事務所を後にされました。

9条の会・うすきへ

元気力ネットワークでお昼を食べた後は、その足で、9条の会・うすきへ。お茶会という気楽なスタイルで語ります。9条の会のメンバーさんもそうでない方も。パン屋さんでのお話会から3場所目のハシゴの若いお母さんも、元気力ネットワーク総会からひき続き参加の方々も、何人か。

9条の会・うすき、という名前には、実はうっすら覚えがありました。一昨年、関西での出前けんぽうかふぇでプレゼントされた「あんぽと今夜のばんごはん」という小冊子。日々の家族のごはんを考え、忙しく生活に追われるお母さん、テレビのニュースも気になりながら時がすぎるうちに、息子はいつしか兵士となって、戦場で「今夜のわがやの晩ごはんは何だろう」と想像している、という内容です。それは、安保法制によって集団的自衛権を使えるようになってしまった憲法の危機を、自分ごとに感じられるとてもよい冊子でした。それを作成したのがたしか、うすきの9条の会だった、と記憶していたのです。

その冊子を手にした時は、うすきを臼杵と書くことも知らず、まして自分がその街で話すことになるなんて思いもせずにいた。関西で出会った一人の人から渡された冊子の矢印は、時をはさんでここへとつながっていたのです。

憲法を伝えるヒントに

各地の9条の会の方々は、みなさんよくお勉強されていて、弁護士さんや憲法学者さんの講演を何度も聞いていらっしゃる。きっと臼杵でもそうでしょう。なので、ただの個人である、何の専門家でもない私が話すことは、知識としてはおそらくご存知のことばかりではないかと。それでも、かつては、憲法って難しいな、遠いなと思い、9条しか知らなかった私が、憲法をとても親しく感じるようになっていった経緯をお話させてもらうことは、へえ〜、こんな伝え方もあるのか、そんなとらえ方もあるのか、って憲法を再発見することであったり、人に伝える時の何かのヒントになるかもしれません。もしそうなったらうれしいな、と思うのです。

その具体例の一つとしてあげたのが、出前けんぽうかふぇで度々している折り紙アンケートのやりかたです。参加しているみなさんに、小さな折り紙を渡して、こう質問します。「私たち国民一人ひとり、日本国憲法を守る義務を負っている。イエス、と思う方は、ご自分の胸の前で、折り紙のきれいな色の方を私に見せてくださいね。違うと思う方は、裏側の白い色の方を私に」。

すると、ほとんどの会場で7、8割の方がきれいな色の方を私に見せてくれて、その場がパッと華やかになります。でも正解は、白色ですよね。99条に、この憲法の尊重擁護義務を負っているのは、天皇や総理大臣や国会議員や裁判官や公務員といった人たち、とありますから。

私たちの自由や権利が奪われないために、国家権力をしばるものが憲法。だけど多くの人が、憲法も法律と同じように私たちが守る義務を負っている、と勘違いしています。それは誰にとって都合がいいこと？　憲法がなんのためにあるかなんて国民はよく知らない方がいい、憲法違反の政治をしても有権者が怒らない方がいい、権力者にそう思わせてしまっているかもしれないですよね。

折り紙を胸の前で、とお願いするのにも、実は意味があって。手をあげるやり方は、答えを間違えた時ちょっとはずかしい。憲法を伝える時には、知らないことを責められない、まちがってもバツ悪くならない、が大事。先に知っている人はできるだけ、後から来る人に、平（たいら）に話す。上から目線で教えてあげる、のでなく。そうやって平に話すことが、対話に、そして平和に、つながっていくと私は思っているからです。

一昨年（2016年）の参院選のあと、毎週の紅茶の時間の中で一時間だけの「草かふぇ」をはじめたこと。「草」は、自民党のつくった憲法改正草案、の草です。今の憲法と草案を読みくらべて、どこがどう違うか自分の目で確かめつつ、憲法を少しでも自分の言葉で話せるようにしていくささやかな試み。ここでも、知らないことは恥ずかしくない、わからないことがあったら何を質問してもいい、という「草かふぇ」のお約束を大切にしています。

前文くらべをした時はこんなふうでした。井上ひさしさんの「子どもにつたえる日本国憲法」をテキストにして、今の憲法前文を40分かけて一行一行読み解き、その上で草案前文を読んでみた。たちまち、え？主語が国民じゃなくて日本国になってる！義務がこんなにいっぱい書かれてる！と発見して、これって誰のための憲法なんだろう、国のためにある憲法みたいだね、と、自分たちの感覚で草案をとらえることができたんです。

草案の読みくらべから始まった草かふぇは、今では憲法に限らず、その時どきで気になっている社会のことを語り合う時間になっています。

そして、けんぽうかふぇで必ず語る、個人の尊重の13条については、これこそが今の憲法の核心であること、それが実現されるためには、私たちが不断の努力を普段からする12条がかかせないので、13条と12条はコインの裏表だということも伝えます。

安倍さんの9条3項

安倍さんの提案している改憲の、9条3項についてもふれました。ここではコッカイオンドクよろしく、市議の奥田さんに福島みずほさん役をお願いし、予算委員会の代表質問のせりふを一部オンドクしてもらいました。安倍さんは9条の1項2項はそのままで3項に自衛隊を明記するだけ、といっているけれど実は、っていう部分です。

福島みずほさん

「安倍総理は、予算委員会の私の質問に対する答弁で、『憲法9条1項2項の解釈を変えて、集団的自衛権の一部を行使できるようにしました。そのままです』と答弁をしました」(*)

なんとわかりやすい。多くの人が思っている「そのまま」と、安倍さんの「そのまま」は、全然意味が違っていることが明白です。安保関連法が成立した2015年9月afterの9条は、安倍さんの中で完全にbefore9条とは違っている。そこをきちんと国民に説明しないで、1と2はそのまま、と言っているのは、国民をわざと誤解させているのと同じです。ここでも、みんなが誤解していたら都合がよいのは誰か、ということが問われています。

9条の会・うすきのふりかえり

9条の会・うすきのふりかえり一言タイムでは、今日ここに来て初めて知ったことor印象的だった言葉orいま感じているきもち、の3択から書きやすいと思うものをそれぞれが折り紙に書いて、お一人ひとり順に読んでもらいました。

「平（たいら）でなければ伝わらない、平に語ることが平和につながる」「13条と12条がセット、というとらえ方が新鮮」「これまで9条9条ばっかりだった」「自由と権利、ひと任せにできない」「9条のことしか知らなくて13条のことはじめて知った」「社会のひとかけらとしての12条する」「私、けっこう12条してたんだな〜って思った」などなど。

参加された30人弱の方々が、正直に、誠実に、自分の言葉で。それは、私の話を真剣に聞いてくださっていた証拠です。9条の会・うすき、という組織が主催した場ではあったけれど、専門家でない私個人の話を、個々の方がうけとってくれたんだ、と感じました。

前の日から連続、3場所をハシゴしきった若い母さんは、折り紙に書いた言葉を堂々と読みあげ

ました。「スウさんと会って、自分の言葉を発するってこわくないことなんだと思った。聞こえない、見えないふりをしないで五感を使って12条していきたい」。1回目、2回目、3回目……と、1回ごとに力が増していく彼女の言葉を、おお！と心の中で思わず拍手しながら聞く私。

3場所でメニューは3つとも違うけれど、やっぱり私がどの場所でも一番伝えたいことは13条です。あなたは、ほかの誰ともとりかえのきかない存在なんだよ、あなたがあなたである、そのことをどうか大切にしてね、と伝えたい。このお母さんはそれをしっかり受け止めて、こんなにわかりやすい言葉で私に返してくれたのです、まるでブーメランのように。

このことは、私にとっても大きな気づきでした。13条が大事です、と言葉だけでいっても伝わらない。このお母さんが、パン屋さんで、私ここにいていいんだ、と安心できた感覚が、「わたし」の存在を認めるはじまり。個人の私がここにいていいんだ。思ったことを言っていいんだ。このお母さんは3回のお話会の中で、自分の中に13条の価値を見つけ、それを自分で育てていっている。そうしたら、知らず知らず12条しはじめている。その過程を、彼女がはっきり言葉にしてくれたおかげで、私は13条と12条の循環を目の当たりにさせてもらうことができたのです。

「このひと」は「個のひと」

臼杵ではどの会場でも、個人の私が、参加されたみなさん一人ひとりと出会えた感があって、それがとても幸せなことでした。

それを誰よりも見せてくれたのが先の若いお母さんですが、パン屋さんでのおはなし会にしても、元気力ネットワーク、9条の会・うすきにしても、個人と個人の出逢いがつながって循環している感覚なのです。

あのパンを作っている人が呼ぶ人だから、奥田さんが呼ぼうと思った人だから、行ってみようかな、聞きに行こうかな。誰か顔の見えない人が言っていることにはうなずけなくても、「このひと＝個のひと」のことは信頼できる、足を運ぶ理由になる、という関係性がとてもいいな、と思えたのです。

ひとがどうこう、という時の「ひと」は、世間とか肩書きとか所属団体とか知名度、といったものかもしれないけれど、臼杵で私が出逢ったのは、いずれも顔の見える、自分の言葉を持った「個のひと」たちでした。個のひとと個のひとが出逢い、循環する社会は、個が消された集合体の社会よりもおそらくずっと呼吸が楽にできそうだ、とも感じます。

そういえば、ウエムラブレッドの上村さんがまだ名古屋にいた4年前、カフェに私の話を聞きに行こうと思った動機も、臼杵に行ってからはじめて聞くことができました

会場となった空色曲玉さんというオーガニックカフェは、上村さんにとっての憧れのお店だったそうです。そういうカフェを開いている人が呼びたい人なら、スウさんてどんな人か全然知らないけれど聞きに行ってみようと思った、と。まさに、空色曲玉さんという個のひとがしていることへの信頼です。

そうやって、個人がふだんからしていることを、別の個人が見ている。見られている側も知らないうちに、誰かがどこかでちゃんと見ていると知ることは、希望でもあり、我が襟を正すことでもありますね。

うすき・紅茶の時間

臼杵から戻るなり、北陸は34年ぶりの大雪に見舞われました。雪に閉じこめられた日々の中、奥田さんから届いたうれしい知らせ。

彼女は臼杵で私に、うすき・紅茶をはじめてもいいかしら、と訊いてきました。もちろんどうぞどうぞ！と答えましたが、それが早くも本当になっ

たのです。毎水曜日、つまり津幡の紅茶の時間と同じ曜日に、元気力ネットワークの古民家事務所でうすき・紅茶をはじめました、と。初日の2月7日には5人の人が生まれたての紅茶の時間を訪ねてくれたそうです。

私が「せ・し・へ・け」と呼んでいる、政治や社会や平和や憲法のことをふつうに話せる場が、一人一人が大切にされてきもちを話せる場が、また一つふえました。

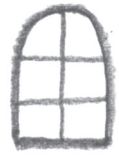
個人と個人があの古民家で出会い、うすきの紅茶からあらたな矢印がはじまっていく確かな予感。この感覚が、臼杵によんでもらったことの、一番すてきなおつりかもしれません。

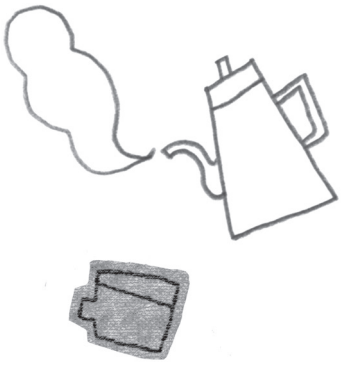
2018.2.25

(*) 9条の会・うすきのオンドク場面では、福島みずほさんから安倍首相への代表質問の続きも、奥田さんに読んでもらいました。ご参考までに再録します。

「つまり、9条3項に明記する自衛隊とは、災害救助のための自衛隊ではありません。国土防衛のための自衛隊でもありません。集団的自衛権の行使をする自衛隊の明記です。これは、憲法9条1項2項の完全な破壊です。安倍総理が9条3項に自衛隊を明記すると言っていることは、戦後の出発点と戦後の72年間を否定するものです。

集団的自衛権の行使は憲法違反です。歴代の自民党政権は、そう明言してきました。安倍政権のもとで、憲法9条1項、2項の解釈を変えて、違憲の集団的自衛権の行使ができるように安保関連法、戦争法を成立させました。その後に明文改憲をして集団的自衛権の行使ができる自衛隊を憲法に書き込もうとすることは、立憲主義に対する重大な侵害であり、冒涜ではないですか」





ノーサイド

禍害と被害を超えた論理の構築

（２７）

中村周平

前回までは、私が取り組んでいる研究活動や、研究での学びについて、書かせていただきました。今回は、少し内容を変えて、以前にご紹介させていただいた Wheelchair Football（以下、WCF）、とりわけこれに関わる方々との出会いや、WCF に参加する上で気づいた新たな魅力について書かせていただきます。

受傷後、スポーツに参加することに対してはあまり積極的になれなかった私にとって、WCF との出会いは衝撃的なものでした。最初は、ちょっとだけと思っていたところが、まんまとその魅力にはまり込んでしまいました。練習会場も、堺にあるスポーツセンターを主に使用していたのですが、ある時期を境に京都の高野にあるスポーツセンターも会場として使い始めました。参加者も回数を重ねるごとに増えていき、気が付けば月に一度、京都で定期的に開催するまでに至りました。会場も決してアクセスが良いところではなく、また、WCF 自体も車いすバスケットや車いすラグビーに比べれば、知名度も認知度もない…にも関わらず、毎回 10 人を超える参加者が維持できている背景には、いくつかの理由がありました。



一つは、この練習会を一緒に運営してくれている「Alex」という人間の存在です。突然登場してきた彼のことについては説明をする必要があるかと思います。ただ、Alex の人となりを説明する前に、出会いのところからお話する必要があるかと思います。Alex とは立命館大学を卒業してから、数カ月経った 2011 年の夏ごろに初めて出会いました。当時働いていた法人に、Alex が知人の紹介でヘルパー（障害の

ある人の生活をサポートする）のアルバイトをしに来たことがきっかけでした。この号の冒頭に掲載していただいた写真を見ていただくと一目瞭然ですが、Alex の国籍は日本でありながら、パッと見、そうは思われない存在です（その説明については、後ほど…）。出会った当初は、お互いに「車いすの人」、「海外(？)の人」といった感じで、あまり関心は無かったと思います。ただ、ある時期に Alex が介助者として私の生活に関わってくれるようになってから、彼という人間に親近感を覚えるようになっていきました。

少し話は変わりますが、「車いすに乗っている人＝高齢者」というイメージは、おそらく多くの方が持っているものだと思います。そのため、30 代で車いすに乗っている私の存在は、どうしても目についてしまうようで、外出の際、交差点で信号待ちをしているときなどは目の前を通り過ぎていくどのドライバーにも凝視されてしまいます。しかし、Alex が外出の支援で入ってくれている時は、ドライバーが私を見た後に彼を見てさらにびっくりする、いわゆる「二度見」という光景を何度も目にしました。また、街中で求人情報誌や新店舗開店のチラシ、選挙が近い時などはそれに関する政党ビラが配られていますが、私も Alex も、それをもらったことはこれまで一度としてありません。おそらく、配る方の先入観の中に私たち二人は、「配る対象」に入っていなかったのではないかと推測しています（これはあくまで、私と Alex の推測の域を超えるものではなく、それ以外に何の意図もないことをご容赦いただければ幸いです)。

とにもかくにも、これまで自分自身の経験として存在した「障害者あるある」と、Alex が教えてくれる「外国人あるある」に同じような境遇を感じざるを得ませんでした。

さらに、日々の生活で Alex に支援に入ってもらう時間が長くなってくると、お互いのこれまでの生活環境や生い立ちについて述べあうこともたびたびありました。Alex は母親がジャマイカの方で、見た目には「日本人が思う日本人」とは異なる個性をたくさん持っています。そのために、幼少期から自分と周囲の見た目による違いに様々な葛藤や苛立ちを感じながら育ってきた背景があります。特に、進学や就職など、これまでと異なる環境に足を踏み込むときは、勝手に文化や言葉の違いがあると思いこまれ、辛い思いをしてきたそうです。それを繰り返すうちに、自分から壁を作って周りを寄せ付けない空気にしてしまうこともたびたびあったとか。

このように、育ってきた環境も多くの点において異なる存在でありながら、先ほども使った言葉ではありますが「親近感」を強く Alex に覚えたのは、この社会の中に存在する共通のカテゴリーに自分と彼がいるのだからだとわかったからでした。その共通のカテゴリーとは、一般的に「マイノリティ」と呼ばれているものでした。

盆踊り漫遊

竹中尚文

第１回



1. お寺で盆踊り

これはお盆のポスターです。といいながらも、「今年の盆踊りはいつだろう？」という気持ちで、このポスターを見る人が多いようです。

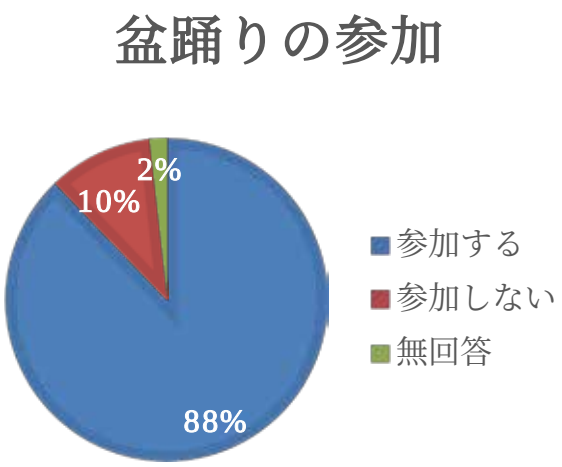
このポスターはマウンテンビュー仏教寺院の昨年のお盆のポスターです。マウンテン･ビューという町はアメリカ合衆国のサンフランシスコ湾岸地域南部の町で、いわゆるシリコンバレーと言われる地域の中心部にあります。

このポスターを見ていると、夏祭りの告知であるのは分かります。提灯が描かれて、太鼓を打ち鳴らす絵があります。中央に「南無阿彌陀佛」とあるのは日本の盆踊りのポスターとは異なるようです。また、食べ物や花を売ったりして、日本の祭りの露店を想像します。その中に「Taiko」とあります。太鼓を売っているかのような印象を受けます。

まず、「南無阿彌陀佛」と書いてあるのは、先に言ったように夏祭りが浄土真宗のお寺で開催されるのです。マウンテン･ビュー仏教寺院だけではありません。全米の浄土真宗のほとんどのお寺で盆踊りをします。そして、そこに参加する人の多くは、盆踊りは浄土真宗のお寺でするものというようなイメージを持っているようです。

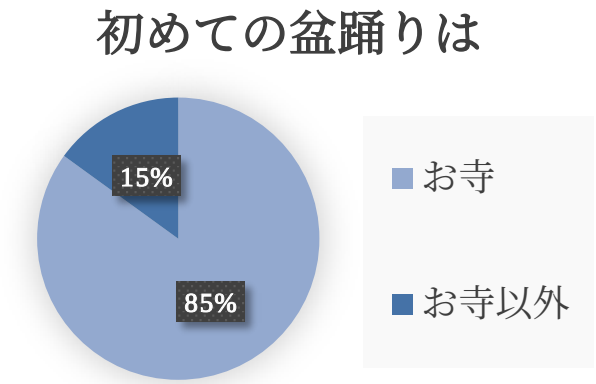
次のグラフはアメリカ合衆国の 33 ヶ寺で 2002 年 2 月に私がアンケート調査をした結果です。

まず、お参りに来る人たちに盆踊りに参加をするかを訪ねて見ました。



調査総数 288 人の内、253 人が参加し、30 人が参加しないと答えました。5 人が無回答でした。お寺に通う 9 割ほどの人たちが盆踊りに参加しているのです。

この参加する 253 人に、初めて盆踊りを踊った所を尋ねました。



お寺で踊ったという人は 215 人で、それ以外の所と回答した人は 38 人でした。この

38 人の内、2 人は第２次世界大戦中の「日系人収容所」でしたし、また 2 人は「日本」でした。

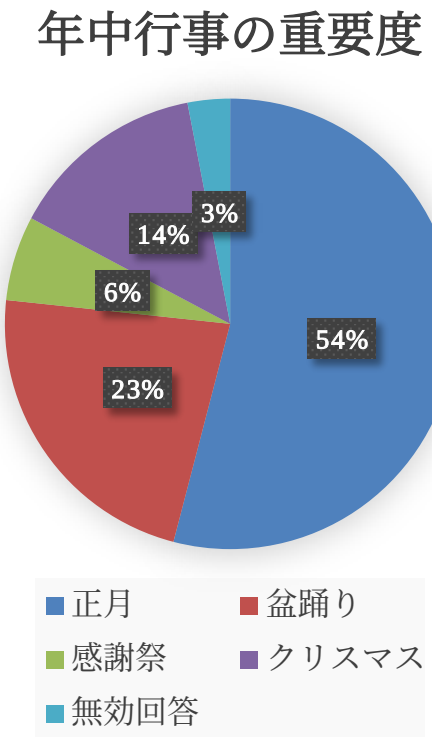
これらのことから、お寺にお参りに来る大多数の人が盆踊りに参加し、初めて盆踊りに行ったのもほとんどがお寺でした。彼らにとって、盆踊りは浄土真宗のお寺と密接に結びついたものであります。

日本で盆踊りの場所は村の神社の境内であったり、町の公園の広場であったりして、盆踊りとお寺の結びつく印象は少ないと思います。

2. 日系人とお寺

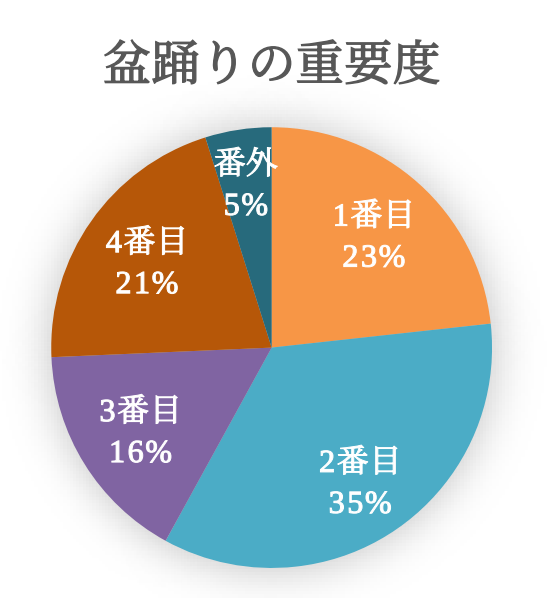
これまでのデータを見ると、お寺に集まるのはほとんどが日系人ではないか、という想像です。このアンケートで自分が日系であると答えた方は約 90%でした。アメリカで何系の民族であるかを尋ねられて、答えにくい人が増えています。祖父母は３つの異なる民族という人も珍しくありません。ここでは、浄土真宗のお寺という日本に由来する寺院だから、日系と答える人が多かったのかもしれません。

そこで、彼らはどのような文化を大切の思っているのだろう調査をしました。家庭の中で年中行事としての「お正月」「盆踊り」「感謝祭」「クリスマス」の４項目に対する意識を尋ねてみました。



これは、４項目の内、最も重要な行事だと思った人の割合です。アメリカだから「クリスマス」が最重要だろうと想像しましたが、「クリスマス」を最重要行事とした人は 14%でした。そうすると、やはり日系文化ということで「お正月」が 54%なのかも知れません。それにしても「盆踊り」を最重要と思う人が 23%もいるのも軽い驚きです。

また、アメリカで浄土真宗のお寺に通う人たちは、盆踊りをどのように考えているのか知るために、「盆踊り」を何番目に重要と思っているかを調べてみました。



この結果は、「盆踊り」を２番目にする人が最も多かったのです。この人たちの多くは１番目に「お正月」を上げたのではなかろうかと思います。アメリカで、浄土真宗のお寺にお参りする人は、お正月や盆踊りのような日本的行事を大切に暮らしているようです。また、これは日系米人全体の傾向を示すものといえるかは分かりません。

　アメリカのお寺ではお盆になると驚く程に人々は盆踊りを楽しんでいます。

竹中がカリフォルニア州オレンジ郡の仏教会で盆踊りの様子を撮影したもの。



盆踊りの全景



盆踊りの様子



盆踊りに先立って太鼓演奏



盆踊り周囲でフードバザー

それでも「遍照金剛言う」ことにします

第１７回

ピアサポートとリカバリーを考える　１

三野 宏治

はじめに

2014 年の 9 月から、群馬県精神障害者地域移行支援事業ピアサポート活用事業委託を受けた群馬県精神障害者社会復帰協議会が開催している「精神障害者ピアサポーター養成研修」の講師を引き受けている。14 年 7 月に群馬県精神障害者社会復帰協議会の事務局長（当時）からメールをいただき、あまり多くを考えずにお引き受けした。14 年当時、私は群馬に越してきて 2 年目であり、学内にも学外にも知り合いが少なかった。また、講義以外に「何か仕事をやりたい」と考えていた時期であったため、この申し出は願ってもないことであった。講義は 9 月に入ってからおこなうということであったので、それまでの時間少し打ち合わせと、昨年のテキストと見せていただくことにした。打ち合わせを行い、テキストを見て「とんでもないことを引き受けたかもしれない」という直観はあった。そして、その直観は講義の準備（講義の組み立て）を行うときに現実のものになった。

頂いたテキストや資料にはリカバリーやピアサポートという言葉がいわば「むき出し」の形で使用されていた。では果たして「リカバリー」なるものが何か、書いた人や受講する人たちはわかっているのだろうか。また、ピアサポート活動が、自助グループを基本とした「自らの元気回復」の一助となる性質なのか、支援を行う主体としての「ピアサポート」を想定しているものかについても、整理がなされていないように思えた。

これからの連載（何回になるかわからない）は、この「精神障害者ピアサポーター養成研修」で感じた疑問について、養成研修を受講された方々と養成研修を始め広めた支援者の方へのインタビューを交えて、述べ考察したいと考える。連載開始の今回は、リカバリーとピアサポーについて文献上どのように記されているかを紹介する。次回の連載では、支援者がなぜ「精神障害者ピアサポーター養成研修」を始め、受講することを勧め、ヒアサポーターを増やしたいと考えるか。その動機やきっかけについて聴いたインタビューを紹介する形で、支援者が考えるリカバリーピアサポートについて考察する。そして、養成研修を受講された方々に受講した理由、受講後の変化や自身が考えるリカバリーについて

聞き取りを行い、随時連載にて紹介していきたい。

精神病・障害からの「リカバリー」について

リカバリーは 1990 年代後半に広がった考えであり、2003 年のアメリカ大統領委員会勧告（NewFreedomCommission on Mental Health:Achieving the Promise :Transforming Mental health care in America 2003）に記載されている重要な目標でもある。この大統領委員会勧告では、リカバリーと「本人中心主義」の実現には様々なプログラムやプランが必要であることが要求されている。これまの回復は、治療者が「回復した」あるいは「回復途上である」といっていた“点”の状態を示していた。しかし、リカバリーでは、本人にとって「障害はあるが満足である、あるいは障害はあるが十分な生活を送り望む社会参加が果たせる」という状況やその過程あるいは、違う人によっては症状の軽減もしくは完全な解消といったように多様である。つまり、その人が目指す市民生活を様々な困難から立ち直ることによって自分の能力に自信を持つ。そして希望を持って生活し続けられるようにすることをさす。（三野 2009）

統合失調症と診断され他経験を持つパトリシア・デイーガンはリカバリーについて次のように述べる。

> リカバリーに普遍的な定義はなく「個人的なもの」「自分らしく生きること」「選択することができる」「役割」「つながり」「治療の成果ではない」とし、「我々の生化学的な部分を変えるのではなく、生活・人生を変えること

また、国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所 社会復帰研究部のホームページには次のような説明がある。

> リカバリーは希望を持つことや会的役割の取得、意味のある人生の達成、他者とのつながりの取得などを含む幅広い概念であり、しかも個々が希望する自分になるための「プロセス（過程）」とその自分になった「アウトカム（結果）」の 2 つの側面を持ちます。 特に利用者個人にとっては、「プロセス（過程）」が強調され、そのプロセス（過程）は必ずしも右肩上がりの直線ではないかもしれません。
>
> よって、リカバリーの内容やそのペース、ゴールは個々によって大きく異なります。
>
> リカバリーの概念は1990年代に米国で生まれ、21世紀になってから欧米を中心に徐々に広まりをみせ、2010 年代ではリカバリームーブメントとして精神障害者支援における国際的な潮流となっています。
>
> 「リカバリー」という言葉自体は非常に多義的であるため、最近ではリカバリーを「臨床的リカバリー」と「パーソナル・リカバリー」という区分でわけて整理しています。特に後者の「パーソナル・リカバリー」については、個人の主観的な人生観なども入っており、単純な症状や機能の回復だけでは達成されない側面が含まれています。

ここまででリカバリーが病からの回復ではなく、全人的な変化であることがわかる。つまり、国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所 社会復帰研究部の解説のうち本連載で扱うのは「臨床的リカバリー」ではなく「パーソナル・リカバリー」ということになる。さらに、「臨床的リカバリー」で「治った」とされる区切りが「パーソナル・リカバリー」ではないという。さらに「個人の姿勢、価値観、感情、目的、技量、役割などの変化の（個人的な）過程である。疾患によりもたらされた制限を備えていても、満足感のある、希望に満ちた、人の役に立つ人生を生きることである。精神疾患の大きな影響を乗り越えて成長し、人生に新しい意味や目的を見出すことでもある。」というアンソニー考えもある。この「リカバリーは過程であり、到達点ではない」という考えは、養成講座修了者の交流会で幾度も聞いた。受講された人たちは群馬県の施設や病院・診療所の精神科デイケアを利用している方であった。それまで、自助グループに参加したことのある人もいたが、ピアサポート活動がどんなものであるか知らない人たちもいたが、受講生の皆さんは、リカバリーについて自らの経験に照らした質問とその後の理解を示された。他方、彼らを研修会に連れてきた支援者の皆さんはリカバリーを理解することに困難があったように感じる。支援者は支援を行うことを生業にしている。そしてその支援がソーシャルワークというものとするなら、目標や到達点、終了があるとされ教育される。リカバリーが起こり変化し続けていくその人たちに対して、そのリカバリーを促す「支援」とはどういうものか。彼らにどのように協力していくにはどうすればよいのか。支援者がリカバリーを考えるなら、自らの仕事を振り返りその結果、混乱してしまうという結果は誠実さの表れなのかもしれない。

大西次郎は「精神疾患の破局的な影響から人生を回復していく、内面的な成熟を示す～疾患の完治を目指す、あるいは発症前と同様の状況に戻ろうとする過程ではない～リカバリーという概念がある。これもまた、旧来の専門職が抱く（援助する者 vs 援助される者という）障害・疾患像に対峙する性質をもつ。」と指摘する。

リカバリーでは支援者は、援助する者 vs 援助される者という位置取りが成り立たない。では、支援者はどのような立場に立てるのか。大西は次のように続ける。「そのような、いわばラディカルさを包含するがゆえに力関係の均衡化に影響力を発揮するのだが、精神障害領域ではどう受けとられるか。たとえば、べてるの家の実践が精神障害領域において日本的なリカバリーの象徴であることは、べてるの家以外の人々によって多々語られる。しかし、べてるの家の人々は積極的にリカバリーを喧伝しない。それは、より個人的でオリジナルに表現される「自分の言葉」の大切さをあらわすとはいえ、かたや常用語に付随しかねない社会的変革という含意から距離をとる意味もあっただろう。」

もはや支援者の取り得る立場を「社会福祉」や「ソーシャルワーク」という文脈に回収させてしまうことは、危険であるということなのだろうか。ただ、ピアサポート活動を、誰かへの支援であると考えるとき、その支援は「社会福祉」や「ソーシャルワーク」といった既存の支援の一部として考えられる恐れもある。では、ピアサポート活動となにか。

ピアサポート活動について

群馬県のホームページで群馬県精神障害者地域移行支援事業は次のように紹介されている。

県では、精神科病院に入院中で、居住先や地域での支援が整えば退院が可能な精神障害のある人に対して、地域での支援体制を充実したうえで、地域生活への移行を促す取組
を実施しています。

１．精神障害者地域移行支援事業ピアサポート活用事業

精神障害者の視点を重視した支援の実施や、精神障害者が自らの疾患や病状について正しく理解することを促す観点から、ピアサポートの積極的な活用に努めており、下記のとおり取組を行っています。

なお、本事業については、「ＮＰＯ法人群馬県精神障害者社会復帰協議会」に委託して実施しています。

（1）ピアサポーター養成講座

ピアサポーターの養成及び養成講座修了者のスキルアップを目的とした研修、ピアサポーターを支援する事業所スタッフの研修を行っています。

（2）ピアサポーター精神科病院交流活動

ピアサポーターが精神科病院を訪問し、入院中の精神障害者と交流することにより、入院中の精神障害者の退院意欲を喚起させます。

（3）ピアサポーター養成等普及啓発活動

ピアサポーターとして活動する人材の掘り起こしと、ピアサポート事業を広く周知するための活動を実施しています。

（4）退院支援プログラム

ピアサポーターが入院から退院に至るまでの経緯や現在の地域生活について、入院中の精神障害者に対して体験報告を行います。

また、入院中の精神障害者が施設体験（日中活動施設、グループホーム等宿泊型施設等）を行う際、ピアサポーターが付添いを行います。

２．精神障害者の地域移行関係職員に対する研修に係る事業

県、市町村、精神科病院、障害福祉サービス事業所、介護保険サービス事業所等の関係職員に対し、精神障害者の地域移行に関する保健・医療・福祉の相互理解を促進するための研修を実施します。

県は、精神科病院に入院中で、居住先や地域での支援が整えば退院が可能な精神障害のある人に対して、地域での支援体制を充実したうえで、地域生活への移行を促す取組として、ピアサポーターを養成し、精神科病院交流活動等を行い、入院中の精神障害者の退院意欲を喚起させるということが狙いとしている。それは講師としてかかわりを持つ、群馬

県ピアサポーター養成講座の内容が①ピアサポート活動や障害の概念の変遷などの講義と②病院訪問・交流会を想定した面談のロールプレイで構成されているおり、②のロールプレイに受講生の力がそそがれることからもわかる。

ここでは、ピアサポート活動を行うことで、ピアサポーター自身のリカバリーをすすめることは述べられていない。もちろん、「精神障害者地域移行支援事業」の予算で行う者であるから、サポート活動をおこなう者のリカバリー云々には言及しようがないのかもしれない。ただ、ピアサポートが「福祉」や「精神科ソーシャルワーク」でおこなわれている地域移行支援・地域定着支援の流れの中で、その力や効果を期待されていることは確かなようだ。

では、「福祉」や「精神科ソーシャルワーク」のなか、支援するものとして多くのピアサポーターが活躍しているのか。

『精神障がい者ピアサポート専門員養成のためのテキストガイド（第3版)』では、1980年代以降、アメリカやカナダにおいて「認定ピアスペシャリスト」の雇用力イドラインや研修プログラムが開発されていることを挙げたうえで、「認定ピアスペシャリスト」の日本名として、「精神障がい者ピアサポート専門員」いう名称が設定したことしている。そのうえで、ピアサポート専門員は、「ピアスタッフ自身が工夫して、新しい技術、知識、能力を身につけ、さまざまな役割を担うようになり、健康で継続的に専門家として雇用され、チームの一員となることを目指す」としている。また、

> 日本でも2000年以降、大阪の社会的入院者退院促進事業に始まる一連の「退院促進・地域移行・地域定着支援事業」の実施要綱においてピアサポーターの活用が打ち出され、その後を継いだ「アウトリーチ推進事業」でもピアサポーターを配したチームが全国の機関で取り組まれている。それ以外にも、既に多くの当事者スタッフが精神保健福祉現場（精神科病院・クリニック・地域事業所等）で従事している。2009年には厚労省の自立支援調査研究として、ピアサポートの人材育成プログラム構築のプロジェクトがスタートし、2010年から障害者総合福祉推進事業として、ピアサポート人材のガイドライン作成に引き継がれ、福祉医療機構助成事業として「ピアサポート専門員（仮称）ガイドライン第1版」が作成され、2011年には『精神障がい者ピアサポート専門員（仮称）構築のための働き方ガイドライン』として出版され研修がスタートしている。（古屋　2014）

これらの記述からも、ピアサポーターの「福祉」や「精神科ソーシャルワーク」の一員となることの有用性が説かれていることはわかる。しかし、少なくとも群馬県内においてピアサポーター養成講座修了性が雇用されたという例は多くない。筆者は養成講座を担当して5年を迎えるが、ピアサポーターとして雇用に至った例は数件であると聞く。「ピアサポーターとしての雇用を希望する」という多くのピアサポート養成講座修了者の声も聴かれる。ではピアサポーターとしての雇用が進まないのはどうしてか。参考として古屋龍太の記述を引く。

各現場で当事者のピアスタッフが最初に直面するのが、実は専門職側の厚いステイグマの壁である。特に、精神科病院の医療専門職スタッフの間では、未だに当事者スタッフに対する誤解・偏見・差別意識は根強いものがある。支援サービス業務を行うスタッフの一人であることは認識されていても、あくまでも医療の場では診断（ラベリング）による「治療者／患者」との二項対立認識が拭い去れず、彼岸の存在と位置づけられる。

古屋の指摘は、ピアサポーターとして雇用された後の困難さに対する懸念である。この「専門職側の厚いステイグマの壁」は存在すると考えられ、雇用が進まないことの理由としてもいえるのではないか。ピアサポーター養成講座では、病院訪問・交流会を想定した面談のロールプレイに多くの時間が割かれることは述べたが、研修修了後に病院交流会が頻繁に行われているとはいいがたい状況であった。2017 年度は、ある病院の作業療法士の協力及びピアサポーターと支援者の努力の結果、病院交流会の回数が増えた。ただそれは、当該病院におけるそれの回数が増えた結果である。他の病院の受け入れは、進まない。

ピアサポーター養成講座を筆者に依頼した、群馬県精神障害者社会復帰協議会の元事務局長は、ピアサポーターを院内に迎え入れようとする病院は、「どのよう場病名のピアサポーターが来るのか」「ピアサポーターの病状は落ち着いているのか」といった情報を欲するという。それは「入院患者の病状が乱れないかの不安」からくるものであるという。他方、ピアサポーターはそれぞれの施設において時に作業をおこなったりセルフヘルプ活動をおこなったりしている。つまり、ピアサポーターの多くがどこかの福祉施設の利用者であり「支援を受けるもの」でもある。この関係のまま雇用されると、ある時はピアサポオーターという「支援者」であり「利用者」である場合もある。この場合によって立場が分けられるのであれば問題は少ないのかもしれない。現場の同僚や施設利用者、あるいはご本人が「支援者」であり「利用者」のどちらの立場であるのかわからなくなるということは容易に予想できる。また、雇用者がピアサポーターとして雇われたものに、どのようなことを期待しているのか、つまり何を仕事としてなしてもらいたいのかが明確でない場合もあるという。

「なぜピアサポーターを養成するのか」という疑問

では、そもそもどうしてピアサポーターを養成するのか。病院交流会や退院促進でのピアサポーターの活躍は期待されているとされる。ただ現時点において、病院は期待より不安を持っている。今後、病院の不安が払しょくされ期待が大きくなり活動の場が広がったとしよう。しかし、現状ではピアサポーターはどこかの施設に所属している。病院交流会に向かうにも、施設の職員の協力が必要になる。施設の職員の協力とはすなわち施設の承認が必要となる。では、施設がピアサポーターの病院交流を認めるだろうか。施設にとって「資する」ことがあるのか。どこの施設も人手は多くない。少ない職員で施設のプログ

ラムを担当する。ピアサポート活動がその施設のプログラムの主たるものであれば施設にとって「資する」ことになるのだろうが、ピアサポーターではない利用者も多くいる。どうすればよいのか。国がピアサポート活動、ここでいうピアサポーターの病院交流に「報酬」を認めればよい。ただ、現状はそうではない。国にも「厚いステイグマの壁」がある。仮にピアサポート活動に「報酬」が認められたときの懸念もある。アメリカのピアスペシャリストの現状について宇田川健氏[i]に話を聞いたとき、彼は「所属はしてよいが発言するな」という状況があるといった。ピアスペシャリストが支援チームに所属している場合、所属していないチームと比較して報酬が高いという。「所属はしてよいが発言するな」とは、報酬が高く得られるという意味でピアスペシャリストの存在は認められるが「支援」という文脈では従来の専門家の価値で行うという考えの表れなのだろう。

では翻って、ピアサポーターの雇用が進んでいない群馬県で支援者たちは、ピアサポーターの有効性や必要性をどう考えているのか。次回からは、ピアサポート活動を施設などに持ち込み、広め、協力し、形作ろうとしている支援者の考えを紹介する。その後、ピアサポート活動を実践している人たちに話を聞き彼らの考えを紹介したい。

引用文献・URL

相川章子 2014「ピアスタッフの現在と未来――日本の精神保健福祉の変革を目指して『精神医療 [特集]ピアスタッフの現在と未来』74,批評社,pp36-45

古屋龍太 2014「巻頭言 ピアスタッフとは何者か?――境界に立ち続ける人々」,『精神療 [特集]ピアスタッフの現在と未来』74,批評社,pp3-7

大西次郎 2015 『精神保健福祉学の構築――精神科ソーシャルワークに立脚する学際科学として』 中央法規出版

精神障がい者ピアサポート専門員養成のためのテキストガイド編集委員会 編 2015『精神障がい者ピアサポート専門員養成のためのテキストガイド』(第 3 版) 一般社団法人 障がい者福祉支援人材育成研究会

群馬県 精神障害者の地域移行の推進
http://www.pref.gunma.jp/02/d42g_00020.html

国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所 社会復帰研究部
http://www.ncnp.go.jp/nimh/fukki/about/recovery.html

[i] 宇田川健 Community Mental Health & Welfare Bonding Organization（ＣＯＭＨＢＯ：コンボ）共同代表。
http://mediwel-galaxy.jp/archive/410/
2015 年 3 月 13 日に開催した、群馬県精神障害者地域移行支援事業ピアサポート活用事業シンポジウム「ピアとリカバリーを考える VOL２」に宇田川氏を招聘した際に伺った。

★★★★★★★★★★★★

★★★★★★★★★★★★

男は痛い！

國友万裕

第26回

『殿、利息でござる！』

１．ある春休みに入ろうとしている日

ベストフレンドからラインがきて、彼が仕事で京都に来るので朝、四条烏丸のところで会うことになった。朝８時、モーニングセットを食べながら、仕事ことやお互いの悩みを語り合った。彼は 10 時から近場で他の用事があったので、9 時 30 分過ぎくらいまでたっぷり話した。彼とは本当に波長があって、彼といると何よりも落ち着く。

たっぷり話した後、俺は近くの心療内科に行くつもりでいた。たまたまその日の夕方に予約を入れていたのだが、おそらく、朝に変えてくれますかと頼めば変えてくれるだろう。薬をもらうだけだし、時間もかからない。

「すいません、夕方に来る予定になっていたのですが、近いところまで来たので、朝空いていたらやってもらおうかと思ったのですが……」俺は受付で話した。

「朝だったら、次に空いているのは 12 時となりますが……」と受付の人からは言われた。まだ時計は 10 時にもなっていない。12 時まで時間を潰して待つのはつらい。

「じゃあ、夕方にまた出直します。」

そういうと俺は烏丸通りに出た。あー、ついていない。家に帰って、しばらく寝るか。俺はベストフレンドにラインした。すると彼から早速返事。

「じゃあ、夕飯も一緒にしますか。5 時ごろ終わるので」

「オーケー」

彼と俺は何回あってもお互いに苦にならないのだ。俺は一度家に帰って、しばらく仮眠をし、家でくつろいで、もう一度、烏丸へと向かった。予約は 4 時だが、せっかちな俺は

例によって、ちょっと早めの 3 時半ごろ病院に着き、診察を受け、薬をもらって、4 時過ぎには烏丸通りに再び戻った。

まだ時間がある。近所に行きつけの喫茶店があって、そこで時間を潰そうか。俺は四条通りへと向かって歩き始めた。するとマスクをした男性とすれ違った。彼は俺の顔をじろじろ見ている。

「國友先生ですか？」

そういうと、彼はマスクを外した。あ、思い出した。俺がかつて専門学校で教えていた学生だった。

「僕、今専門学校で教えているんです」と彼は話してくれた。もう 28 歳になったという。彼と前にあったのが昨日のことのようなので、あれから 10 年近い年月が経ってしまったことが信じられなかった。一方で、20 代の彼からしてみれば、その間の年月はそれなりに長かったはずで、彼は本当に久しぶりに思わぬ人にあったという顔だった。

彼も時間があって、喫茶店に行こうかと思っていたというので、俺の行きつけの店に一緒に行くことになった。ここは俺の教え子がバイトをしている店である。目立たない地味なお店なのだが、烏丸のビジネス街の中なので、それなりに常連さんがたくさんいるのだそうだ。今いるマダムは 3 代目なのだそうで、60 代くらいの女性である。映画好きなのだそうで、先日、俺の書いた本をプレゼントした。店に置いておいてくれるらしいから、若い学生やサラリーマンの目にもとまるかもしれない。バイトは近所の大学の学生を何人か雇っている。「皆、卒業するときに他の人を紹介してくれるんです」とおっしゃっていた。学生たちからしてみれば、マダムがお母さんのような雰囲気なのだろう。行くと、バイトのシフトでもないのにバイトの学生が来てマダムと駄弁っている。その日もある男子学生がいて、彼は前に高校卒業認定試験を受けて大学に行ったので、もう 25 なのだと言っていた。

高校卒業認定試験とは以前の大学検定のことで、名称が変わったのだ。俺も大学検定で大学に行ったんだよと気楽に言いたいところなのだが、それは無理である。様々なトラウマが湧き上がってくる。大検なんて、俺たちの頃は白眼視されるものだったのだ。でも、彼は何気なくそのことを話す。大検や高卒認定と聞くと誰だって、「どういう事情があってなの？」と聞きたくなる。でも、俺は理由は言いたくない。あの嵐のような日々は筆舌に絶するもので、そんなもの聞かないでくれ！俺は彼にも事情は聞かなかった。

お店には特別なものは何も置いていない。トースト、スパゲティ、カレー、ピラフなど、普通の喫茶店メニューである。専門学校の教え子の彼はお腹が減っているとのことで、サンドイッチセットを注文した。俺はトマトジュースを頼んだ。

彼は大学院を出た後、中学などでも講師をしていて、専門学校にも教えに行くことになったのだそうだ。

「専門学校で教えてみたいと思っていたから、楽しいです」と彼は笑顔で話してくれた。40 分ほどよもやま話が続いた。

「先生、専門学校でモテまくりだったじゃないですか。強烈な印象の先生だったし笑」と言ってくれた。そうだったのか。俺は文句もたくさん言われたし、専門学校の仕事はしんどかったんだけど、好きだと思ってくれていた子はいたみたいだ。もっと自分に自信を

もたなくては！

その後、ベストフレンドからラインがきて、そろそろ会う時間になりそうなので店を出た。専門学校の教え子はもう社会人だから割り勘でもいいかと思ったが、かっこつけておごった。どっちみち、2 人で 1200 円もかからないし、この頃金欠だけど仕方がないか。

「これからも、keep in touch しましょうよ」

「いいけど、若い子と付き合うと俺がおごらなきゃいけなくなるからね笑。あなたはもう社会人だからおごらなくてもいいだろうけど」

「幾つになっても、僕は教え子じゃないですか。だからおごってくださいよ笑笑」

そういう話をしながら、別れた。Facebook でつながった。

ベストフレンドとの夕食はヨドバシカメラである。串カツバイキングのお店に入った。

彼とは、もう長い付き合いになるが、女性の話をしたことはない。俺が女性と付き合えない性格だということがわかっているから、俺の前では気を遣って言わないだけのことで、女性はいるのかもしれないのだけど、そういう話をしなくても男の友情は続いていくのだ。

彼と俺が上手くいっている理由の一つはお互いに金遣いが荒い。金銭感覚が似ているのである。また彼も俺も、わりと親に経済的に頼って生きてきているので、男は親に頼るべきではないという考えに囚われていない。お互いに車も乗らないし、タバコもしない、お酒も付き合い程度。この上、女の話もしないんだから、ほとんど男っぽさ皆無なのだ。

俺は自分が男か女かわからない。男になりたいけど、男になることに抵抗する、男って何？？？

２．女子学生に手作りのケーキをもらう。

次の日。

この日はまだ期末テストだった。テストが終わった後、女の学生から「先生、レアチーズケーキとか食べますか」と突然、訊かれた。彼女が自分で作ったケーキをお裾分けに持ってきてくれたのだ。可愛らしい包みに入れて、優しい女の子だなあと思った。先生冥利につきる瞬間である。こういう子は時々いるのだ。

前にある出版社の男性と話した時だ。

「じゃあ、女子学生の人たちとはうまくいっているんですね。國友さんの本、読んでいるとあまり女が好きじゃないんじゃないかと思っていたんだけど」と言われたことがある。

これに対する答えは Yes&No である。確かに女子学生の中には可愛い女子学生もいる。しかし、それは恋愛対象という意味ではないのである。俺はおそらくもう一生、女性と恋愛はできない。女性に対する偏見は抜けないのだ。

俺は大学に入ってからは前向きだった。不登校の過去を帳消しにしたかったからだ。しかし、俺には、大して深く考えている余裕がなく、英文科を選び、女の子が 7 割以上という環境に投げ込まれて、またしても女の子たちから悪口を言われ続けることになった。たまたま入った大学がクラス制を敷いていたので、いったん入ったクラスが上手くいかないとそれはずっと続いていく。そして、結局彼女たちへのわだかまりは消えることなく、俺は大学を後にしたのだ。

俺だって苦しんだ。今だって、当時の女の子のことが夢に出てくることがある。しかし、

人の心というのは苦しんでも変えられない。苦しみぬいてよくなるケースもあるだろうが、俺にこんな苦しみを味わわせる原因を作った女性が許せないという気持ちが湧いてきて、女性とまともに付き合うことができないのである。

３．400 円の焼きそばを食べた。

その次の日。

この日は FB にリクエストが来た。知らない男子学生からである。もう 20 歳過ぎているから問題はないんだろうけど、いささか躊躇した。しかし、共通の友達の先生がいるので、まあ、いいか、FB は実名だし、学生たちはほとんど使っていない。アカウントを持っているだけだ。学生の方は躊躇しないが、俺の方は学生と SNS でつながるのはなんとなく怖い。悪さをされたら困るしなあ。それを前に話したら、ある学生から「先生、僕らを小学生みたいに思っている。大学生がそんなバカなことしないですよ」と言われた。確かにそうだなあ一先生の中には FB を公開している人もいるし、FB を悪用したりするのはよほど一部の人たちであって、普通の人はそこまでしたいとも思わないだろう。まあ、いいか、とリクエストを承認した。

「実は國友先生の授業取りたかったんです。だけど、とれなくて、今の先生になったんだけど、今の先生と FB で繋がって、友達の中に國友先生の名前があったので、リクエストさせていただきました」というきちっとした内容のメッセージが届いた。真面目な学生という印象である。この子だったら大丈夫だろう。

この日は大学の近所の喫茶店で、ランチを食べた。そこは 2 年前に卒業した体育会系の男の子が教えてくれた店である。女性が 2 人でやっているのだが、40 年ほど前からある店なのだそうで、当時はお姉さんだった女性たちも今はおばさんである。この店が体育系の子に人気があるのは焼きそばが安いからで、卵が付いてボリュームもあって 400 円である。

写真を撮って、今は東京で働いているその男の子にラインで送った。

彼から早速返事。「せこっ。俺も行きたい！」

こんな安いところで食べるなんてせこいということらしい笑。彼は大学の頃から俺にコミュニケーションしてくる子で、卒業して、一度は一緒に会おうとしていたのだが、何せ東京なので会う機会がない。俺の方もこの頃行く機会がないし、彼も京都に遊びに来ようにもまだ給料が安いからお金がないとのことである。この頃の学生は大概は東京に行ってしまう。最初は東京で研修して、そのあと、名古屋や札幌や大阪に配属ということにもなるのだが、とりあえずは東京。

昔、フェミニストはよく言っていたものだ。女は結婚すると檻に入れられる。しかし、男だって檻に入れられている。この頃は 1 流どころの企業は全国区になってしまっているので、勤務地はなかなか選べない。選んだりしたら、出世コースから外れるだろう。男は社会という檻に入れられている。そして、そこで飼い慣らされていく。そこで男たちはいつの間にか自分をなくしていく。男にはそういう人生しか用意されていないのか。

今年で定年のある女の先生が言っていた。

「女は定年になっても、したいことがいっぱいあるから大丈夫なんですよ。むしろ時間

ができるのが嬉しい。」

確かに女性の年寄りは元気だ。男は身体は元気な人でも、定年になって、自由になったという雰囲気ではない。むしろ居場所がなくなって、時間を潰せなくて、所在なさげにしているおじいさんがどれだけ多いことか。男って、損ばかりしている。なのに、男たちはそのことに気づかないのだ。

「夏には東京に遊びに行くと思うから」と東京の元教え子にラインを返したところ、「肉を食わせて！」と返事。「じゃあ、風呂も付き合ってくれな」と返事すると、「肉食った後風呂」と返事が来た。俺は色々な男の人と風呂に入るが、俺が風呂に誘うのは大概は体育系のやつなのだ。彼らと風呂に入ると、体育会になったような気持ちになってすごく楽しい。

女性たちは、一般にスポーツ問題のことがわかっていない。スポーツ系のやつは爽やかで、さっぱりしていて、魅力的だ。それはおそらく彼らが男性性を発散しているからだと俺は理解している。社会のシステムはスポーツと似ている。そこでプレーしていくことに彼らは慣れてしまっているから、ホモソーシャルな社会にも適応しやすい。スポーツができない男は、男性的な活動から除外される。男の部分を発散できないまま、孤立感を深めていく。俺はまさにそういう男子だったのだ。今頃になって、マッチョな男たちと風呂に入ることで、若い頃にできなかった夢を疑似体験しているなんて、寂しい話だ。男に生まれること、とりわけスポーツができない男に生まれることは悲劇である。

４．東京が好き、九州は嫌い。

そのまた次の日。ひたすら寒い１日。

仕事が終わった後、マッサージの人に来てもらった。いつも通り、楽しく歓談しながらボディメインテナンス。

「俺、昔はこの時期に上半身裸でマッサージ受けていたよね？　あの頃はまだ若かったのかなあー」

「今年はとりわけ寒いんですよ」

彼もラグビーや陸上をやっていたスポーツマンである。彼に話を聞いてもらいながら、マッサージをしてもらうようになって、もう６年である。もうお互いのことをほとんど知り尽くしている。彼は俺が九州嫌いで、地方恐怖で、都会にいたいと思っていることも知っている。

「俺は 75 で死のうと思っているんだ。京都が好きだし、京都の市外局番は 075 だからね」

「じゃあ、75 まで京都で暮らして、そのあとは九州に行ったらどうですか笑。九州だったら市外局番がもっと大きな数字だから、75 から第２の人生」

「なるほど。それもありか笑笑。でも俺は九州で骨を埋めたくないからね」

今年の夏休みは学会で仙台に行くことが決まっている。埼玉の大宮に叔母が住んでいるので、叔母に久々に電話した。仙台は叔母のところからだと新幹線で１時間ぐらいで行ける。仙台に長くいるよりも、叔母のところに止まって、その前後を東京で過ごして、かつての教え子と会ったりしている方が楽しいだろう。他にも会ってくれる人はいるだろうか。

５．　消えない過去

そのまたまた次の日。

朝からテストの採点。そのあとお昼から『デトロイト』を見に映画館へ。これで 6000 ポイント貯まった。このシネコンでは 6000 たまると１ヶ月のフリーパスがもらえる。その間は無料でいくらでも映画が観れる。ちょうどいい時期にたまったものだ。これからの１ヶ月はしばらく時間のゆとりがある。

そのあと、しばらく眠り、夜から『祈りの幕が降りるとき』を早速みる。フリーパス鑑賞第１作である。

最近になって、松本清張原作の『ゼロの焦点』をネット配信で見た。これは何度かドラマ化もされていて、ストーリーは大体知っている。元パンパンだった女性がその過去を隠すために殺人を重ねていく物語である。彼女はパンパンになりたくてなったわけではないのだから、彼女をそういう状況に追い込んだ社会が問題なのだけど、社会はそれを個人の責任にしようとする。だからと言って、人を殺していいということにはならないが、忌まわしいトラウマを理解してもらえなかった人間は社会全体を憎むことになる。それをエクスキューズとして彼女の殺人は始まるのではないか。そんなことを考えた。

そういえば、松本清張原作の映画といえば『砂の器』が有名だが、これも同じテーマだった。ハンセン病であるがために迫害された父親との過去が原因で殺人を犯してしまう音楽家の物語。

『祈りの幕が降りるとき』も過去との相克を描く映画である。何も予備知識なしで見たのだが、面白かった。

６．壊れた心

そのまたまたまた次の日。

このところ原稿を書くのが重い。過去のことを書こうとするのだが、それを始めると辛い気持ちが蘇ってくるので、できないのだ。思い出すことすら辛くなってきている。それは俺が初老になって、もうだいぶ人生がわかってきて、どれだけ思いを巡らしてもこの思いは消化できないという諦念の思いを抱き始めたからだろう。何年か前だが、「過去に囚われていると先に進めなくなる」とある先生から言われたことがある。その先生と限らず、過去は変えられないことは皆が言っていることなのだが、俺は過去に押し戻される自分をどうすることもできないのだ。過去のトラウマが大きければ大きいほど、あの過去がなかったら、俺はこれだけ苦しまなくても済んだのではないかという気持ちが湧いてきて、過去を恨みたくなるのだ。心はある日突然に壊れるのだ。そして、いったん壊れた心を元に戻すのには膨大な時間がいるのだった。

この日はフリーパス鑑賞第 2 弾で『嘘を愛する女』を見た。これまた過去の話で、主人公の恋人は実は以前、結婚していて、その時にトラウマを追って、それを忘れたいがために瀬戸内から東京に出て暮らしているのだということがわかっていく。東京だったら、誰も過去のことは聞かない。『時代屋の女房』という映画で、「何も言わず、何も聞かずが都会の流儀」という言葉が出てくるが、
東京は過去を忘れたい人のための町なのだ。

７．呼吸が苦しい！

そのまたまたまたまた次の日。
朝からテストの採点三昧だった。

昼頃からちょっとだけスポーツクラブ。30分、トレッドミルでウォーキングしただけで激しい疲れ。この頃呼吸が苦しい。いつか胸が苦しくなって、ばったりいきそうで怖い。痩せなきゃなあー。呼吸の調子が悪いのは体重のせいだろう。

父が死んでから早２０年が経つ。時の流れはあまりにも早い。あの時のことは今でも克明に覚えている。その１年ほど前から父が癌だということは知っていた。しかし、当人には明かしていなかったし、父は天然みたいな人だったので、本人も死ぬとは思っていなかった。また一時期は回復したので大丈夫かとも思っていた。

しかし、２月の下旬、俺の誕生日の数日前に容態急変の電話がきて、俺の誕生日の前日２６日に父はなくなった。父は若い頃から糖尿病で、何度も危ない時期があったので、65歳まで生きることができたのはむしろ幸運だった。俺は体は丈夫なので、65で死ぬということはないだろうが、50代になるとさすがに体のことが気になってくる。

今年の冬は思いのほか寒い。暖房は冷房よりもお金がかかるので、いつもの年だと多少は使うのを控えるのだが、今年は惜しみなく使っている。暖房代ぐらいはケチっちゃいけない。もう若くはないのだから。

スポーツクラブの後、家で仮眠。

そのあと、突然ベストフレンドから連絡がきて、夕食を食べることになって、京都駅へ向かった。さっぱりと和風の食事。彼とは本当に一生に一人の親友である。

夜中。突然、この１年教えていた男の子からメッセンジャーでメッセージが来た。「１年間ありがとうございました。先生のなんとも言えないキャラ、嫌いじゃないですよ」と書かれていた。嫌いじゃないということは、好きでもないってことなの？？？？？笑笑

８．『殿、利息でござる！』（中村義洋監督・2016）

こんな調子で俺の１週間は過ぎていった。読者の人たちはまたいつもと代わり映えがしないことが書かれているなあと思っているだろう。でも、50代にもなるとそうそう変わったことなんて起きないのだ。

この頃、唯一変わってきたことは、掃除をするようになったことだ。俺の周りの男性は綺麗好きが多いので、俺の部屋に来るとあまりの汚さに驚いて、頼んでもいないのに掃除をしてくれる。多少はあやからなくてはならないと思い、この頃、できる限り無駄なものは捨てていて、トイレやバスもマメに拭き掃除している。今だったら、誰が遊びに来てくれても、いつでもオーケーだ。

今回見たこの映画は、時代劇で阿部サダヲが主演なのでコメディかと思いきや、シリアス調だった。俺は時代劇は元々苦手で大きなことは言えない。ただ印象に残ったのは、江戸時代の家屋の中が掃除が行き届いて綺麗だったこと。江戸時代は、戦争もなく、最高の時代だったという人もいる。当時の人は涼やかで、キリッとしていて、凛とした美しさがある。みんな背筋が伸びているし、猫背の俺とはえらい違いだ。

21世紀の日本映画は先に挙げた映画も含めて、死を思わせる、ゾンビのような話が増えていっている。ポスターを見ただけで、陰鬱で、見る気がしなくなるものが多いのだ。そ

のことをある映画の仕事をしている女性に話したら、「でも今の若い子たちはそういうのの方が好きなだろうから」と言われてしまった。そうか、だからこそ、時代劇でキリッとした姿を見せられるのも心が洗われるという部分があるのだろう。

これから世の中、どうなるのか。とりあえず、もう若くはないのだから、神様がくれた時間だと思って、日々を大事に生きていくしかないのだ。

俺の人生はこれからどう流れていくのか。神様にお任せである。死ぬ前に存分、男を発散させて、男に生まれてよかったという気持ちを味わってみたい。それができれば、俺の人生は成功だなあとこの頃は思っている。

男は痛い！でもマッチョになりたいです！！！笑笑



身を粉にして働く

過労死ラインの残業をさせても違法にならない「働き方改革関連法案」。
今もたくさんの人が仕事に殺されてるのに、さらに加速させたい財界と政府。この国大丈夫ですか。

三嶋あゆみ

援助職のリカバリー

《25》

～「セックスレス」に立ち向かう(6)～

袴田　洋子

土曜の夕方、京子は手際よく仕事を終えると、足早に駅に向かった。自宅の最寄り駅から１つ先の駅近くの居酒屋で、先輩薬剤師の香と今夜、初めて一緒に飲む約束をしていた。日本人女性のセックスライフ議論について、京子と香は、多いに盛り上がったのだが、さすがに薬局の昼休みに話し続けるには難しく、改めて場を設けようということにした。

店は、土曜の夜ということもあり、ほぼ満員の状態だった。店員に、予約している自分の名前を告げると、「お連れの方がもういらしています」と言われ、席に案内された。

「お疲れ様。先に着いたから、もう始めちゃった。」と、香は片手にビールジョッキを持って、京子を見上げた。香は、今日は有給休暇を取っており、昼間は、渋谷に映画を観に行っていた。職場では、自他共に認める映画好きと知られ、単館ロードショーの映画なども、一人でよく観に行っていた。香から鑑賞を勧められた映画は本当に面白く、その選択基準を京子はとても気に入っていた。人々の日常生活の中に起こる葛藤や苦しみ、希望など、リアルな感情を描いているストーリーで、印象に残るものが多かった。そんな人間らしさをテーマにした映画を多く観ている香だから、女性のセックスライフについて真面目に話しが出来ると、京子は直感的に考えていた。

京子も同じ生ビールを注文し、二人で乾杯をした。「あまり強くないから、そんなにたくさんは飲めないけど、たまに一人で飲みに行くこともある」と香は言った。これまで、香とはそれほど、私的な話をしたことがなかったので、京子は、女性のセックスライフについて、どこから話をしたらいいのか戸惑った。そんな京子の気持ちが伝わ

ったのか、香は自ら、話し出した。

私ね、夫と結婚する前、高校の時から付き合っていた彼氏がいたんだけど、大学が別になってしまったことで、ちょっと遊んじゃったの。彼とは、はっきり別れないまま、ちょっと他の男の子とデートしたり、飲みに行ったり。まぁ、浮気っていうのかな。多分、向こうもおんなじ。なんとなく他の女の子と遊んでいるじゃないかな、って思ったり。でも、お互いで別れようっていい出さなかったから、続いていたのよね。多分、今、思うと、セックスが気持ちよかったの。で、大学卒業して、お互い就職して。でも、就職って、やっぱりこれまでの生活と、大きく変わるでしょ。職場の先輩が、とても大人で男性として、素敵に見えたりして。同級生で同い年の男子より、ずっとかっこよく見えるのよね。それで、ふらふらっと、付き合っちゃって、結婚。９歳年上の先輩が、今のうちの夫。同級生の彼も、同じ頃に他の女性と結婚したのよ。で、うちは結婚して、5年目でやっと子どもが出来たんだけどね。不妊治療？不妊治療なんて考えもしなかったわ。ただのセックスレス気味だったから。夫と付き合い始めた時、それまでの彼とのセックスとはぜんぜん違ってびっくりした。あんまり気持ちよくないのよ。なんか、あまりセックスのことを大したことないって思ってるのかな。でも、私も子どもが欲しいと思ったから、がんばって、排卵日を予測して、なんとか妊娠できたの。で、ふと思ったのよ。今後は、妊娠のためのセックスではなくて、夫婦の性欲のためのセックスをするんだよなって。そうしたら、今のままでは、とても続けていけない、と思ったの。お互いで気持ち良いセックスが出来るように、努力しなくちゃと思ったの。で、滝沢さんとまったく同じ。ネットで検索したら、出てくる出てくる。女性向けのアダルトグッズを扱っているサイトもあって。びっくりしたわ。それで、思い切って、そのサイトで、自分でバイブを買ったの。で、セックスの時に、夫に使ってもらったのよ。夫は、最初はびっくりしていたけど、その後は、私が気持ちよくなれるように、自分から他のもっと高級なアダルトグッズをネットで買ってくれていたりして。それで、私もオーガズムを感じられるようになって、気持ちいいセックスができるようになったの。浮気しないで済んだわ。ほんとよ。滝沢さんが考えていたとおり、日本では、女性がセクシャルなことを口にするのを受け入れられていないと思うわ。こんな話、なかなか出来ないでしょう？でもね、とても大事なことなのよ。女性にも性欲があって、気持ちよいセ

ックスがしたい、って、堂々と言っていいのよ。でも、そのためには、ちゃんと女性が、自分自身の性欲を認めることからよね。でも、あまりにも忙し過ぎたり、仕事で疲れていたりすると、セックスするより寝たい、って思うわよね。世の夫は、仕事で疲れているのに、体力使うセックスなんてしたいと思えないかもよね。でも、だからこそ、前戯をして、女性が潤って、アダルトグッズのローターやバイブを使って、女性をちゃんと気持ちよくさせれば、挿入したあと、短時間で射精しちゃっても女性は満足できるのよ。そうすれば、何歳になっても、体力の衰えを怖がらずに、夫婦でセックスを楽しむことができると思うわ。ただ、女性が気持ちよく感じても、加齢と共に、どうしても潤わなくなってくるんだけど、潤ってないのに挿入されると、性行為はただただ痛いだけだから、そういう時は、潤滑剤のゼリーを使えばいいのよ。美味しいものが食べたいな、っていうのとまったく同じように、気持ちいいセックスがしたいな、と思っていいのよ。それは、恥ずかしいことでも何でもないわ。夫婦やカップルにとって、とても大事なことなのよ。日本は、そういうことを誰も教えてくれないものね。性的欲求の解消は、とても大事なことなのよ。

香の話は、京子の人生が 180 度変わるくらい、衝撃的に感じられた。が、不健全には、全く感じなかった。いや、これこそが、健康な性の考え方なのではないかと思えた。どちらかが我慢するようなものは、続けることはできないのだ。生ビール３杯飲んだとは思えないほど、頭は冴えていた。京子は、香に教えてもらった女性用のアダルトグッズを扱っているサイトにアクセスし、ローターとバイブを一つずつ購入した。

★★周旋家日記２３★★

「シティズンシップについて考える①ー町内会活動を概観する」

乾明紀

１．はじめに

昨年の夏、学生が主体となって大学周辺の町内会の現状を調査することとなった。これまで地域社会と連携したプロジェクト活動をしたことはあったが、町内会を調査対象とすることは筆者にとっても初めてであった。そこで、本稿では町内会について概観してみたい。

2．町内会のジレンマ

様々な課題を抱えながらも自治体が大きな期待を寄せているのが、町内会である。加入世帯数は減少傾向にあると言われている一方で、地域課題を解決したり予防したりする組織としての期待は益々高まっている。そのようなジレンマの渦中にいるのが町内会である。

筆者は京都市の下京区で生まれ育ったが、子どもの頃、友人の多くは商店主の子どもで、職住が近接した環境で暮らしていた。友人宅に遊びに行けば、働く両親の顔も見ることができた。仕事、住まい、地域は一体であり、町内会活動への参加は通過儀礼であった。筆者は家業を継げなかったため、生まれ育った地域の町内会に入ることはできなかったが、地域に残った友人は、町会長や消防団員として地域活動をしている。友人と町内会との関係は、かつてと変わらない風景である。歴史ある町内会では、友人のように複数世代に渡る地縁の中で暮らす人々が、その活動を支えている。しかし、個人商店は減り、役員の担い手不足や高齢化により活動に支障をきたす町内会も多い。

一方、生まれ育った地域を離れた人々の多くは、賃貸マンションなどで町内会との関係を断って暮らすようになる。親世帯からの独立し始めた社会人や親元を離れてひとり暮らしをする大学生などである。その後、結婚し子育てが始まると、新しく移住した土地で地域と関わりを持ち始める。町内会からの勧誘や保護者のつながりで加入する世帯もある。さらに、子どもが小学校に入学すれば、自治連合会(町内会の上部組織)の取りまとめ地域でもある「校区」はぐっと身近になってくる。

しかし、マンション住居者の中には、町内会と距離を置く世帯も多い。マンションの管理組合が、町内会と類似機能を有することもその一因であるが、町内会側が勧誘に消極的な場合もある。利便性の高い地域にはマンションの建設も多く、昔ながらの地縁の文脈で暮らす人々にとって、地域性の喪失や自らが少数派になることへの不安がその背景にあるという。

３．町内会の役割

中田（2017）[1]によれば、町内会とは次の５つの特徴を有する組織である。

①一定の地域区画を持ち、その区画が相互に重なり合わない
②世帯を単位として構成される
③原則として全世帯（戸）加入の考え方に立つ
④地域の諸課題に包括的に関与する（公共私の全体に渡る事業を担当）
⑤それらの結果として、行政や外部の第三者に対して地域を代表する組織となる

しかしながら、この特徴を認識している市民はど

[1] 中田実（2007）「新版 地域分権時代の町内会・自治会」自治体研究社

れだけいるだろうか。先にも述べたように、マンションは、たとえ一定の地域区画内にあったとしても町内会の外に置かれる場合もある。さらに、任意団体であるため、加入しない自由や脱退する自由もあり、現実的には全世帯が加入していない町内会がほとんどである。

また、戦後、「個人の自由」を擁護する民主主義の考え方は浸透したが、町内会を通じて「公共の福祉」を護持していくことへの共通理解は十分ではなかった。この共通理解の前提がなければ「地域の諸課題に包括的に関与する」ことへの必要性が理解しにくいし、利害調整のための代表性への理解も乏しくなる。

このようにみると、中田の整理した特徴は、もはや理想形を指しているに過ぎないかもしれない。しかし、町内会を否定し、地域住民の「公共私」にかかる調整をすべて行政に委ねるべきだろうか。税金を納めている以上、行政に解決を委託すべきという意見もある。しかし、この考えを追求すれば、行政の肥大化を覚悟しなければならないし、近隣同士のもめごとは全て裁判で解決せよということになる。良好なコミュニティを維持する仕組みは、お金でサービス（私有財）を等価交換の原則で購入するという資本主義モデルとは異なり、「おせっかい」や「配慮」を媒介としたものである。このような互酬性は、利他的行動がやがて公共の利益（共有財）になることに信頼を置くことで生まれる規範である。互酬性の規範は、防犯や災害時の対応に力を発揮する。パットナム[2]（2001）は、社会経済的に発展し、行政パフォーマンスが良い地域には「互酬性の規範」「社会への信頼」「ネットワーク」の 3 点から成るソーシャルキャピタル（社会関係資本）が充実していると主張した。このような視点からも町内会を維持したり、活性化することへの期待は高い。

４．町内会のこれから

一方、価値観の多様化や複雑化する現代の社会問題に対して、町内会が「包括的に関与」して解決できるのかという指摘もある。確かに町内会はアマチュア集団である。それ故の限界があることは否定できない。しかし、だからと言って不要だと片付けてしまうのは暴論と言えよう。社会の問題を機能別に解決していこうとする NPO や社会的企業などのプロフェッショナル集団も増えてきたが、まだまだ課題（収益性・持続性など）も多い。町内会が行政や NPO などと連携・協力することで、複雑な問題への対応力が高まることは予想に難くない。また町内会が包括的に関与する場だからこそ早期に発見できる課題もある。

少子高齢化の進展は、我々の予想を超える社会変化を引き起こす可能性がる。だからこそ、市民社会の中にセーフティネットを厚くしていく必要がある。その機能を担う組織や場としての町内会への期待は大きい。ただ、問題はそこに関与できる人が地域にどれだけいるかである。学生がおこなった近隣町内会へのインタビュー調査によると、町会長が負担を感じる一番の理由は、行政や外郭団体などと紐づいた委員活動との兼務であった。

このような状況に対して、紙屋（2017）[3]は町内会の“業務”はほとんど無くせると主張する。しかし、ご近所さん同士の互酬性は絶対に無くしてはいけない規範である。この規範があるから犯罪や災害に強い地域となる。このことに気付いた住民が多ければ、その町内会はきっと活性化していくだろう。　-つづく-

[2] パットナム（2001）「哲学する民主主義―伝統と改革の市民的構造」NTT 出版

[3] 紙屋高雪（2017）「どこまでやるか、町内会」ポプラ社

トランスジェンダーをいきる

（最終回）

「自己物語の記述」による男性性エピソードの分析

牛若孝治

新たな男性性構築に向けて

1　始めに

身体の性別は女性・ジェンダーの性別は男性の筆者が、これから人生の折り返し地点を生きていく上で、自己の新たな男性性をどのように構築していくか。そこで本稿最終稿では、従来のジェンダー規範に基づいた男性性とは異質な次元の事柄を扱うことにする。

これまでの稿では、FTM トランスジェンダーの自己の思い込みや決め付けによって、男性性を補償してきた部分が数多い。その結果、誇張した男性性、肥大化した男性性などの性質を諸特徴とした通常の男性性とは相容れない巧妙な性質を持った特異な男性性を再生産してきた。現在、中年期に差しかかった自己のあり方として、このような諸特徴を持った巧妙さを含んだ特異な男性性を見直し、新たな男性性の構築を模索しなければならない時期にきている。それは、男らしさの遍歴を一心不乱に駆け抜けてきたこれまでとは異なり、中年期に向かう際に直面している男性性の矛盾や葛藤だけでなく、社会との共生を模索する必要性を痛感しているからである。

この社会との共生の必要性として最も重要なことは、同じ視覚障碍のある人との共生である。本稿再就航では、どのようにして視覚障碍のある人たちの世界に飛び込んでいったか、その結果、現在どのような男性性を構築しようとしているかについて記述する。

2　「視覚障碍者の世界」に飛び込む

「あなたは視覚に障碍があるのに、なぜわざわざ「視覚障碍者の世界に飛び込む」なんて書き方をするのか」と突っ込まれそうな雰囲気だが、これまでの筆者の生き方としては、「視覚障碍」より、性別違和、つまり「トランスジェンダー（性同一性障碍）」の方が、圧倒的に生き辛さ・理解のされにくさを痛感したのは事実である。特に、視覚に障碍のある人たちからは、「視覚に障碍があるから、体の性別（女性）の素晴らしさが判らないのではないか」・「そんな話気持ち悪いから止めてくれ、聞かない」などと一方的に拒否されてきたことが多い。鍼灸マッサージ師の資格

を有しているにも関わらず、そのようなことを平気で言ってのける視覚障碍者が多いのは、筆者としては残念である。だから、筆者の立場としては、やはりここは、「視覚障碍者の世界に飛び込む」と書いた方が、真実をついているような気がするのである。

① 同窓会で再開した友人からの一言

2015 年 1 月、視覚障碍関連の同窓会に出席したときのことである。当初筆者は、同窓会に出席することを躊躇した。視覚障碍者の世界は狭い。だから、筆者のように体の性別（女性）に違和感を覚え、ジェンダーの性別（男性）として生きていくことを決意し、視覚障害者協会や盲学校の同窓会などの名簿の氏名・性別変更の依頼をしたところ、たちまちのうちにその噂が広まった経緯があったからだ。そこで筆者は当初、びくびくしながら同窓会に出席した。

乾杯の儀式が終わり、歓談しているときに、20 数年ぶりに声を掛けてきた友人が一言、「おめでとう」と言ってくれた。「何がおめでたいん？」と聞いてみると、彼は筆者の耳元でそっと言った。「牛若君になったんやな。俺は嬉しかった」。筆者はよい意味で我が耳を疑った。男の友人がこんなことを言ってくれるとは思っていなかったからだ。再会を気に、彼は時々筆者の家に来てくれるようになり、その度にいろいろな話をした。「君はずっと前から男やと思っとったで」と言ってくれた彼に、筆者は救われた思いであった。

彼との再会を期に、筆者はその後、盲学校の同窓会や、視覚障害者協会の行事などに少しずつ出席するようになった。その度に、「やっぱり、女性の方があなたらしい」などの無理解なことは言われるものの、理解されることもあることが分かってきた。「視覚障碍者は情報が少ないから世界が狭い、よって筆者の性別違和の状況は理解されない」という筆者の思い込みが徐々に崩れつつあった。

②「視覚障害者協会」への提言

彼との再会を期に、盲学校の同窓会や視覚障害者協会の行事などに出席することを通じて、筆者と視覚障碍者仲間との間に少しずつ接点が見出せるようになった。その一方で、視覚障害者協会に決定的に欠けているものも見えてきた。それは、「視覚以外のさまざまな生き辛さに対する理解がほとんどないこと」である。視覚障害者協会であるから、視覚障碍ゆえの困難や生き辛さについての社会への提言をするのは当然であるが、たとえば筆者のように身体の性別違和によって生じるさまざまな困難や生き辛さについては、ほとんど無理解である。たとえば、外出する際に目的地まで誘導してくれるガイドヘルパーの制度は、身体・戸籍上の同性が基本であるが、この制度を筆者が利用しようとすると、女性として利用しなければならないことになり、このことは筆者の本意ではない。確かに個人として筆者の状況を理解されることは徐々に増えつつあるものの、視覚障害者協会として、筆者の状況を理解されることは、ほとんどないといわざるを得ない。そこで筆者は現在、視覚障害者協会に対して、視覚以外の他の障碍や生き辛さについても目を向けるように提言している。

また、京都では毎年 10 月から 11 月にかけて、啓発活動として「白杖安全デー」が行われてい

る。これは、白杖を持っていることで、視覚障碍者が何に困り、どのように改善して欲しいかを市民に呼びかけるイベントである。その際、いくつかの文言があるのだが、特に「白杖見たら声掛けて」という文言があり、これは視覚障害者協会が一番重要視している。しかし、筆者はこの文言を猛烈に批判している。「共生社会」が叫ばれている昨今、なぜ視覚障害者だけが一方的に「声を掛けられる存在」に甘んじなければならないのか、特に、単一の視覚障碍者は、自分から声を掛けるスキルを身につけることが必要だ。筆者はこのことに対しても、視覚障害者協会に問題提起している。

③新たな男性性構築――「強靭さ」と「粘り強さ」

このようにして、視覚障碍のある仲間や視覚障害者協会への提言・問題提起を重ねていくうちに、筆者の中で新たな男性性構築を模索する必要性を痛感するようになった。それは、「強靭さ」と「粘り強さ」である。「強靭さ」とは、たとえば視覚障碍のある人たちから、「女性のあなたの方がいい」と言われた場合、「そういうことは一切言わないで下さい」と毅然とした態度で応酬する、視覚障害者協会への提言や問題提起をするときは、粘り強く論理的に、などである。一方「粘り強さ」とは、たとえば視覚障害者協会がこれまで培ってきた歴史をいったん受容し、とことん「入り込む姿勢」である。この場合、「いったん受容してとことん入り込む」というのは、何も盲目的に受容して入り込むのではない。いったん受容してとことん入り込むことで、今後改善すべき課題が見えてくる。その改善すべき課題を見出すためには、時間と労力が必要である。筆者はそのような意味で、粘り強さが必要と考える。

3　終わりに

2012 年 5 月から連載してきた『トランスジェンダーを生きる』は最終回となるが、筆者のトランスジェンダーの人生はまだまだ続く。筆者は今後も、トランスジェンダーであることを肯定した上で、社会に発信していきたいと考えている。

最後に、この連載を読んでくださった方々に、心から感謝している。

うしわかこうじ（立命館大学大学院先端総合学術研究科）

役場の対人援助論

（２３）

岡崎　正明

（広島市）

差別考　～お役所として、当事者として～

障害者差別解消法

2016 年 4 月に施行された障害者差別解消法。名前くらいは聞いたことがあるだろう。

どんな趣旨の法律か簡単に説明すると、「人は障害があっても無くても、基本的人権のある個人として尊重され、尊厳ある生活を保障されるべきものである。だから障害を理由とした差別の解消を推進していく」というものである。

お役所というのは法律に基づいて仕事するところだ。なので新しい法律ができると、関係部署にその内容と、それを受けての対応が通知される。障害者差別解消法ができたときも、私たち末端までちゃんとそのお知らせがきたのだが、ちょっとその様子がいつもとは違っていた。というのも、この法律は障害者に関わる可能性があるすべての部署、つまりは窓口業務すべてにとって関係があるため、お知らせもかなりの広範囲になったのだ。

そのため職員向けの研修会も開かれた。

特にポイントになったのが「合理的配慮」について。合理的配慮とは、障害者から依頼や要望があった場合、過度な負担になり過ぎない範囲で行う、必要な便宜や手立てのことで、例えば弱視の方には拡大コピーした資料を提供する、知的障害のある方には漢字にすべてふりがなをふった書類を使い、説明は平易な言葉で行うなど、その相手に応じた特別な対応のことである。

特別な便宜・手立てというと、「特別扱いはどこまで許されるの？」「役所は誰に対しても同じ対応じゃないといけないのでは？」という理屈にぶつかることがある。

合理的配慮は、確かに特別扱いである。しかしそれは“必要な特別扱い”だ。

例えば先ほどの弱視の方への対応。もしそれをしなければ、その方は資料が読めず、理解

が進まないことになる。拡大コピーを渡すことで資料が読め、ようやく障害が無い利用者と同等の理解を得ることができるのだ。
　数値に例えると、仮にお役所で利用者に対してなされるべき適切なサービスが「10」として、相手が一般の人であれば、職員が 10 のサービスをすれば、通常 10 受け取ることができる。しかし障害者はその障害ゆえに、３とか６しか受け取れない場合がある。そこで職員が７とか４を追加する。ここまでやることで、結果がやっと同じ１０になる、というわけだ。
　まあ本来は障害があっても無くても、どんな人でも初めから 10 受け取れるサービスの形であるのが望ましい（こういうのをユニバーサルデザインといったりする）が、現実問題としてなかなか難しい面があるのも事実である。

　これに対しやってはいけない特別扱いは、ちゃんとした理由がないのに他の利用者と差をつけ、１２とか１５のサービスを提供してしまうことだ。特定の業者にだけ入札価格を事前に知らせる。友人だから公営住宅の抽選が当たるように操作する。そんな特別扱いは、「不正」とか「癒着」と呼ばれるものになってしまう。
　だから障害者への合理的配慮自体は問題ない。ただ、難しいのはその時の「過度な負担になり過ぎない範囲で」という点である。
　「過度な負担」というのは、どの程度のことをいうのか。たしかに、市の予算の半分も使わないといけない対応を求められたら、すぐに実現するのが困難だというのは理解できる。しかしそこまで分かりやすくなくとも、担当者の事務負担がとても増えてしまうとか、判断に迷うような微妙な事例をどうするのか。
　また全体から見ればわずかだが、合理的配慮という言葉を盾に不当な要求をしてくる事例も起こりうる。その場合の見極めや対応について、研修では多くの時間をとっていたし、職員からも心配する声や、様々な意見がでていた。

　お役所という立場上、合理的配慮を提供する側としての視点や姿勢が大事になるのは当然だ。しかし私は正直、少しもったいないなあと感じた。なぜなら研修ではその逆の、「受け手側」から見るという視点がまったくなかったのだ。
　私たちは障害者差別解消法というと、「障害のある人のための法律」だと思ってしまう。自分には直接関係ない、一部の人のためのもの。しかし本当にそうだろうか。この先、私やあなたが弱視になったり難病になったり、あるいは障害のある子や孫を持ったり。将来的に、様々な配慮のいる立場になる確率は、実は結構高いといってよいのではないだろうか。そう考えると、この法律は遠くの他人の話ではなく、自分やその近く起こり得る未来の話。そう認識した方が正しいのではないか。

　お役所というところは、組織内に実は結構な数の障害者を抱えている。障害者雇用促進法という法律で、全職員の 2．3%（H30 年 4 月から 2．5%）は障害者を雇わないといけない決まりになっている。対して民間企業は 2%が目標とされているが、達成できていない企業も多い。つまり普通の会社より、障害者と働くことが身近な職場だといえる。

　この特色を活かし、障害のある職員に合理的配慮についてどう思うか？どんな配慮が適切で、どんなときに困ることがあるのか？など、コメントをもらってみるとか、協力してもらえる人には当事者の立場として話をしてもらうなどすれば、もっと深く、より具体的に、この法律の持つ意味や運用上の注意点が考えられるのではないか。
　提供者側としての心構えだけにとどまらず、受けて側となったらどんな世界が見えてくるのか。両方の視野を持った方が、理解が広がり、深まるのは当然だ。

せっかくの人材を使わないなんて。もったいないとしかいいようが無いではないか。

われらマイノリティ

障害者にせよ、他のマイノリティにせよ、マジョリティ（圧倒的多数側）にいるときの私たちは、彼らの痛みにとても鈍感である。

例えば国籍の問題。私たちは日本人として生まれ、日本で育ち、日本語でのコミュニケーションにも困らない。それが当たり前だと思っている。そんな私たちは国籍や民族について、普段ほとんど意識することがない。

しかし私たちの社会には日本人と同じように育ちながら、外国籍を持つという一群が存在する。彼らは進学や就職、結婚などの人生の節目や、役所での手続きや選挙など、生活の様々な場面で「国籍」というものに向き合わされる。もちろんそのすべてが問題になるとも限らないが、どう知らぬふりをしても、その事実から逃れることも出来ない。多数派と違う事情があるというだけで、細かい説明や難しい選択を求められたり、時には悩み葛藤したりすることになる。

そんな機会に接しない私たちは、彼らの苦労が想像できない。分からない。そのため下手をすると気づかないうちに、彼らを差別する側になってしまうことすらある。

だが私たちは個々に違う人生を生きている。どんなに平凡な、一般的な生活をしていようと、たとえ一卵性双生児だろうと。自分と全く同じ人生を生きる人はいない。個別の事情は異なってくる。

「何を当たり前のことを」といわれそうだが、実はこれがとても大事なことでありながら、私たちが見落としがちな真理である気がしている。「十人十色」「みんなちがって　みんないい」。昔からいろんな言い方で表されているが、ようは、

「私たちは　それぞれ違う　１人を生きる」

ということ。これが紛れもない現実である。

このことはつまり、私たち誰もが例外なく、マイノリティとなることを避けられない存在だということを示している。

「母子家庭だった」「難病を抱えている」「家族に犯罪加害者がいる」「帰国子女だ」「アトピーがひどい」「LGBT だ」「子どもに発達障害がある」「DV 被害を受けた」「がんサバイバーだ」「転校生だった」「親が認知症だ」などなど…。

この世の中には実に多種多様な事情がある。その１つ１つは全体から見ればわずかな存在。数パーセントのマイノリティだ。障害者も、日本の全人口から見ればおよそ７％の少数派に過ぎない。

しかし、その数パーセントずつを足していって、合わせて１００％になったもの。それがこの社会なのではないだろうか。

「いろんなマイノリティの集合体」。

実はこれが世の中の正体だということを、私たちはもっと意識してもいいんじゃないかと思う。

話はそれるが、以前オバマ大統領が広島を訪問したことがあった。このとき街は厳戒態勢で、平和公園も一般市民は立ち入り禁止に。職場からの帰宅時間、ひどい渋滞に巻

き込まれた私は、腹立ち紛れに思った。「アメリカ大統領といったって、所詮は同じ人間１人だろ。そんなに偉いの？」「なんでこんなに特別扱いしなきゃならんのだ！」。
　でもちょっと大統領という立場を想像し、あらためて考えると「これってある意味、合理的配慮なのかも」と。大統領という人種は、「テロ被害に遭いやすい障害」というか体質（？）というか。そんな一般人とはちがうマイノリティなのかもしれない。
　そうやって思考を広げていくと、
　「大阪のおばちゃんは陽気でお節介と思われやすい障害？」とか「左利きの人は世の中のいろんな道具が使いにくい体質か？」と思えて。やはり世の中はいろんなマイノリティの宝庫だということに気づかされたのだった。

差別の正体

　私は差別とは結局のところ「理解不足」につきると思っている。
　だから差別は中々なくならない。なぜなら人がお互いを完璧に理解し合うなんて、夫婦や親子でもできないのだから。おそらくこれは、ずっと付き合っていく課題なのだろう。

　ただ、「理解不足⇒差別」といっても、世の中には２種類ある気がしている。

　１つは「積極的な理解不足」といってもいい。むしろ感情や歴史的背景など様々な要素から、思想や信念のごとくその理解不足（偏見や間違った理解）を改める気がないタイプのもの。
　過去の人種差別政策や、近年のこの国の一部に存在する、ヘイトスピーチや近隣国への過度なバッシングが、このタイプだ。これらの末路は、ユダヤ人の虐殺や今話題のロヒンギャ問題など、歴史的にも残酷で哀しい結果を生んでいる。相模原事件の加害者もこれだろう。

　もう１つは「消極的な理解不足」というべきか。前途の『マイノリティの痛みが想像できない』といった、無知ゆえに起こる誤解や勘違い。そこから生まれるタイプの差別や偏見がそれである。
　そしてこの後者の方が世の中の大半であり、これを長年放置することで「積極的な理解不足」を生む土壌ができてしまう気がしている。
　逆にいえば「消極的な理解不足」の取り扱い方しだいによっては、相互理解を進め、積極的な理解不足にならないようにするチャンスにもなる一。そういう捉えもできると思う。
　最近その好事例となったのが、ダルビッシュのあの事件である。

　2017 年 10 月 28 日。ヒューストンで行われたメジャーリーグのワールドシリーズ第３戦。アストロズのグリエル（元横浜 DNA）が、ダルビッシュから２回に本塁打を放った後、ダグアウトで同僚と談笑しながら、両目尻を引っ張るような動作をした。これがアジア系の人々を侮辱する行為として波紋を呼び、複数のメディアがダルビッシュに対する人種差別行為の可能性があると報道した。
　ダルビッシュは試合後取材に答え、

「自分はアジアだけじゃなく、様々な人種の人に対して区別するようなことをするというのは、よくないことだと思う」とし、「ああいうことを公の場でしてしまっている以上、MLBもそれなりの処置をしなければいけないと思う」と話した。
その上で彼は、「でも自分自身としては、みんな完全な人間はいないので、彼もそうでしょうし、僕もそうでしょうし、ここにいるみんなもそうでしょうから。それも彼の中での１つのミスであって、色んな人がこのことから学べると思う。人類として学んで、人類として１つ前にいけるステップになれば、ただのミスで終わらないんじゃないかと思う」とコメントした。

マスコミは彼の対応を大変紳士的と評価し、喝さいを送った。
しかし私は、ダルビッシュは怒っていたのだと思う。イラン人の父と日本人の母を持つ彼は、おそらく日本でも様々な経験をしたはずだ。それが多様性の国、自由の国に来てこの有様。「なにやってんだか～」と呆れたに違いない。
しかし彼はただ感情的に怒るわけでもなく、かといって「気にしてません」と矮小化するわけでもなく、ちゃんとグリエルにダメ出しをした上で、相手の立場や気持ちも想像・配慮し、「互いに理解しよう、学び合おう」とのメッセージを送った。
私はこの姿勢こそが、差別解消のための、長く、しかし他にない唯一の道を示すものだと思う。

野球に限らず、サッカーやバスケットなどのスポーツで、あるいは芸能人や政治家の発言で、ときに差別の問題が顕在化することがある。あのオバマ大統領も、知的障害者への問題発言で批判を浴びた。確かに褒められた発言ではなかったが、おそらく悪気はなく、軽いジョークのつもりだったのだろう。
そんな時世の中は激しく、感情的に発信者を非難する。「許せない」「辞職せよ」などとヒートアップし、中には直接関係ないのでは？という人が怒ったり、逆にそこまであなたがしなくても、という人がやたら謝ったりという事態になる。
そして本当に何が問題なのか、どうしてそのことで傷つく人がいるのか。誰も学ぶことなく、バッシングとペナルティだけが大きく取り扱われ、次第に事件が忘れられていく。
それでは人類として１つ前にいくためのステップには、ならないんじゃないかと、私は思う。

もちろん「悪気がないから許してやれよ」「知らなかったんだからしょうがないじゃん」などといいたいのではない。あの時のオバマは批判されて当然だとも思う。知らなかったら人を傷つけていい道理などないのだから。
ただ、差別的な発言をしたら袋叩きにする、という手法では、けして差別はなくならない。むしろ巧妙に隠され、表と裏で使い分けられ、そしていつしか「積極的な理解不足」へと、醸成されるだけではないのか。

だから無知による差別が顕在化したら、罰則だけで封殺するのではなく、なぜそれがダメなのか、逆にどうしてダメだと思わない人がまだいるのか。学び合い、理解を深め合うチャンスと捉える。そんな意識を持ちたい。憎しみに振り回されるのでなく、相手の意見に耳を傾け、違う立場について想像できる大人でありたい。
いつまでたっても分かり合えない私たちだからこそ、それを続けていく意味があるのだと思っている。

検査をめぐる動向

新版Ｋ式発達検査をめぐって　その㉒

大谷　多加志

「平成」の元号が 30 年で終わりを迎えるということで、テレビなどでも時折「平成を振り返る」というような特集を見かけるようになりました。小渕さんが「平成」の紙を持つ有名なシーンも、なんだかよく目にします。

30 年前を、はるか昔のことのように感じるか、ほんの一昔前と感じるかは、年齢や個々の感性によってさまざまだと思いますが、平成元年当時の映像を見ると、ブラウン管テレビに、公衆電話、列をなすセダン車…など、今や懐かしく感じるようなものも多く見受けられると思います。

一方、この連載のテーマである「発達検査」ですが、30 年前と今と、ずいぶん変わったとも言えますし、あまり変わっていない部分もあるように思います。発達検査やその源流である知能検査は、世界で初めて作成されてからおよそ 100 年が経過しています。その間で、検査のあり方も徐々に変化してきました。今回はそのような検査の変遷や現在の動向を踏まえて、K 式発達検査の特徴について述べてみようと思います。

ビネー式知能検査とウェクスラー式知能検査

現在の主要な知能検査や発達検査を大別すると、ビネー式知能検査とウェクスラー式知能検査に分けることができます。

日本におけるビネー式知能検査には、田中ビネー知能検査や鈴木ビネー知能検査があります。ビネー式の知能検査は、対象者の知的発達の水準を評価することを目的としています。K 式発達検査は、京都市児童院において院内検査として用いられていた K 式乳幼児知能検査と K-B（京都ビネー）個別知能検査を統合したものになりますので、部分的にですが、ビネー式の知能検査の流れをくんでいると言えます。

一方の、ウェクスラー式知能検査は、アメリカにおいて開発された知能検査で、日本では原版の検査の日本語版が作成され使用されています。ウェクスラー式知能検査においては、知能は「目的的に行動し、合理的に思考し、能率的にその環境を処理しうる総合的・全体的能力」と定義され、人の情報処理過程に注目した分析が採用されています（上野・海津・服部, 2005）。

つまり、さまざまな知的能力について、例えば図形など視覚的な情報処理と、言語的な情報処理とで、どちらの情報処理が優位か等を調べることによって、対象者の方に適した支援や関わりを考える材料とするわけです。例えば、言語情報の処理の方が優位な方であれば、その方に何か伝えたいことがある時に、単にやり方を（視覚的に）見せるだけでなく、「まず○○を～のようにして、

次に…」というように、言語化した説明を加えた方が理解が促進されるであろうことが予測できます。

いずれの検査も対象者の知的発達の状態を評価した上で、適切な支援にむすびつけることが目的であることに変わりはありませんが、数値的な情報量が多いのは、ウェクスラー式の知能検査の方かもしれません。そのためか、ウェクスラー式の知能検査を第一選択として使い、ウェクスラー式の知能検査では評価しにくい発達水準の対象者の場合だけ、ビネー式の知能検査や新版 K 式発達検査を使う、という機関や検査者も少なくないようです。

これは決して検査の優劣を示しているわけではありません。基本的には対象者と検査を行う目的に応じて適切な検査を使用すればよいということになります。

しかしながら、あくまでも個人的な感覚ですが、比較的システマティックな検査構造をもつものの方が、一般的には検査結果がわかりやすく好まれる傾向があるようには感じています。やはり「検査」と名のつくものですので、数値的な結果がいろいろ出てきて、数値から説明できることがたくさんある方が、使いやすく感じるのは、わかるような気がします。

CHC 理論と知能検査

知能検査の分野で重視されるようになってきているものとして、CHC 理論があります。CHC 理論とは、現在の知能研究において有力と考えられている 3 人の知能研究者（Cattell–Horn–Carroll）の名前を取ったものです。知能検査の分野においては、当該の検査が、この CHC 理論に準拠するかどうかというのは、一つの大きなポイントになってきています。

前号の「心理尺度」の話でも触れましたが、「知能検査」についても、限定的な対象や年齢、目的によるものを含めると、既にかなりの数の検査が開発されています。ただ、それぞれの検査が測定している「知能」には少しずつズレがあるはずで（むしろ全く同じものを測定するのであれば、別の検査を作る必要性がありません）、「知能検査」の乱立は「そもそも知能とは何か？」という知能観の混乱を招く恐れもあります。その意味では、CHC 理論のようにさまざまな検査をまとめあげる概念があることは重要なのかもしれません。

検査のグローバル化

近年では、多くの国で共通する知能検査が利用されるようになってきている。これは知能研究の成果が国際的に共有されていることの表れでもあり、同一の検査を使うことで国際比較研究が行えるなど、メリットも大きい。どの国においてもグローバル化が進行している状況の中、知能検査も必然的にグローバル化を迫られているのかもしれません。

このような時代的背景の影響もあり、近年の知能検査はどちらかというと検査課題に「文化的要素」をなるべく含まないように努めていることがうかがえます。これは、その検査が他の言語に翻訳されることを考えた場合、あまりに文化的要素が強いと、翻訳自体が成り立たない場合があるからです。

以上のような知能検査をめぐる動向を踏まえて、最後に新版 K 式発達検査の特徴と意義について触れてみたいと思います。

ドメスティックな検査としての新版 K 式発達検査

新版 K 式発達検査は、ゲゼルの発達診断やビネーの知能検査、ビューラーとヘッツァーの知能検査など、数多くの知能検査を参考にして作られたものですが、「K 式」つまり「京都式」の名の通り、京都という土地に根ざして発展してきた検査です。検査手引書の記述にさえ、京都弁が出てきたりしますので、ユーザーの方は実感がおありかもしれません。

そもそも、新版 K 式発達検査は児童相談所生まれの検査です。この検査が今日においても日本国内で広く用いられている理由の一つに「検査の実施順序が定められておらず、柔軟性がある」ことがあると思います。実際、乳幼児の検査を担当したことがある方は誰しも経験があると思いますが、乳児さんに泣かれたり検査を拒否されたりしたら、どこかでこちらから歩み寄りをしないと進むものも進みません。現場における臨床の知として、ここ（実施順）は柔軟にすべきという判断があったのかもしれません。

一方で、これは「研究」という観点から考えると大きな議論を生じる点であるとも言えます。心理学を専攻した方なら必ず学習するものに「順序効果」があります。「順序効果」とは、同じような課題を続けて実施する場合、課題そのものの内容や難易度だけでなく、その課題を呈示する「順序」が結果に影響することを指します。例としてですが、いきなり複雑な立式を必要とする数学の問題を出されたとしたら解くことに苦戦するかもしれませんが、基礎的な問題から順に呈示し最後に複雑な問題が出されたとしたら、それまでの思考や経験を活用することができるため、ひょっとすると解きやすくなるかもしれません。

通常、心理検査ではこのような「順序効果」の影響が生じないように、どの対象者の方にも、まったく同じ順序で課題を実施するのが基本です。つまり、ある時点の結果（結果 A）と別の結果（結果 B）を比較する場合、この 2 つの結果は全く同じ順序と手順で実施されていることを前提として、比較されるわけです。

新版 K 式発達検査の「実施順序を定めない」という発想は、現場的であり、実用的でありますが、やはりなかなか大胆な思い切りです。また、検査内容についても、多分に文化的な要素を含んでいる印象があります。つまり、非常にドメスティックな検査です。現在、2020 年を目標に改訂作業が進められていますが、このドメスティックさは、受け継がれていきそうです。この動きは、国際的な動向とは、少々異なるかもしれません。

これが適切かどうかは、今後も議論されるべき点であると思いますが、一方で、「発達検査」で測定しようとする「発達」も、やはり一定程度はドメスティックなものなのではないかと思います。子どもの育ちは時代や文化の影響を確実に受けています。では、それを調べる検査とはどうあるべきなのか…。何が正解ということはないのですが、何を目的に、何を重視して、検査を実施するのかという点を踏まえて、何より目の前の子どもや家族に、少しでも役立つものであるように、知能検査や発達検査のあり方について考えておきたいと思っています。

講演会＆ライブな日々⑭

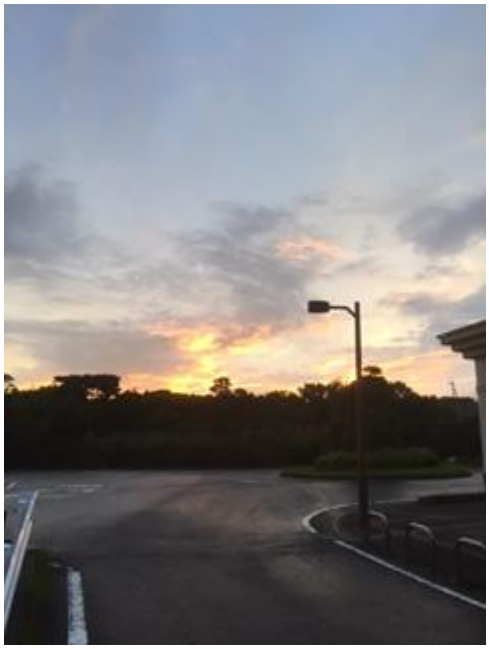
古川　秀明

「和歌山　串本　台風旅２」

紀伊大島
次なる目的地は紀伊大島。
♪「ここは～串本～向かいは大島～中をとりもつ～巡航船～」♪
串本節でも有名だ。
しかし、最近ではテレビＣＭで話題になった。



このくるくる回っている道路。
本州串本と紀伊大島を結ぶ串本大橋。
ここで撮影され、有名になったそうだ。
その串本大橋を案内してもらった。
こんな感じでくねくねぐるぐる。
確かにぶっ飛ばしたら気持ち良さそうな道。
都会に近かったらバイクで走りに来る人も多いだろう。
私が行った日は台風の影響なのか、車は１台もいなかった。
昔は巡航船でしか行き来できなかった紀伊大島。
案内してくれた人も紀伊大島のご出身。
便利にはなったが、田舎は田舎ですと謙遜されていた。
とにかく人生初の紀伊大島上陸だ！
串本大橋をくるくると回り、紀伊大島に上陸。
橋でつながっているから、島という感じはしない。



夕焼けに空が赤く染まってきた。



案内してもらったのは「樫野埼灯台」と「トルコ記念館」
「樫野埼灯台」は分かるが、なんで「トルコ記念館」なんだろう？
なんの記念なのかな？
ま、行けばわかるさ。（行ってびっくりしたのだが・・・）



樫野埼灯台口のバス停。
時刻表を見てみると・・・



一日に６本しかない。
いや、地方の路線バスなら６本あるだけでも多い方かも。

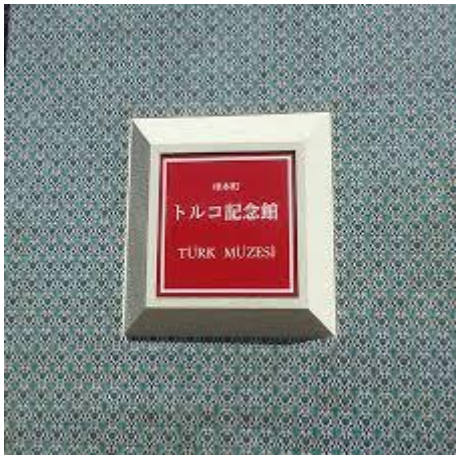


綺麗な雲を見ながら、トルコ記念館に案内してもらった。
その道すがら、串本とトルコの深い関係を聞いて驚いた。
それは１８９０年（明治２３年）に樫野埼灯台近くでオスマン帝国（現在のトルコ）のフリゲート艦エルトゥールル号が座礁した 時のことに由来する。
座礁したエルトゥールル号の乗組員を、地元大島村（今は串本町）の村人が総がかりで救助した。

そのことに感謝したトルコと日本の友好が始まった。
この出来事は映画にもなったと教えてもらった。
そこで私の記憶がよみがえった。
この映画、私も観た。



日本・トルコ合作映画「海難１８９０」
２０１５年の映画だから２年前。
トルコと日本、時を越えお互いを信じあい、助け合う。
今、北朝鮮やアメリカに望まれるのはまさにこのことだろう。
攻撃するより、お互いに助け合い、分かり合う。
トルコ記念館はこのエルトゥールル号の救助活動を記念した博物館だったのだ。



エルトゥールル号の事件を今の日本人はほとんど知らない。

ところが・・・、

イラン・イラク戦争が続いていた、１９８５年３月１７日、イラクのサダム・フセインが「今から４８時間後に、イランの上空を飛ぶ飛行機を全部打ち落とす」ということを世界に向かって発信した。

イランに住んでいた日本人は、慌ててテヘラン空港に向かったが、どの飛行機も満席で乗ることができなかった。世界各国は自国民の救出をするために救援機を出したが、日本政府はすばやい決定ができなかったため空港にいた日本人はパニックに陥った。

そこに２機のトルコ航空の飛行機が到着した。トルコ航空の飛行機は日本人２１６名全員を乗せて、トルコ（アンカラ経由イスタンブール）に向かって飛び立った。

タイムリミットの、１時間 30 分前であった。

なぜ、トルコ航空機が来てくれたのか、日本政府もマスコミも知らなかった。

後に駐日トルコ大使のネジアティ・ウトカン氏は次のように語られた。

「エルトゥールル号の事故に際して、日本人がなしてくださった献身的な救助活動を、今もトルコの人たちは忘れていません。私も小学生の頃、歴史教科書で学びました。トルコでは子どもたちでさえ、エルトゥールル号の事を知っています。今の日本人が知らないだけです。それで、テヘランで困っている日本人を助けようと、トルコ航空機が飛んだのです。」
※この事は、あまり日本人に知られていません。



こんな小さな記念館だけれど、中に詰まっているのはとても美しいものだ。

しかし、こんな悲しい事件もあった。

ムスタファ・ケマルはオスマン帝国の将軍で、トルコ共和国の元帥でもあり、初代大統領でもある。

トルコでは英雄の中の英雄として知られる、まさにトルコの誇りたる人物。
日本で言えば、西郷隆盛、坂本龍馬、勝海舟、う～ん、聖徳太子も入るかな。
なにせ、それぐらいトルコ人にとっては、トルコ建国の父である大切な人物。
時は１９９６年、今から２１年前に遡る。
新潟県柏崎市に民間企業の運営で「柏崎トルコ文化村」というテーマパークが作られることになった。



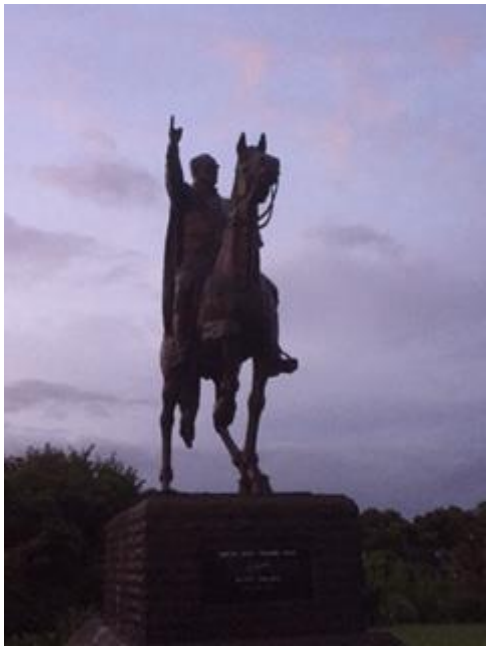
それを記念して、トルコ政府から友好の証としてトルコの英雄ムスタファ・ケマル像が寄贈された。
トルコ政府はエルトゥールル号救出以来、ずっと日本に友好的なのだ。
ところがその民間企業が倒産した。
柏崎市は 06 年 7 月、上越市のプラスチック製品製造会社「ウェステックエナジー」に「トルコ文化村」(約 5 万 2 千平方メートル)を 1 億 4 千万円で譲渡した。
譲渡に当たっては「トルコとの友好関係に十分配慮するとともに、アタチュルク像の今後の取り扱いは十分、市と協議する」と明記された。
同社は施設を改修して結婚式場をオープン。
像はそのまま展示したのだが、07 年 7 月 16 日に新潟県中越沖地震があり、「像が傾いてしまい倒壊する恐れがある」との理由で、像を台座から外した。



当初は野ざらしで放置され、その後ブルーシートがかぶせられていた。
像を台座から外して間もなく、産経新聞などが「親日国の英雄への『冷遇』に、友好団体や市民からは『非礼だ』との声が上がっている」などと報じ、像の扱いを非難する記事を掲載。この問題は広く知られるようになった。

しかし、産経新聞 07 年 9 月 30 日付けによると
(ウェステックエナジーの)飛田尚芳社長：「いつまでもトルコのことを言われるのは正直、迷惑な話だ。市が移転するなど至急対処してほしい！」
会田洋市長：「想定外だ。市の物ではないので、市が補修したり買い取ることはない！」
こんなやり取りが両者の間であったと書いている。
それがずっと解決されないまま時が過ぎて行った。

トルコと日本の友好の印であるムスタファ・ケマルの像。
なんやかやともめ続けていた。
09 年 2 月 16 日頃からメールや電話で「アタチュルク像を助けて欲しい」といった要望が多数届くようになった。
中には移設のための募金、並びに資金提供を申し出る人もいたという。
そしてとうとう 07 年末にトルコ大使館から、費用は全て大使館が負担する用意があるので、「移設していただけないか・・・」という要請があった。
そこまで言われて黙っているわけにいかない。
日本とトルコの友情が始まったエルトゥールル号遭難事件があった和歌山串本町が手を挙げた。
串本町議会は全会一致で像の受け入れに賛成した。



ムスタファ・ケマル：「日本のみなさん、私達トルコ人はあなた方の友情を終生忘れません。どうもありがとう！」
夕闇の中でムスタファ・ケマルさんがそう言っているように思えた。
私は深々と頭を下げた。
「こちらこそ、航空機を出して頂いたり、像が倒れたままになったままだったり、最後は移転費用の心配までさせてほんまにすいませんでした」と、心の中でお詫びした。
こんなふうに世界中の国が友情で結ばれたら素敵だ。



ムスタファ・ケマル：「さぁ古川君、次はあそこに見える灯台を見学したまえ。あそこから見える夕日は綺麗だぞ！」
古川：「はは～、閣下、そうさせて頂きます」
私はムスタファ・ケマルさんお薦めの灯台を目指した。

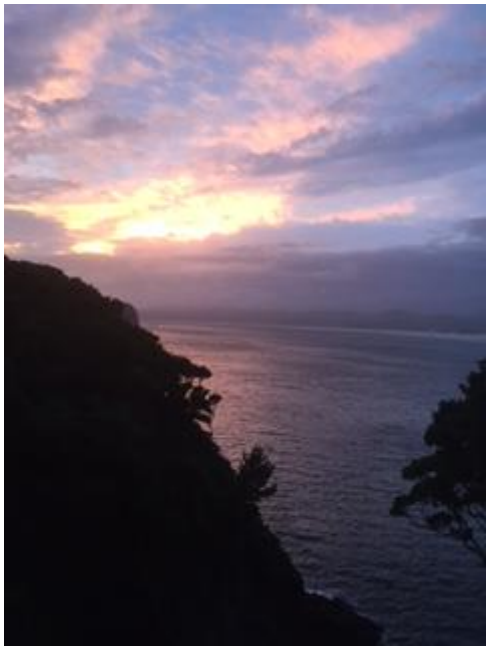
樫野崎灯台は「日本の灯台の父」と呼ばれるリチャード・ヘンリー・ブラントンが日本で最初に設計し、１８７０年７月８日（明治３年６月１０日）に初点灯した日本最初の石造灯台。



日本最初の回転式閃光灯台でもあり、その初期の建物が現存している。



エルトゥールル号遭難（1890 年 9 月 16 日）の場所としても知られる樫野埼に建つ白亜の無人灯台で、灯台内部へは入れないが外部階段から灯台に登ることができる。



夕暮れ時の灯台は美しかったし、そこからは和歌山の素晴らしい景観を一望できた。



「エルトゥールル号遭難慰霊碑」も灯台から歩いてすぐのところにある。



日本とトルコの友情にバンザイ！！
よし、私も機会があればトルコのみなさんの為になにかお役に立つことを考えよう！
（最後まで読んで頂き、ありがとうございました。次号に続きます・・・）

シンガーソングカウンセラー
ふるかわひであき

養育里親

～もうひとつの家族～

20

坂口　伊都

はじめに

前回は、「新しい社会的養育ビジョン」について書きました。その影響で今、里親委託に注目が集まっていますが、実のところは家族再統合や特別養子縁組に焦点があたる内容であり、長期代替養育は否定的に捉えられていることを忘れてはなりません。その中で我が家は、長期での養育里親をしています。改めて、里子と家族になろうとしていくことの意味を考え始めています。里子も里親家族側もいろいろな想いや課題を乗り越えながら、ここまでやってきました。家族になろうとしなければ、ここまで頑張れなかったかもしれません。

今回は、その里親家族の「里兄・里姉」に焦点を当てて書こうと思います。里兄は、いつ頃からでしょうか、家族とあまり言葉を交わそうとしていません。里親をする時も、あまり深く考えることもなく承諾しました。実際に里子が家族の中に入って、どのように感じたのか外から見ている中では、よくわかりません。

里姉の方は、悩み、泣き、訴えながら揺れを前面に出していました。イライラすると機嫌が悪かったりすることもあり、感情をストレートに出しているとように見え、またファミリーホームに 1 週間ほど滞在した経験もあり、高校生になったことを機会に里姉として自分の体験を語ってみないかと誘ったところ、やってもいいとの返答だったので、里母の私と一緒に体験を語り始めています。

もともと里母として話をした時、フロアから実子の話を聞きたいと言われていたことが、ずっと頭に残って気になっていました。実際に娘

がどのように感じて過ごしてきたのか知りたいという気持ちと、母である私が娘の代弁をすることは不可能だと感じていたので、娘が自ら語って欲しいと思いました。

さらに、娘の進路希望は今のところ生物関係で、福祉分野を考えているわけではないので、人生の中の一つの体験としてプラスに働けばいいと考えています。以前に「すごい、英才教育ですね」と言われたことがありますが、その意図はありません。娘も動物は好きだが、人間嫌いだと豪語しています。傍から見ていると、人とのつきあいは長けている方だと思うのですが、頑として人間嫌いを譲らないので、そういうことにしています。今回も最後までおつきあいください。

打ち合わせ

娘は、熊本市の里親支援機関「優里の会」の公開講座で初めて話をしました。そこに参加していた方が、「長崎県里親育成センターすくすく」の研修会講師に推薦してくれたそうで、親子で呼んでいただきました。私と娘が並び、その時々にどう感じたのかを並行して娘にも語ってもらう形にしています。

優里の会では、最初に内部研修の依頼を受けて、私が話をさせてもらいました。外部研修でもう一度と依頼がきたので、里姉の話を入れてもいいか打診し、快諾をいただいたことで実現しました。娘にとって全くしがらみがなく、暖かく受け入れてもらえる場所だと感じていたので、承諾いただけて有難かったです。

娘と打ち合わせをするに辺り、気持ちを切り替えたかったので、家ではなく喫茶店ですることにしました。打ち合わせをしてみて初めて、家では里親について議論することなく過ごし、人前で話す機会をいただいたことで、親子で里親になったことについて話すことができたことに気づきました。

家の中では、里子がいるから話しにくいという条件下になりますが、日常生活について家族で話題にしようと思っていないことにも気づきました。そして、娘の本心を知らずに過ごしてきたことも認識し、胸が痛くなりました。娘の気持ちを知りたいと思いながら、知ることを怖くも感じています。

打ち合わせでは、まず私が今まで話してきたことを娘に紹介しました。何故里親をしたいと思ったのか、里親になるまでの葛藤、委託してから里母として苦しかった思い等を話すと、娘が「そうだったのか」と言いました。私としては、隠しているつもりはなかったのですが、敢えて伝えるということもしていなかったのだと感じ、自分の想いがあまり伝わっていないことに驚きました。伝えているつもりでも、相手の受け止め方が違ったり、流したりするものです。それは仕方がないことですが、何事も伝えたからと思わない方が賢明だと学びました。

打ち合わせで里親体験を話し合っていく中で、娘が 2 回涙を流しました。その顔を見ると、私の気持ちがざわつき、チクンと針で刺されたような痛みを感じます。今でも、娘が隣で何を語るのかドキドキしているところがあり、毎回、新事実を突きつけられています。

打ち合わせで初めて娘が泣いた場面は、委託前にファミリーホームに娘一人で行った体験でした。ここのファミリーホームには、家族で泊めてもらった経緯があり、次の年に子どもだけ遊びに来ませんかと誘っていただきました。兄は中学生になっており、部活動が忙しかったため、小学 6 年生の娘が一人で行くかどうするか悩んでいました。娘が悩んでいる時に「行けば、少しは里子ちゃんの気持ちがわかるようになるかもね」と話していました。娘はしばらく悩んでから行く決意をし、1 週間ほどファミリーホー

ムで過ごしました。娘と同じように遊びに来ている年下の女の子もいて、帰ってきた時にはテンションが高く、あれをして、これをしてすごく楽しかったと話していました。「〇〇お兄ちゃんがね、こんな面白いことをした」という話も出て、行って良かったねと話し、胸をなでおろしていたのですが、3年後の打ち合わせで「あれは辛かった」と泣き出すのです。この驚きと動揺は大きく、子どもは親に本音を隠すのだと痛感しました。楽しかった思い出は本当だと思います。ただ、親元を離れ、ファミリーホームにいる年上の女の子にいろいろと言われることが辛かったそうです。どちらかと言えば負けん気が強い娘なので、年上というだけで命令されると、カチンときてイライラしていたようです。確かにお姉ちゃんが嫌だったとは言っていましたが、3年後に涙する程のこととは想像もしていませんでした。

娘の場合は、帰る日も決まっていて、たかだか1週間の話です。それでもこれだけ強烈に残っていました。児童養護施設出身の向井啓太監督の『チョコレートケーキと法隆寺』の中でも、仲間もできるが、年上の子に仲がいい子と何回も殴り合いを強要されたエピソードが出てきて、子ども同士の関係性が与える影響の強さを感じました。子どもの人数が少なくても影響力の強さを大人は知るべきなのだろうと思います。

もう1か所の涙は、里子の床屋についていった時のエピソードでした。その床屋は、里父が中学時代から通い続けている所で、里親をしていることも知っています。里子の髪を切りながら、床屋さんが「お姉ちゃん、優しいやろ、好きか？」と話しかけたら、里子が「うん、お姉ちゃん優しくて好き」と娘の前で答えてくれたそうです。それまで、名前で呼ばれることの方が多く、お姉ちゃんと呼ばれないのだろうなと思っていたそうなので、お姉ちゃんと呼んでくれたことと、ケンカもしている仲だったので、それでも優しいと言ってくれたことに感動したそうです。それも涙が出るくらいですから、里子との関係を巡っていろいろな想いを抱えていたのだろうと思います。里子は、女性に対して挑戦的なところがあり、里姉にもそれを出していました。腹が立つことも多い中、里子のためにアルバムを作ってあげたり、お土産を買ってきたりと気遣いをしてくれています。その行為に対して、どうしたらいいかわからず、憎らしい態度になってしまうこともあるので、娘の中でも大きな葛藤があったのでしょう。

打ち合わせで娘が流した涙は、それぞれ違う感情をまとっていました。娘の気持ちを全然わかっていない親だとわかりました。

しがらみの中で

娘は、「私の話しなんか聞いてどうするの？面白くないよ」と言い、人前で話す意味がピンときていないようです。自分の気持ちをそのまま伝えればいいからと話しています。最初は気合を入れて頑張るのですが、途中で面倒くさくなるようで、「私の話しなんて、いらんやん」と言いだす始末。気まぐれな高校生にその気になってもらうのは、骨が折れます。

それでも、話し終わると多くの方が娘に「良かったよ。貴重な話、ありがとう」「自分の子ども同じように思っているのかなと感じたよ」「すごくリアルに伝わってきた」等、言いに来てくれます。少しずつ、自分の言葉の意味を感じて



くれているのではないかと思います。

娘の話しの中では、人間関係の息苦しさがありました。委託時、娘は中学生で保育所時代からの知り合いも多く、弟ができたと話すと不思議がられます。里親をしていると説明をしても、よくわからないと言われたり、「自分には無理」「何かすごいね」等言われ、マイノリティとしての自分を感じなければならなかったようです。先生や周りの大人に里親をしていてどうかと聞かれたりもしたようで、何故私に聞くのだという苛立ちを感じたそうです。確かに、里親をしている親の方に聞けばいいのですが、直接には聞きにくいのか、娘が聞きやすいタイプなのか、周りのが大人達が娘に様子を聞くことが集中したようです。それを親にいちいち言うわけでもなかったので、気持ちをため込む結果になりました。そのような状況で、高校受験が重なり、部活で発散することもなくなり、中学と家の往復が辛かったとも話していました。

娘は、とにかく一人になる場所が欲しかったと言います。「家族とも友達とも離れた空間で気持ちを切り替えたかったけど、そんな事は無理だ」とも言っています。同じような立場の人と愚痴を言ったりしたら、少しは楽になるかと質問したら、「その人と私のイライラする部分が同じではないから、意味がないと思う」と言っていました。同じ立場の人と実際に話してみると、想像と違う部分も出てくるのでしょうが、里姉として誰かと話したくないという気持ちが先に出るようです。

里兄は、「世の中は理不尽にできている」と言い、その趣旨がどこを指しているのかわかりませんが、家族を回避していると感じる時期がありました。もう、里子とは関わらないようにしていくのかと思っていましたが、里母と里子が言い争いをしていると、2 階からそろりと降りてきて、ドアから顔だけ覗かせて様子を見に来ました。里子が渡そうとしないゲームを里兄に預かるようにお願いしたら、それをしてくれました。里兄はその場に腰を下ろして、里子に何があったのと聞いています。里子は「あいつが腹立つねん」と言い、諭すように「あのな、子どもっていうのはな、大人がいないと生きていけない存在なんや」と語り始めるのです。息子が、そんなことを言うなんて、私の想像の粋を超えていて、驚きでした。それを受けて娘も「お兄ちゃんは、いざという時にはちゃんと兄をする人だ」と言います。子ども関係に屈服です。息子が家にいない時は、娘が間に入ってなだめる役をかってくれていました。それもストレスになっていまいた。不甲斐ない親で、子どもたちに苦しい想いをさせているなぁと落ち込みます。里親をしていなくても、いろいろな想いを抱かせてしまうのだと思いますが、一緒に暮らしている中で子どもの気持ちを知るということは、かなり難しい行為であるのだと感じています。

終わりに

里親の語りの中に実子の存在そのものが少ないからなのか、あまり焦点を当てられていないように感じています。里親は、夫婦のどちらかに引っ張られる感はあるでしょうが、ある程度自分の意志で決めていったことでしょう。子どもは、どのような立場だったのだろうかと思います。娘は、親がしたいと思うことを応援してあげたいと思ったと言います。

そんな娘が、マガジンの「そうだ、猫に聞いてみよう」の小池英梨子さんのプロジェクトに参加して、元ノラ猫の里親をしたいと言ってきました。我が家には、ミニチュアダックスフンドが 2 匹いて、元が狩猟犬で性格が甘えん坊なので、一緒に飼うのは難しいだろうと話していましたが、私も娘にできる限りの協力と応援をしたいと思い、どうしたら飼えそうか、飼うた

めには何をしなければならないか娘と一緒に考えていくことにしました。

一つ一つ課題をクリアしてから、猫の説明を聞くために動物病院に行きました。1匹なら何とかなるという気持でいましたが、きょうだいで保護されていて、仲がいいからできれば一緒に飼ってあげる方がいいと聞き、悩みました。1匹は白血病を持っていると聞かされ、きょうだいで仲良く同じゲージに入っている猫を見て、引き離す気になれず、2匹とも連れて帰ってしまいました。まずは、犬との相性を見るためにトライアルから始めて様子をみることとなりましたが、実際はその日から家族そろってメロメロです。

里子は、猫なんかいらないと言い、最初は触ろうとしなかったのですが、今は抱っこしたり、猫じゃらしで遊んだりしています。自分の後輩ができて、それだけでも嬉しいのかなと思って見ています。

この子猫たちの親は娘で、私と夫は祖父母です。猫の世話をするのは母である娘なので、食事は娘があげています。朝寝坊の娘に猫たちはニャーニャーと餌をねだりに娘を起こしに行くようになりました。娘からは猫グッズを買ってくる孫に甘いジジ・ババと呼ばれています。



娘は、小池さんからいろいろ教えてもらっていて、動物の里親という用語に反発する声があり、使うのを控えている所が増えていると聞かせてくれました。こちらの里親も新ビジョンの中で用語を変えると出ているので、違う名称になっていくと思うと話しました。

親は子どもに与えるだけの存在ではないのだと改めて感じています。ネガティブな感情が錯綜する時は、胸が張り裂けそうなぐらい辛くもなりますが、協力したり、喜びあえたりもできるものだと学びなおしているところです。



周辺からの記憶 18

～2014 年 3 月 NY で～

村本邦子（立命館大学）

2018 年 2 月 25 日（日）、「東日本家族応援プロジェクト 2017」シンポジウムは、団士郎さんの退職記念とドッキング企画で、「団士郎先生退職記念シンポジウム：家族と漫画と東日本大震災と」として開催し、ずいぶんたくさんの人が来てくださった。団さんの講演もそれらしく、自分の人生と仕事をふり返り、そのなかでこのプロジェクトがどんな意味をもたらしたかということを話してくれたので、聴きながら、私も自分の人生と仕事を重ね合わせていた。成人してからの前半は、女性ライフサイクル研究所の設立 1990 年から所長を退任するまでの 24 年間、その概要は、最初のマガジン連載「女性ライフサイクル研究所 20 周年を迎える」に書いた。後半は、開設 2001 年から勤め始めた立命館大学応用人間科学研究科で、来年度から人間科学研究科として生まれ変わる。その間の 16 年を団さんと一緒に仕事してきたことになる。私にとっても、ひとつの大きな区切りである。

今、研究室や京都の家の引っ越しを前に、終活というには少し早いかもしれないが、身辺整理をしようという気分になっている。関心の赴くまま、のべつまくなし集めた物を整理して、生きている間にはもう使わないだろうものを処分し、自分にとって価値があるはずなのに十分活用せず忘れていたものを掘り起こす。知識や経験についてもそうしよう。貴重なこのプロジェクトの記録も、今後もっと活かしていけるよう、何か考えなければ。





今回の連載は、このプロジェクト最大のスピンオフ企画とも言える NY でのプロジェクトの話である。

<2015年3月NYへ>

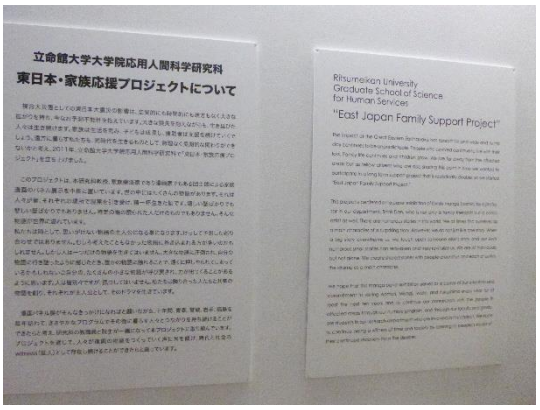
2015年3月、団さんがニューヨークで漫画展を開催することになった。1月末、中村さんがいきなり「我々も一緒に行きましょう」と言い出して、急遽、合流することにした。せっかくなので、現地で少しでも有意義な交流ができたらと、あちこちのツテを頼って、複数の企画が立ちあがった。

3月6日、成田経由でニューヨークへ飛ぶ。忘れもしない4年前の3月12日、震災が起きた翌日に、同じ経路でニューヨークへ飛んだ。あの時の緊迫した異様な雰囲気は、とても言葉で言い表せない。成田では大きな余震があって、携帯の警報が鳴り響いた。断片的に衝撃的な映像が眼に飛び込んでくるが、状況を飲み込むことができないまま、大きな不安と恐怖を抱えて、飛行機に跳び乗った。訪問先のイエール大学では、口々に見舞いの言葉をかけられ、戸惑った。こんなふうに4年後を迎えるなんて、あの時は思いもしなかった。

風の影響で1時間以上早くJFKに到着したが、雪の影響もあってシャトルバスは2時間以上かかり、ようやくホテルに到着。漫画展は3月5日からスタートしている。荷物を置いて、早速、メトロで会場に向かう。天理文化協会のギャラリーだが、アクセスもよく、きれいな展示となっている。外からガラス越しに、さりげなく中が見えるのもよい。大賑わいというほどではないが、次々と訪問客がある。18時よりオープニングパーティ。

















3 月 7 日、ギャラリーで「ほくほく会」追悼式でのプレゼン打ち合わせ、あわせて 10 日報告会の打ち合わせをする。

夕方は、総領事館で行う JAMSNET 講演会の打ち合わせを兼ねた関係者交流会に参加。活動準備 OK だ。

<3 月 8 日　ほくほく会　追悼式>

「ほくほく会」はニューヨークにある東北 6 県と北海道の県人会で構成されている。毎年、東日本大震災の「追悼式」を開催しており、第三回目を 3 月 8 日 13 時半～17 時、ニューヨーク日系人会館にて開催。およそ百人が参加した。

第一部では、在 NY 総領事高橋礼一郎大使、NY 宮城県人会佐々木健二郎会長、NY 兵庫県人会大西哲也会長の挨拶の後、被災地からの声として、最初に「『東日本大震災津波被災地への家族応援プロジト』から見る被災地の現状」の報告をした。15 分という貴重な時間を頂いたので、わかりやすくコンパクトに伝えることができるよう、ずいぶん悩みながらパワーポイントを準備した。

「私たちの大学院では、心理、教育、福祉、医療などさまざまな対人援助職者を養成しています。

私自身は、二十数年にわたり、臨床心理士として、現場で女性や子どものトラウマ支援をしてきました。回復のために専門家にできる支援など微々たるもので、

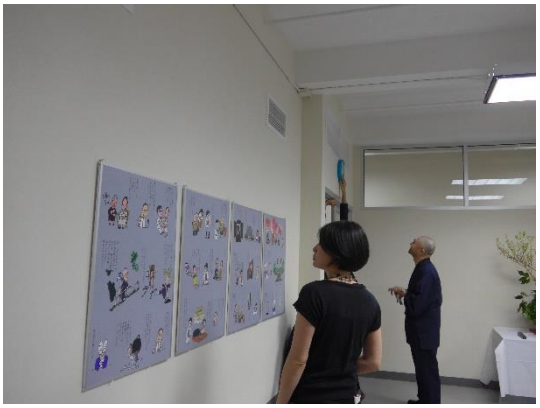
できることは証人（witness)として存在し続けることに尽きると考えています。原発事故について、それまで関心を向けてこなかった自分の責任を考えました。阪神淡路大震災の経験もあり、忘れることなく、遠く京都から、細く長く関心を持ち続けたいと思いました。院生たちにも、社会的問題に向き合う力と援助とは何なのか問い続ける姿勢を学んで欲しいと思っています。そこで、このプロジェクトを立ち上げました。

内容としては、東北４県を十年訪れ、現地の支援機関と協働し、家族漫画展と対人援助プログラムを実施することで、顔の見える出会いを重ね、関係を育て、被災と復興の証人（witness)となり、双方のコミュニティの力を活性化することです。漫画展とともに、大きな復興の物語の陰にあるたくさんの小さな物語に耳を傾け、豊かで多様な物語が語られることを応援できる存在となりたいと思っています」ということで、毎年の実施状況と今年度の各地の写真を紹介した。

遠く NY から故郷を思う人々に懐かしい風景を届けることができたらと思ったのと、被災地で頑張っておられる女性たち、多賀城のおおぞら保育園の黒川恵子さんや飯館村の椏久里珈琲の市澤美由紀さんのことなども伝えたかった。参加者の中に市澤さんをご存知の方がおられたそうで、連絡を取り合うなど嬉しいご縁の拡がりもあった。小さなスペースではあったが、漫画パネルを展示し、冊子の配布も行った。





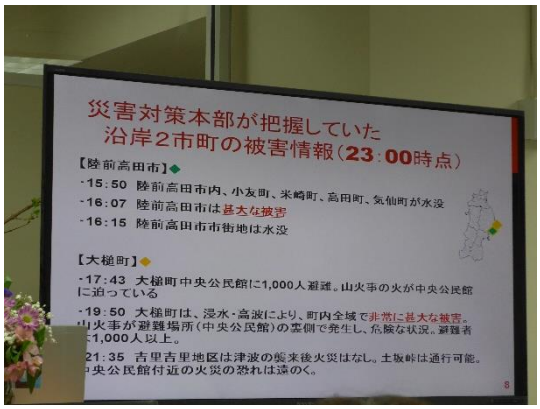


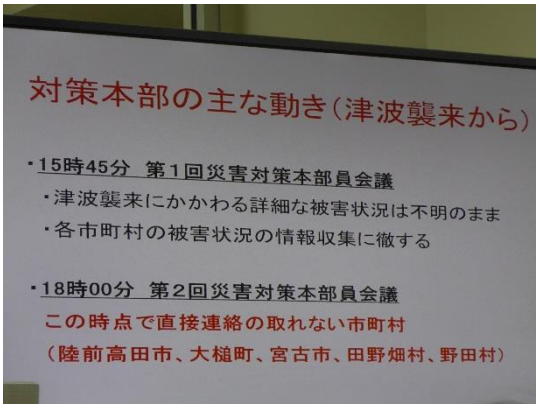
続いて「東日本大震災風化防止プロジェクト・メモリー・スピーチ・コンテスト」銀賞受賞者の高橋匡美さん(宮城県)による「石巻市南浜町〜父と母を亡くして〜」。高橋さんは、石巻南浜町の実家にいた両親を亡くした。震災３日後、まさに地獄と化した被災地に入り、母の遺体を見つけたという。その後、青いビニールシートに不造作にはった身元不明人の写真のなかに父を見つけた。イギリス留

学中という息子が母をサポートしていたが、被災時は高校生で、一緒に被災地へ行き、「戦争の後？」と言ったというエピソードも出てくる。

郡山市「移動保育ポッケア」理事長・上國料竜さんによる「福島県の子どもたちの今」ビデオレポートでは、福島の人たちの声を届ける、当事者たちを招いて話してもらえることがありがたいと言っていた。そして、岩手県人会・クレアニューヨーク事務所所長補佐・松田耕一さんのスピーチ。当時は大槌の役場に勤めていたということで、発災直後の災害対策本部の動きを紹介した。緊迫した雰囲気がひしひしと伝わり、非常にリアル。









その後、ニューヨーク仏教連盟会長中垣顕實法師の法話と読経があり、14時46分に一同で黙祷した。

第二部では、北海道ゆかりの会・道走会・山崎綾子さんによる“ Run for Japan”、福島県人会・大沢泉さんによる「ふくしまの花ポスト」のレポートに続いて、民舞座による“ふるさとの踊り”（「相馬盆歌」「大漁唄い込み」「盛岡さんさ踊り」「新タント節」）があった。相馬盆歌、大漁唄い込みなど、豊作や大漁を祝うもので、踊りながら泣いておられる女性たちがおられた。最後は、混声合唱団ともによる合唱（「くすのき」「ジェリコの戦い」「見上げてごらん夜の星を」）だった。







お世話役の方から、「ほくほくの会は北の人間の集まりなので、派手なことが苦手で会の雰囲気はとても地味ですが、心の温かい我慢強い人達ばかりです。そういう会が主催する追悼式なので、手作りのささやかな、でもほのぼのとした会となって今年で四年目を迎えました。私達の合言葉は、『忘れないこと、続けること』です。NY から被災地にエールを送る、という賑やかしいものではありません。故郷の復興を、遠く離れたこの街から、これからずっと絶えることなく見守って行く、いえ、見守らせていただく、そんな気持ちでこれからも続けます」というふうに聞いていた。追悼式に集うみなさんの声に耳を傾けながら、また踊りや合唱を見ながら、遠く離れていても、あるいは逆に遠く離れているからこそ、故郷の被災を悼み、共に心を寄せつながりを感じられる場が強く求められてきたのだということがひしひしと伝わってきた。

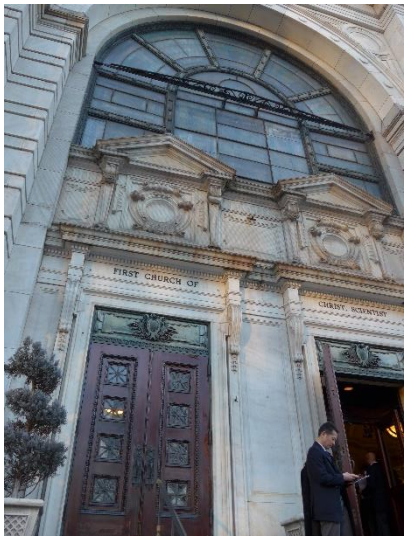
こんな人々の思いがまた東北に届くといいなと思うし、ささやかながら私たちにも届けることができるはずだと思う。それもまた証人としての役割だろう。会場で、NY から東北へのメッセージを集めた。

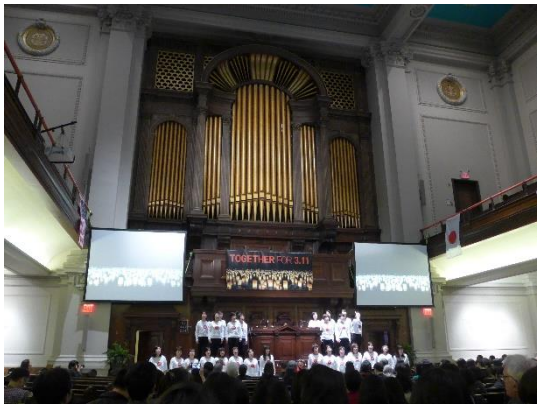
<Together for 311 追悼式>

同日、NY では市内各所で「追悼式典」が開催されており、ほくほく会での追悼式の後、16 時 45 分からクリスチャン・サイエンス教会で開催される「トゥギャザー・フォー・311 追悼式典」にも参加した。こちらは、「フェローシップ・フォー・ジャパン」主催のもので、五百人近く集まる大きな集会だった。代表の AK（柿原朱美）さんは、ニューヨーク在住のシンガー・ソングライター、「４年たった今でも、仮設住宅で生活している人が 8 万人以上います。現地の人々から、忘れてない人がいることが心の支えですという声

を聞きました。震災を風化させてはいけません」と訴えた。

黙祷の後、在 NY 日本国総領事髙橋礼大使、NY 福島県人会藤田小夜子会長、宮城県塩釜市の高橋匡美さんらのスピーチがあって、みなさん梯子しながら追悼集会に参加しているのだった。追悼集会を結ぶネットワークとも言えるのだろう。AK さんが関わってこられた福島県相馬市「みなと保育園」の園児たちが、将来の夢を書いた紙を持って、「私たちは、夢に向かって元気で頑張っています！ニューヨークの皆さんありがとう！」というビデオメッセージもあった。収益はすべて在ニューヨーク日本国総領事館 Japan Earthquake Relief Fund、ジャパン・ソサエティーなどを通して東日本大震災の支援へ送られるとのこと。さまざまな立場、さまざまな形の追悼があるのだ。





<3 月 9 日　総領事館での研究交流>

3 月 9 日には、CJCAT（Japanese Community of Creative Arts Therapists）主催、JAMSNET（Japanese Medical Support Network）と在ニューヨーク日本国総領事館の後援による研究交流「親密な関係における対人暴力の現状～日本とニューヨークの現状」が開催された。中村正さんが「親密な関係における対人暴力の現状～加害者への対応を踏まえて」、私が「親密な関係における対人暴力の現状～被害者支援の視点から」として日本の状況について講演した後、ニューヨーク側からアジア女性センター(NYAWC)が、米国での DV 対策、国際結婚とハーグ条約の問題など紹介してくれた。

その後、懇談会となったが、個人開業の臨床心理士、精神科カウンセラー、医師、看護師、ソーシャルワーカー、弁護士など、ニューヨークで活躍する日系社会向けメンタルヘルスの専門家たちと交流する貴重な機会となった。海外で生活

する移民、企業の在米駐在員とその家族、現地で結婚して市民生活を送る人などの家庭内暴力をはじめとしたメンタルヘルスの問題は幅広くあり、とくに国際結婚後、離婚した親子関係にかかわるハーグ条約の問題などはホットな話題で勉強になった。

　これは直接、震災プロジェクトとは関りのないものだったが、実は、会場となった総領事館は、今年度のむつプロジェクトに参加してくださったむつ市長が昨年まで勤めていたところで、元同僚だった方々と御一緒したのだ。本当に面白いようにご縁がご縁を生み、巡り巡って戻ってくる。

















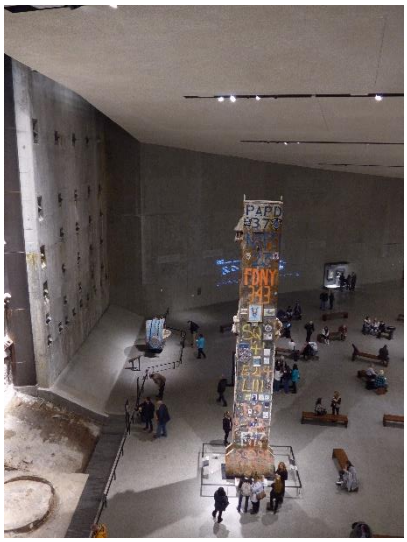


<3月10日　911メモリアル>

この機会に911メモリアルを見ておこうと思った。2001年9月のあの時、私は、シンシナチで開催されるPh.Dの卒業式に出席するためNYへ行く旅行の手配を終えたところだった。結局、参加は取りやめ、無期限で参加できる卒業パーティのチケットが手元に残ったままだ。予定が少しずれていれば、巻き込まれていたかもしれない。

かつてのワールドトレードセンターがあった場所にある911メモリアルの地下に博物館がある。2014年5月に完成したばかりらしい。チケットは結構高くて、ツアーガイド付きで39ドルしたが、ものすごい人だ。

博物館には、中核となる展示が2つあって、“In Memoriam”は、1993年の世界貿易センター爆破事件と2001年9月11日に犠牲となった人々を偲ぶ追悼のための展示。“2001.9.11”は3部構成の歴史的展示。聴く時間はなかったが膨大な口述記録とともに、消防自動車、記念碑的な鉄骨の残骸、遺留品などが展示されていた。



これは事件後の廃墟に最後まで残っていた「最後の柱」で、写真やメッセージがたくさん貼ってあった。



メモリアルホールにある青い壁には、“No Day Shall Erase You From Memory”（「いかなる日も、あなたを時の記憶から消し去ることはできない」）と書かれていた。古代ローマの詩人ウェルギリウスの言葉だそうだ。

外へ出ると、かつてツインタワーがあった跡地の庭に、ノースプール、サウスプールという大きな池が作られており、犠牲者の名前が刻まれていた。



NY では 3000 人近くの人が犠牲となり、あの衝撃は世界中の多くの人が多かれ少なかれ分かち持ったのではないかと思っているが、それにしても、アメリカがその追悼にどれほど大きなお金をかけているかは想像を絶するものがある。アメリカでは国内が激戦地となったことがないだけに喪失の大きさを表しているのかもしれないし、追悼が政治的であることを反映しているのかもしれない。

犠牲者の冥福とともに、どこにも追悼され得ない名もなき犠牲者たちの冥福を祈った。

<3 月 10 日 TCI での報告会>

10 日 18 時～20 時は、漫画展会場にて報告会「東日本家族応援プロジェクトから見えた被災地の今」を開催した。8 日の報告時間は限られていたため、これに肉付けし、とくに漫画展との関りから聞こえてくる声を中心に、現地の人々の声を紹介するようにした。続けて団さんからスライドショーと合わせた漫画トーク、

中村さん、院生の木下大輔さんからも報告があった。スタッフ以外の参加者は十名程度とこじんまりした会だったので、最後に皆でシェアリングの時間をもった。

遠方に暮らす者として、故郷を襲った惨事をどんなふうに経験したのか、被災した故郷へ戻って見た光景、そこからまた遠く NY に戻ったが、被災の経験を共有することができず苦しい思いをしたことなど、さまざまな体験が語られた。それだけに、県人会のつながりや、毎年活発に持たれている追悼式の意味が大きいことをあらためて思った。

震災時、距離的には遠く離れたところにいる人々の心の被災を考えた。現在被災地に暮らしていないが、そこが故郷であったり、特別な思い出があったり、あるいは大事な人がそこに住むなど、その地に強い思いを持つ人々である。その後すぐ、サンフランシスコの日本人コミュニティと関わる機会を持ち、その思いを強くした。

それが、ここでもずっと続いているのだ。きっと世界各地に似たような人々がいるのではないだろうか。そんなことにも思いを馳せることができるようになった。私たちのプロジェクトを被災地の外で行うことは、証人として被災地の状況を伝えるだけでなく、そんな人々がほんのひと時集い思いを合わせる機会を作っているのではないかと思った。災害が運んでくるもうひとつの出会いだ。







<3月11日　最終日>

3月9日、すでにカフェでインタビューをしたのだが、この日は John Jay College of Criminal Justice を訪問し、Nina Rose Fischer さんらに加害者臨床とカリキュラムについて聞く。









午後はセントラルパークを通り抜け、メトロポリタン・ミュージアムへ行った。頭の中で、みんなの歌「メトロポリタン・ミュージアム」が鳴り響く。











夜はハーレム Jazz ツアーに参加してみた。3 軒の Jazz バーを梯子したが、うち 1 軒は、帰還兵たちのたまり場になっているようだった。正直、話を聞いてみたいところだったが、そういう場でもないので断念。慌ただしいツアーだったが、充実した NY だった。

つづく

病児保育奮闘記

(17)

子どもサポート H&K
大石　仁美

コミュニケーション不足が

事故を呼ぶ！

当施設は今年で15周年を迎えました。ほそぼそと、潰れずによくやってきたなあと感慨深いものがあります。子どもが好きで、楽しいからやってこられたのですが、失敗がなかったかというとウソになります。

自分の失敗談を語るには、ユーモアや冗句を被せて笑い飛ばせばいいのですが、でも仕事上のあってはならない失敗は事故につながりますからそうはいきません。

どんなことがあったのか事例をきちんと整理し記録しておくことは、職業人としての誠意とけじめであり、また今後に向けての大切な指針になると思うので、勇気を出して書き記しておくことにします。

階段からの転落事故一件

部屋にはすべて引き戸の上部に鍵をつけています。つまみを回せばカチッと引っかかるだけの簡単なものです。子どもには届かない場所なので、大人が出入りの際にきちんと鍵をかけることを忘れなければ、子どもが自由に移動することはありません。感染防止のため、病気ごとに部屋を分けることもあり、部屋ごとの鍵は重要です。特に保育室は二階にあるため、階段に通じる戸の施錠は転落防止のため忘れてはならないものです。

これらは保育者全員の共通認識です。

ところが、一歳児が階段から転落するという事故が起きてしまいました。

ほんの数秒階下にものを取りに行くだけ。他の保育士が部屋にいるのでたぶん大丈夫。そんな安易な気持ちが事故につながったのです。子どもの行動は予測がつかないことが多いです。他の保育士だってその子を見ているとは限りません。おむつ替えの途中だったら急な動きに対応出来るはずがありません。

少なくとも部屋にいる保育士さんに「ちょっとだけ一階に物を取りに行ってきます。」と声掛けしていたら、この事故は防げていたでしょう。もちろん面倒がらずにロックするのが原則ですが。

幸いなことにこの子はおしりから滑るように落ちたので、おむつがクッションになり、打ち身のあともなく、びっくりして泣いただけで済みました。すぐに電話で保護者に報告をし、当日の夜、仕事を終えてから当事者と一緒に、謝罪とその後の様子伺いに家庭訪問しました。ご両親は至極恐縮されて、「こんな遠いところまで申し訳ない」と気が動転しているこちらの気持ちを労わってくれました。気が重くても行ってよかった！一仕事終えたすがすがしい気持ちで帰ったことが心に残っています。

鍵掛け忘れでもう一件

お母さんのお迎えで、子どもを抱っこして、一階に下り、引き継ぎをしていた時のことです。もう一人の

子どものお母さんがお迎えに見えました。

お迎え時間が重なってしまったので、少しお待ちいただくことになりました。ところが二階で母親のお迎えを今か今かと待っていた五歳の子どもは、母親の声を聞きつけて階段を駆け下り、引き継ぎ部屋に入ってきてしまったのです。「あっ、入っちゃダメ！」でもすでに遅し。その子は水痘で隔離していた子で、単なる風邪の子と、一瞬でも同じ部屋になってしまったのです。

どうか他の子に感染していませんように！祈る気持ちで二週間が経ちました。でも、とうとう恐れていたことが本当にやってきたのです。

おそるべし！空気感染！

あまりに申し訳なくて、保育料は無料にしますと申し出たのですが、「いえいえ、いずれ罹ると思えば今罹っても同じですからご心配なく」といってくださいました。なんという優しいお言葉！こんなに物わかりのいい親御さんはそうそういるわけがありません。申し訳なさと恥ずかしさで心苦しい気持ちが優しさに救われました。有難かったです。

この後、階段出入り口の戸に**必ず施錠！**と札を張り付けたのは言うまでもありません。

食物アレルギーの怖さ

食物アレルギーの子は多いです。過去にアナフラキシーショックを起こしたことが有る等聞くと、その状況を思い浮かべるだけで、身震いがします。親御さんはきっとパニックになって大変だったことでしょう。そういう子どもを持つ親御さんはたいてい、食事持参で来られます。私たちにとってもその方がありがたいし安心です。でも急なお迎えの時もありますから、普段から食品には気を配り、加工食品は極力使わないようにしています。

アレルギーを起こす食品はいろいろありますが、特に乳幼児に怖いのはミルクアレルギーです。これによるショックは時々聞くところです。それと数が多いのが卵です。で、牛乳と卵は一歳を過ぎるまではどの子にも使わないことに決めています。

過去のアレルギーのある子の顔を思い浮かべると、親御さんの苦労が思われて、いろいろ大変だったろうなあと頭が下がります。特に、牛乳、卵、小麦、サバ、マグロ、エビ、トマト、こいも等、何種類ものアレルギーを持っている子の、食事を作る母親のストレスはいかばかりでしょうか。お父さんはじめ他の家族の皆さんに、お母さんのストレスを少なくしてあげられるよう、優しく労わってあげて欲しいものです。

まさかの失敗

子どもたちのおやつは、値段に関係なく、頂いたものも含めてその日の果物盛り合わせと決めています。バナナ、りんごが多いですが、季節によりスイカ、メロン、いちご等が入ることもあります。果物嫌い、または果物アレルギーの場合は焼き芋になります。ところが続けて数日利用する子がいる場合、本人の希望を聞いて、変化をつけることもあります。

その日はホットケーキをつくって出すことになりました。もちろん卵と牛乳入りです。一人卵アレルギーのA子ちゃんがいましたので、ホットケーキが渡らないよう気をつけなくてはなりません。よくわかるように皆とは別の盆に A 子ちゃんのおやつをセットしておきました。

一人ずつお皿に盛り、準備をしてから、翌日の足りない食品の買い出しに出かけました。おやつは私が帰ってから出すつもりでした。ところが帰ってみると、キッチンに準備してあったおやつがありません。一皿のフルーツだけを残して。

ん？？どういうこと？不思議に思いつつ二階の保育室に入ると、「みんな早く起きたので、早めのおやつにしました」と保育士さん。

「A子ちゃんのおやつが残っていたけど？」

「あらどうしよう！変だなとは思ったんですけど」

「A子ちゃんにもホットケーキ食べさせたのね」

「はい。どうしましょう」

うろたえる保育士さんを見て怒る気にもなりません。ショックは私の方でした。ひとこと、ここにおやつを準備しておくね。これがA子ちゃんのよと伝えておけばよかったのです。分かっているつもり、自分がするつもり。この**“つもり”**がいけないのです。

いまさらながらコミュニケーション不足が引き起こす落とし穴の怖さを思い知りました。

すべては私の責任です。腹をくくって、すぐ動ける

ようA子ちゃんの観察をはじめました。10分、30分、1時間経過。A子ちゃんは元気に遊んでいて、なにごともありません。身体になんの変化も起きていません。ほっとしながらも、お母さんのお迎えを待ちました。

お母さんは「私が今まで、どんなに注意深く、苦労しながらこの子を育ててきたか分かりますか?!」と言って涙をこぼされました。本当に申し訳ありませんと謝るばかりでした。この日の保育料は無料にしてお帰り頂き、翌日、経過を教えていただくため家庭訪問。お母さんは昨日と打って変わって、穏やかな表情で「受診して卵が解除になりました。医師もそろそろいいかなと思っていたようで、よかったです。祖母が、隠されて言ってくれないより、本当のことをきちんと伝えてくれるところは信用出来るところだよと言っていました。私も本当にその通りだと思いました。これからもよろしくお願いします。」

このお母さんの言葉は、腹をくくった私への最高のご褒美でした。

翌日すぐにアレルギーと書いた少し大きめの印を注文しました。登録用紙に朱書きするだけでなく、すべての記録用紙に**アレルギーの朱印**を押すことにしたのです。

事故はとんでもないところに、隙間をあけて潜んでいます。今まで大きな事故にならなかったのは、単に運が良かっただけにすぎません。ちょっとした思い込みやうっかりで、命にかかわる大事故になってしまうこともあるのですから、一つ一つの失敗を心にとめて、予防策を積み上げていく知恵と工夫が問われることになります。

コミュニケーション不足を補う工夫

人間関係は、むつかしいものです。良いと思ってしたことが、かえって相手の心を傷つけてしまったり、また誤解されて、思わぬ結果を生むことだってあります。恥ずかしながら、私はストレートにものをいう人間なので、今までもそういうことは結構あったと思います。

もともと群れで行動するより一人でいるほうが好きなので、おしゃべりおばさんの輪に入ることを避けてきました。つまり雑談などしながら、まろやかな会話をする術を学んでこなかったのです。

いまさらこれを直そうとしてもぎこちないだけなので、個性として許してもらうことにして、こうしたクセを補うにはどうしたらいいのか、思いつくままに書き出してみました。

① 記録に目を通せばわかることでも、子どもの状況や注意してお世話をしなければならない点は、言葉できちんと保育者に伝えること（伝達の徹底）
② 保育者の仕事ぶりをみて、いいなあと思うことはその場で伝えること。例えば、子どもの遊びの様子をよく観察している。記録がとてもわかりやすい。上手に遊んであげている。等（プラス評価）
③ 足りない点は注意するより一緒に行うこと。そうすることで共に学びあえる。（共同作業）
④ 研修会に参加したメンバーは、報告会を行うこと。（知識の共有）
⑤ 昼食は子どもも大人も同じ食事をみんなで食べる。（食育と連帯感）
⑥ 年に一度は懇親会をもつ。（互いの理解を深める）
⑦ その他、個々が行っている活動や、関わっているイベントなどを紹介し、出来るだけ楽しんで参加する。

こうして書いてみると、なんだ、これは今までの職場や地域でやって来ていたことそのものじゃないですか。職員旅行、職場の球技大会、研修会、忘年会、新年会、新人歓迎会、送別会等々、すべてコミュニケーションを深めるための知恵だったのですね 。

特に地域のお祭りや運動会などは、地域住民の結束を深める最大のイベントで、こうして先人たちの知恵が引き継がれて、歴史を作ってきたのだと思うと不思議な気持ちがします。

実際、面倒だと思うことも多いのですが、人間関係が希薄になっていくばかりの現代だからこそ、人と人とのつながりをスムーズにする手立てを考え直す時かもしれません。また、今風の新しいやり方も探したい。

硬くなった感性を、柔らかくほぐす工夫が求められているようです。

対人支援点描（13）

「勤務先のクリニックの心理面接の枠について」

小林　茂（臨床心理士/牧師）

はじめに.

思うところがあり、社会福祉法人浦河べてるの家を退職してから、札幌の精神科クリニックの心理士として、主としてトラウマへの介入を託されて心理面接を行うようになった。そこでは地域の福祉事業所とは異なった経験を得させていただき、今さらながら振り返り考えさせる課題を教えていただいている。

今回のは、その一つとして治療構造論(theory od therapeutic structure)と呼ばれる心理面接の「枠」について考えてみたい。

1. 心理面接の「枠」についての基本的理解

そもそも治療構造の始まりについて、明確な起源といえるものはたどれない。どの要素を、どれくらい含めば治療構造と呼ばれるものが発生しているといえるのか、明確な線引きもない。

栗原(2004)によれば、フロイトが「セッティング、セラピストのとるべき態度、クライエントに課せられる要請などを、いわば一つのセットとしてそのクライエントに処方する、という発想のもとで、この方法を提唱したといえる。ーそしてこの、ある病態に応じて処方さえるべき手続きの全体を、治療構造therapeutic structure とよび、各病態に応じた処方内容を検討するという観点から、治療構造は出発した。」とする。

さらに、治療構造には、外的な治療構造と内的な治療構造があり、外的な治療構造には面接室のあり様、セラピストの存在、セラピストとクライエントの位置どり、時間的要因、経済的要因、などが含まれ、内的な治療構造には面接の目的をはじめとした契約内容、クライエントに要請されること、秘密の保持のあり方、暗黙の了解事項があるとされる。

こうした外的、内的な構造化が図られることにより、治療的な環境や条件といった意味が生じる。これは、何もないなかで治療という作用が起こりうるのではなくて、目的をもって対人援助がなされるか、されるところには必ず治療構造もあるということである。医師の診察もある人が病にかかり患者となるなかで治療が成立する。その反対に、医師と患者がバスや電車で居合わせたとしても治療が成立するわけではない。

構造化され、「枠」づけられたところに

治療という目的と意味があるといえる。

2. 浦河の地域支援で感じた「枠」について

以前、浦河の地域支援について、浦河という地域での支援は、外的な枠というものが希薄で、内的な枠によって条件されているという主旨を述べたことがある。地域の福祉事業所の対人援助の場においては、決められた時間、場所、契約、料金といったものは求めようがない。選べるような医療機関もなく、福祉事業所もなく、利用者の多くが年金や生活保護暮らしで隣町に行くことも不自由する環境にある。

そのなかで、行動化(acting out)するにしても、ドクターショッピングするにしても、通所や通院拒否するにしても、しようがない。嫌な支援者や医師、利用者仲間を避けるにしても小さな街では避けようがない。田舎の人たちの目もあれば見えないところで何かするにしても、ほどなく知れ渡ったりする。そこで利用者は、自分と自分の病に向き合うしかないし、日常生活を密に共にする支援者や病気仲間と、その時々で相談する。

アメリカの映像人類学者の中村カレンさんが「浦河はホテルカリフォルニアみたいなところ」と形容したが、行くのは簡単だけど、出ることが難しいところ、という意味である。

これが浦河という環境であり、「枠」となって治療構造としての機能を果たしていた。

3. クリニックで感じた心理面接の「枠」について

札幌のクリニックは、浦河べてるの家とは別法人、別団体であるが、当事者を中心とした医療を行おうという目標を掲げ、浦河べてるの家の立ち上げにかかわった向谷地生良氏も理事となり立ち上げたクリニックである。そのこともあり、精神保健福祉士らによる心理支援が主で、心理職による支援の発想が希薄な面があった。現在は、常勤の心理士１名と嘱託で週２日勤務する私の２名体制で心理職による心理支援が行われている。先の事情ため、つい最近まで心理検査のキットも WAIS が１セットあるのみであったり、面接室も、毎日、調整しながらこなしている。部屋がないときは、音響療法の部屋の待合やデイケア室の隅で心理面接をすることもある状態にある。

精神科クリニックという医療機関の割には、浦河の伝統を
受け継ぎ“ゆるい”雰囲気が所狭しと充満したところである。

こうしたこともあると汲み取っているが、デイケアの患者も飛び込みで「相談したいので時間ありますか？」とスタッフ室に駆け込んできたりする。

このような環境で私も心理面接を行っているのだが、環境面を考慮したとしても、心理面接の「枠」が安定しない患者の多い。その多くは、何かしらの不安症患者や、親兄弟・会社の同僚・デイケア仲間のひと言で不調になり寝込み動けなくなる患者、季節的（特に冬季期間）な不調を訴える方も多い。全般的に被影響性が高い方である。本人も何とか都合をつけたいという思いもあると思われるが、結果として心理面接予定日の直前や当日にキャンセル（無連絡も含む）になる方が多い。

また、その多くが生活保護を受給していることや、精神科通院歴が長いことも

共通している。

病態が重いから精神科の患者となり、働けないことから生活保護になってしまっているのか、経済的な枠組みが薄いからキャンセルが容易だからか、定期的な心理面接が成立しないでいる。そのため、持続的な心理面接ができないので、治療構造という「枠」が保てないで続けているケースが手元に残っている。

支援側の葛藤として、このような患者に対し、「病態が重い方なので、だからこそ根気強く支援が必要である」と受け止めるか、面接自体が不定期で心理面接の効果が得られないから中断するか、と判断に迷う。それなりに心理面接の待機者も抱えているなかで、予定していた面接時間の枠が空白になると、待機者や空いた時間にさえも給与を用意するクリニックに対し気の毒な気持ちになる。

このような状況が起こるのは、私の勤めているクリニックに限られたことなのか、通院だけの精神科医療機関であれば、どこでも抱えていることなのだろうか。同業者に尋ねてみたいところである。

4. まとめ

心理面接について「枠」というものが必要であることは間違いなく実感するところである。

しかし、実際のところ臨床という場にあっては、必ずしも構造化がうまく成立しないことがある。そのことは、援助者側の問題ばかりではなく、心理士と患者が心理面接を行う環境や、病態という患者側の課題、皆保険や生活保護による医療費の実費支給というような社会保障により成り立つ心理面接という条件というものが絡んでいる。また、うつや不安症に対する認知行動療法のエビデンスがあり、整ったテキストがあろうとも、実際に患者が面接に定期的に来院できなければ用を足さない。

さまざまな諸条件のなかで可能な限りの要望に応えようとしているが、心理面接自体が不定期にしか成立しないという出来事を通じて、改めて臨床現場での「枠」というものを確保することの難しさを考えさせられた。

参考文献

栗原和彦(2004)「治療構造論」『心理臨床大事典〔改訂版〕』培風館.

「あ！萌え」の構造

（番外編　その３）

- ドラゴンクエスト徒然草－

総合心理学部　齋藤清二

番外編ばかり続いてたいへん申し訳ないが、今回も本題からはちょっとそれる。「え、そもそもこの連載に本題なんかあったの？」といぶかる君、君は正しいよ。いつも同じような言い訳をしているが、本連載の中心テーマである「萌え」とは、「私たちが有無を言う暇もなく魅惑されてしまうもの、あるいはその現象」であるから、非常に広範な事象を含むのである。それについて一貫して論じようとしても、すぐに迷い道にはまりこんでしまう。だから、どうしても本論の部分が少なくなって、序論がいつまでも続いたり、番外編の数が本論を超えたりしてしまう。まあ、これも致し方ないと思うしかない（←完全に居直り）今回のテーマは「ゲーム」である。いまさらと思われるかも知れない。ゲームはアニメや漫画などと並んで、おそらく「萌え」について論じる時に絶対に外せない中心的なジャンルの一つだと思う。ただし、今回取り上げるのは、いわゆる「萌え系」のゲーム（これも定義はなかなか難しいのだが）ではない。

そう、日本が生んだ王道中の王道のゲームである、『ドラゴンクエスト』を取り上げてみようと思うのである。そもそものきっかけは、某心理学系の巨大学会から広報誌にドラゴンクエストをめぐる小エッセイを書いてくれと頼まれたことである。「え、なんで！？」と思ったのは事実であるが、良い機会だと思って、寄稿することにした。ただし、字数制限がきついので、書き残した内容がたくさんある。そこで、今回は私の頭の中にある、ドラゴンクエストに関連したイシューについて、思いつくままに順不同で書いてみたい。そういえば、「ひぐらしすずりにむかいて、こころにうかぶよしなしごとを～」とか書いていた先人がいたなあ。確か吉田さんとか言ったっけ。そう「ドラゴンクエスト徒然草」みたいな感じで書けたらいいなあと思っている。

ドラゴンクエストをめぐる私的なヒストリー

ドラゴンクエスト（DQ）は、もちろん日本を代表するロールプレイングゲーム（RPG）である。その第一作は 1986 年に発売され、150 万本以上を売り上げる大ヒットとなった。その後数年ごとに新作が発表され、現在まで 11 作の本編だけでもソフトの売り上げは 3000 万本を超え、まさに国民的な作品と言える。30 年を超えてその人気は衰えることなく、物心ついてすぐにドラゴンクエストに触れた世代はすでに社会の中堅の年代となり、親子どころか時には 3 世代を超えて、共通の話題の媒体となっている。

私がはじめてドラゴンクエストを知ったのは、子供が小学生になった頃で、４０歳ちょっと前くらいの頃だったと思う。そのころ任天堂のファミリーコンピューター（略称ファミコン）が爆発的に普及し始めたばかりの頃だった。自分の子供時代の経験からいって、友人たちがみなしている遊びを経験していないと学校などで話題に入っていけないことになり、孤立しやすくなる。それは避けたい。べつにテレビゲームを無理にやれと子供に勧めるわけではないが、最初の経験は重要である。自分の子供に与える最初のゲームは親が一番良いと思うものを与えたい。そう考えていた。とは言っても、親自身がテレビゲームのことを知らないので、とりあえず伝え聞くところでは一番有名なゲームらしい「スーパーマリオブラザーズ」と「ドラゴンクエスト」を与えれば問題ないだろうと考えた（全く理屈っぽい親である）。

というわけで、仕事帰りに駅前のデパートに寄って、ファミコンの機械と「スマブラ（初代）」と「DQⅢ」を買って帰った。子供は大喜びだったが、一度に二つのゲームを同時並行でやるのは無理なので、とりあえず子供にはスマブラを与え、DQⅢは私がまず毒見をすることにした。・・・で、後の流れは想像つくと思うのであるが、私はドラゴンクエストの世界にどっぷりとはまってしまったのである。もちろん子供はすぐに後を追いかけてきて、あっと言う間に追いつき、追い越してしまったのであるが。

その後、ドラゴンクエストシリーズは、数年に 1 作の割合で発売され続けたのであるが、ゲーム機器の進歩もあり、しだいにゲームの規模が大きくなり、新作が発売さ

れるまでの間隔も長くなった。私は最初にDQⅢを数か月かけてクリアし、その後DQⅠ、DQⅡに遡り、次いで数年後にDQⅣ、さらにDQⅴまでをクリアした。この頃が子供の年齢的にも一番ドラゴンクエストの世界にのめりこんだ時期である。その後DQⅥとⅦにはチャレンジしたものの、仕事が忙しくなったこともあり、最後までクリアできず、しばらくドラゴンクエストからは遠ざかっていた。しかし、完全３D 化されたDQⅧでまた復活（ゲーム機はプレステに変わっていた）し、そのころから始めたMixi で実況しながらクリアした。その後ゲーム機の再度の変更により、Ⅸ、Ⅹは全くプレーせず、最近になって、DQ Ⅺの発売とともに、久しぶりに挑戦。半年かけてクリアして現在に至るということになる。

年代的なことを振り返ってみると、物心ついて以来ドラゴンクエストシリーズとともに育ってきたのは現在 40 代くらいに達している世代であるが、ドラゴンクエストを好む人達の年齢範囲はもう少し広いようだ。私の場合は子供が育つのと並行して自分も楽しんだという世代だが、私より上の世代でも、死ぬ直前までドラゴンクエストを手放さなかったという人もいる（先年亡くなられた女優の淡路恵子さんが有名であるが、気持ちは非常に良くわかる）。最近の小、中学生では、さすがに他に高い人気を誇るゲーム（ポケモンとかぶつ森とかいうらしい）がたくさんあるので、相対的にドラゴンクエストに圧倒的な人気があるわけではない。しかし、今の子供たちはすでに親世代がリアルのドラゴンクエスト世代であり、ゲームについての世代断絶はないように見える。実際私がDQ Ⅺに熱中して、SNS などにその一部を発信してみると、大学生の世代の若者達は、親しみをもって見守ってくれているようである。

ドラゴンクエストというストーリー

さて、ドラゴンクエストは基本的には、「勇



者である主人公が試練に満ちた旅を続けながら成長し、最終的には悪い竜と戦ってこれを倒し、囚われているお姫様を救出し結ばれる」という、いわゆる「竜退治」のストーリーを下敷きにしている。特に初回作のドラゴンクエストⅠでは、そのころのソフトのメモリの限界もあり、比較的シンプルなストーリーが展開している。この「竜退治」の物語は「西洋的自我意識の確立」の典型的なプロットであり、深層心理学的な観点からも頻繁に論じられてきた。しかし日本の昔話についての河合隼雄の研究にみられるように、日本における自我の確立の物語は、これとは少し違っているのではないかという主張もなされてきた。それを反映してか、ドラゴンクエストのそれ以降のバージョン（Ⅱ～Ⅺ）では、単純な竜退治にとどまらないきわめて多彩で複雑なストーリーが展開するものになっている。

いずれにせよ、神話、伝説、おとぎ話などの、物心つく時にすでに世界を構成している普遍的な物語の中で、私たちはさまざまのできごとを経験しながら、個別の人生の物語を構成していく。ここ30年来の日本において、この「日本版竜退治の物語」は、多くの少年・少女が自我を確立していく人生の旅において、物語のテンプレート（鋳型）を提供する役割を担ってきたのではないかと思われる。

ナラティブとしてのドラゴンクエスト

対人援助をはじめとする幅広い領域において、物語への注目はかなり以前からのものであるが、最近になって、ストーリーとしての物語とは少し違った意味づけをもって、ナラティブという概念が広く注目されるようになってきた。ストーリーとナラティブの関係についてはさまざまな見解があるが、近年ゲームの開発やデザインの領域において、このストーリーとナラティブを対比的に特徴づけるような考え方が語られるようになってきている。おおざっぱにいうと、ストーリーが特定の状況において登場人物が体験する時間軸に沿った出来事のシークエンスをなすような、一貫性のある構造であるのに対して、ナラティブは個別の出来事や他者との相互交流を通じて、創発的にその都度浮かび上がる物語的体験であるとする考え方である。このような前提にたつと、ドラゴンクエストというRPGで私たちが体験するのは、ストーリーというよりはむしろ、プレイヤーである私たちの個別で創発的なナラティブなのではないかと考えられる。

ドラゴンクエストにおいては、プレイヤーである私たちは、主人公であるキャラクターと同一化しつつゲームのストーリーに参入する。主人公には前もって名前が与えられておらず、私たちは自分自身で勇者を命名することができる。ミヒャエル・エンデの『果てしない物語』で語られているように、物語的世界において「名前を与える」という行為は「創造する」行為だから、私たちはドラゴンクエストの世界の中で「私」を創造することになる。主人公は多くの場合声を発することはできないが、ゲームの中で出会う他のキャラクターから話を聴いたり、交流したりすることができ、目的を共有するパーティーを組織し、一緒に旅をし、一緒に敵と戦い、経験を積んでいく。

ゲームの中での体験はおおむね、下敷きとなっているストーリー上でなされるとはいえ、基本的には探索的かつ創発的であり、それぞれの体験は個別的で、時には即興的な工夫が必要とされる。このようなゲームの世界での生き生きとした体験は、キャラクターの体験であると同時にプレイヤー自身の体験でもあり、この二重性は私たちの人生の物語の形成に大きな影響を与えるものと思われる。

ドラゴンクエストの世界観とビアンカ/フローラ問題

ドラゴンクエストの中でキャラクターと同一化しながら、二重の人生を体験するプレイヤーにとって、その中で生きるところのゲームの世界がどのような性質をもっているかは重要である。この世界を構成する3 大要素は、おそらくシナリオ、キャラクターデザイン、それと音楽であると思われる。ドラゴンクエストはこの３要素にこれ以上はないと思われる天才的な製作者をそろえているのであるが、このあたりは本稿の主題ではないのでこれ以上は触れない。

ドラゴンクエストの世界（初期の作品ではアレフガルドと呼ばれる）の特徴を一言で表すと、そこは冒険と戦いの世界であるにもかかわらず、包み込まれるような基本的な安心感に満たされているということである。これはゲームに没入している時の圧倒的な心地よさとして感じ取られる。この守られた安心できる空間を象徴する設定はたくさんある。例えば主人公とその仲間たちは、戦いで死ぬことはあっても、必ず復活することができ、所持金を半分失うだけで経験値は失われない。つまりこの世界には「取返しのつかない失敗」はないのである。これはゲームという仮構世界であれば、必ずそうだというわけではなく、ドラゴンクエストシリーズの大きな特徴の一つである。これは「失敗してもリセットしてしまえばよい」という意味での安心感とは異なるものである。この世界では、失敗はそれがすなわち経験であり、失敗そのものが成功なのである。「表面的には成功と失敗があるのに根底的には失敗はない」ということが保証されているのが、ドラゴンクエストの特徴である。これはある意味究極の安心の世界であり、安心だからこそ冒険や挑戦や成長が可能になるという心理療法や対人援助の根本原則にもつながるものではないかと思われる。

この原則は、ゲーム中でしばしば遭遇する「何かを選択する」機会においても徹底して現る。例えばゲームのシナリオの中で、プレイヤーはしばしば、「目の前の壁にボタンがあります。押しますか。はい/いいえ」といったような選択の機会を与えられる。しかし、ほとんどの場合、はいを選んでも、いいえを選んでも、その結果に大きな差はないのである。どちらを選んでも大きな害を被ることはなく、例えば床が開いて階下に落下しても、また階段を探して上がっていけば元の場所に戻ることができる、といった具合である。カンダタという悪党を倒して「見逃してくれよ、な、な」と言われて「見逃しますか？はい/いいえ」の選択肢が与えられても、結局どちらを選んでもカンダタは「ありがとうよ。この恩はわすれないぜ」などと言いいながら去っていく。

（ゲームの後半で彼は主人公たちに道を教えてくれたりする)。ここでも、選択の機会は与えられるが、結局のところはどちらを選んでも、それが致命的な失敗になることはない。このような世界観は現実の厳しさを無視した未熟な万能感の現れだとするような批判的もありうるだろうが、おそらくそうではなく、この世界における現実とは、文脈を変えることによって、どのような選択も成功にも失敗にもなりうるし、結局のところそれは全て失敗ではないということなのだろう。ドラゴンクエストの世界はそのような世界なのである。

ところがである。このような失敗というものが存在しない（つまり実質的に選択というものが必要とされない）ドラゴンクエストの世界において、とんでもない大きな選択のイベントが導入されたのである。それは、ドラゴンクエストⅴ『天空の花嫁』における、花嫁選びのイベントである。この作品のストーリーは古典的なドラゴン退治とは著しく異なっている。そもそも主人公が勇者ではない（これがどれほど破天荒なことであるかを説明することは難しい)。しかも主人公の結婚という通常ならストーリーの最後に来る（あるいは日本の場合は最後にも起こらない）大きなイベントが、ストーリーの中間より少し前に終了してしまうのである。そこまでのストーリーでは、幼馴染のビアンカという少女が主人公と行動を共にしているので、最終的に結ばれるのは彼女だろうと思うのが普通であろう。ところがストーリーの途中で、主人公の性格を見込んだルドマンというお金持ちが、娘のフローラという修道院帰りの典型的なお嬢様を婚約者として主人公に差し出す。主人公は幼馴染のビアンカとお嬢様のフローラという二人の花嫁候補のどちらかを選ばなければならない。しかもこの二人の花嫁候補は、育ちも性格も全く異なっているが、どちらも良い娘であり、互いに争うことも嫉妬することもなく、ただ主人公の選択を慎ましやかに待つのである。

これは究極の選択である。しかもこの選択は決して今までの小さな選択のように実質的に同じ結果をもたらすのではなく、決定的に異なった道に分岐してしまう。もちろんどちらを選んでも、どちらかが失敗で、どちらかが成功だというわけではない。どちらを選んでもそれはそれなりに成功のストーリーである。しかし、二つのストーリーは全く異なったものになる。つまり、ここで主人公/プレイヤーは、真の主体的な決断を迫られるのである。幼馴染を選ぶのと金持ちの令嬢を選ぶのとでは、表面的な運命は違ってくる（フローラは、最初は全く役にたたないが、親からの持参品がそれを補う。主人公とともに試練を経験した後には、ビアンカを超える強力な呪文を身に着ける)。しかし、真の選択はそのような「どちらが得か」によって決まるものではない。それは「どちらを愛するのか」という、真の感情に基づく決断なのである。このような主体的な選択ができるようになることは、一人の「私」が「真の私」になるための必須の課題なのである。このような試練を経て、プレイヤーはキャラクターである主人公と共に成長していくのだろう。

多職種協働のメタファーとしてのドラゴンクエスト



最後に、公認心理師制度の発足にも関連して、心理専門職にとって多職種協働のモデルとしてのドラゴンクエストという観点に触れたいと思う。多職種協働とは、「メンバーの専門性の違いを認め、それぞれが他の専門性に敬意を払いつつ、共通の目標に向かって力を合わせて行動すること」と定義されるが、ドラゴンクエストのパーティーは、まさにこれを具現していることが明らかである。そもそも、キャラクターの職業という特性が典型的な形でゲームに組み込まれたのは DQⅢからである。例えば戦士と武闘家はともに戦いのエキスパートであるが、どちらが強いかを競い合っても意味はない。ましてや魔法使いと僧侶はどちらが偉いかなどという比較は全く意味をもたず、お互いの特徴を生かしながら協力して行動することが当然の目標となる。勇者といえども常にチームのリーダーの役割をとるとは限らず、時には回復呪文を駆使してメンバーの補佐役に回ることもある。共有される最終目標はラスボスを倒して世界を救うことである。プレイヤーはキャラクターの体験を自分のものとしつつ、このような多職種協働のエートスとスキルを経験的に学んでいくことになる。ドラゴンクエスト世代の対人援助職の未来は明るいと思われる。

海の向こうにでて見れば

（10）「お・も・て・な・し」の表裏

石田 佳子

約 4 年前前からマレーシアの首都クアラルンプールで暮らしています。普段は日本人がほとんど居ない地域に住み、日本人のコミュニティと交わらずに過ごしているため、先日「いつの間にか私は、“日本の常識”を忘れていたかもしれない？」と感じる出来事に遭遇しました。そこには異文化に染まることで生じた私自身の変化と、日本人の一面が表れていると思うので、今回はそれについて振り返ります。

日本人の「お･も･て･な･し」

クアラルンプールに住む日本人（退職者）の多くは、S 氏とその奥様を中心とする日本人のコミュニティに属しています。そのコミュニティは、相互援助と「家族同然の親しい交流」を目的とするもので、外国暮らしの不安や寂しさを感じる人には、役立っているようです。前述したように、そこから離れて暮らしている私たち夫婦ですが、移住前には現地の情報源として S 氏の運営する SNS を活用させてもらったこと、近年 S 氏（83 歳）の健康状態に不安が見え始めたため「S 氏が元気なうちにもう一度お会いしてお礼を言いたい」と考えたことから、先日初めて S 氏の奥様が主催するパーティに参加しました。

それは S 氏の誕生祝いを兼ねた新年会で、S 夫妻が毎年自宅を開放し催しているものです。会場・料理などは奥様が用意すること、しかし参加者にも得意な料理を一品とか好きなお酒を一本持参してもらえると嬉しいこと、それが出来ない人は寄付を置いてくれても良いし、当日台所を使って料理を作ってくれても良いことなどが、事前に SNS 上で奥様から告知されました。私は「主催者側の負担を減らすため、ポットラック形式にするんだな」「その方が気を遣わなくて良いな」と考え、大皿料理を 2 品持って参加しました。

当日は、約 40~50 人の日本人が参加し、食べきれないほどの手料理とお酒が持ち寄られました。途中から一人の客人（元観光省高官のマレーシア人女性）が加わると、彼女の前には少量ずつ取り分けられた多種類の料理が供され、参加者全員が一人ずつ歩み出て英語で自己紹介をするという特別待遇が（奥様の指示で）施されました。これはマレーシアではあ

り得ないような「お･も･て･な･し」だと思います。私はS氏へのご挨拶を果たし、お料理とお酒と会話を楽しんで、満足して帰途に着きました。

「お･も･て･な･し」の舞台裏

しかし、帰宅後（会員なら誰でも見られるSNS上で）パーティのお礼を伝えた時のことです。S氏の奥様から「今年は初参加なので大目に見るけれど、次回からは貴女もキッチンに入って働いてね。」との叱責を受け、びっくり仰天してしまいました。他の女性たちには「準備から後片づけまで手伝ってもらって助かった。」と言っていましたから、そのパーティは、表向きには「無礼講で」としながら実は細かいルールが言外に強制される、フォーマルな（仕事のような）集まりだったようです。

そう言えば、パーティの最中「なんとなく、男性ばかりが座って飲んでいるな～？（女性のほとんどが台所の中か周辺に集まっていました。）」とか、「食べきれないほど料理があるのに、まだ作るのかな？（延々と料理をし続けている女性もいました。）」とか、「それにしても、なぜ紙皿と紙コップを使わず、高そうな食器を使うのかな？（黙々と皿洗いをしている女性もいました。）」といった疑問も頭に浮かびましたが、「きっと各人が好きなように楽しんでいるのだろう！」と思い直し、飲んで喋って……マイペースに楽しく過ごした私です（大笑い）。

「平場」ではない日本人社会

おそらくこの集団には（年齢や参加頻度や貢献度などによる）ヒエラルキーが存在し、私はその最下層に属しているにも関わらず、下働きを“自ら買って出る”という身分相応の行動をしなかったために、顰蹙を買って「空気の読めないダメな奴」というレッテルを貼られたのだと思います。どうやら私は、ローカルの人たちとの気楽な交流に慣れ過ぎて、「公には本音でなく建前を言うので、言われた事を真に受けてはいけない」とか「上下関係を意識して、上の人の真意を”忖度”しなければならない」という“日本人（あるいは海外在住日本人コミュニティ）の常識”を忘れていたようです。

しかしながら、合理的に考えれば、すでに職場も肩書きも持たない退職者たちの集まりに、「フォーマルな（仕事のような）集まり」のルールが持ち込まれることには、違和感を禁じ得ません。また、思い返せば5,6年程前、まだ日本に居て初めて関連オフ会に参加した時、ボソボソとしか喋れなかった（元々大勢の前で話すのが苦手な）私が、いつの間にか「身振り手振りつきで長々と（英語の）演説していたよ」と後から夫に指摘されるほど（冷や汗）「他人の目を気にしない」「空気が読めない」という鈍感力を身につけていたことに初めて気がつき、我ながら驚きました。

自分軸（自分のニーズ）が頼りの海外生活

多様な人種が共存しているマレーシアでは、「他人の目を気にする」より「自分のニーズを大事にする」ことが、許されています。（ただしそれ故に、物事が指示/約束の通りに実行され難いといった弊害もあるのですが。。。）いずれにしろ、相手のニーズを先取りした“おもてなし”や“忖度”などの複雑なコミュニケーションは、望むべくもありません。良くも悪くも「多くは期待できないし、期待されない」環境だと思います。

だから、公に告知したことは「言葉通り」に受け取られますし、もし正直に「料理やお酒を持参しても、寄付はすること。」とか「女性はもてなす側として、台所で働くこと。」などと伝えれば、誰も（特に女性は）参加しないでしょう。また、「あらかじめ手の込んだ料理を用意し、身なりを整えて参加して、男性たちが飲み食いしている間中、笑顔を絶やさず台所で働くのが、日本女性の美徳なの。」などとローカルの人に説明したら、「えっ、それは凄いね〜！でも、それで楽しいの？」と不思議がられることでしょう。

他人軸（従順さ）が美徳の日本人社会

「もちろん楽しいはずはない！」と私は思います。しかし、彼らは「この集団の中でしか生きられない」と信じているので、そこから排除されないために、そのルールを受け入れている（振りをしている）のだと思います。そのような集団の中では「自分はどうしたいか？」を棚上げにして「集団（みんな）の利益を優先する」べきであり、そのためには「空気を読む」ことや「他人の目を意識する」ことが期待される、適応的な行動になるでしょう。

今の私の実感としては、「日本人は、個人として付き合う分には真面目で優しくナイスな人が多いけれど、集団になると妙なルールや圧力を醸し出して怖くなる」気がするのです。そしてこれは、（“村”社会と揶揄されることもある）海外在住日本人のコミュニティだけに限られたことではなく、日本人の集団や社会には多かれ少なかれ見られる傾向ではないでしょうか。

「個人の満足より、集団（みんな）の利益を優先するべきだ」というのは、聞こえの良いスローガンだと思います。しかしその結果として、個人の内面が弱体化するとしたら？犠牲や皺寄せを強いられるのが、集団の中でも弱い立場の個人だとしたら？……何かが間違っていると言わざるを得ません。そもそも集団をつくる目的は、「一人では弱い個人が力を合わせて生き易くするため」だったのではないのでしょうか。その集団が大きくなり、力を持つに従って、集団が個人を抑圧し、潰すようになってしまうのは、本末転倒だと私は思います。

「それは誰のため？」と「逃げる手もあり！」

私自身は、「自分のニーズを大事にする」ことが許される集団の中に居る方が、エンパワメントされます。（「家族同然の交流」や「おもてなし」は享受できなくても）「自分はどうしたいか？」に集中することで得られる満足感には手応えがあるため、（たとえ失敗しても）やる気と自信が湧いて来るのです。それとは逆に、「他人からどう思われるか？」を気にして自分のニーズを蔑ろにしていると、（「他者からの評価」は得られたとしても）自分の内側が希薄になり「虚しさ」に捕らわれ易くなるように思うのです。

近年の日本のニュース（鬱や自殺や過労死、パワハラやブラック企業、お祭り騒ぎのような不倫報道など）を見ていると、社会全体の要求水準が高くなり過ぎ、無用なストレスを生み出して、その発散対象を求めているかのように感じられます。だから、弱い立場の日本人には、「もしあなたが周囲から、理不尽なほど高い期待を押しつけられていると感じたら、『それは何の（誰の）ためになるのか？』を見抜いてね！」「場合によっては、『逃げる』という手もありだから！」と伝えたいと思います。

清武システムズ

♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪

〜シーズン２「清シス・アピール」

エピソード 12 ：紛れ込める場の中で

しすてむ❤きよたけ

☆★おつきだし★☆

　あまりにも囲い込みを感じた。

僕には不適切な場所だと思い、拒んだ。でも、すごくインパクトがある僕（らしい）のに現場に馴染むし、ぜひ続けてと言われ、もう一度考え、悩み悩み伝えて続けてみた。

　そんなこんなことを、４か月ほど繰り返した。正論を求められ、拒んでいた。正論がどうなるのかなんてわからないから。でも、会話の流れで言った。その挙句、いつのまにか、批判していると思われ、いつの間にか決めていた期間も過ぎ、終わった。

　こん実践について、試行錯誤書こうと思っていたが、面白くないことを選んで書いても面白くない。だから、僕が好んでいることを今シーズンから書くことにした（最初の方に書いていた【SM クラブの受け付け】は楽しかった）。

　誰かの人生や街中、町中の道中に居てもいなくてもいいけど、あったらいいんじゃない？と思うようなコミュニケーションを。

☆★今回のお品書き★☆

1: 出かけるとき
2: コミュニケーション発動装置
3: 台本のない舞台
4: 今の時代コントかよ！？
5: 旅の醍醐味！予測不可能
6: 決断を応援したい
7: これから入って来るひと



1: 出かけるとき

　依頼先で、僕ができることは何か…どうしたら、僕自身が面白くなるだろうか…とぼんやり考えていた時だった。

「行ってみたい喫茶店がある。愛流くん、好きだと思う。煙草も吸えるみたい。」

「行こうか〜煙草吸える場所なら」

誘われて出かけることは多いなーそんな時こそ、おもしろいことがあると知っている。ただ、そこそこ見極めるポイントはある。まず、僕は、僕だから。

2: コミュニケーション発動装置

僕は、とある喫茶店に行くことになった。だいたい、僕が目的をもって外に出るときの基準と必須ポイントは、煙草が吸えるか、長居できるか。この2つ。

近年、禁煙が推進されているが故に、喫煙可能な場は、愛煙家の僕にとって貴重な場所になっている。

喫煙者は、どんどん煙たがれているような時代だ。分断されたからか、ニオイすら嫌だとか言われるようにもなった。10 年前くらいまで、そんなことはなかった。

10 年前くらいの僕は、喫煙可能な年齢くらいだった。どの煙草が自分にしっくりくるだろうかと考えて、やたら、色々な銘柄を買ってみては、自宅に友人が来た時や出先で誰かいる空間で、吸っていた。

僕は、交友関係がべったりしているわけではない。頻繁に会い、話す相手が決まっていたわけではなかった。今もそうだと思う。しかし、思い出すと、煙草を吸っている時は、人と集い、それなりの会話を交わしていた。ほぼ、静止している間に誰かと話し、関わっていたのだ。

今の時代、こういう状況に出逢うことは少ないのではないだろうか。言い換えれば、あの頃は、それとなく人と関わることが可能な時代だったようだ。

禁煙推進をやめてくれ！といっているようであるが、そういうことではない。ま、そうでもあるのだけど。ただただ…嗜好品が、緩やかに誰かとかかわりや、そういう嗜みの場所で、そんなに大きなことではないが、それとなく言葉を交わせる人の特性が、発揮されているんじゃないの～？とは言いたい。

もしかすると、制度や政策により、減少傾向に当たり前化のように進んでいるような気がする。

それはそれとして…僕は、人がもつ緩やかに起こるコミュニケーションを発動させられる装置になれやしないだろうか？と思わんばかりだ。

3: 台本のない舞台

とある喫茶店に居る僕の周辺が気になり始めたのは、着いて 30 分もしない間だった。印象は、15 時～17 時前まで、おじさん多し！

ただそれだけ。でも、何で気になったのだろう、とぼんやり考えていた。

最近、嫌われているイメージをもつことば『おじさん』。その彼らが、集合しているのだ。

きっと、思春期の女の子は、嫌いだろう…新聞や週刊誌を読みながら、煙草を吸い何か飲んだり食べたりしている。お洒落じゃない、ながら行動に見えた。

あれッ…！？嗜好品を嗜んでいるのにお洒落じゃない、このギャップ！喫煙者が集う場所には、そんな現象が現れている可能性があるのではないか！？と思い、気になった。

もう一丁ゥ！最近、おじさんたちがシェアして暮らしているドラマ『バイプレイヤーズ』。人気があり、第 2 弾まで放送されている。視聴者の一部には、おじさんラブな人たちもいるようで、おじさんニーズは、増えている現象もある。

一方で、先にいったよう、嫌われるだろうなと思うおじさん。ラブに入らないおじさんたちが明確になりつつあるのかもしれない。



おじさんラブの反対側には、一定の嫌われるおじさんが常である？と言っても過言ではないだろう…。

※『おじさんずらぶ』というドラマもある。内容は割愛させてもらうが、兎にも角にも「おじさん」がキーワード。異性・同性に「おじさん」好き、いや、好きな「おじさん」像が現れたには違いなさそうだ。

またまたもう一丁ゥ！…これは、既に違いが明確な話。ジェンダーね。

女性って集うイメージあるでしょ。いやいや、そうじゃないわよ！！おじさんっておばさんより集うイメージはないけど、集うのよ～！

ぼんやり、僕は喫茶店で過ごしていた。本を読もうか、iPad を出して仕事をしようか…そんな時だった。おじさんずが合席。

知り合いを見つけ、待ち合わせをしていたわけでもないのに、すすすすす～っとその人の席にいき、同じ席に「座っていい？」なんて言わずにすわり、そのまま「ホットコーヒー」と注文したと思えば、次にはもう目の前の相手と「ビットコイン」話。

それがこの人たちにどんな関係があんの！？と思うくらい、パジャマ姿のようなおじさんだったのだけど、続けて「 商売ばなし」や「 荷物送る」など、どうのこうの話していて、どうやら、商売人の社長たちだ。

彼らの儲けがどうなっているのかなんて僕には関係ない。だけど、最近、いちいち

「いいですか？」「どうですか？」確認してくる作法とは違う作法が、通用する人たちが、まだいるのだ！！と思い、僕は面白味を感じた。

言い換えると、僕は、突然参加型人間だからだろう。「急に入ってくるよね！？」と言われることは、少なくはないからだ。僕の振る舞いって、嫌われがちなおじさん？と思うような出来事で、くすくすと笑えた。

だけど、いきなり始まることだって、世の中には多い。用意していた通りに行くとき…台本があり、それを操る人がいる時だ。いわば、つくられた場には、急な始まりは少ない。

となると…日常の多くは、どんな始まりがあるかなんてわからない。だから、人生は面白い。

僕は、それが、起きたらいいなぁ～と思ったり、そういう状況を楽しめる人たちと居たいし、そうでないけど、そうなりたいと探している人たちには、協力したいと思っている。

4: 今の時代コントかよ！？

急に入らない以外、いちいち、今から入りまーす！なんて言っていたら…芸人のコントか？と思ってしまうのも僕だ。
人が誰かと関わり始める時に、形式なんてなくてもいいんじゃない？あるから、できない人は、排除されるし、形式にこだわってしまうことだって起こりうると思うのだ。ま、分からないけど、どうもそういう社会システム…お作法によって生まれている事象は少なくないだろう。

なんとか、いい働きかけをしていきたい。喫茶店のおじさんたちの中に居て、改めて思ったのだった。

5: 旅の醍醐味！予測不可能

集っている男はおじさんだけじゃなかった。学生らしい男２人もいた。

薄っすらと日がさす寂れた窓際に。彼らは、宗教について話しているようだった。「キリスト教から派生している宗教、教えは多く…」と各々が知る宗教、理念を話していた。「へーーー」と心の中で思い、僕はそのまま自分が過ごしたいように過ごした。詳しく覚えていないのはとても残念なのだが、彼らなりの解釈を語っていたようだった。

会話は面白い。違う考え、見立てがあろうとも、相手が発したことに誘発され自分の考えを発している。その繰り返しだ。

ただただ、誰かと過ごす時間の中では、相手がいるかいないかで、随分と違う方向に進んでいく。きっと、１ 人だと、ある程度決めた、分かった道筋をたどり、辿り着く行き先も分かっていることもあるのではないだろうか。時間の中にあった会話だ。

それを思い返すと、他者に巻き込まれ便

乗する時間も人生の一部で、面白いもんだ。

僕は、そんな人生を歩みたいし、そんな歩みを面白いと思う人がいるなら、その人たちと予測不可能な旅路を歩みたい。

6: 決断を応援したい

男性だけじゃない。薄暗く煙たく、冷ややかな場に女性もいた。店員さんだ。私服だった。客か店員かわからなかった。彼女が帰るとき、明確になった。

茶髪のデニム生地の服を着た女性。帰るさい、うろちょろしていた子どもが彼女に近寄っていた。母親のお仕事終わりを待っていたようだった。「お疲れ様でした〜」と女性が発し、子どもと２人で外にでた。

外で待っていたのは、旦那だったようだ。何かにこやかに話し、合流。彼ら３人は見えなくなった。

場所がノスタルジックを感じさせたからか、懐かしい光景だった。

働く女性を応援することを掲げている現代社会だが、昔から働くことを認めている…いや、そうしようと決断して動いていた家族もあったのだと思う。僕の 90 歳くらいの婆さんは、昔働いていた。

社会が応援することも一つあるが、家族が決めて動けること。きっと、それが、こらからの力になるのだろう。

そう思うと、社会は、その家族の決断も応援できるようにしていくことが、軸になるのだと思う。

そして、どこかに居させてもらう清シスの装置である僕には、なにができるのだろうか。

7: これから入って来るひと

まだ、学生らしき男はいる。そして、店にセーラー服を着た女子高生が、ニコニコ話しをしながら入ってきた。



★☆〆★☆

はい。今回は、ここまで！中途半端でしょ〜。だって、僕、そうですもん。自分で区切りつけたことには忠実なんです。それが、今回はここまでで、他の人からしら、めっちゃ中途半端なんです〜

どうです？一直線に進んでいたり、同じ業界だけに留まっている方いませんか？あれこれ、作り直しばかりしていませんか？

僕は、より良く動いていることは何か、すぐにおわることは何か？そんなことを考えながら、前者を作るに一旗揚げています。でも、失敗も多いんです。皆が皆、同じ考えではないですからねー。届くところに届けられることができたらいいなーと思っています。

通りすがりの旅人です。　清武システムズという看板を引っさげ、お仕事中。めんどくさいことも起きるけど、そっから面白く展開していこうじゃないか！「何か変化を求めているが、手立てがわからない。」そんな時に部品の１部だと思って、ぜひ導入を！

精神科医の思うこと⑧

家庭教師

松村　奈奈子

長期の不登校のケースなどで、家族が家庭教師をつけているのを時々目にします。
そんな時、ついつい“どんな感じの先生ですか？”なんて聞いちゃいます。
実は私、小学校の終わり頃から中学生の間、家庭教師の先生にお世話になった事があります。いろんな意味で、私の人生に大きな影響を与えてもらったと思っています。
いい経験だったので、自分も大学時代に数人の子ども達の家庭教師をしました。
そんな感じで、家庭教師については思うことがあるので、今回のテーマは家庭教師。

父親は経済的な理由からか、母親は保守的な家族に育ったからか、二人とも大学には進学しない人生でした。そのこともあってか、子どもには大学に行かせたいという思いがあり、４０年ほど前に、当時としてはまだ珍しかった家庭教師をつけてくれていました。
どこから探してきたのか、今では覚えていないのですが、教育学部１年生の女子大生さんでした。
今から思うと、１８歳の彼女は非常に聡明な女性だったと思います。
いろんなタイプの“家庭教師”がいるとは思います。でもガツガツ勉強を教えるってイメージではなくて、何のために勉強をするのかを教えてくれた人でした。

勉強の時間の事はよく覚えてなくて、先生とのお話の時間が楽しかったのを覚えています。中学生の私は丁度反抗期、保守的な両親の考え方に疑問を持ち始めたころで、そんな不満を彼女に話すと、彼女は自分の考えを話しながら、いろんな物事のとらえ方を説明し、時には議論したりしました。先生との話の中で、物事の多様性を教えてもらったんだと思います。
たまには休日に一緒に映画を見にいってランチしながら、先生の恋人の話を聞いたり、大学の学園祭に誘ってもらったりと、なんだか“お姉さん”のような存在でもありました。
先生はオーケストラ部でフルート奏者をしていたので、毎年大学オーケストラ部のコン

サートに誘ってもらいました。「人生、ひとつくらい楽器ができると楽しいわよ」と言われて、私も大学ではオーケストラ部でフルートを選びました。家庭教師の先生にあこがれて楽器を始めた私は、音楽の才能はなくクラブのみんなには大変迷惑をかけましたが、先生のマネができて満足な私でした。「大学では講義ノートが売られてるのよ、好きな勉強だけを楽しくしたらいいのよ」「人数の多いクラブに入っているとテスト情報がよく入るのよ」・・・なんて悪知恵も教えてもらって、後の大学生活では役立ちました。また、先生は夏休みには必ず旅行にでかけて、お土産をくれました。沖縄土産のかわいい小瓶に入った星の砂をもらった時、見た事のない太陽と青い海を想像したのを忘れられません。私もきっとバイトして旅に出かけたいと思いました。

大学生活をイキイキと楽しむ姿を見せてもらいながら、私の中で“大学”がイメージでき、とりあえず勉強しなくちゃなーと思わせてくれる、上手な教育方法だったと思います。

また、両親はあまり本を読む習慣がなく自宅にあまり本がなかったので、先生はいくつか本も貸してくれました。なかでも「大地」（パール・S・バック著）は1番記憶に残っています。中学生の私には“難しい”本で、読み進める事だけでアップアップでした。当時はノーベル賞をとった作家だなんて意識もしていなかったと思います。ただ、今も忘れない 1 冊です。

今、考えると「大地」には先生からのメッセージが込められていたのかなって思います。

また、家庭教師の先生は、いつも私の勉強が終わると、何やら母親とよく話していました。よく母親に反発していたので、母親もまた先生に相談していたところがあったんだと思います。

後にヤンチャな弟も同じ先生にお世話になりました。我家は、聡明な女子大生の彼女に大きく助けられていたのかもしれません。

そんな家庭教師にいいイメージを持っている私は、大学生の時には中学や高校生の子ども達の家庭教師をしました。私がしてもらったように、一緒にプラネタリウムや映画をみたり、マクドナルドでランチしたりしました。お金持ちの令嬢の時は、夏休みに高原の別荘で令嬢の友達と3人で１０日程過ごしたこともあります。全く料理ができない子ども達に料理を教えたり、夜な夜な長話をしたり、なんだかドラマみたいな体験もしました。
成績をあげるというよりは、子どもたちには楽しんで、夢を持てる子になってほしいな・・・と思って関わってきました。私の先生の様に、憧れの存在になれたかどうかは自信がないのですが、家庭教師は楽しかったです。

家庭教師にいいイメージの私は、治療の中でも金銭的に余裕のある不登校のケースなどには、勧めてみることが多いです。

その時には、超有名国立大の学生というよりは、ぼちぼちの大学で、ゆるゆる人生を楽しんでいる学生をいつもおススメしています。

ある不登校の中学生が来た時に、家族も家庭教師の提案にのってくれて、近くの大学に家庭教師をお願いしました。男の子は「家庭教師は僕が問題を解く間、僕のマンガを読んで笑ってる」「このあいだはギター持ってきて弾いてた」「へらへらしてて、たよんないわぁ」と診察で話しているうちに、ほどなく登校出来るようになりました。そう、そんなもんなんです。

イキイキしている家庭教師にあたった子供ほど、よくなっていく気がします。

金銭的余裕のない家族の子ども達には、私が病院で診察の中で家庭教師役をしたこともありました。

病院は通常、5時には受付は閉まってしまうので、これまでの病院ではできませんでしたが、最後に１０年程勤務していた総合病院は、救急をしていて２４時間窓口が開いていたので、学校帰りに診察に来れたのです。当時の院長は理解があり、精神科医も私１人だったので自由にできたからかもしれません。精神科担当の看護師さんも子どもが大好きで、協力的でした。

「お帰り」と診察室で看護師さんと迎えて、しばし子ども達の話を聞きます。

中学を３年間不登校した子ども達が高校に進学するときの不安は、勉強もそうですが人との関係でつまずいた時のちょっとした声掛けで大きく軽減します。

勉強に関しては先生がみてあげるから！と保証し、対人関係の不安は診察で話したらいいし・・・と送り出してみます。「初めて教室に入る時、背中から汗がわいてきた・・・」と初登校の後、診察室にやってきた男の子は話します。「どうやって話しかけたらいいんだろ」「不登校だったこと聞かれたらどうしよう」などなど、それにはロールプレイ的に具体的にサンプルを伝えると、なんとなく乗り越えられるように。やっと話せる友達ができて、ちょっとしたトラブルなんかも診察でヒントをもらって乗り切れたら、それはとってもいい感じ。診察は終わりに近づきます。継続した友達ができるまでが私の仕事です。友達ができると、勉強に関しては「友達のレポート写して提出したわ」と笑って言えればＯＫ．ずる賢さを身に付ければいいんです。

逆に教えてもらった事も多くありました。

中学で不登校の子供たちが行く高校の教科書を見た時、すごく驚きました。それはこれまで見た事のない教科書でした。

英語の教科書の最初のページはＡＢＣのアルファベットが並び、子ども達は「今日は筆記体を書く練習をした」と楽しそうに話します。数学も分数の説明が丁寧に書かれていました。ああ、そうか、中学３年間不登校の子どもの高校の教科書は、ここからスタートするのか、

なるほど・・・と、びっくりしながらも納得したのを覚えています。
　不登校だった子ども達が進学し、どんな勉強をしているのかを知った事は、その後の長期不登校の子ども達に“勉強の事は心配しなくて大丈夫”と言ってあげられる根拠となりました。医師になって診察の中で、久しぶりに家庭教師役をして気づかされた事はたくさんありました。

　人は「夢」や「あこがれ」を持って初めて、ちょっぴり努力ができる気がします。
あの“家庭教師”に出会わなかったら、精神科医としての今日の私はなかったのかなって、思う事もあります。多感な青春時代に、両親とは違う“大人”のモデルをとおして、いろんな夢を抱けたことは、大切な体験でした。
　「夢」や「あこがれ」を一緒に作れることが、子ども達との関わりの中で、私にとって大切な事と思っていますし、私自身がいくつになっても「夢」や「あこがれ」を抱いている大人でありたいと思っています。

おくのほそみち

～　選ぶということ　～

生き場　8

理学療法士
奥野　景子

「高木さん、施設に行くことになったんだって」この言葉を同期に言われた私は驚いた。高木さんは、長年の膝の痛みに耐えられず、膝に人工関節を入れる手術を行なった人だった。東京の人だったが、家族の意向もあり、田舎にある病院にリハビリのために入院していた。

正直、入院当初から家に帰っても何の問題もない人だった。そんな高木さんが、リハビリでダイエットに成功し、退院まであと二週間くらいといったところで施設行きが決まった。しかも、そのことを本人は知らない。それは、退院前日まで本人には知らされなかった。そして、そのことを知った高木さんは憤慨し、もちろん退院は延期になった。

高木さんは、入院当初から家に帰っても何の問題もない人だった。ただ、それは身体機能的なことだけであって、入院前から家族にとっては、家に居て欲しくない人だったらしい。

私は、理学療法士として約 9 年間働いてきた。二つの回復期リハビリテーション病院で合計 4 年間働き、現在所属する診療所に勤務してもうすぐ約 5 年が経つ。その約 9 年間を通して、今の私が大切だと思うことは「生きる場所をどうやって選ぶのか？」、「どう生活をしたいのか？」ということである。そして、その為に自分に出来ることは、自分が行なうべきことは何なのかを考え、それに取り組んでいるのだと思う。

今回のマガジンは、今までのマガジンの中でもとても大切なことを書くことになるのだろうと思いながらパソコンに向き合っている。ただ、上手く考えがまとまっていない部分も多々あると思われる。でも、書いてみようと思う。

【失語症の大工さん】

一つ目の病院に勤務していた時に担当した佐々木さんのことをたまに思い出す。元大工さんで、奥さんと二人暮らし、娘さんは近所に住んでいるが、各々家庭を築いていた。頑固者で、自分をしっかり持った方だった。脳卒中の影響で、右半身に重度の麻痺があった。人の言っていることは何とかわかるけど、自分が言いたいことは上手く言えない、そんな感じの失語症もあった。一つのことに集中すると他のことに注意が向かなくなり、一生懸命に運動をするあまり、自分が大きくバランスを崩し、今にも倒れそうな姿勢になっていることに気が付

かないことも何度かあった。

退院を間近に控えたある日、家屋調査に行った。事前に家屋の情報をもらっていたものの、それだけでは実際の生活の中でどこに不自由が生じるかがわかりにくく、本人と奥さんと長女さん、担当看護師と私でお家を訪問した。事前にある程度、問題が生じそうな場面は想定していたが、思っていた以上にそれは大変だった。早く家に帰りたい佐々木さんは「家での生活なんて何の問題もないよ」と言わんばかりにガシガシ階段を上がり、狭いトイレにもグイグイ入っていく。佐々木さんがそれを頑張ろうとすればするほど、姿勢は大きく崩れ、私たちの声は佐々木さんに届かなくなり、転ぶギリギリのところで身体を精一杯支えることしか出来なかった。

福祉用具や家屋改修だけでどうにかなることではないことは、明らかだった。佐々木さんを介助するのは、一緒に住む奥さんが中心になる。娘さんたちは、自分の家庭もあり、頻回に家に来ることは出来ないと言う。奥さんの介護負担を軽減するだけでなく、身体機能や能力面でも課題を残したままの退院になることが想定されたため、リハビリ目的でのデイケアの利用を提案するが、本人はそれは嫌だと言う。家族もお父さんには合わないはず、と。ヘルパーの利用にも消極的で「じゃあ、一体この状態でどうやって家で生活するつもりなんですか！？」と、やんわりと本人と家族に話したが「まぁー、どうにかするしかないですよね〜…」と。転倒のリスクも伝えたが「転んだら転んだで仕方ないし、それでどうにかなっても自業自得ですからね〜」と、腹を据えた奥さんは頼もしくもあったが、頼り難い部分もあった。

「自業自得」と言われると、こちらもどうにも出来なくなることがある。明らかに無理なことは止めるけど、そうでなければ、その可能性があるというだけの場合は「自業自得」と言われるとどうしようもない。90 歳のおじいちゃんに 50m を 7 秒台で走りたいと言われたら、それは無理だと言えるけど、90 歳のおじいちゃんに 5m をなんとか転ばずに歩きたいと言われたら、それは無理だと言い切れない。なんとか歩けたとしても転倒のリスクはなくならないし、リスクを説明した上でそれを行ない、転んだ時は自己判断、自業自得と言うしかない…のだろうか。たぶん、そう。ただ、自己判断、自業自得と言っても良いのは、そこに至る過程で、様々な可能性や選択肢を提示し、互いがある程度の納得をした時しかないように思う。

【仲良し家族の大和さん】

毎年、遠方に住む息子さん家族も集まって家族写真を撮ることが決まりになっている大和さん。自宅で生活を行なうためには車いすが必須になるが、そんなに広くはない家の中にはたくさんの物があり、どうにもこうにも車いすで生活をするイメージは湧かなかった。

元看護師の奥さんは、力任せではあるものの自分なりに介助方法を開拓していっていた。「もうちょっとこうした方が…」ということもあったが、提案する隙も与えられないくらい独特のペースで進んで行っていた。大和さん自身も独特のペースがあり、

会話が成り立たないこともしばしば。長男さんは何とも掴みにくい人で、現状についてわかってくださっているものの、今後の生活については「ぼくら家族でどうにかするんで大丈夫です」と、蚊帳の外に追いやられる感じがしていた。退院間近に登場したのが次男さんだった。彼が一番とっつきにくかった。お父さんのことを話している途中で「あぁ～、はいはい、わかりました。気を付けるんで大丈夫です。ありがとうございます」と、まったく聞く耳がない感じ。大和さんのこれからはどうなるんだろうと思うとともに、自分自身に対してもこれからどうするんだろうと思っていた。

結局、大和家は、大和さんが退院する前に業者も雇って家の大掃除をすることに決めた。もう少しリハビリをすれば、もう少し回復が見込めるかもとなっていたが「もう迎え入れる準備は出来たから退院します」と、笑顔で退院して行った。

【目が見えない佐々木さん】

佐々木さんは、緑内障があってどんどん見えにくさが強くなっていた。肩が痛いと開始された訪問リハビリでも、その訴えの大半が見えにくさに関することだった。ヘルパーやデイサービスの増回、施設入所の提案も行なったが、佐々木さんはサービスを増やすことはしたくないと言い、施設に関しても「いずれは入るしかないと思ってるんやけどね～」と、施設入所に対してもまだ先の話といった感じがしていた。結局のところ、今の生活を変えたくないという強い気持ちがあり、ここでの生活を続ける為に何かを変えるのか、変えられない今を、変わってしまう今を受け入れて生活の場所を変えるのか、何かが変わるのを待つのか、そんな感じがしていた。

コトが動かないと何も動かないことが多々ある。でも、思っていなかった方向にコトが動いて「こんなはずじゃなかった…」と言って欲しくないし、「だから、言ったでしょ？」なんて言葉は言いたくもない。お互い、何かしら納得した上で今を選択できていれば良いと思うし、そうであって欲しいと思っている。だから、一般的に言いにくいとされそうなことを比較的はっきり言うこともあるし、何度も繰り返し言うこともある。「そんなこと言ってても、何も変わらないですよ」、「しつこいセラピストが担当でザンネンでしたね」、「今日はリハビリなんてどうでも良いので、とことん話そうと思ってきました」、「いつかが来るのは、もう目の前かもしれないですよ」嫌な奴だと思われても良い、仲良くする為ではなく、セラピストとしてこの人の前にいる、それが私がたどり着いたところなのだ。

目の見えにくさが進行し、自宅での転倒が増えてきた時期に近所にサービス付き高齢者住宅が出来た。それまでに見学した施設に対しては「ご飯が美味しくなかった」と断っていたのに、新設されたそのサ高住は「全国展開してるし、信頼できると思ったから」とご飯の試食も内覧もせずに入居を決めた。他のサービスは使いたくない、今のデイサービスから離れたくない、私はあなたが良いのよと言っていた佐々木さんは、あっさりコトを決めていた。

【なんで救急車呼んだらあかんの？】

高梨さんは、末期がんの方だった。旦那さんとの二人暮らしだが、旦那さんが日中は仕事に行くため、日中独居となっていた。意識ははっきりしているものの、言葉を上手く伝えられなくなっていった。がんに伴う体調の変化はコントロールできるようになっていたが、誤嚥による窒息や肺炎に伴って死が近づく可能性は高い状態だった。

高梨さんは、病院ではなく家で時間を過ごすということになっていた。だから、ヘルパーや訪問入浴、訪問看護、訪問診療、訪問リハビリなどを利用し、家で時間を過ごしていた。昨年末、高梨さんは急に高熱を出し、誤嚥性肺炎と診断されて、病院に緊急搬送された。病院での加療によって体調が安定した高梨さんは、再び自宅に帰ってきた。でも、そこで大きな課題が明らかになった。それは、がん発症初期に病院で高梨さんが「いずれの場合も加療は希望しない」と意思表示をしていたことがわかったところから始まった。そのことについて、我々在宅スタッフは知らされていなかった。そして、高梨さん自身も、娘さんも、そんな意思表示をしたことはない、と。おそらく、旦那さんが彼女と一緒に受診した際に今後に対する説明をされ、彼女自身がそのことを理解できないままに、決定をしたことが予測された。そして、その背景にある大きな問題は、それが彼女の、彼女の家族の総意として、医療者側が認識していたというところにある。

今、高梨さんは、自宅で過ごす中で緊急時に救急車を呼ぶ呼ばない問題に困惑している。「えっ、なんで？しんどくなったら、どうしようもなくなったら、救急車呼ぶしかないでしょ？ん？？？」と。医療者にとって、救急車を呼ぶことがどういう意味を成すのか、そこで立ち止まるべき、考えておくべき点は何なのかは、明らかだ。でも、自分の病状や今後についてよくわかっていない高梨さんにとって、救急車を呼ぶ呼ばない問題に取り組むために必要な情報が足りていなさすぎる。それを伝えた上で、向き合わないといけない人やコトがある。早くしないと、間に合わなくなるかもしれない。今できることを、いつかが来る前に、早く、早く…。

【私からそんなこと…】

高山さんは、圧迫骨折を繰り返していた人だ。昨年末にも自宅で転倒し、圧迫骨折を受傷した。最近、退院してきたのだが、やっぱり一人暮らしの生活には億劫なことがいくつも転がっている。

退院前カンファレンスでは、「いつでも退院できます！これやったら家でも大丈夫ですわ〜」と余裕をかましていた高山さんだったが、実際家に帰ってみると日常のちょっとしたことが憂鬱になってきた。夜からお昼過ぎにかけては、娘さんが居てくれる。食事の準備も家事も全て娘さんがしてくれる。それでも、やはり日常の中にあるちょっとしたことは、意外と多く、積み重なることで思っていた以上に大変になったりもする。そして、その負担を娘さんに負わすことも気がかりだった。

ある日、「最近、配食サービスっちゅうのがあるやろ？あれはどうなんやろか？」、

「ちょっとしたことが億劫でな〜、ひとりの人はどうしてはるんやろか？」と言われた。娘さんの負担を少しでも減らしたい、ひとりで過ごす時間をどう過ごすと良いのだろうか？という思いからくる内容だった。その翌週、娘さんと話す機会があった。高山さんから配食サービスや介護保険サービスの利用に関する話題が挙がったと話した。そして、娘さん自身は、今の生活をどう思っているのか、これからについてどうしていきたいと思っているのかを聞いた。すると「私からそんなことを言うことは出来ない」と言われた。「おばあちゃんが自分で大丈夫って言うまでは今を続けたいです。私からサービスを提案したり、もう来られないなんて言えません」と。それなら今をずっと続けることになっても良いのかとなると、そうではないと言う。今までの経過を踏まえて、今より良くなる可能性は低いことを伝え、これからどうするのかとなると、「私からそんなこと…」となった。

人はみな、成長、発達すると同時に老いていくものでもある。いつまでも若くはいられないし、どうやっても早く歳を取ることはできない。でも、「こうありたい」、「こうあって欲しい」という気持ちもある。その希望や願望を否定するつもりはない。ただ、それだけでは今を過ごすことは出来ない。やり過ごすことはできても、それだけでは過ごせない現実がある。それらとどうやって向き合ったり、付き合ったりするのか。そのタイミングは、どこに、いつあるのか、どうやってつくるのか。それが大切で、大事なことなんだと思っている。

冒頭に『今の私が大切だと思うことは「生きる場所をどうやって選ぶのか？」、「どう生活をしたいのか？」ということである。そして、その為に自分に出来ることは、自分が行なうべきことは何なのかを考え、それに取り組んでいるのだと思う。』と書いた。それに通じるエピソードをいくつか挙げてみた。

生活は、生きるための活動だと思っている。もしくは、生活は、生きるという活動と言うこともできるのかもしれない。今の私が大切だと思うことは「目の前にいる人が、どこで、どう生きたいのか？」、「その為に自分はどうしたら良いのか？何ができるのか？できないのか？」なのだと思う。

あくまで、私は理学療法士だ。でも、専門性を活かして出来ることには限界がある。むしろ、専門性なんか関係なく、求められていることや必要なことの方が多いのかもしれない。専門性の外の方が大切なことはたくさんあるのかもしれないし、それがわからないと専門性の中にあることも十分に発揮されないのかもしれない。専門性が大切ではないなんて言わない。むしろ、専門性があるからこそ、その人の前に、その場にいられるのだから、専門性をないがしろにしてはいけないし、したくはない。専門性を持って言わないといけないこともあるし、専門性を隠してそこにいることに意味があることもある。

私が、理学療法士として大切にしていることは「その人の生き場がどこで、その人はそこでどう生きるのか？」なのだと思う。そして、その選択や決定、そこにある葛藤や悶々とした感情、決意や歪み、混沌とした何か、人やモノ、コトや場所との関係性、

その周辺にある広がりや見え隠れするモノやコト、逃げ、余白、捻じれ……そんなことに対して興味深さを感じているのだと思う。それは、自分にとっても大切で、必要なことだと思っている。また、そこにあるなんてことないコトやモノの中に、見落とされがちな大切なことがあり、それに触れられたりすることに関しては、楽しかったり、嬉しかったりもしている。

～　終わりに　～

まとまりのないマガジンになったが、ここまで書いてみて少し満足気な自分もいる。自分が大切にしたいと思っていることや大切にしていることを出せたような気がしている。明確にできていないし、まだまだ吐き出せていないこともあるのだと思う。それでも、少し満足している。

これが「選ぶということ」の締めになるような気がしているが、まだな気もする。たぶん、まだまだ。

毎回、この終わりにで「次回は…」と書いているが、その通りにいった試しはほとんどない。だから、今回からそれは辞めておこうと思います。次回もその時々に応じて書きたいことを書いてみます。

👣　おくのほそみちのこれまで　👣

第 24 号
　新連載決意表明（「執筆者@短信」にて）
第 25 号
　リハビリテーションのこと
第 26 号
‘リハビリテーションが行なわれる場’について考える前に
第 27 号
‘リハビリテーションが行なわれる場’について考える前に
　二歩目；〇〇〇と私
第 28 号
‘リハビリテーションが行なわれる場’について考える前に
　三歩目；‘あなたー私’という
　　関係 によって変わる‘場’
第 29 号
　選ぶということ
　一歩目；私の内にある‘絶対’
第 30 号
　選ぶということ
　二歩目；理学療法士として①
第 31 号　　在宅医療について

やぶにらみ日記

New! 東成区の昭和(29)









New! 東成区の昭和(30)









やぶにらみ旨記

New! 東成区の昭和(31)









New! 東成区の昭和(32)









やぶにらみ日記

New！東成区の昭和(33)









New！東成区の昭和(34)









やぶにらみ日記

New! 東成区の昭和(35)









やぶにらみ日記

New! 東成区の昭和(36)









やぶにらみ旨記

New! 東成区の昭和(38)









New! 東成区の昭和(37)









やぶにらみ日記

New! 東成区の昭和(39)







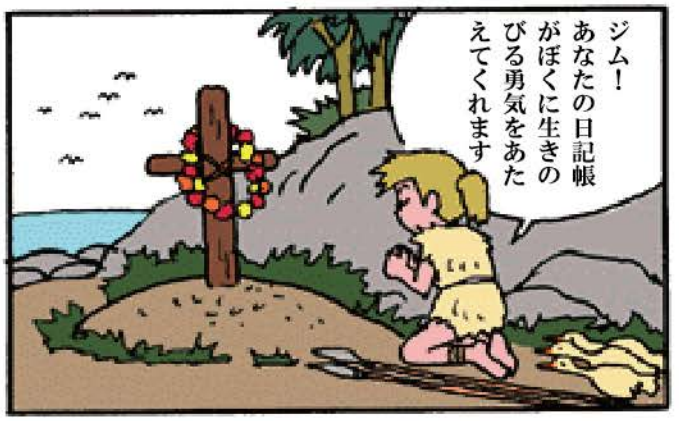


やぶにらみ日記

東成区の昭和(40)









やぶにらみ日記

東成区の昭和(41)









東成区の昭和(42)









やぶにらみ日記

東成区の昭和(43)



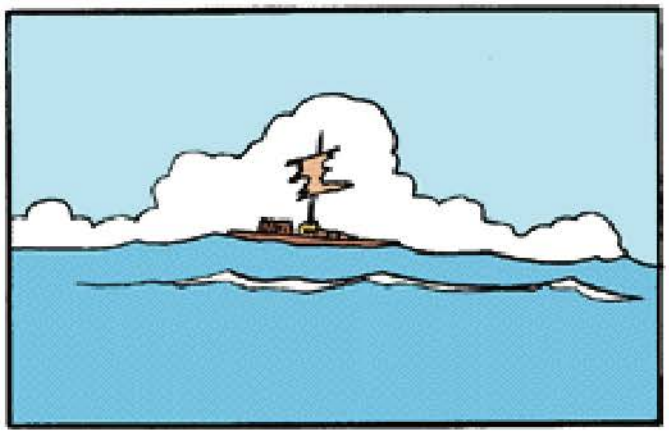


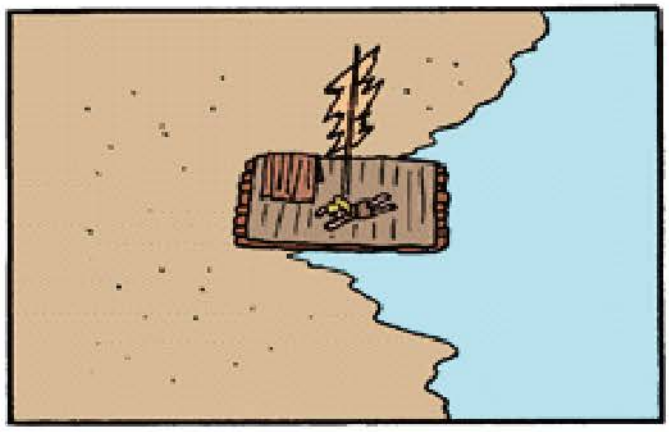




やぶにらみ日記

東成区の昭和(44)









書簡型連載　7



お坊さんとケアマネさん



竹中　尚文　様

差出人　木村　晃子

竹中　尚文　様

すっかりご無沙汰いたしておりました。こちらは、春はほど遠い毎日です。
今年は、北海道以外での雪の被害のニュースを聞きながら、さぞかし大変なことだろうと、我が身に迫る思いです。
雪は、美しいだけでなく、毎日の生活の中に厳しさをももたらせる存在です。
私の住まう地域も、豪雪地帯です。残念ながら、この冬も、雪にまつわる悲しい出来事が起きています。暗いニュースばかりでは、春が待ち遠しいばかりです。春は本当に近くまで来ているのだろうか、と感じてしまうほど、今年は冬が長く感じます。それでも、春は来ますね。毎年、それは経験していることです。

さて、仕事の区切りで言うと、もうすぐ今年度が終わります。振り返ると、めまぐるしく走り通した一年でした。
これまで、自分の住む地域で、暮らしも仕事もしてきました。ずっと、それは続けて行くのだろうと思っていました。けれども、この年度をもって、仕事を辞めることになりました。諸事情があってのことです。

自分で決めたこととはいえ、「こんなはずではなかった。」というのも正直なところです。

平成 17 年、なんの看板もない私が、たった 1 人で独立開業をしました。

地域の人に支えられながら、ケアマネジャーという仕事を続けてきました。様々な出会いがあり、別れもありました。

出会った方々の、人生の最後の方の日常に、ほんの少し寄り添わせていただくこの仕事は、とても多くのことを学ばせて頂いたと感じます。

まる 13 年。本当に地域の人にはよくして頂きました。

継続して積みあげてきた仕事を離れるのは、まさしく断腸の思いでした。

仕事を辞めることを決めてからは、喪失感でいっぱいでした。しばらくは、自分への疑心暗鬼で、未来を考えることさえも難しい状況でした。そんな時に助けてくれた人がたくさんありました。

親身に考えてくれた人。黙って受け止めてくれた人。現実を教えてくれた人。それらの人たちに支えられて、今は少しずつ、春からの新しいスタートへと気持ちを向けることができてきたところです。

自分のしてきたことが、思わぬ結果になってしまった時。何を信じたら良いかわからなくなりました。しばらく途方に暮れましたが、今は流れに身をまかせてしまおう、と思うようになりました。

自分ではどうしようもないこと。そんな時は、流れに身をまかせて、ひっそりと生きていこう、と思えるようになりました。

今年の春は、別れの春となります。そして、その次には、出会いが待っているのでしょう。

絶望でもなく、希望でもなく、ただそこに在ることを感じていこうと思います。

先日、親しい仕事仲間から、「蓮の花ですね。」という言葉をもらいました。どういう意味なのかな、と考えていたところです。

次は、どんなことを話題にするのでしょうか。３か月後の自分が楽しみです。

春を待ちわびて・・・

2018年2月23日

木村晃子様

竹中尚文

こちらこそ、ご無沙汰をしてしまいました。

今年の冬は厳しいと報道を耳にして、きっと北海道は私の想像もできないような寒さかも知れないと思っています。私が住んでいる所では、この冬は積雪がありませんでした。でも、人と会えば「とっても寒いねぇ」という言葉を交わす冬でした。来週は三月です。もう春がそこまで来ているような気がして、背伸びをして眺めてみたい気がする頃です。

木村さんはいよいよ今の職場を退職されるのですね。「こんなはずではなかった」というのは、退職の決心についてのお気持ちですか？　それとも今の職場についてのお気持ちでしょうか？　おそらく今の職場に対するお気持ちでしょうね。勤めてみたら予想と異なっていて、ひどくがっかりされたように想像します。

仕事に、恋愛に、結婚に、進学に「こんなはずではなかった」と思う人も多いと思います。選択をするとき、その結果は分かりません。確かに結果を予測して選択をするのですが、予測と結果は異なるものです。転職や離婚が否定的に見られた時代もありました。それは、自分の選択の責任であるのだから、望まない結果を我慢すべきであるという考え方が背景にあったのでしょう。そうした我慢が何かを生み出したり、有効であったりするでしょうか。選択の結果が、すべて運に左右されるとは思いません。一方ですべて努力に左右されるとも思いません。選択の結果は、そんな一元的要素に支配されるものではないのでしょう。

選択の結果が望ましくないのであれば、リセットする方がいいのです。リセットをするというのは、また一から始めなければなりません。それはしんどいことかも知れませんが、やらなければなりません。木村さんは、今、その当事者であります。その木村さんに、私たちは頑張れというしかありません。声援を送るだけです。映画は途中から見るより、最初から見る方がずっと面白いのです。そして、つまらない映画を見始めたら最後まで見る必要はないのです。

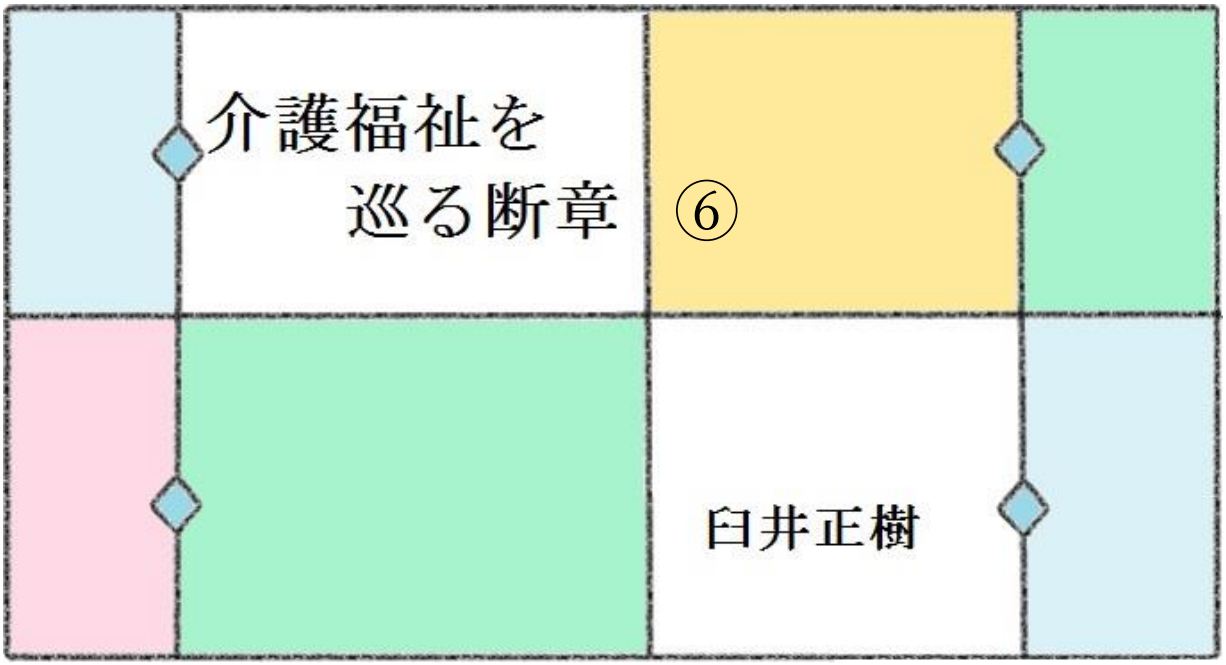
ここで少し、木村さんのケースを離れて見てみましょう。問題は、選択と決断

をしない場合に大きいようです。人生において選択と決断という場面はそれほど多くないように思います。経過観察ということで選択と決断を保留にすることが多いと思います。選択と決断より保留にしておく方がいい場合も多くあるでしょう。しかし、選択と決断が必要な場合にそれができないのは困ったことです。決断の先が見えないから、決断をしないのかもしれません。家を出たら誰に会うかもしれない、だから家を出る決断をしない人がいるようです。いやな人に出会ったなら、逃げ帰ってくればいいのです。いやな人に出会ったなら、走って逃げ帰ればいいのです。いやな人に出会って、殴り倒すよりずっと平和的解決法です。そして、改めて出直せばいいのです。

木村さんのことに話を戻しましょう。木村さんにはすぐ傍で見守っている人たちがいます。木村さんが、再び一からやり直すのは無駄な努力かも知れませんが、子供たちの人生に意味ある努力です。子供たちがそれぞれの人生において一からやり直す場面に直面したとき、木村さんの今の状況を思い出すかも知れません。木村さんは勇気を与えることができます。家族はお互いの人生に勇気を与えたりもらったり、支え合って生きています。そして、木村さんの文章を読む私たちも応援していますし、あなたから勇気をもらっています。

もうすぐ春です。どうかお元気で。

合掌



6　もう一つの課題整理

(1)　あるセミナーで

介護福祉人材を中心として、社会福祉の人材確保が極めて難しい状況にある。あらゆる業種で人材確保が難しくなっているなかで、社会福祉分野、特に介護福祉の分野で人材の確保はより困難な状況に置かれている。

神奈川県社会福祉協議会は、2018 年 1 月 22 日、施設関係者の研修会として若手職員の確保・定着・養成に関するセミナーを開催した。神奈川県内で介護福祉を教える公立高校福祉科の教員、保育士を養成する短大の教員、社会福祉士及び介護福祉士を養成する大学の教員の三名の方に、パネラーとして教育現場における人材育成の現状を話していただき、その後フロアから出た多くの質問に答えていただいた、私は、全体のコーディネーター役としてこのセミナーに参加した。

三名のパネラーの先生方は、それぞれの学校でどのような人材養成を行っているのかを各 30 分説明してくださった。公立高校の先生からは、生徒さんたちが介護福祉を学んでいる様子をスライドで紹介するとともに、「1　福祉のこころを育てる」「2　介護のプロフェッショナルを育てる」「3　自分の夢を実現する」という福祉科の目指すこと、高校では学校と施設（現場）の協働で人材を育てることを目指して取り組んでいること、高校で大切に育ててきた生徒を施設でも大切に育ててほしいということを述べた。

次の短大の教員は、保育士、幼稚園教諭を育てる立場から短大の教育目標、学科の教育方針、学生の特徴、実習による学生の意識の変化などについて述べた。最後の大学教員は、学部・学科等の特徴、学生の様子、社会福祉実習の内容、就職の状況等について

説明を行った。

約一時間半が経過したところで、休憩を取った。その間、フロアからパネラーに対する質問紙を提出していただき、80 名程度の参加者のおおよそ半数の方が質問を寄せてくださった。関心の高いテーマだったということができよう。

- 若い人に関心を持ってもらうためのホームページづくりの方法
- どのくらいの給与水準で募集をすればよいのか
- 様々な募集を行ってもなかなか人が集まらない

といった質問が多かったと記憶している。また、質問の中には、

- 発達障害のある若手職員への対応方法
- 資格を取ることだけを目指していて実際に現場で働く意思のない学生にも、実習指導をしなければいけないのか

というものもあった。

多くの質問に対してパネラーの皆さんから回答していただいたほかに、コーディネーターである筆者の方からも幾つか回答をさせていただいた。最後にまとめとして、十五分の時間をいただき次のような話をさせていただいた。

(2) 私が話したこと

人材確保に関しては、対症療法としての取組みと本質的な取組みがある。基本的にはこの二つを必要に応じて使い分けることになる。

対症療法としては、第一に EPA（経済連携協定）に基づくインドネシア、マレーシア、ベトナムからの介護人材の活用、昨年から制度的に解禁された技能実習生制度の活用、さらには在留資格「留学」で日本に来ている中国、韓国を含めた東南アジアからの留学生を週 28 時間内で雇用する方法がある。いずれの方法を選んでもよいが、こうした外国人労働者は、概ね 5 年程度で帰国することを前提として受け入れるものであり、介護福祉に関する日本から海外への技術移転のためのものであることを理解しておく必要がある。

第二に人材派遣会社への依頼、有料の職業紹介会社の利用である。すでに医師、看護師等で明らかになっていることは、人材派遣会社、有料の職業紹介会社の全てとは言わないが、多くの会社が専門人材をストックしていて、依頼に合わせて派遣・紹介するが、斡旋料等を返還しなくても済む時期を過ぎると人材の多くは退職してしまう状況にある。つまり、半年程度の短期間、抱えている人材を依頼先に回しながら利益を上げている状況にある。高い斡旋料を払っても、長続きする人材を確保するのは極めて難しい仕組みであることを理解する必要がありそうな方法である。

第三は、介護等を学ぶ学生への奨学金の給付又は貸与である。すでに看護師の確保として大学への奨学金など、様々な先行事

例が試みられている。学校に通っている 2 年から 4 年の期間が経たないと実際の雇用につながらないことから、少し時間がかかる方法である。

もう一方で人材確保に向けた本質的な取組みがある。第一に、人材を養成している各学校の先生からも発言があったように、時間をかけて人を育てることができるようにすることが大事である。介護福祉に関する知識・技術をきちんと身につけていくことができる職場であることが分かり、学校で育てた若い人を預けたときに将来をまかせられることがわかれば、学校の教員も若い人の親も安心できる。人材難で苦しいだろうが、人材を使い捨てにする職場ではなく、大事に育てる職場であることが求められる。

第二は、きちんとした労働環境・職場環境を確保することである。大学院生が研究したところによれば、介護福祉の職場には、現場で知識・技術・経験を積み上げていくことに対し、多くのマイナス因子が存在する。残念ながら、仕事に対する社会的評価が低いことにあわせ、給与面をはじめとする職員処遇のレベルが低いこと、人材育成の仕組みが現場に定着していないことなど、多くの課題が未整理のまま残っている。介護福祉の仕事の社会的意義を整理し社会における認識を高めること、介護福祉に求められる専門性を確立していくこと、職員処遇レベルを看護師とほぼ同じところまで順次引き上げていくことなど、労働環境をよくしていくために、取り組むべきことは沢山ある。

第二の課題を受け、第三には「介護」「介護福祉」についてプラスの価値を語る言葉を持つことがあると考える。「介護」「介護福祉」に関しては、マスコミ等によってこれまでマイナスイメージが植え付けられてきた。だが本当にそうなのか。給料が低いというのは、「介護」「介護福祉」に対するある種の評価の結果として起きている事象ではないのか。大変な仕事だが、給料が高いからお金のために介護の仕事を行う、生活のために介護を行うということではなく、より本質的なところで積極的な意義を有する仕事として位置付けることはできないのだろうか。その社会的意義をどのように言語化するのかが我々に問われている。

(3)　介護福祉の専門性を改めて考える

民主党政権下のある厚生労働大臣が「介護」は誰でもできる仕事だと言ったという。誰でもできる仕事であったとして、その仕事に対し意欲を持って取り組もうとする人をどのように確保し、育成するのか。少なくとも、育成のために残っていることは、我慢して仕事をすることを教えるだけであろう。

そのように考えるのではなく、誰でもできるものとしてではなく、そこには知識・技術・経験が必要であり、それらを獲得して「介護」「介護福祉」を行うことで、仕事を通してこのような喜びを得ることができる、このような社会的意義があるということを感じられるような枠組みを考えていくべきであろう。より質の高い介護人材の確保をとおして、よりよい介護福祉を提供してい

くためには、少なくとも「介護」を誰でもできる仕事として認識するのは、方向性として適切ではない。

第 4 回目で既に述べたことだが、「介護福祉士」が法律に規定されたとき、介護は食事、入浴、排せつの支援として定義された。その後、平成 19 年の社会福祉士及び介護福祉士法の改正によって、「心身の状況に応じた介護」へとその役割を変えた。そこでは、人生の最期までその人の尊厳を守るための支援としての意味付けが前に出る。また、「介護」「介護福祉」には、具体的な介護行為を通して社会的なつながりを再構築する役割があるとも述べた。第 1 回目では、韓国の文化と「ウリ」「ウリ性」について論じた。

このようなことの延長線で、「介護福祉」について以下のように考えることができよう。

『介護福祉とは、具体の介護をとおして支援対象者の尊厳を維持しつつ、対象者の状況にあわせてその人なりの親密圏を維持・強化する社会的な支援行為である。』・・・(＊1)

幾つかの説明が必要である。第一に、「尊厳」についてであるが、この言葉を適切に説明することは極めて難しい。このことは、人が人として存在するために何が求められるかという問いに還元できよう。この場合の「人」は、生物学的存在としての「ヒト」ではない。命を単に長らえるというだけではなく、欧米で長く議論されてきた人や社会に対する考え方が前提となる。「人」としての人格的存在を守ることが、人間の尊厳を守ることであると考える。

この考え方の基底には、「ヒト」は、人格的存在として存在するときに「人」となるという考え方がある。しかし、この考え方を理解することは、日本人にとってかなり難しい。「人格的存在」であるかないかが「人」としての前提であることから、欧米の多くの人たちのなかでは、非人格的存在は「人」ではないと考え、この延長線で脳死は人の死であると考えるようになる。一方で、日本、あるいは東アジアの多くの人は、集団の中における生物学的生命としての「ヒト」＝「人」への畏怖がある。我々の多くは、心臓が動いていて温かい身体が維持されている場合、「人」＝「ヒト」はまだ生きていると考える。

したがって、高齢者等の尊厳を守る介護を考えるとき、訪米の考え方に立てばその守るべき範囲は狭く、日本や東アジア等の考え方に立つ方が守るべき範囲は広いといえよう。認知症になってもその人の尊厳がありそれを守ることを求めるのは、後者の場合である。

もう一つ、「親密圏（intimate sphere）」という重要な概念について説明を加えておきたい。「親密圏」は、1962 年にユルゲン・ハーバーマスが著わした『公共性の構造転換　市民社会の一カテゴリーについての探求』において論じられた「公共圏（public sphere）」と対をなす概念である。さらに「親密圏」については、アンソニー・ギデンズが

1992 年に著わした『親密性の変容　近代社会におけるセクシャリティ、愛情、エロティシズム』の中で詳しく論じた。「親密性」は、コミュニティ心理学でいうコミュニティ感覚（sense of community）に近い概念で、集団における凝集性を構成するものであり、「親密圏」は「親密性」によって形成された集団をさすと考えることができる。もともとは、「親密性」が性愛の関係をいい、「親密圏」は性愛の関係に基づく一組の男女、あるいはそこから派生する家族を指す。この概念を性愛の関係だけに限定するのではなく、より一般化し親密性に基づく集団としての親密圏を構想することで、公共圏との比較で様々なことを論じることが可能となる。

第 1 回目で論じた韓国の社会文化を理解するうえでのキーワードである「ウリ」「ウリ性」は、概ね「親密圏」「親密性」に対応する。族譜による大家族への帰属意識を出発点として、同じ学校出身であること、同じ地域の出身であること、同じ教会へ通っていることなど、様々な帰属意識が韓国には存在し、その帰属意識の中での規範を守ることが重要な意味を持つ。この「ウリ」「ウリ性」は、単純に性愛に基づく関係性ではなく、別のものである。「ウリ」「ウリ性」という言葉を用いるときは、韓国社会の問題を論じることになり、またコミュニティ感覚という言葉は、「ウリ性」、あるいは性愛の関係性ではない「親密性」を
意味すると考えて大きく間違ってはいないと思われる。

また近代社会が形成される以前の古典的なコミュニティは、コミュニティ自体がある種の親密圏であり、宗教の力を借りて親密圏に公共的な要素を加味することでバランスをとった集団として理解することが可能である。

(4)　噛み砕いていうと

前の節で提示した介護福祉に関する定義（＊１）について、もう少し噛み砕いて説明しておこう。

『介護福祉とは、具体の介護をとおして支援対象者の尊厳を維持しつつ、対象者の状況にあわせてその人なりの親密圏を維持・強化する社会的な支援行為である。』･･･（＊1）

高齢になり認知症になったり、脳血管の障害から片麻痺が残ったりすることがある。そのことによって、以前は出来ていたこと、食事、入浴、着替えや排せつに関し、他者の手を借りる必要性の生じることがある。自分で出来ないよりは出来たほうが面倒くさくなくてよいと言えばいえるのだが、他者の手を借りることが、そのまま人としての意義や価値の低下となるわけではない。人としての意義や価値はそうした行為ができるかどうかということの中にあるわけではない。人としての意義や価値を、人としての喜びと言い換えても同じであろう。

そうではなく、人としての意義や価値は、人とのつながりの中にあると考えることができる。人と人のつながりの中に身を置くことを参加という。国際生活機能分類（ICF）

では、「健康」という概念を、「心身機能・構造」「活動」「参加」という構造に分け、さらに「個人因子」と「環境因子」からなる「背景因子」が関与するというモデルを提示している。「参加」の部分は、より正確に述べれば「親密圏」への参加と「公共圏」への参加に分けられる。介護を必要とする当事者に加えて家族や親しい仲間だけではなく支援する介護福祉職との関係も含め、親密圏を維持し、強化することが介護福祉の本質ではないだろうか。

看護系の大学院生と議論をしていると、看護が感情労働であることを意識させられる。理屈のうえでは、対人援助は援助者が被援助者に対してある種の介入を通して、被援助者を支援する行為である。しかしながら、看護の実践者は被援助者との感情の交流に巻き込まれることなしに、援助としての介入を行うことは難しいと思われる。なぜこのようなことが起きるのかを考えるとき、その分かりやすい説明は、看護におけるケアは、親密圏の中で行われる行為であると考えることであろう。看護には、医療の補助としての科学的な役割（公共圏に属するもの）と、療養上の世話としてのケア（親密圏に属するもの）という二つの性格がある。後者の性格を前面に出し、さらに被援助者の属する親密圏の維持、強化（場合によっては、援助者を含む新たな親密圏の形成）を行うことに、対人援助の本質があると考える。

『介護を巡る断章』として書き始めたが、今回の拙文が書きたいと思っていたことの中心部分である。次回は、2017 年度に指導した二人の大学院生の研究についてご紹介したい。

町家合宿 in 京都 vol.6

～名刺交換～

山下桂永子

11 年前、参加者は中学生と高校生のみだった町家合宿も、リピーターの多い最近では、参加者は中学生から 20 代中盤までと幅広くなってきている。そして 11 年間毎回、宿泊する町家に到着して、参加者にまず取りかかってもらうことが、名刺作りと名刺交換である。

新しい人と人とが出会う場で、自己紹介は欠かせない。しかし、不登校やひきこもり経験のある町家合宿参加者の中には、人とコミュニケーションを取ることに不安があったり、苦手意識があることが多いので、自己紹介と言っても、初対面の人に自分の名前を名乗ることすら難しいということがある。なんとかその出会いの緊張を緩和し、スムーズにお互いを知ることができないものかと考えたのが、名刺を作って交換するというものである。



名刺作りの風景①



名刺作りの風景②

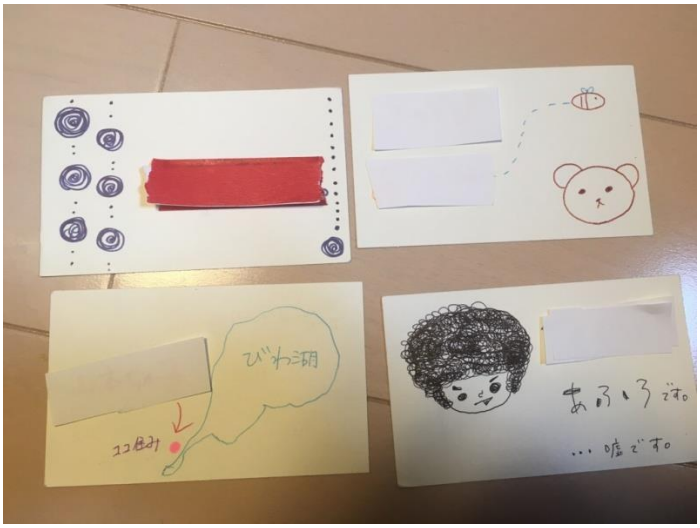
☆名刺交換をしようと思った理由

なぜ中高生の参加者同士で（今は社会人もいるが）名刺交換なのか。そもそも対人援助職になる前の私は、大学卒業後すぐに事務職に就いていて、マナー研修というものを受け（させられ）たことがあった。その中で、来客へのお茶の出し方、お辞儀の仕方、電話応対、タクシーに乗る順番、尊敬語、謙譲語の使い分け、などとともに、名刺交換のロールプレイも行ったのだが、そこで感じたことは「マナーって、合理的で効率的なコミュニケーションの方法でもあるんだなあ」ということだった。マナーとは、（相手との暗黙の合意のもと）商談が円滑に進むよう、邪魔にならぬよう、しかし、相手を丁寧に扱う姿勢は見せるよう、とことん合理的で効率のよいやり方なのかもしれないとその時に初めて気づいたのである。それまでは、マナーもお作法も面倒なだけであったが、その意図や目的がわかると「なんて便利なんだろう、これを身につければ、もう初対面でどうしていいかわからないなんてことがなくなるし、相手に（もよるが）余計な気を遣わなくていいんだ」と目からうろこだったと記憶している。ちなみに対人援助職になった今でも、昔取った杵柄で、電話応対や飛び込みの電話相談は嫌いではない。

そんな私自身の経験もあり、人見知りが多い参加者たちとともに、「将来役に立つし、やっておいて損はない。しかも言葉が（ほとんど）いらない自己紹介だよね」ということで、町家合宿で名刺交換をやってみたわけである。

☆名刺交換の様子

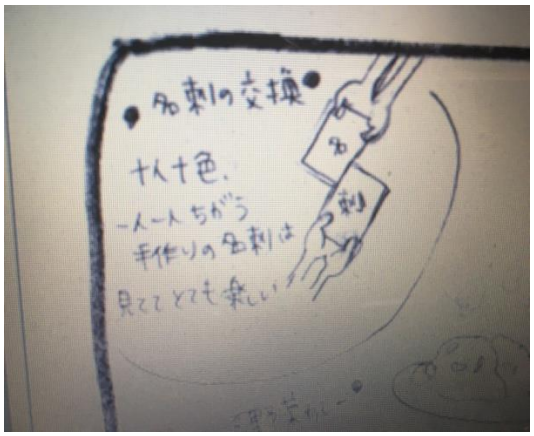
用意するのは、名刺用の印刷用紙（ミシン目が入っていて、A４で名刺 10 枚分ほど）と色鉛筆や多色のペン。「名前でも、ニックネームでもいいし、趣味や血液型、絵でも字でもなんでもいいので、10 枚分描いてね」と伝えて名刺作成スタート。その間、私は、自分はあらかじめ PC で作成してある名刺があるので、夕食の用意を始めたり、宿泊代の支払いをしたりしているなか、他のスタッフは参加者と一緒に名刺を作成してもらっている。



交換した名刺の一部。もらってうれしい。

私が関わるフリースクールや適応指導教室の不登校を経験した子たちは、言葉でのコミュニケーションが苦手でも、結構な高確率で絵を描くのが好きだったり、少なくとも学生時代に美術の成績は散々だった私よりも格段にセンスが良く、絵がうまい子が多い。町家に到着して、初対面の人の中で過ごすにあたり、何か決められた作業をやっている方が、黙っていても違和感がないし、集中して緊張がほぐれるという面もあると思う。そうして黙々と作業がすすむが、10 人分の名刺を手作りしてもらうので、参加者によっては、かなり時間がかかる。そこはまじめというかこだわりがあるのか、1 時間ほどかけて作ってくれる参加者もいる。





名刺交換の様子と名刺交換についての感想文抜粋

作ったあとは実際に交換するのであるが、当初は私が、マナー研修の講師のように、参加者にレクチャーしていたのだが、最近は、スタッフで豊富な社会人経験を持つ方にお願いして、漫談のようなレクチャーをしてもらっている。名刺交換の歴史的背景や、名刺交換後の名刺の扱いに至るまで、丁寧かつおもしろく話をしてくださるので、毎年参加者だけでなく、スタッフも興味津々で話をうかがっている。

その名刺を交換することで自分を知ってもらって相手のことも知る。相手の名前を聞き逃しても、忘れても、こっそり見ればすぐわかるし、町家が終わって家に帰ってからでも、あの子の名前なんだっけとなったときに思い返せる。名刺は、社会でも通用する便利なコミュニケーションツールである。11 年やってきた名刺交換は、社会人の参加者が増えてきた今だからこそ、日常生活で役に立つこともあるだろうし、続けてきてよかったと思っている。

☆町家合宿の名刺交換を他の臨床現場でやってみた

町家合宿で細々と行っていた名刺交換を他でもやってみた話をしたい。と言っても、私の仕事は対人援助であって、その名刺交換を町家合宿以外でこどもとやってみたというだけなので、相手に実際に役に立ったかどうかはわからない。

☆2011 年 6 月の名刺交換

2011 年 3 月、私は 5 年ほど続けていた町家合宿のことを、初めて秋の学会で発表することになっていて、論文集に載せる要旨をまとめる作業を行っていた。そんな中、東日本大震災が起きて、3 月末に、教育委員会からの震災ボランティアとしての派遣が決まった。月末締切の要旨をなんとか完成させ、夜中に中央郵便局に走り、次の日には宮城県に旅立った。1 週間ほどの寝袋生活の中で、避難所のこどもたちと関わり、無力感をとことん感じて帰ってきた。

その 3 ヶ月後の 6 月、再び東北に行くことになった。3 月の時のように避難所ではなく、避難先の仮校舎で過ごすこどもたちと関わることになっていた。県立の工業高校が、原発事故によって５つのサテライトに分かれていて、そのサテライトを教員が行ったり来たりするのだが、１つのサテライトから他のサテライトに行くには車で片道２時間はかかるので、授業を行うこともままならない状況だった。そこでのカウンセラーへのニーズは、こどもたちの心のケアはもちろんではあったが、それ以上に「なんでもいい、授業をしてほしい」ということだった。

その高校を卒業すれば、地元の原発関連施設に就職するはずだった生徒たち。そこで起きた原発事故。高校 3 年生は慣れない土地で突然の求職活動を始めなければならないのに、やり方を教える先生たちもどうしてよいかわからない。そんな家も就職先も将来のロールモデルも失った生徒たちに、対人援助職者として一体何ができるだろう。３か月前のように無力感だけ抱えて帰るのも正直いやだけど、分断と喪失の悲しみに寄りそうにはどうしたらいいのかもわからなかった。カウンセラーだからメンタルヘルス？リラクゼーション？私がやっても付け焼刃のような気がした。そんな中で生徒一人ずつ、15 分ほど話を聴くことを続けるうちに、ふと名刺交換をしてみようと思った。「将来どこに行っても役に立つ。やっておいて損はないし、しかも言葉が（ほとんど）いらない自己紹介だよね」と。

カウンセラーが名刺交換のレクチャーをして何になるねん、と思わないでもなかったが、その数日前、私はその時のカウンセラー派遣事業の前の陣で行っておられた尊敬する先生から、今でも強烈に私を奮い立たせる言葉を頂いていた。「そこに臨床心理学的知見があれば、何をやっても心理臨床である」という言葉である。

そうして名刺交換を授業で行ったわけだが、結果的には、町家合宿でやっているような名刺交換はできなかった。自分の名刺のデザインをイメージしてもらうということと、名刺交換の方法のレクチャーを行い、あとは雑談という感じに終わってしまった。それでも 10 人弱の生徒たちはまじめに名刺交換のロールプレイに取り組んでくれたり、その後の雑談も、なごやかにお互いの話をいろいろとしてくれていた。名刺交換が役に立ったのかはわらないが、私は少なくとも「なんでもいいから授業をしてほしい」という先生方のニーズに対して、なんとか授業を埋められたことにホッとしたし、生徒たちが和気あいあいと話をする姿は、名刺交換が、生徒たち同士のコミュニケーションを促進させていたようにも思っている。

☆町家合宿の展開

こんなふうに名刺交換を町家合宿以外の、他の臨床現場で使ってみることによって、心理臨床として名刺交換をすることの本質と言うか、効用、限界などが見えるような気がした。町家合宿の中で行っていることが、名刺交換に限らず、普段の臨床現場で生かされることが多いと改めて感じている。



「猫を保護してほしい」という相談

これまでの連載で、TNR や地域猫、大学猫活動といったノラ猫問題への取り組みを紹介したり、“人もねこも”一緒に支援しようとする取り組みを紹介したりしてきました。こういった取り組みをしていても、私のもとに来る相談で一番多いのは「猫を保護してほしい」だと思います。理由はいくつかあります。例えば、「子猫がいたので保護してたんだけど、うちでは面倒みれないので、どうしよう？保護してもらえるところはない？」とか、「担当の高齢者の方の体調がすぐれないので、ペットを保護して里親に出してあげたい。どこか保護してくれるところ知らない？」とか、「近所でノラ猫に餌をあげているお年寄りがいて、増えて困るからノラ猫を保護してくれない？」といった具合です。そして多くのケースで最後に「保健所はかわいそうだからその前に相談しようと思って。」という脅し文句付き。見捨てることができず保護活動をしている人に対して、『保健所も視野に入れているよ』というメッセージは、脅迫に近い。もちろん、こういったケース以外に自分でできるだけ頑張るので、協力してほしいという「ぜひ、協力させて！」と言いたくなる人もいます。

保護活動に対するリアリティの欠如

ものすごく気軽に「保護してほしい」という難題を投げることができる背景には、実際に猫を保護して、ケアし、新しい飼い主に譲渡することは、具体的にどんなことなのか知らないということがあげられるのではないだろうかと思います。そこで、今回のマガジンでは、私の保護活動のパートナーである一時預かりボランティアの亀井さん家族にご協力いただいて、猫を保護して、新しい飼い主さんに譲渡するまでの金銭的、労力的負担も含め、美化せず、リアルをお伝えしたいと思います。ただ、保護活動の内容や経過はボランティアによって違いますし、保護する猫によっても大きく変わります。あくまで１例として読んでいただければ幸いです。

一時預かりボランティアの活動紹介（亀井みさ子　文）

私は４人家族と猫１匹と暮らす家庭の主婦です。「一時預かり」「ミルクボランティア」という言葉がメディアで取り上げられはじめたものの、その実態はよく掴めず、「ちいさな子猫をただ可愛がるボランティア」と思っておられる方も多いのではないかと思います。この場をお借りして、保護した猫の例を挙げながら活動紹介をさせていただきたいと思います。

■ケース１　シロ親子（母６歳、子１ヶ月）

もともと高齢者の単身世帯で飼育されていましたが、飼い主の健康上の理由から飼育が困難になり、新しい飼い主を探すことになりました。生後１ヶ月の赤ちゃん猫と授乳中の母猫シロが我が家にやってきたのは、真夏の猛暑日でした。



（お預かり２日目。警戒しているシロ親子　）

預かりをはじめる準備として、最初に取り掛かるのは環境づくりです。感染症予防のために原則として先住猫（我が家の飼い猫）と預かり猫との接触は避け、双方が安心して健やかに過ごせるための別室を用意します。我が家の場合は、先住猫のくつろぎ場所であったリビングが、先住猫は立ち入り禁止の部屋となりました。シロの場合は特に、授乳中のデリケートな時期でもあったため、工夫を凝らしてリビングの隅の押入れ下段に涼しく暗く静かな生活環境を整えました。

毎日のお世話は給餌や掃除はもちろんですが、いちばん重要なのは子猫の体重測定です。体重が減っていたり母乳が足りていない場合は粉ミルクを与えます。授乳中の母猫には「たっぷりの栄養」を。…ここまでは多くの方が想像できる猫の飼い方だと思います。ところが、もともと飼育が困難な健康状態の方に、やむなくネグレクトに近いかたちで飼われていたシロは、「足が弱って歩けない」「トイレで排便できない」「人に心を開かない」という深刻な状態になっており、このままでは新しい飼い主さんへの譲渡は難しいと感じました。

感情を持つ動物にとって「たっぷりの栄養」とは食事に限ったことではなく、家庭のぬくもりや安心感でもあるはずです。少しずつ、声を掛けたり撫でたりしながら、シロが心を開いてくれることを忍耐強く待ちます。真夏の暑い日に汗をかきながら床に落ちたウンチを拾っては床を消毒する、その繰り返しの日々の中、ふと不安がよぎります。「…この子、ほんまに飼い主さん見つかるの？」

心が折れかけた時に支えてくれるのは仲間です。貴重な休日に猫の様子を見に来てくれました。シロのケースでは、里親募集窓口担当の小池さんに加えて、依頼主でもある元の飼い主さんのご親族の女性が、食費や医療費などの経済的な面だけでなく、里親希望者との面談や譲渡の際の車の運転など、最後まで責任を持って一緒にやり遂げてくださいました。猫と離れ離れになった元の飼い主さんの気持ちや健康状態にも心を配りながら、ご自身が主体となって解決に向けて頑張ってくださいました。まさに、本稿冒頭で小池さんが記されている「ぜひ、協力させて！」と言いたくなる依頼者であり、私たちと信頼関係を築けたからこそ、私も依頼者の責任感に応えたい気持ちを保ちながらシロのお世話を引き受けることができました。

お預かりから３週間が過ぎ、シロ親子は少しずつ私たち家族に慣れはじめリラックスして過ごせるようになりました。



（お預かり２６日目。リラックスするシロ親子）

歩行も排便もできるようになり、必要な医療も受けさせて準備万端となった頃に、里親希望者から「亡くなった愛猫とそっくりなので会ってみたい」と連絡が入りました。そして迎えたお見合い当日、里親希望者は亡き愛猫への想いを涙を流しながらお話され、私たち３人はただ耳を傾けて聴きました。里親希望者との面談を丁寧に行うことも私たちの活動のひと

つです。しっかりと喪に服して心を整理して、シロ親子を迎える気持ちの準備をしていただけたように思います。また、里親希望者が亡き愛猫との過去や悲嘆を勇気をだして手放すことができたのは、新しく家族となるシロ親子との出会いがあったからだとも感じました。数日後、トライアル（お試し飼育）のために里親希望者のお宅に伺うと、すっかり元気になっておられて安心しました。保護活動とは、ただ猫のためだけにあるのではなく、私たち人も猫との関わりから大切な何かを得ており、はからずも“人もねこも”一緒に支援する結果となりました。その後、無事に正式譲渡に至り、現在もシロ親子は里親様に愛されて家族で元気に仲良く暮らしています。

■ケース２　空（くう）ちゃん（生後８日目）

たとえ短期間であっても、命を預かるということは幸せな経験ばかりではありません。一緒に過ごした時間はたった５日間でしたが、心に残っている子猫がいます。生後８日目に我が家にやってきた「空ちゃん」です。まだ肌寒い４月の終わり頃、生後間もない空ちゃんは、ダンボール箱に入れられ遺棄されていたところを通りがかりの大学生に保護されました。そのまま大学生の家で７日間過ごしたあと、生後８日目に私の家に来ました。息を飲むような小ささに驚き体重を計ると、わずか７０ｇしかありませんでした。７０ｇというと鶏卵１個と同じ軽さです。本来であれば、猫の出生体重は約１００ｇあり、生後８日目になると約２倍の２００ｇになります。私の家に来るまでの７日間に何があったのか。どうして体重が減少しているのか？大学生とそのご家族から返ってきた言葉はこうでした。
「可愛いから連れて帰った」「でも大学を休んでまでお世話したいとは思わなかった」「飼いたいけれどお金は出したくない」「まさか死ぬとは思っていない」…。

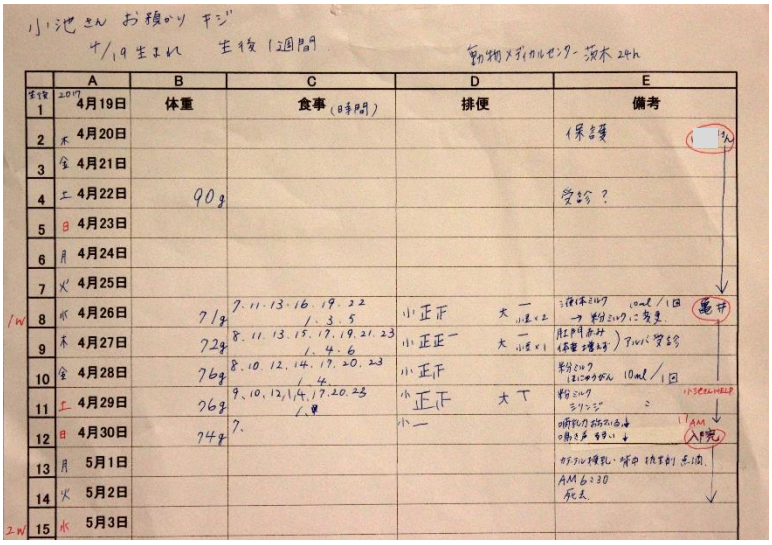
これは、空ちゃんのケースだけではなく、多くの「猫好き」を自称する方から寄せられる相談に共通する言葉です。ここにも重大な「リアリティの欠如」がみられます。小さな身体が「動くぬいぐるみ」ではなく「生き物」であることをリアルに感じていただくために、空ちゃんの話に戻りたいと思います。

生き物である以上、死も覚悟してのお世話ですが、小さな身体が必死で生きようとする姿をみると、私が先に諦めることはできませんでした。とても小さな身体ですが、とても大きな声で泣くのです。母猫も突然いなくなった赤ちゃんを探して、おっぱいを腫らしながら泣いていることでしょう。お母さんを探して「ミーミー」と泣く声を聴くと、動物の遺棄がいかに残酷なことか、繁殖制限せず自然に産ませたほうが猫にとって幸せだという傍観者の声がいかに無責任なことか、痛恨の思いを抱えながらお世話にあたりました。



（生後１０日目。ミルクを飲む空ちゃん）

母猫に成り代わってのお世話は、「ミルクボランティア」という可愛いネーミングとは名ばかりの不眠不休。低体温を防ぐために保育器代わりとなる箱を用意して、湯たんぽを温めて２８度を保てる寝床を作ります。生き延びるためには、とにかく体重を増やして体力をつけなければなりません。長時間眠りがちな子猫を起こして、まずは湿らせたコットンで肛門刺激をして排尿排便をさせます。それから温めておいたミルクをシリンジで一滴ずつ舌の上に落とします。優しく口を広げて一滴落とし、飲み込むのを待ち、また口を広げて一滴…。そして体重を計り記録します。



小池さん お預かり ネジ
サ/19 生まれ 生後1週間
動物メディカルセンター 蒲木 24h

	A	B	C	D	E
生後 1	2017 4月19日	体重	食事（時間）	排便	備考
2	木 4月20日				保温
3	金 4月21日				
4	土 4月22日	90g			受診？
5	日 4月23日				
6	月 4月24日				
7	火 4月25日				
8	水 4月26日	71g	7.11.13.16.19.22 / .3.5	小 正 下 大 一 小並×2	液体ミルク 10ml／1回 → 粉ミルクに変更
9	木 4月27日	72g	8.11.13.15.17.19.21.23 / .4.6	小 正 正一 大 一 小並×1	肛門刺激（体重が増えず） アルバ受診
10	金 4月28日	76g	8.10.12.14.17.20.23 / .4	小 正 下	粉ミルク はじめカタめ 10ml／1回
11	土 4月29日	76g	9.10.12.14.17.20.23 / .4	小 正 下 大 丁	粉ミルク シリンジ ＝
12	日 4月30日	74g	7.	小一	1 AM 入院
13	月 5月1日				ガテル挿入・留置 抗生剤 5.1ml.
14	火 5月2日				AM 6:30 帰宅
15	水 5月3日				

（空ちゃん健康記録）

授乳は２時間おき、とよく言いますが、人工乳の場合は作業に１時間近くかかるため、お世話をする人の睡眠時間は最長１時間になります。この時も、私の睡眠確保のために小池さ

んが休日に来てくれて、日中はお世話を交代してもらい、その間私はまとめて睡眠をとりました。私ひとりでは、とても乗り越えられなかったと思います。

生後１２日目の朝、空ちゃんは哺乳力が弱くなり、最期の１日は入院してカテーテルによる人工給餌と点滴による栄養補給をしましたが、健闘むなしく、そのまま病院で息を引きとりました。保護した大学生には、空ちゃんに接する私たちの緊迫した様子を毎日報告していたこともあり、しだいに大学生の目に空ちゃんの生命がリアルに映るようになっていったように思います。亡骸となった空ちゃんを家族として迎え入れたいとのお申し出を受け、空ちゃんは大学生のご実家のお庭で安らかに眠っています。

さて、猫を保護した場合、現在の日本の法律では、生きている猫は「落とし物」として警察に届け出をして、死んでいる猫は「ゴミ」として美化センターで処分されます。空ちゃんの場合は、たった１４日間であっても「命として認識された」貴重な時間がありました。しかしながら、保護の依頼は絶えずあり、とても対応できる量ではありません。しかも残念ながらそのほとんどが、こちらへ丸投げする無責任な依頼です。生き物を「モノではなく命として認識する社会」になるように、保護活動と並行して啓発活動にも力をそそいで参りたいと思います。（亀井みさ子）

新しい飼い主を探す

上記の活動紹介を書いてくださった亀井さんとは、かれこれ５年くらい一緒に活動している信頼できるパートナーです。一時預かりボランティアの仕事は上記の内容のほかに、餌代や獣医療費といったかかった経費の帳簿作成や、通院、新しい飼い主を探すための写真撮影など盛りだくさんです。もちろん、ボランティアなので、給料は一切なく、餌代や医療費といった実費支払いのみ。場所と労働力を無償提供していただいています。

一時預かりボランティアが猫を保護してくれている間に、私は新しい飼い主を探します。ペットの飼い主募集専用サイトを利用することが多いです。インターネット上で、誰でもみることができるため、声がかかる確率は高くなりますが、全くしらない人から連絡がくるため、本当に猫を飼うことに適している信頼できる人なのか見極めることがとても重要です。残念なことに、善意の飼い主希望者のふりをした動物虐待マニアも存在し、悪気はないものの、命を飼う責任感が乏しく、譲渡をうけてからすぐに猫を逃がしてしまいそうな人も多い現状です。

●面会

まず、サイトを通して連絡してくださった方と電話やメールでやり取りをします。猫が一緒に住むことになる家族構成、皆の合意があるのか、他にペットはいるのかなど、飼育環境

を教えてもらったり、飼い主希望者さんからの質問に答えたりします。この段階で、お断りすることもされることもあります。情報を隠してとりつくろっても後々悲惨なことになるだけなので、猫の健康状態や経緯など正直にお伝えします。その上で、話を進めていく場合は、一時預かりボランティアのお家に面会にきてもらいます。希望者さんには、なるべく家族全員で来てもらいます。保護主側も、私と、一時預かりボランティア、保護主が別にいる場合は、保護主もいれて３名で希望者さんを迎えます。面会を終え、希望者さんが帰ったら、保護主側で相談をします。関わっている全員が、譲渡に賛成した場合のみ、トライアルへと進むことになります。



ここまでの手順を簡単に図式化するとこんな感じです。そこそこ手間と時間がかかることを感じていただけたでしょうか。

●トライアル

面会を経た次のステップは、「トライアル」です。トライアルは、ホームステイのようなもので、希望者さんに実際に保護猫と暮らしてもらい、家族や先住ペットとの相性をじっくり見てもらう期間です。トライアルの際は、実際に飼い主希望者さんのお宅に訪問し、トライアル期間の保護猫の所有権は保護主側にあるとする誓約書を交わします。希望者にとっては、家族に猫アレルギーが出ないか、先住猫との相性は大丈夫か、実際に見極めることができるというメリットがあります。保護主側としては、本当に猫を大切にしてくれるのか見極めることができるというメリットがあります。トライアル期間は、先住猫がいない場合は、１週間程度、先住猫がいる場合は１ヵ月～２か月に設定することが多いです。

●譲渡

トライアル期間を終えたら、再度希望者さんのお家を訪問します。そして、保護猫の様子や飼い主希望者さんとの関係を見させてもらいます。保護猫が全然なついていなかったり、状態が悪くなっていたり、トライアル時はきれいだった家が荒れていたりする場合は、トライアル失敗です。保護猫はすみやかに引き上げます。特に問題がなく、希望者さんと保護主側の双方が正式譲渡に合意したら、晴れて正式譲渡証を交わし、所有権の移行をします。



以上が「保護してほしい」と依頼されてから任務を完了するまでの流れです。最低２回は希望者さんのお宅を訪問しますし、トライアル期間中に相談を希望されれば何度も訪問します。新しい飼い主が決まりやすい子猫だとしても、短くても１ヵ月、長ければ半年以上かかることもあります。成猫なら何年もかかったり、生涯飼い主希望者が現れず、保健所を免れたとしても保護シェルターの中で一生を終えることもあります。ほとんどの保護シェル

ターは、一時保護場所としては有効でも、生涯の居場所としては幸せとはいえません。殺されないだけマシ、というのはあまりにも想像力が乏しいと思います。

無事、正式譲渡に至ったとしても飼い主さんとの関係は切れるわけではないので、やむをえない事情が発生し、正式譲渡から半年後に引き取りなおすことになることだってある。1度関わった猫とは一生責任の一旦を担い続けることになるわけです。

●費用

保護して新しい飼い主さんに巡り合うまでの期間にもよりますが、医療費（ノミダニ駆除や血液検査費）や食費、猫トイレの砂代、動物病院や飼い主希望者さんのお家までの交通費入れると、保護猫がとても健康で、スムーズに事が運んだとしても１匹あたり２万円はかかります。おなかの中に回虫がいたり、体調がすぐれない場合や入院が必要な場合はそれ以上、数日入院なんてことになればあっという間に５万円やそれ以上になることもあります。

保護依頼の場合は、依頼者さんに実費の負担をお願いしています。依頼主が子どもで、親の理解がゼロの時や、学校に入り込んでしまった猫のように、金銭的な負担をできる人がいない場合は、もちろん自腹です。新しい飼い主さんにワクチン接種費だけ負担してもらうこともあります。とはいえ、金銭的にも時間的にも、できる限界があります。

まとめ

保護活動は、とてもやりがいのある活動です。ボロボロの状態で保護した猫が、ピカピカになって新しいお家で暮らしている様子を写真などで見ると、何とも言えない幸せな気持ちになります。生きたそうめんみたいな回虫が猫のうんちからうようよ出ている光景、下痢から元気なかたいうんちに変わった喜び、怯えていた状態から、甘えてくれるようになった瞬間の感動。面白おかしく美談にまとめようと思えば、何ページで書ける気がします。でも、そういった明るい側面だけでなく、沢山の時間とお金と手間がかかる責任の重い活動でもあるということを今回のマガジンで知ってもらえたら嬉しいです。「じゃあ見捨てろってこと？」ではなく、大変なことだからこそ、誰かに丸投げではなく、一人一人が自分にできることを考えて取り組もうとする姿勢をもってもらえたら、より、沢山の命を救うことができるはずだと思っています。最後まで読んでくださってありがとうございます！

おわり



小池英梨子

NPO 法人 FLC 安心とつながりのコミュニティづくりネットワーク

「人もねこも一緒に支援プロジェクト」　プロジェクト代表

「ねこから目線。」としてフリーでも活動中。

先人の知恵から
19

かうんせりんぐるうむ　かかし

河 岸　由 里 子

故事・ことわざ辞典は、我が家に幾つかあるが、世界のことわざ辞典というのもあり、読んでいると中々面白い。世の中、どこに行っても、同じような行動があり、同じような戒めがあり、同じような言い伝えがあるものだと感心する。例える物がその土地特有の物だったりするのも面白い。皆さんも読んでみてはいかがだろう。

今回は、き行から次の８つを挙げてみた。

- 窮すれば通ず
- 窮鼠猫をかむ
- 笈を負う
- 兄弟は他人の始まり
- 兄弟は両の手
- 今日の一針、明日の十針
- 今日は人の上、明日は我が身の上

＜窮すれば通ず＞

行き詰ってどうにもならない状態にまで追い込まれると、開き直るなどして、案外解決の道が開かれて何とかなるものだということ。「窮しては通ず」ともいう。
出典　易経

「四面楚歌」という言葉があるが、人間行き詰ると視野が狭くなり、どんどん自分を追い込んでしまうことが多々ある。ちょっと離れて自分を見ることができれば、案外抜け道を見つけられるものだが、当の本人は目の前の壁しか見えない。

新米ママによくみられるのだが、赤ちゃんが泣いたときに、お腹が空いたのかとおっぱいやミルクを飲ませてもだめ、おしめを換えてもダメ、抱っこしても泣き止まないとなると、もうどうして良いかわからず、

叫びたくなるし逃げたくなる。そういうものだとわかっていても、やはりその場になるとどうにもならない。そんな時に、この諺を伝えることがある。開き直って、「いいや、泣かせておこう」と思ったとたんに案外早く泣き止んだりする。「あれこれやってもあれだけ泣き止まなかったのに、なんで？」と思うだろう。むしろジタバタするから、物事が進まなくなるということはよくある。じっくり座って、「先ずはお茶でも一杯」そんな気持ちの余裕ができると、物事の解決策が見えたり、思わぬ展開になったりするものである。

英語では・・・

A hungry man smells meat afar off.(空腹の人には遠くの食べ物も匂う)又は　Necessity is a hard weapon.(必要は頑丈な武器である)

＜窮鼠猫をかむ＞

弱いものでも絶体絶命の窮地に追いつめられると、強いものに逆襲することがあるという例え。追い詰められたネズミが、逆に必死で猫に噛みつくという意から。「窮鼠(きゅうそ)反(かえ)って猫を噛む」ともいう。

出典　塩鉄論(えんてつろん)

先日相談中の母親から聞いた話。まだ小さい妹がお姉ちゃんからいつも意地悪されていて、母親も気にしていたのだが、ある時お姉ちゃんに向かって行って、噛みつき、お姉ちゃんが泣いたという。

「『窮鼠猫をかむ』ですね。」と言ったら、「何ですか、それ？」と聞かれた。その方は学校の先生だったが、この諺はもう一般的ではないのかと驚いた瞬間だった。

どんなに弱いと思われている人でも、余り追い詰めれば何をするかわからない。特に、自分を出さず、ひっそりと耐えていると、ある時膨らみ過ぎた風船のようにはじけて、周りがびっくりするような言動をとることがある。

最近の子どもたちは、とても良い子が多く、周りの子と上手くやろうと自分を出さないし、保護者に対しても気を使っていたりする。こんなことを続けていれば、当然何処かに怒りや辛さをため込むわけで、苦しみ風船がどんどん膨らむ。

風船を破裂させないようにと、無意識にかなりのエネルギーを使っている子も見かける。

いじめられっ子の逆襲や、良い子の大きな問題行動など、「窮鼠猫をかむ」言動にならないよう、追い詰めないよう、周りの大人が注意を払って行かねばならないし、子どもたちにも、我慢のし過ぎは良くないことを伝えていきたいものだ。

英語では・・・

Despair makes cowards courageous.(絶望すると臆病者も度胸がすわる)、A baited cat may grow as fierce as a lion.(犬にけしかけられれば、猫もライオンのように獰猛となる)

＜笈を負う＞

勉学のため、郷里を出て遠い土地に出か

けること。遊学すること。本箱を背負う意から。笈とは背に負うように作った本箱のこと。　出典　史記

「可愛い子には旅をさせよ」という諺は以前に紹介したが、生まれ育った土地ばかりにいては、知識は広がらない。例え東京にいて、すべての中心にいるように思っていても、世界は広い。様々な地域に足を延ばし、その目で見、肌で感じ、話を聴くことで、自分が如何に小さな存在であったかに気づくものである。

子どもが大学に行く頃になると、家から出たい、一人暮らしをしたいという子がいるが、金銭的な理由もないのに、心配だから家から通ってほしいと引き留める保護者も多い。

北海道から東京に行くだけでも、「危ない」と思う親はいるだろう。まして海外などと言ったら猛反対する。しかし、若いうちに、感性が柔らかいうちに、違う文化、言語、風習に触れることはその後の人生を豊かにすると思う。

もちろん、海外でも危ないと言われている場所に行くことはない。そこまでしなくても、異文化に触れることはできる。

「笈を負う」という諺を知らない人の方が多いだろう。今時中々「遊学」という言葉も聴かないが、文字通り「遊学」を勧めたい。

＜兄弟は他人の始まり＞

仲良く育った兄弟も、それぞれ成長し、独立して自分の家庭をもつようになると、疎遠になって他人同士のようになっていくということ。「兄弟は他人の始め」ともいう。

兄弟というのは不思議なもので、仲の良い兄弟もいれば、すごく仲の悪い兄弟もいる。仲の悪い兄弟では、その保護者の対応に差があることが多い。上の子ばかり大事にされた、上の子ばかりにお金をかけて自分は我慢させられた、などという話も聞く。兄弟間差別は今では虐待の中の一つとされてもいるくらいだ。こうした差別は、生涯にわたってずっとシコリとして残ってしまう。

しかしそういう差別などがなくても、仲の良かった兄弟が、それぞれ結婚し、所帯をもってからは、お嫁さん同士の関係が上手くいかなかったり、遠くに住んだりということで疎遠になることはある。

血の繋がった兄弟であっても、大人になるとお互いに距離をとることもあると知っておけば、そうなった時に恨んだり、怒ったりしなくて済むのではないだろうか。家族というのはくっついたり離れたり、その時々の個別の家族の状況によって変遷していくものだ。

＜兄弟は両の手＞

兄弟は左右の手のように、互いに助け合わなければならないという教え。「兄弟は左右の手の如し」ともいう。

前述の諺とはちょっと違った意味の兄弟に関する諺である。「親はいつまでも生きてはいない、親亡き後、兄弟同士、助け合っ

ていきなさい。」という親の想いを表している。

右手と左手、両方の手があれば、色々なことができる。片手だけでは不自由なことも多いことから、助け合ってという意味合いになるだろう。兄弟は二人とは限らないし、もっと多かったり一人っ子ということもある。兄弟がいることで、良いことも悪いこともあるかもしれないが、お互いに助け合える兄弟になれるよう、親は育て方に気をつけなければならないのかもしれない。

＜今日の一針、明日の十針＞

わずかな手間を惜しんでやらずにいると、後で余計な苦労が増えるということのたとえ。今日なら一針縫えば済むほころびも、明日になれば広がって、十針も縫わなければならないという意から。

この諺は、自分への戒めも含め、特に片付けない子、片付けが苦手な子に伝えている。使ったものは元あったところに戻すというのは、簡単なようで中々できない人が多い。元あったところに戻っていれば、探すことも無いし、散らかることも無い。しかしこれができないために、物が散乱し、探し物が増える。これは自分自身にも当てはまることで、つい、そのまま出しっぱなしにしてしまうことが多々あるため、片付かない。物を探していることも多い。

また、夏休みの宿題や勉強などにも同じことが言える。毎日少しずつやって行けば終わるのに、今日やるべきことをサボれば明日にそのしわ寄せがくる。今日のことは今日やるようにしていると、何か不測の事態が起きても慌てないで済む。

面倒くさがらずに、今の一針をきちんと縫っていくことで、後の苦労を減らすことができる。

英語では・・・

A stitch in time saves nine.（適時の一針は九針の手間を省く）というアメリカの政治家フランクリンの有名な言葉に基づく。

＜今日は人の上、明日は我が身の上＞

人の世は不安定なものだから、他人の災難をよそ事として見過ごさず、用心しなければいけないといういましめ。今日は他人のことだと思っていた災難も、明日は自分のこととなるかもしれないという意から。「今日は人の身、明日は我が身」ともいう。

略して「明日は我が身」ということもあるが、いつも他人事と見過ごしていると、いつか自分の身に降りかかることもある。

日本は地震の国なので、地震災害、火山災害、津波などの自然災害は、「もしかしたら」という思いがあるだろう。しかし、東日本大震災があったときは、過敏すぎるほど気にしたのに、７年も経つと、その怖さ、危機感が薄れ、自分の身には起こらないと思っている人も多い。南海トラフ巨大地震や北海道南西沖地震の可能性について、つい最近８０％という確率を出したことは、今一度注意を呼び覚ます良いきっかけになったかもしれない。

火事や交通事故も含め、世の中には様々

な事件事故がある。自分の身に降りかかっていないのは、むしろ幸運なことだと思い、用心して生きることも大切。但し、用心し過ぎては元も子もない。程々に用心することが大切だろう。

英語では・・・

I to-day, you Today you, tomorrow me.(今日はあなた、明日は我が身)　又は Laugh before breakfast, you'll cry before supper.(朝食前に笑うものは夕食前に涙するであろう)

出典説明

易経・・・周代の占いの書。儒教の五経の一つ。今日文とその解説書の「十翼」を合わせて十二編よりなる。陰と陽を組み合わせて八卦、これを重ねた六十四卦によって、自然と人間の変化の法則を説いた所で、中国の哲学思想の元になった。作者として、周の文王、周公、孔子が挙げられるが、確かではない。

塩鉄論・・・十巻六十編

前漢時代の経済政策の書。前漢の儒者桓寛の編者。武帝が財政難を打開するために行った塩・鉄・酒などの専売制度を存続させるかどうかについて、昭帝の時に諸国から集められた学識者と官僚たちが討論したことをまとめたもの。当時の政治・社会・経済などを知るための重要な文献。

私の出会った人たち

(4)

関谷啓子

週に一回、郊外の施設に通って７年になる。
友人の友人の義母さんが入所しているのをお見舞いに行っているのだ。
子供は遠くに住んでいて面会が間遠くなるので代わりに、、、と軽い気持ちで引き受けたのだが、お元気で今年９５歳を迎えられる。
出会った頃は彼女もなかなか元気で、持参したお昼の弁当も気に入らず食べてもらえなかったり、私の不注意な言動で不快な思いをさせてしまって「お出入り禁止」と言われたり、、、散々だったのだが
ケアマネさんや施設のスタッフの方々の手助けもあって、なんとか今日まで続いている。
訪問する度にその様子を書いて家族に届けているのだが、読み返すと色んな気づきがあって面白い。
以下の、今年の冬にあったこと抜粋。

１１月８日
雨でした。食堂に居られたので自室へ移動しておやつにしました。
今日は小さめのプリンでした。
おやつの後、薄く匂いのついたアロマオイルでマッサージをしました。習ってから少し時間が経ってしまい、おっかなびっくりしながらのマッサージをでしたが、両手足が終わる頃には車椅子の上でスヤスヤお休みでしたのでまあまあ良かったかと自画自賛です。
夕食介助して帰る頃は雨もすっかり上がって夕焼けが綺麗でした。雲が茜だけでなく緑の部分があり感動。「Mさん見て見て！夕焼け雲があんなに綺麗」と言ったのですが、反応無しでちょっと残念。でも初めて見た夕焼けの色に私は感動。彼女に感謝です。

１１月２１日

食堂に居られました。誰かと話をするというのでなく、静かに一人居られました。前回お願いしていたカットも終わりサッパリとしたご様子。「ああ、短くカットされたのですね。でもちょっとうなじが寒そう、、、」と言いましたら「そうですか？」との返事。
自室で持参したおやつを食べられました。今日はサッパリとレモンケーキです。これだとご自分で手に持って食べられます。介助のほうが楽ですが、おやつはなるべく自分で食べられる物を、、、と思って選んでいます。
夕食はおでんでした。すり潰してあるので見た目では分かりませんが、メニューを見ながら「大根ですよ」とか「これは厚揚げかな」
などと解説付きで口へ入れてます。
同じテーブルの男性の方が今日は９９歳の誕生日でした。「ケーキというわけにはいかないけれど、、、」と言いながらスタッフの方がカステラを小さく切っておロに入れてあげておられました。「来年の１００歳のお誕生日にはケーキを、、、、」とも話しかけてました。そうなると良いなあ～と思いつつ聞いてました。ささやかですがこんなふうに話されるのを聴いていると気持ちが柔らかくなります。
きっと来年の４月３０日にはMさんもこんなふうに話しかけられるのだなあ、、、と。
食後、例によって両手とデコルテのマッサージ。午後の入浴のあった日なのでお肌がしっとりでした。
お花は小さな黄色のにしました。ちょっと部屋が明るくなったような。

１２月１２日
お風呂上がりだったので頬がピンクで気持ち良さそうでした。
靴下を履かそうとすると足の爪がだいぶ伸びています。
スタッフの方に爪切りをお願いしました。親指の爪がかなり巻いて分厚くなっており、切りにくいだろうとは思いますが、、、。
手の指もそうですが、かなり嫌がられて動かれるので、爪切りは看護師さんがやられるそうです。
今日は急に目をパッチリと開けてじっと凝視しておられる時間がありました。何を考えておられるのか？もし自分が同じ年齢まで生きていたら何を考えるのか、、、、と色々感じさせられる表情でした。
リスみたいに可愛らしい目です。

１２月２５日
年内最後になったのですが、お顔を見にいきました。
いつもと同じ、食堂にお一人でした。自室に戻っていつものように両手とデコルテをマッサージしましたが、今日はどうしても目を開いてはもらえませんでした。持参の軽い麩菓子は召し上がられましたが、その間も目は閉じたままでした。まあまあこんな日もあるか

と思い、スタッフに次回来るまでのおやつを預けてかえりました。お正月飾りを出したら一足早く新年の感じ。
新年には明るい花を持参しようと思って帰りました。

１月６日
新年始めてでした。
紅梅、蝋梅、ミツマタ、水仙を持参しました。
お昼に間に合ったので、食事の介助ができました。
今日はコーンスープと野菜サラダ、オムレツでした。オムレツは柔らかく崩してありますが、ちゃんとオムレツの形に成形されケチャップまでかけてありますので、見た目も綺麗で楽しいのです。
未だ松の内なので、自宅に帰られた入居者の方も多くいつもよりは少ない人数でした。ゆっくりと食べていたら最後でした。
洗濯の乾燥を待ちながらマッサージをしましたら、気持ちが良かったのか？フンフンと目を閉じたままで声が出ました。
母とは一度もこのような時間を持つことができなかったのですが、他人のＭさんには優しくできるのが不思議。家族って何だろうと最近思います。我が家の娘達も私にこんな風にしてくれるとは想像できませんので、、、、、。
でも、家族とか他人とか一切関係なく、気持ち良くスッと出来る人が出来る人にやればいいのではないかと思います。周り回ってみんなが気持ち良く過ごせればそれで良いのですから。
帰る頃は夕焼けも終わって、暗くなっていました。

１月１６日
ミツマタの花がやっと開いてくれて綺麗でした。
私はあの地味な可憐な花が大好きなのです。「ミツマタの花ですよ」と話しかけて目の前に持っていきましたが、あまり興味がなさそうでしたが、最近、視力が弱ってきているのでは、、、、と思う時があるので次回にでも看護師さんに尋ねてみます。
夕食後は歯磨きをしてもらって完了です。
耳元で「また来ますね」と言うと「そうですか」とはっきりした声で返事がありました。
今日やっと繋がった会話でした。マッサージの時は気持ち良さそうにされているので私はそれで満足ですが、やはり会話が成立すると違った嬉しさがあります。

うたとかたりの対人援助学

第５回　シリア人留学生の祈り

鵜野　祐介

シリア人留学生ナーヘドさん

昨年（2017）の暮れ、シリア人留学生ナーヘド・アルメリさんに、シリアの子守唄やわらべ唄についてお話を伺う機会を持った。ナーヘドさんは 1987 年に首都ダマスカスの北約160㎞ のシリア西部の町ホムスに生まれ、ダマスカス大学日本語学科を卒業後、2011 年 9 月に来日し、現在は筑波大学大学院博士後期課程で童謡詩人・金子みすゞの研究に取り組んでいる。漫画やアニメへの関心から日本語学科に入学する学生が多い中、「遠く離れた場所のことを学びたい」という目的で、この学科を選んだという。「そんな動機の学生は私一人でした」と微笑む好奇心と冒険心にあふれた彼女は、色白で涼やかな顔立ちの女性である。

シリアは砂漠の国ではない

2016 年 11 月の日本児童文学学会年次大会（日本女子大学）ではじめてお会いして以来、何度かお話する機会があったが、今回、日本子守唄協会の機関誌に連載している「世界子守唄紀行」でシリアの子守唄を取り上げようと、ナーヘドさんに取材させていただくことになった。

彼女が来日した 2011 年 9 月の半年前に始まったシリア内戦は、その後絶望的な泥沼化をたどり、今日も続いていることは周知の通りだが、私自身「紛争の国」という以外のこの国に対するイメージは、かつてティグリス・ユーフラテス川流域にメソポタミア文明が栄えた後、「月の沙漠をはるばると…」というものだった。

だが、そのことをナーヘドさんに話したところ、「皆さん、そんなふうに思っておられますが、東部の方を除けばシリアには砂漠はありません」とのことだった。インターネットで検索してみると確かに、「国土の内、西部の地中海沿岸部には平野が広がっており、南部は肥沃な土地が広がっており、国内農業のほとんどを負担している」（ウィキペディア）。また、彼女の生まれた町ホムスの紹介サイトには、緑豊かな「かつての」町の写真が載っていた。

ところが、同じサイトには空爆で破壊し尽された現在のこの町の写真も紹介されていた。おそらく私は、その白々としたコンクリートの残骸に、白い砂漠のイメージを重ね合わせて、「砂漠の国」という幻像を勝手に作り上げていたのだろう。

3つの子守唄

ナーヘドさんは3つの子守唄を歌ってくれた。3曲ともアラビア語の方言である（日本語訳はナーヘドさんの下訳を筆者が補筆したもの）。

「神様　愛する人を私のもとへ」
ああ　ロザナよ

あなたの中に　全ての幸運がある
ロザナよ　あなたの行いに対して
神様の報いがありますように

ロザナに乗って　アレッポに向かう人たちよ
あなたたちの中に　私の愛する人もいる
あなたたちは　ブドウを運んでいる
ブドウの下には　リンゴを積んでいる

まわりの人たちは　愛する人と一緒なのに
私の愛する人は　ここにはいない
ああ　神様　私の愛する人を
風とともに　私のもとへ届けてください

――「ロザナ」はシリア北部の町アレッポとレバノンの港との間を運航した輸送船の名前で、第一次世界大戦中、オスマン帝国が自国の安いブドウやリンゴをレバノンの市民に売り、レバノンの商人や農民に打撃を与えた。それを見かねたアレッポの商人たちがロザナをレバノンに送ってこれらを買い取り、彼らを救ったという歴史的出来事に基づいているという。

離れて暮らす愛しい人のことを想い、自分のもとに戻ってくることを祈る恋歌である。以前の回に紹介したように、英国スコットランドにも「今夜私は眠れない／大切なあの人が帰ってこないから」と歌われる子守唄があるが、民族や時代を問わず、歌い手のやるせない想いの受け皿となってきたのが、幼な児のつぶらな瞳なのだろう。今、戦火の中でもこの子守唄の歌声は、風と共に、愛する人のもとへ届けられているだろうか。

続く2曲の「アンズ」と「鳩」は、いずれも寝た子へのご褒美を約束する子守唄で、世界の子守唄の定番モチーフである。日本であればお餅や赤飯、スコットランドではウサギの毛皮やミルクが待っているのと同じである。

「アンズの実を摘もう」
ティティチ　ティティチ
アンズの実が　アンズの木に成っている
風が吹いたら
ヌーラに　アンズの実を摘んであげよう

――「ティティチ」は、特に意味のない、リズムを作るための言葉で、英語では「ジングル」と呼ばれる。ナーヘドさんによると、シリアの民家の庭には大抵、アンズやイチジクやブドウなどの果樹が植えてあったそうで、その実を寝た子（ヌーラちゃん）へのご褒美にあげるというのも、ごく自然なやりとりといえる。

「鳩をあぶって　ヌーラにあげよう」
ねんね　ねんね　寝てくれたなら
鳩をあぶって　ヌーラにあげよう
鳩さん　そんなことはしないからね
ヌーラが寝てくれるように
ウソをついてるだけだから

――「鳩のあぶり焼き」はちょっと残酷で、そのせいか、「鳩さん、そんなことはしないからね」と付け足しがされている。実際には、鳩が食用とされることはそんなに多くないそうで、ドキッとするような残酷さもまた、世界の子守唄の定番である。ちなみに、日本の「ねんねんころりよ」や「おろろんばい」にあたるシリアのあやし言葉は「ヤッラ　トゥナーム」だそうである。

まりつき唄

シリアの子どもたちはどんなことをして遊んでいたかというと、ボール遊びでは、女の子は

まりつき、男の子はサッカー。それから鬼ごっこは男女一緒に遊んでいたという。こんなまりつき唄もあったそうだ。

「私はいい子」
私はいい子
父さんと母さんのことが大好き
まりつきが上手
これ全部　ウソじゃないよ

――いかにも、少し大人ぶった女の子がすました顔で言いそうなセリフである。

小学校の教科書に載っているうた

以上4曲は、ナーヘドさんが生まれ育ったホムス周辺の地域で伝承された子守唄や遊び唄で、歌詞はアラビア語のホムス地域の方言だという。シリアでは、アラビア語の文字はコーランを記した神聖なものであるため、方言を文字として記録することはタブーとされていたそうで、方言で歌われる子守唄やわらべ唄、また方言で語られる昔話や世間話の類いは記録されてこなかったそうだ。

これに対して、歌詞が記されている子どものうたは、標準語のアラビア語で作られた、学校の教科書に載っている歌で、今回ナーヘドさんはその中から「兎」と「お母さん」を歌ってくれた。シリアの子どもはみんな知っている歌だという。

「兎」（スレマーン・ルイーサ作詞）
兎が何かにおどろいて跳ねた
私は隣で遊んでいた
光のように白い兎
果樹園を走り回る
稲妻のようにジグザグと
緑の葉っぱを探しているのか
波のように柔らかい兎の綿毛が
緑の草の上にふわふわ浮んでいる
私から逃げないで
兎さん　あなたは私の友だち
一緒に遊びましょう

「お母さん」（スレマーン・ルイーサ作詞）
お母さん　あなたは私のいのちの鼓動
愛のしずくで　私の心を満たしてくれる
お母さん　あなたは私のうた
あなたの祝福は　私の祝福
あなたの微笑みは　私をそっと支えてくれる
私は家の中で　飼われている小鳥
お母さん　あなたのキスは
私の一日に　光を与えてくれる
朝　私が目覚めると
お母さんは　私の髪を撫でている
お母さんのことが　私は大好き
お母さん　あなたのために尽くします

――いずれも、日本で百年前に創刊された『赤い鳥』に登場しそうな、動物への呼びかけや母親への思慕をモチーフとしている。ナーヘドさんが金子みすゞ研究に取り組むことになった淵源はこのあたりにあるのかもしれない。

ただし、標準語で歌われ、文字として記録されているこれら2曲の歌詞は、少し忘れてしまっていたのでネットで確認しなければならなかったとナーヘドさんは笑った。一方、方言で歌う最初の4曲は、文字として記録されていないためか、頭にしっかりと残っていたそうだ。

山本美香さんと「大きなくりの木の下で」

シリアと言えば思い出されるのが、2012 年 8 月に北部の町アレッポで取材中、戦闘に巻き込

まれ凶弾に倒れたジャーナリストの山本美香さんである。山本さんの追悼本『山本美香という生き方』(新潮社 2014)に、わらべ唄にまつわる次のようなエピソードが記されている。

1990 年代、彼女が初めて紛争地での取材をアフガニスタンで行なった時のこと。ある民家を訪れて、赤ちゃんを抱いた母親から話を聞こうとすると、突然現れた異国からの訪問者に母親は警戒していた。その時、山本さんはとっさに思いついて、「大きなくりの木の下で」を日本語で歌い始めた(身ぶりつきだったかもしれない)。すると母親はたちまち表情を崩し、笑い声を上げた。それから、赤ちゃんをあやしながら一緒に歌ったという。

おそらくそれ以来、山本さんは行く先々の紛争地で、また支援をおこなった東日本大震災の被災地でも、折に触れてこの「大きなくりの木の下で」を歌ったにちがいない。わらべ唄が民族や言葉の壁を越えて、人と人の心をつなぎ合わせる力を持っていることを、彼女は実証してみせたと言えるだろう。

石なご遊びの国際性

私の恩師、故藤本浩之輔先生が 63 歳で亡くなられる前の数年間、特に情熱を注がれたのが「石なご遊び」と呼ばれる、石や骨などで行うお手玉遊びの国際比較研究だった。日本国内各地はもとより、中国、ブルガリア、トルコ、ギリシアなどにも足を運ばれた。

トルコのアナトリア文明博物館では、紀元前 7000 年～5500 年頃の出土品に遊具か占具に用いられたと思われる羊の距骨があることや、紀元前 1200 年～700 年頃のレリーフに骨お手玉をしている場面があることを発見され、また現在も当地の子どもたちが石を使ってこの遊びをしていることを確認された。

「お手玉遊びは、世界にもっとも広く分布している遊びの一つであると言えよう。(中略)分布の世界性においても、伝承の歴史性においても、屈指の人類文化、すなわち、世界的無形文化財だと言ってよいと思う。注目すべきは、それだけの伝播・普及や伝承が、間違いなく子どもたちの力に負っているということである」(藤本『遊び文化の探求』久山社 2001:34 頁)。

「世界子ども文化フェスタ」をシリアで

シリアは、藤本先生が訪れたトルコの南に隣接する国である。そう思って、この石なご遊びを知っているかどうか、ナーヘドさんに尋ねてみた。するとやはり、シリアでも女の子の遊びとして 5 個の石を使ってやっていたという。

私自身が子どもの頃、岡山県北部の田舎町で「ごいし(五石)」と呼んでいた石なご遊びのやり方をナーヘドさんに説明すると、「おんなじです！」と答えてくれた。シリアの子どもと日本の(しかも中国山地の片田舎の！)子どもが、同じ遊びを同じ材料(石)、同じルールでやっていたとは、なんと愉快な話だろう。

いつかシリアの地から戦火や銃声が消えた時、祖国に戻ったナーヘドさんたちが中心となって、世界の子どもたちが集まり、わらべ唄や遊びを一緒に歌い遊ぶ「世界子ども文化フェスタ」をこの地で開いてもらうことを提案したい。

「6年前の来日後、一度だけ、2年前に帰国しました。その時に見た光景は、テレビやインターネットを通して想像していたイメージをはるかに超えていて、言葉を失いました」。こう語るナーヘドさんの、祖国シリアの平和への祈りが、いつか叶えられますように。そしてまた、「世界子ども文化フェスタ」が実現する日がいつかきっと訪れますように。

あぁ、結婚！

―婚活日記―

第5回

黒田長宏

＜11月30日＞　東京の婚活のほうで2人めの申し込みがあり、勘違いして私が応募した中で反応があったのかと思い、いよいよ見合いかと思ったが、応募していない相手からの申し込みだった。それはとても光栄で有難い事なのだが、実子を諦めきれない私は、その人が47歳という年齢から、妊娠出産がかなり難しい年齢だと判断して、申し訳なく残念な気持ちながら、断った。私が断られているのは既に330人を超えていると思うが、こちらから断るのはなんとも嫌な気持ちがした。しかし、それでも実子を諦めず、達成のために、めげずにチャンスを応募を続けながら待つ。

＜12月3日＞　繊細な話なので具体的に書きすぎないが、婚活会社から連絡がきて、私が応募していた人で、実は大きな病気をした後だけれど、それでも良いなら相手に伝えるというのが来た。とても美人であったが、そのわけありが私の器量では支えきれないと思い、お断りした。なにかしんみりしてしまった。これで3人、この婚活で交錯しながらも、お断りになってしまった。私が断られたのは、350人は超えているにしても、3人でも申し訳ないような気もする。しかし仕方がない。

＜12月10日＞　久しぶりに県のほうでやっている婚活に行った。38歳までの希望を40歳までにして、独自のそこのルールに則って3人選べた。そのルールの規制緩和を担当者にお願いしたが、会議で難しいらしいのは聞いている。ネット婚活のほうはコツコツやるしかないが、断られた数が増える増える。

＜12月15日＞　この時点でネット婚活で断られた人が730人を超えたが、それもショックだが、出会いが成立してしまうと一人につき5千円。キャンセルだと1万円のペナルティーがあるのだが、これだけ応募すると、成立が重なると出費が莫大になるのがまるでギャンブルのようである。しかし多数応募しないとこのざまなのだから、今日も数十人応募を加えた。しかし、よくそんなに応募できると思う。かなりの八方美人だとしか思えない。赤い糸とは一体なんなのだろうか。

＜12月19日＞　タブレットからメールを開くと、見合い成立となっていた。パソコンのほうにパスワードを入れてあるので、急いでパソコンに向かうと、なぜか、私は日本人で子供なしの人に応募してきたのに、中国人で16歳の娘のある人からだった。間違えたのか。規則でキャンセル料金が発生するのだが、キャンセルしかなかった。うかつだったのか。衝撃的である。キャンセル料金も安くはないが、値段を提示する勇気がない。提示したら衝撃度は大きいだろう。婚活会社に連絡しておいた。あと1時間ほどで銀行があくから、仕方ないがキャンセル料を振り込む。どうしてこういうことばかり起きるのか。辛いが生きていかねばならない。婚活会社には、ネットにて、プロフィールの書き直しを伝え、新規会員に何人か応募した。正直初婚の人がいいが再婚の人も応募した。

＜12月19日（2）＞　銀行からキャンセル料を振り込み、がっかりしながら縁側で新聞を読んでいると、茨城新聞の連載、『婚難の中で』の4回目があり、大手メーカーの26歳の若者がFacebook 連動の婚活サービスに登録したところ、2時間経過しないうちに連絡がきて、半年間で約100人とマッチングしたら14人くらいに会えたという。7回も会えた人もいるが、交際には至らず、今は職場の人と交際しているのだという。私に起きている現象とは立場も相まって、天と地ほどの差がある。私はまだ半年にはならないが、700人以上応募を断られていて、一人も会っていない。立場の違いもあるが、26歳と50歳の違いと、申し込む異性の違いもあるだろう。妙なタイミングで情報はやってくるなと思う。しかしどん底のような展開だが、3ヵ月もこれからあれば、変化もみられるかも知れないと思ったりしている。ある程度楽観的でないとやっていられないし、事実、50歳どころか、30代で結婚を諦めてしまっている人は多いだろうと思う。なんだかそういう話を聞いたりする。私は諦めない。わざと悪いことをしたわけではないし。婚活会社からキャンセル料を都合してくれないかとさえ思っているところ。

＜12月19日（3）＞　婚活会社にメールだとこんがらがるので、電話したら社長が出てきて、そのケースだと成立になっていないからキャンセル料払わなくて大丈夫との事。振り込んでしまったのは、月々の会費や、成立料で調整してもらうことで了解を得た。良かった。ちょっと神経を使う金額だったのだ。今後は相手のプ

ロフィール確認には気をつけよう。コミュニケーション能力の高い社長なので助かる面もある。

＜1月6日＞　11月15日に老人ホームから祖母が心肺停止になり救急措置で心臓が戻り、近くの病院に運ばれて、それから50日が過ぎるが、酸素吸入と栄養は点滴からで、ほとんど目をつむっているが、目を開けることもあり、母は毎日訪問している。私も休日に病院に行き、大変である中、もうネット婚活は800人には応募したかという今日、スマホに連絡が入り、パスワードをパソコンにだけ入れているので、今度はなんだろうと開くと、わけありの人だが、それでも良ければ手続きをするかも知れないというような内容で、私はそのわけありに関しては気にしない条件だったので、会えるなら会いたい旨を伝えた。今朝は、『崖っぷち高齢独身者』(樋口康彦)という新書を少し開くと、40代で崖っぷちとタイトルにあるように、50歳ではもう無理だくらいの勢いで書かれていて衝撃を受けていたところなのであるが、平均的にはそうだろうが、平均と違うセンスの人もいるので、少ないチャンスを大事に出来れば良いなと思っているところである。

＜1月13日＞　14日の朝に綴っているのだが、昨日は勤務の昼休みの12時20分頃に、母の携帯に祖母の容態を尋ねたら、数値が安定していて大丈夫だとの事で、峠を越したかと思い、勤務に戻ったところ、母から連絡が来て、ほぼ1時に容態が急変して祖母が死去したとの事。90歳と大往生ではあるが、昨年11月15日に心肺停止から吹き返し、入院していた病院での死去であった。婚姻後3日で出ていってしまった元妻と面会したことがあったが、その頃はだいぶ弱っていた。どれだけ認識できていたのか。家とその存続を強く願っていた世代である。私はマッサージをしたり、闘病中も付き添えたとは思ってはいるが、離婚から離婚裁判の3年の歳月は、いまだ婚活をしている50歳の私として、祖母の期待に応えられなかったのは、悔いにしかならない。休憩時間にかけただけではあるものの、容態急変前に電話するタイミングに霊があるような気もした。告白が出来ず、ネット婚活などをしているが、結婚出来たら良いかも知れないと思うような人が、なぜかその日は私との業務との兼ね合いで少しあちらから来たようなタイミングがあったような気もしたり、精神的にも浮揚した気も受けた。勤務は最後まで通して、もともとの休日も含めて4日間の連休を勤務先に告げたが、帰宅すると親戚が集まっていて、母が近所2人と農協の葬祭部とでほとんど取り決めをした後だった。私は喪主になるが、喪主は飾られているくらいで良いと周囲から言われた。母が一番ダントツに介護したのだから母がなれば良いと思ったが、既に取り決め、ちょうど厳冬のさなかでもあり、72歳の母でもあり、元気には見えるが、疲れるのかも知れないし、私がやる。だが、時代が変わり、農村部も核家族化して、部落内の葬儀手伝いの簡略化、農協の人たちに葬儀の手伝いの、部落がやっていた面を委託するくらいで、勤め人の部落の人は休まなくても良いようにした。ほかの家はもっと簡略化して、香典だけのところもみられている。4連休もなかなかないが、親戚が来て、気は遣う。それが休みのようで休みではない。葬儀の翌日もできれば休んで5連休にして、5日めはこっそり偲びたかったが、90歳という年齢もあるのだろうが、偲ぶという気でもないが、目が冴えて寝付かれず、祖母との事や、結婚出来たらどうなのだろうというような職場の看護師さんのことなどを考えていた。告白ができないというのは、アメリカでセクハラ問題がおき、フランスの女優たちが、逆に、男からのアプローチも必要面があると物議があるらしいが、複雑な気がする。もうネット婚活では800人には振られただろうか。そんな状態なのに特定のときたまに顔を合わせる人に頼めるものなのか。出来そうにない。

＜1月15日＞　祖母の死去から葬儀までの4日間をあと3日残しているが、昨日だけでも親戚近所の大群で疲れてしまった。日頃の私は、付き合いもせず、DVD や映画やネットで気ままに一人で休日を過ごしているので、他人たちに揉まれると頭脳が渋滞してしまう。だがそのきつい中で、考えさせられることや有難いこともあり、こうした冠婚葬祭のようなとき、特にあっては欲しくはないが、葬儀というのは、親戚近所の人にしても、当人たちは特に強く意識もせずに言ったり行為したりしているだけだろうが、これはどういう意図で言ったのかなど、どうも私は悪気にとってしまう傾向もあり、自分の至らなさに詰まりそうになる。さらに世話してもらわないとなされないイベントなのだから、それが負い目のような感じである。事実上は、72歳になる、親戚近所付き合いが普通にできる私の母親が支配していて、私は喪主といっても飾りのようなもので、親戚近所がそれぞれ談話している中をぽつんとしていたりするのだが、その中でもちょっと普段話が途切れていた関係が、こういう時には頼りになってくれたりと、感じさせられる。ただ、このところ家族葬などが多くなったり、個別化、密葬化しているのだという。それに、私は農家に生まれながら生産主体となるのを手放している人間のために、農家の収入が比較的潤っていた時代の最後のような残渣と、現在の経済的苦境気味のところとの狭間で、農家の多い、ベテランの親戚の感覚との微妙な関係、90歳だったという祖母の時代の継続というところでも、整理して文章化できないが、世間的にも、こうした農家的、しかし、公務員や大企業またそれに近いような集団で同じような感じが移動したのかも知れないが、そうした形態から、個別的、密葬的に、経済的事情も絡んで、悪く言えばしがらみや揉み合いのない方式を好んで来ているのかも知れない。ただ悪く感じたらそうだとしても、その裏面の良さもあるように思うから、それが文章にできないところが私の壁なのだろう。◆およそ15軒の近隣が、帳

場の手伝いをしてくれる仕組みだったのだが、実はその間に家族葬が2軒初めてのように起きたのだが、その帳場を葬儀業である農協の葬儀部門に依頼した。近所の人たちは、「改革したな」と、賛否の考えは言わずにそう語った。特殊な数少ない日なのだから勤め人をしている人は休みをとってもそれが集落という集団の結束のような、感じ入る事が起きたかも知れないのにという意見もあるかも知れないが、給料を実際もらっているところに、都合をつけるのは気が引けるものである。私自身が気楽に近所と葬儀のような場でいる気持ちのタイプではなくなってしまっているためもあり、一日半、またはまる二日にもなっていた、葬儀の手伝いは業者という新たな形態に任してしまうという変化は悪くないのではないかと今でも思う。◆農協というもともとは農家の互助会のような組織も、大企業家され、細分化され、職種の転換はあるのだろうが、葬儀担当者はまだ20代前半にみえるくらいに若いのに、送り人を仕事にしていて、それもだんだん高齢化も集中していたが、だんだん少なくなるだろうし、先行き明るい部門ではないようだし、民間の葬儀社は格安で家族葬などでやってくるしと、私が喪主なのに、母親と近隣の相談で勝手に、従来の農協にバックアップしてもらう方式をとったため、驚くか驚かないか世間を私は知らないのだが、経費が150万円以上になるのかなというような大イベントである。経済的に困っていないほうの農家の親戚近所などの数によって、埋め合わせしたり、貯金が大きく切り崩される大仕事である。戦後農家などは貧困農家の時代から機械化農業化し、昭和の後半あたりから平成はじめころも続いていたのか、実業家のような面を出していて、死んだ父親などは立派に農業収入を得ていたが、さらに土方もしていた。私から思うと段違いの働き者であったが、それを継承できている人もいるようだが、農業を親に任せて都会の勤め人になってしまっている人もいる。私の所属している集落はなぜか特殊だと思うが、親は近くの人なのだが、次男その後の人が数組流入している。その人たちも念頭にあって、手伝いは農協へ移行という改革も考えられたのだが。◆祖母はしっかりしていた時は一番、家の存続、私の結婚を望んでいたのだが、せっかく最晩年に結婚したらスピード離婚から裁判3年の間に衰えていき、それでも生きているのがやっとくらいになってしまったので、心配の言葉も出せなくなってしまった。それでも、ネット婚活を叔母にみせて騒いでいたら、「うるさいよ」と本当に後にも先にも久しぶりに祖母が発声したことがある。祖母がネット婚活をしていたのがわかっていたからかは定かではないが、叔母のほうでも高齢未婚者がいて、私が50歳未婚でこうした事を祖母の前でしていては、不甲斐なさすぎて、奇跡的に怒ったのかも知れない。心肺停止からおよそ2か月、一時は自力呼吸まで回復した超人的な人だった。母はその2か月一日も欠かさずに病院まで見舞いしてしまった。入院前には排泄は当然だが介護はすべて母親がしていた。親戚は祖母から解放されて母が気が緩んでボケてしまうのではないかと心配していたが、複雑だったが、母親には内縁者がおり、大丈夫ではないかと思っている。ただ、激寒の時期なので親戚近所も高齢者が多くなり、普通に気をつけなければいけない季節でもある。◆核家族、個人主義的に気ままに生活したい現在の男女が、農家のような親戚近所との絡み合いがある家族に行くのは重く感じる人もいるかも知れないし、企業生活で同じような揉み合いの中にいるなら意外に大丈夫なのかも知れないが、私は諦めが悪いからまだ婚活を続けるが、周囲の人たちは、全国的にそうなのかも知れないが、結婚しないまま50歳を超えた人は何人も見受けられる。30代には諦めてしまっていたのかも知れないと思うが。◆まだ折り返してもいないし、今日は納棺なのだが、祖母までは母の徳で、自立力ないまま幾つかの家族への葬儀に参加してきたが、この後は母のいないところで母を見送る必要が私にはあり、母そのものの徳が、葬儀参加者はあるだろうが、私への思いというところでの面では非常に下がる気がしてならず、そう思うと、他者たちを悪い人のように思っているようで、さらに私の心が悪質なのかも知れないが、葬儀はそういう面から厄介だと思ってしまう。ところが、人付き合いのできる人は、人の集まりがまるで葬儀においてでさえ楽しめるような気がしている気さえする。この場合、祖母が90歳という、長寿で祝い事と捉えても良いくらいだという緩和条件はある。これが20歳くらいの人の葬儀だと感覚は違っていただろう。細かいエピソードはまだあるが長くなりすぎた。この間、伯父叔父たちなどには、結婚は諦めていないから、良い配偶者を得て立ち直ると、空元気みたいに言った。ただやってもらっているにも関わらず、他の葬儀に私が他人に対して何かしてあげられるかというと、そちらのほうが怖い気がする。その面の記憶の喪失は人間として怖いところなのだろう。

＜1月18日＞　15日は祖母の葬儀の喪主中で神経質になり、沢山書いてしまった。昨日葬儀を終えた。昨日の納骨の時だけ涙雨となってしまった。この間、ネット婚活で会えるかも知れないと思っていた人からキャンセルが来てしまった。きっと後から私より条件の良い人が出てきてしまったのだろう。この仕組みだとそんな気がする。久しぶりにだいぶ語り合った伯父には、事情を説明すると、勤務先にいる看護師さんや介護士さんにアプローチ出来ないのかと言われたが、出来ないのである。結婚できるできないは、アプローチできるできないの差もあるかも知れない。きっとネット婚活のような800人を超えても断りばかりというのとは違う事になる気がする。従妹に、16歳違いの結婚も幾つかあるよと慰められた。

＜1月20日＞　重複もあるのかも知れないが、3つのネット婚活合わせて1060人もの女性に断られてしまっていた。800人どこ

ろではなかった。それでも続けるが、2つ考えていることがある。1つは職場が病院なのだから女性スタッフは多く、結婚対象になるのではないかという年齢やルックスの人も幾人かいて、その人たちをみるたびに、告白というか、アプローチ出来ないなと思うこと。出来ないからネット婚活なんてしているのである。ここに1つの問題提起がある。あと1つは昨夜に結婚相談所にメールしたが、800人（だと思っていた）に応募してもだめなら、ピンポイントで、今までの応募して却下だけではない、プラスした何らかのアプローチができないかという相談を提起した。具体的宗教名など書くとマガジンに載せられないかも知れないが、極端に言えば、統一教会などは会ったばかりの人と結婚しても生涯そこそこ夫婦になってしまう場合もあるらしい。そうしたピンポイントでやれば、例えば、普通の恋愛でもいったん振られても、またアプローチすることで結婚に至る場合もある。極端なのはドラマ『101回目のプロポーズ』のようなコンセプトだろうが、今のネット婚活では一回振られたら終えるのである。そこを結婚相談所に提案してみたい。

＜1月21日＞　県でやっている婚活のほうの通知がきて、3人ともダメだった。若い頃や条件が良い場合には良いが、私のような条件が悪い人だと、数が少なく、これで1か月費やすから、これだけでは成り立たないと思っている。ネット婚活も1000人を超えてもだめだが、3ヵ月だから、1か月で100倍のスピードが出せる。だが、ネット婚活のほうの社長に、ピンポイントでできる方法はないかと提案した。

＜1月29日＞　1000人応募しても駄目なのに、昼に応募したばかりの人と2時間か3時間後にメールみたら、面会承認がきてしまった。どうしたらいいか婚活会社にメールすると、都合の良い日時を3つばかり報告してくれとの事。葬式の疲れも出たのか、インフルエンザ B 型になってしまい、数日勤めも休んでいて、今日も名残はある。だが、これはチャンスである。もっと大事に考えないと。

＜2月2日＞　はじめて4ヵ月か。1000人応募してようやく1人めの見合いが9日に決まった。ただ、東京の新宿まで行かねばならず、翌日は仕事である。夕方の待ち合わせである。ちょっと辛いが、そうは言っていられない。15歳年下の人なので、婚活によっては、年齢制限をしてしまっているところは、15歳差などは最初から排除されてしまう。だから年齢制限が関係ない人もいるという証明になると思う。亡くなられた地井武男さんが、再婚の時に、助けて欲しいと言ったそうだが、私も同様の気持ちである。

＜2月9日＞全国的なお見合いのネットワークに加入して初めての面会になった。1000人でようやくである。しかしネットを使っているのと規模の大きなお見合いの団体でようやく可能になったのかも知れない。お相手と自己紹介のような感じで2時間近くカフェで話した。またお会いしてもらえることになった。

＜2月12日＞　2月9日分も12日に書いたのだが、婚活会社を経由して相手の携帯電話番号を交換となり、電話番号からのショートメールというのか、それで通知した。簡単に帰ってきたが、次回に会うための連絡は通じている。年齢が15歳も違っていて私のほうのハンディキャップは大きいが、頑張るしかない。この婚活会社の仕組みが私にとって大きな援助だと思う。これが無かったらもっと婚活のチャンスは無いと思う。私が婚活適齢期だったら県単位の見合いの制約があってもなんとか会えるかも知れないが、ハンディキャップが多すぎるようになると、相手の数の多い全国的なところが有利かも知れない。それに多様な考え方の人が増えるから、年齢が離れていても会ってもらえることがあるのは証明できた。ただ、田舎の良さをアピールしたりと、そういうことはしていた。

＜2月16日＞　婚活のお相手と2度目にお会いしたが、とっている新聞がやたらと宣伝していて関心があったので、国立新美術館で開かれているビュールレ・コレクションに行き、ルノワールや、セザンヌやモネなどの作品をみた。プライバシーで詳しくは書けないが、場所が場所だけに奮発した面もあるが、そうでもしないとと思うところもあった。それもあってか、今のところ3度目もお会いしてくれる雰囲気である。お相手を待っているときに、乃木坂駅のトイレでとても驚き、生涯で一度だけだろうが、トイレでうつ伏せに倒れている人がいて、駅員に伝えると救急を呼んであるとの事。4人きて、担架に運んでなにかしていたが、意識はないようで動きが無かった。とても倒れそうもない大柄で精悍な人で、消防士が36歳と言ったのが聞こえたのでそうなのだと思った。まさか、婚活の大事な時に、若い人がヒートショックなのか不整脈なのか倒れて意識不明になっているのに遭遇するとは、日頃は家でビデオや読書で一日を終えるのに、こんなに違う日もあるのかと驚き、倒れていた人がかわいそうで、50歳にもなってこうしている自分はいいのかとも思ったが、精いっぱい頑張っていると思う。ただ、50歳はおろか、30代で結婚を諦めている人もいる気配で、どうしてこう難しい時代になってしまったのかと思う。2月2日に書いた、地井武男さんの話もお相手にしたが、印象に残ってくれただろうか。対人援助学をまだ私は把握していない不届きものだとは思うが、救命の4人も命に関わる対人援助だろうし、婚活の会社もれっきとした対人援助だと思う。そして婚活の相手には私を対人援助してもらいたいのだが、成就するのがとても大

変だ。お相手には最初の結婚がスピード別居から離婚裁判の最終局面まで行ったという大失敗も話してしまった。倒れている人をみたのも含めて、帰宅してこうして記録を書いているが、少し虚脱感がある。

＜2月19日＞　個人所有のための日記と違い、こうした公的な場での文章にはどこまでも書くには限界があると思うのだが、元妻もひどかったが、婚活する人たちはなんだかんだ一癖二癖あるのか、婚活相手が変なのは、なぜか某サプリを契約してくれないと婚活が続けられないという。不信に思ったが、婚活を続けたいので16日に契約したが、某サプリ会社から連絡が来て、住所確認というところで、受注者の名前が婚活相手と違っていたため、不信に思い、婚活相手のラインに通知したところ、その人は社長で私は社員だというのだが、これは問い合わせするのを忘れたが、婚活サイトには、自営業と書いてあったので、なんだかわからない。こんな不思議な人なのだが、1000人に1人でようやく会えた人なので、私のほうでは足元を見られようが仕方ない面もあり、また会ってこの件は解説して欲しいとしたら、多分了承した模様。元妻は精神不安定だったが、今回の婚活相手は、なぜかサプリ契約にこだわり、詐欺かよとさえ思ったりする。一体私の婚活はどうなってしまうのだろうか。

＜2月21日＞　以前ネットから大ヒットした『電車男』なんてのがあったが、あれは匿名性が強かった面があり、私の婚活事例は匿名ではないので書きにくい面はあるし、だがお相手とトラブルが残るような事は書かないように慎重に書いているつもりだが、何事も当然かも知れないが、婚活は個別的、特殊的事情が生じ、記録しておかないと忘却してしまうようなところに大事な面がある。そんな特殊なところに普遍性が垣間見れれば良いと思い、婚活は、茨城新聞が婚難として連載しているように、とても高齢化すると大変になってしまうところは主張できれば良いと思っている。昨日、メールにて、婚活相手とどうしてサプリにこだわるのかという協議をして、27日に某サプリメントの商品説明会があるからランチの後に一緒に出ることにした。ちなみにそれはＡムウェイというところではない。だいたい、婚活のネットに、一緒に健康を追求してくれる人と付き合いたいと書いていた人だから、お相手の望みをかなえていると思うのだが、それを私は商売に婚活を使っているのではないかとお相手に抗議したわけである。そうしたらメールで利用してないと言う。お付き合いの条件がそれなんだと言う。私自身がこの後どうなるかさっぱりわからず、ドラマ的に面白い展開かも知れないが、本人としては苦しい状況である。だいたいそのお相手が4か月で1000人応募してようやく会ってくれた最初の人である。このお相手の次はいつになるかわからない。もう私は50歳と8か月になってしまっている。45歳以上や体質に特徴のある人や外国人を含めたら数人私のような者でも応募が来たが、私は実子にこだわりが残り、そのこだわりがなければお会いしても良い人もいたが、残念ながらお断りせざるを得なかった。今のお相手はようやくどうして私を選択しているのかいまだにわからないのだが15歳年下で実子を得られる可能性は比較的あると思っている。だが、婚活なのに、結婚に関しては強くアプローチ出来ないと心理が働いてしまう。あまりに私の立場にハンディキャップがある。対人援助学マガジンは3か月感覚だから今回は祖母の入院と死去。6年ぶりのインフルエンザ（今回はＢ型）。急に現れた婚活相手とかなり激動な回になってしまった。これは私が演出してできることではもちろんない。私の人生のタイミングとして現れた。こうした出来事を記録し、読んでいただける事はありがたい。私の気持ちには、結婚はこんなに大変で、どうしてこんな大変な事が出来た人たちが離婚してしまうのかという一連の主張がある。だから書かせていただいている。個人の影響は社会からの影響から左右されると私は思っているからだ。この私の実話が『電車男』のように大ヒットして、対人援助学会に多額の潤いをもたらすとはとても思えないが、トラブルがないかぎり、婚活のお相手と再びお会いするのは27日で、締め切りを超えてしまう。続けるのは物理的に不可能でもあり、その後の展開の発表は次回にさせていただきたいと思う。ただ、まったくお相手がいない状況からすると、どうなるかという不安の苦しみも生じるが、お相手がある状態というのは刺激はあるという事である。交際相手がいるいないとでは日々の感受性も人生もずいぶん違ってくるのだろう。

〔PBLの風と土　第4回〕

基本は急がば回れの学びでも時に近道を

山口 洋典（立命館大学共通教育推進機構准教授／オールボー大学人文学部コミュニケーション・心理学科客員研究員）

【前回までのおさらい】

2017年4月から1年、デンマークのオールボー大学での学外研究にて、全学でPBL（Problem-Based Learning）を展開する教育実践に関心を向けています。第1回では歴史的・文化的背景を、第2回ではPBLの類型を整理し、プロジェクト型の問題解決学習PO-PBL（Project-Oriented Problem-Based Learning）に着目してきました。

連載第3回ではPBLのカリキュラム・デザインを紹介しました。そしてPBLは学生の学びに効果的「である」というより、教員の指導・監督により効果的「にする」ものと捉えていくことが適切だと明らかにしました。

1. 学習では洞察と試行錯誤との区別を

デンマークのオールボー大学での研究生活も、残りわずかとなった。29号から連載を開始した本稿も、今回で4回目を数える。シリーズタイトルを「PBLの風と土」と命名したとおり、この連載では、1974年の開学以来、全学でProblem-Based Learningを展開してきているオールボー大学に根差す学びの風土に迫ってきた。今回は、PBLの学びのプロセスを効果的にするためにはどのような科目運営が求められるのか、スーパーバイザーの存在と機能に焦点を当てる。

そもそも、学外研究にあたって、筆者が掲げた研究課題は「参加型学習における問題解決活動と教育実践の相即にかかる理論的・方法論的アプローチ」であった。相即とは聞き慣れない言葉かもしれない。仏教語としての意味もあるものの、2つの物事が密接に関わり合っていることを意味する。英語を充てるならば「interbeing」が相応しく、相互作用と捉えて差し支えない。

本連載の読者であれば、手段と目的とを区別すること、また手段と目的とを混同しないことが重要であることは十分に理解が及ぶのではなかろうか。手段と目的の関係については、20世紀初頭にドイツで生まれたゲシュタルト心理学の中心人物の一人であるケーラーが、チンパンジーを研究対象として、回り道、道具の使用、道具の制作等の洞察を表す行動を示すことを明らかにしたことを想い起こして欲しい。洞察とは、ただやみくもに何かを行う試行錯誤と対比される。したがって、洞察の過程を通じて、道具はある目的を達成するための手段として用いられるのである。

しかしながら、参加型の学習においては、時に学習者の主体性を重んじるために、また主体性が喚起され発揮され続けるために、洞察よりも試行錯誤を促す場合も、よく見られるように思われる。もちろん、そもそも洞察と試行錯誤とは異なる営みであり、その両者に絶対的な優劣がつけられるものでもなく、つけるべきものでもない。しかし、ただやみくもに活動するだけでは、問題解決はもたらされないであろう。そこで前号でも予告したとおり、2017年11月15日に筆者がオールボー大学の文化心理学研究センターによる「キッチンセミナー」で話題提供をした内容を踏まえ、参加型学習において問題解決を重視するにあたり、特に教育者が学習者をどのように指導・監督するのが適切か、スーパーバイズの方法論を述べていく。



図1：2017年11月15日のキッチンセミナーの様子（筆者撮影）

2. 学びのステップをはしごに見立てる

PBLにおいて教育者が学習者をどのように指導・監督するか、この問いを素直な表現に言い

換えるなら、PBLでは教員は学生にどう関わっていけばいいのか、ということである。もちろん、この問いは前掲の研究課題に深く根差している。研究課題についても素直な表現に言い換えるなら、いわゆるアクティブ・ラーニングは大人数講義による古典的なレクチャースタイルと何が違うのか、ということになる。さらに言えば、アクティブ・ラーニングにおいて、教員が学生をアクティブにさせる固定的な役割を担うのではなく、学生がアクティブになる学びの場を教員が創出・維持・発展（そして終了時には解消）するためには教員にどのような素養が求められるのかを明らかにしたい、というのが筆者のデンマーク滞在中にあたっての問いであった。

中でも、Mogens Jensen准教授には、学外研究の開始当初から、筆者の問いを丁寧に扱っていただいた。本連載の第1回でも記したとおり、オールボー大学およびJensen先生とは、サトウタツヤ先生（立命館大学総合心理学部教授）が縁を結んでくださった。複線径路・等至性アプローチ（TEA）の理論と方法論の構築者の一人であるサトウ先生は、2014年4月、その理論の根幹をなす等至性の概念を提唱したJaan Valsiner教授の転籍先であるオールボー大学を訪れた際、PBLが積極的に展開されていることを知った。（本マガジン19号のサトウ先生の連載を参照されたい。）そして、筆者の学外研究にあたってはオールボー大学としてはどうか、と助言をいただいた結果、2016年7月、横浜で開催された国際心理学会にオールボー大学からJensen先生と意見交換することができ、客員研究員として滞在したいのであればJensen先生が受入担当になってもよいということ、さらにはPBLを研究対象にするCasper Feilberg 先生にも受入担当を依頼しようと調整をいただくことになったのである。

学外研究中、筆者は受入担当教員らと月1～2回の程度のリサーチミーティングを行ってきた。開始早々の4月21日、Jensen先生がご自身の教育実践を紹介される際、実践家と共に行う教育の「trappestigen（step ladder／はしご、踏み台、脚立）」というモデル（以下、PBLのはしごモデル）について紹介いただいた。これはもともと、Jens Rasmussenによる『Information Processing and Human-Machine Interaction』で示されたモデル（図2）を、Jensen先生が博士論文執筆の際に再構築したそうで、問題探索、情報収集、シナリオづくり、到達点の再検討、活動の選択、実現可能性の検討、実際の活動を通した問題解決、という流れを取っている（図3）。この日はこのモデルを前提にし、グレゴリー・ベイトソンによる『Steps to an Ecology of Mind（邦訳は「精神の生態学」）』で示された3つの学習段階に即して、学びの場に関しての意見交換を行った。

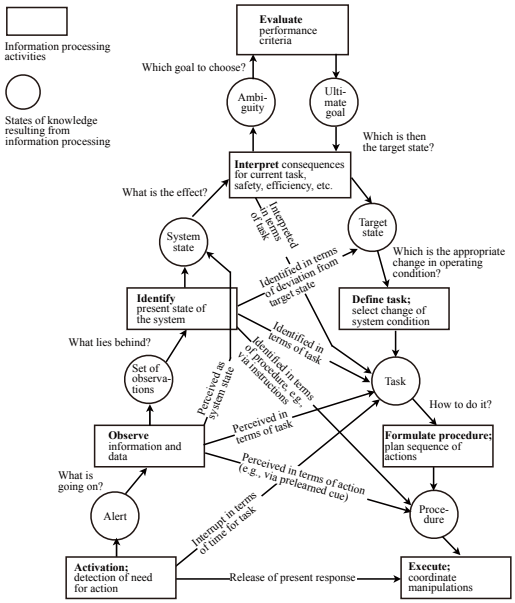


図2：The decision ladder template
(Rasmussen, 1986)

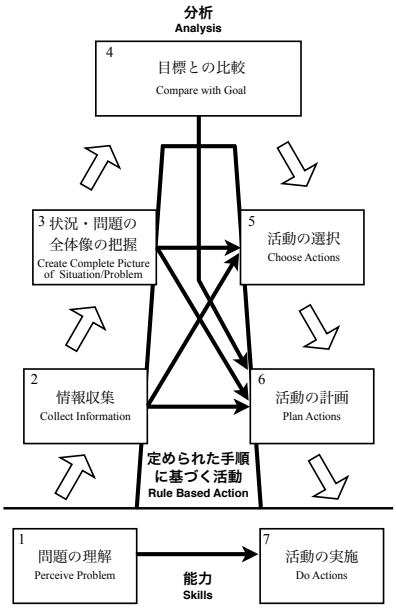


図3：PBLのはしごモデル
(Jensen, 1991を原著者が英訳し、筆者が邦訳)

このモデルに深く関心を抱いた筆者は、その後、6月16日と22日のリサーチミーティングにおいて、このモデルの理解と、日本における筆者の実践への援用可能性を探っていった。特に22日には、PBLでの指導・監督について逡巡する場面に直面することが多いというHanne Bruun Søndergaard Knudsen先生も交えて、PBLのはしごモデルを通して、プロジェクト型の問題解決学習において、教員がいかに指導者として立ち居振る舞うのが適切かについて意見交換を重ねた。子育てをテーマにしたPBLの指導・監督をしているKnudsen先生は、子育てをしたことがない学生たちであっても、自らのこども時代を振り返り（reflect themselves, down to the layer ）、何が問題であるのかを定めることに時間を掛ける（formulate the problem, so much time ）、そのために教師ではなく指導者として自らの関心へと仕向けない（no control by institution, in different ways）ことが大切だと、実体験から語ってくださった。この点について、Jensen先生は「現場は問題を抱えている」という前提で臨むのではなく、目の前に起きている現象やそれらの行為をもたらしている習慣を説明できるようになること、その過程で理論的観点を深めることができ、そこから未だ気づいていない前提を問い、結果として解決すべき問題が定められると、一連の「はしご」を登って降りていくメタファーで捉えられる学びのモデルを説明してくださった。

3. PBLとサービス・ラーニングの混交

筆者の研究が大きく動いたのは、9月8日のリサーチミーティングだった。この日、サービス・ラーニングにおける学びの軌跡に着目した筆者の研究を紹介した。PBLのはしごモデルに照らし合わせると、なぜそのような軌跡を辿ってしまうのか、さらには好ましくない方向へと向かう場合に教員はどのように学びのコミュニティに向き合い、関わればいいのか、その視点が定められると捉えたためである。ちょうど、アイルランドのゴールウェーのアイルランド国立大学ゴールウェー校で開催される国際サービスラーニング・地域貢献学会（IARSLCE2017）の2日目（9月15日）に、山口と河井（2016）でまとめた研究を、さらに実践の現場との関係性に着目して発表することになっていた（Yamaguchi, Kimura, & Kawai, 2017）。この日、Jensen先生との対話では、大学に入学する学生が社会問題を「持っている（have）」ことが稀で、社会問題は学習を通して「扱う（treat）」ことが多い、という状況は、デンマークでも日本でも変わらないことが確認できた。

そこで、2018年2月にアメリカ・カリフォルニア州のサンタクララ大学で開催される国際PBL会議（PBL2018）にて、筆者を筆頭者としてJensen先生とCasper先生の3人で、デンマークと日本との比較研究を発表することを提案した。鍵概念とするのは、サービス・ラーニングにおける活動（サービス）と学習（ラーニング）のバランス（Sigmon, 1994）と、PBLのはしごモデルである。立命館大学のサービス・ラーニングでは、現象の中に身を置いて、ものの見方を豊かにし、理論と実践のバランスを整えるだけではなく倫理観の高い人間となるよう促すことで、よりよい未来のための人格形成がもたらされる、というステップが求められる。一方で、連載第3回で詳述したように、オールボー大学の心理学分野でのPBLでは、ではあくまで専門性の習得のために、セメスターごとのテーマに添って、着実なプロジェクト展開が求められる。

表1：シグモン(1994)による活動と学習の類型
（項目のラベルを追加の上で筆者訳）

型 type	様式 style	学びの構造と状況 learning structure/situation
sL	service-Learning	学びの目標の達成が優先、活動の成果は副次的 Learning goals primary; service outcomes secondary
Sl	SERVICE-Learning	活動の成果が優先、学びの目標の達成は副次的 Service outcomes primary; learning goals secondary
sl	service learning	活動の成果と学びの目標の達成が極めて分離 Service and learning goals completely separate
SL	SERVICE-LEARNING	活動の成果と学びの目標の達成が等価であり全ての関係者が双方を促進 Service and learning goals of equal weight and each enhances the other for all participants

立命館大学サービスラーニングセンターによる全学教養科目「シチズンシップ・スタディーズI」では、活動と学習の進展にあわせて、学びのコミュニティに何らかの変化がもたらされる中、惰性的進行、拘泥的進行、回復的進行の

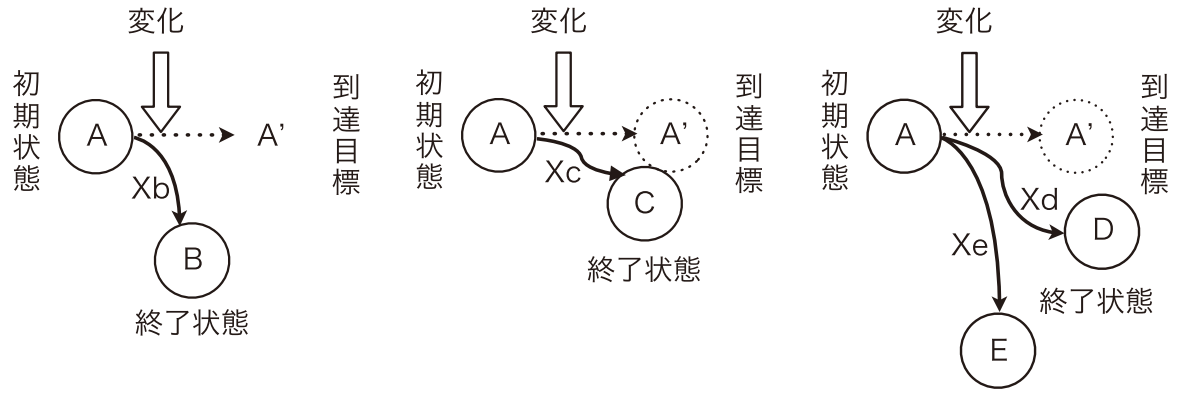


図4-1：惰性的進行（sI型）　　図4-2：拘泥的進行（SI型）　　図4-3：回復的進行（sL型）

図4　立命館大学におけるサービス・ラーニングの展開パターンと型との対応（山口と河井, 2016, p.49）

3つのパターンがあることを明らかにされている（山口・河井，2016）。それぞれに、環境変化に対して、集団の過剰適応がなされる場合（図4-1）、堅硬性で対応する場合（図4-2）、柔軟性で対応する場合（図4-3）を図式化したものである。これらにSigmon（1994）による活動と学習のバランスに着目したサービス・ラーニングの分類を重ねるなら、図4-1のようにプロジェクト終了時期が来たところが到達点となるsl、図4-2のように当初設定した到達目標には至らないながらも充実した活動が成し遂げられるSl、図4-3のように学習を重ねていくことによって当初設定した目標とは異なる水準の目標を達成することになるsLと位置づけることができる。

こうしてサービス・ラーニングでの知見を重ねると、プロジェクト志向のPBL（Project-Oriented Problem-Based Learning：POPBL）を推進するオールボー大学の心理系のカリキュラムでは、セメスターごとの目的に添ってプロジェクトが設定・設計・展開されるため、問題解決学習におけるプロジェクトはさらに2つのタイプに分けることができることが明らかになった。一つは学部生を対象としたプロジェクトにおいて、心理学に関する知識を習得するためにプロジェクトを編成して取り組むもので、知識を開発することに重点が置かれた「Study-oriented Projects（SOP）」として位置づけられる[1]。もう一つは大学院の修士課程を対象としたプロジェクトにおいて、実社会で発生している問題もしくは発生しようとしている問題に対して、自らの専門性をもとに問題解決への実践に取り組む「Intervention-oriented Projects（IOP）」として位置づけられる。ここでPBLのはしごモデルの7つのステップにおけるそれぞれの特徴を際立たせるために、図7に示したとおり、各ステップの動詞のみに着目してみると、SOPでは1～3のステップを順に進めることによって問題の同定が重要となり、IOPでは5～7のステップを通して同定した問題が解決される状態に導く道程が重要となる。

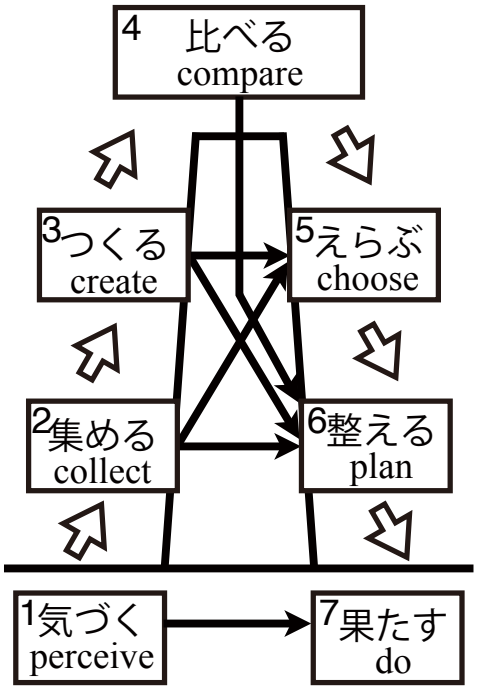


図7：PBLのはしごモデルの各ステップでの振る舞い
（Yamaguchi, Jensen, & Feilberg, 2018）

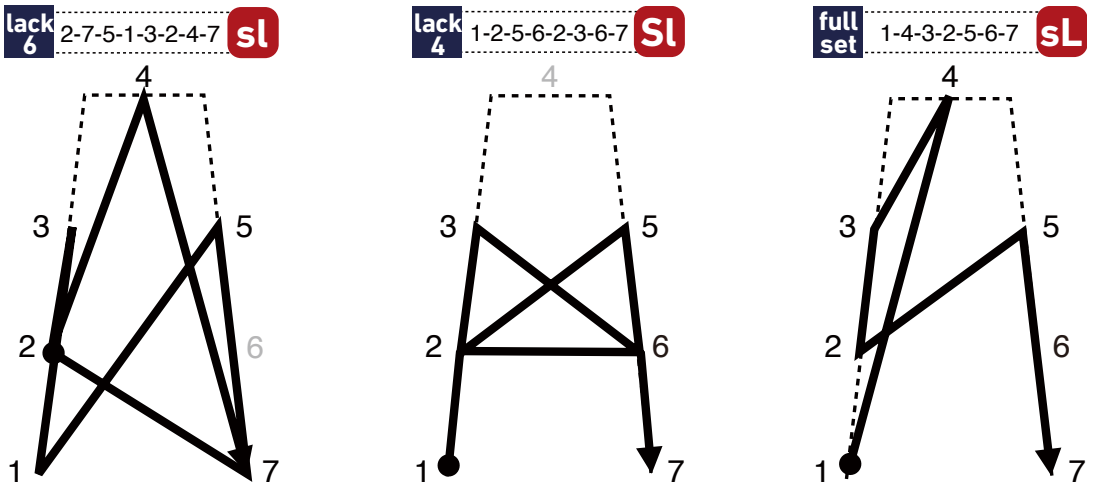


図5-1：惰性的進行（sl型）の進行　　図5-2：拘泥的進行（Sl型）の進行　　図5-3：回復的進行（sL型）の進行

図5　PBLのはしごモデルから見た立命館大学のサービス・ラーニングの展開ステップの可視化

4. あえて回り道や近道する助言を

こうして立命館大学におけるサービス・ラーニングと、オールボー大学の心理学分野でのPBLとを比較すると、学生に対する教員の関わり方のあり方について、PBLのはしごモデルが示唆を与えることがわかる。オールボー大学では学部生対象のSOPにおいては、学生が実社会の問題に気づき（perceive）、情報を集め（collect）、収集した情報から現実世界に対する問題解決の仮説をつくる（create）することが重要である。一方でIOPでは、そうして構築した仮説が適切かどうかを分析するために他の事例や問題が解決された状況と比較し（compare）、実社会における問題の具体的な解決策を選択し（choose）、具体的な問題解決の実践計画を整え（plan）、定められた時間のあいだに実行して責任を果たすことが求められる。したがって、教員の指導・監督のポイントは、SOPであればPBLのはしごの左側のステップに重点を置いてプロジェクトを設定・設計できているか、IOPであれば右側のステップに重点を置いて添って、プロジェクトを設計・展開できているか、そのプロセスに関心を向けれていけばよい。

一方で、　筆者のフィールドノーツをもとに、図4で示した軌跡をPBLのはしごモデルと照らし合わせてプロセスを表現してみたところ、サービス・ラーニングでは、必ずしも7つのステップに添って取り組んでいく必要はないことがわかった。具体的には、sl型の惰性的進行のプロジェクトでは、問題の認識が甘いまま始まり、見よう見まねで現場で取り組んだ後、自分たちが担う役割を選んだものの、そもそも何のために行う活動なのかの理解が及んでおらず、改めて自らが向き合う問題は何かを見つめ直す、という具合に、2-7-5-1-3-2-4-7の順で活動が進められた。Sl型の拘泥的進行のプロジェクトでは、まずは現実社会の問題に認識した後で、情報収集をした後、他の取り組みとの比較・分析が不十分なままに前年度までの蓄積から活動を選択したものの、改めて情報収集が足りないことに気づいたという具合に、1-2-5-6-2-3-6-7の順で活動が進められた。そしてSl型の回復的進行のプロジェクトでは、問題を認識した後で、何が理想的な状態かを展望し、複数の理想像を検討した上で、情報収集を行うという、言わばバックキャスティングの発想でプロジェクトに臨んでいったため、1-4-3-2-5-6-7の順で活動が進められた。

このように、PBLのはしごモデルは、POPBLにおける教員の指導・監督のためのポイントを明確にするだけでなく、学生たちも含めて、プロジェクトにおける学びのプロセスを可視化するツールとしても利用できることを、筆者らはPANPBL2018にて発表した（図6）[2]。既に発表前に受入担当の2名の教員と議論したところ、可視化のツールとして活用できるゆえに、プロジェクトの再設計や立て直しのツールとしても活用できるだろうという感触を得ていたために、活動と学習の双方で良い相乗効果がもたらされなかった図5-1であれば2-7と進んだところ

を、SOPのように1-2-3の順で進めたらどうか。とにかく活動終了まで、自分たちの活動を成し遂げるべく精力的に取り組んだ図5-2であれば1-2-5と自らの視点で完結していたところを、一旦別の取り組みと比較して自らの取り組みの特徴を明らかにした上で良い部分を伸ばしつつ悪い部分を摘んでいく1-2-4といったパターンがありうるのではないか。設定された問題の大きさを真摯に受けとめることで理想的な将来像を展望した図5-3であれば、まず何が問題なのかを認識した上で現場に足を運び、その問題の只中にある人たちと共に時間を過ごし、インターネットや新聞などの二次資料では得にくい情報を収集して、具体的な理想像を共に構想していくという具合に1-7-1-2といった展開がよいのではないか。

こうして捉えてみれば、PBLのはしごモデルは、ショートカット（近道）やショートサーキット（堂々巡り）そのものが問題ではないことがわかる。とりわけ、セメスター内での活動を1サイクル（1～7のステップのうち、どこから始めて、どこかで終わる1工程）に留めずに展開できる場合（例えば、立命館大学でのサービス・ラーニングのカリキュラム）には、ショートカットによって効率を重視することや、ショートサーキットによっていたずらに時間を費やすことによって、新たな可能性が失われることが問題となる。よって教員には、学生にとっては回り道と捉えられても一つひとつのステップを踏んでいく大切さを説くことや、場合によっては大胆にショートカットをして、次の活動サイクルへと連続的な移行を促していくことが求められるだろう。

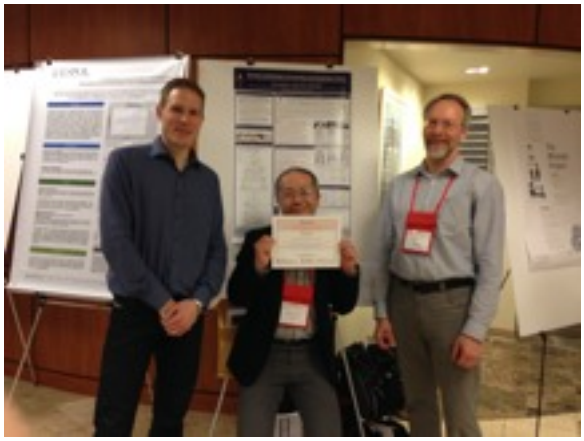


図6：発表後の様子
（右からFeilberg先生・筆者・Jensen先生）

筆者のオールボー大学の滞在は間もなく終わりを迎えるものの、本連載では引き続き、サービス・ラーニングとPBLという2つの教育手法を比較しながら、対人関係を豊かにしながらよりよい社会をもたらす実践の可能性を追求していきたい。特に次回はPANPBL2018で積極的にコメントをいただいたアイルランド・ダブリン大学のTerry Barrett 准教授の近著を中心に、オールボー大学以外のPBLの議論を重ねていく。

(gucci@fc.ritsumei.ac.jp)

【引用文献】

Jensen, M. (1991). Kollegial Supervision: En kortfattet introduktion. Unpublished manuscript.

Kolmos, A. (1996). Reflections on Project Work and Problem-based Learning. European Journal of Engineering Education, 21(2), 141-148.

Rasmussen, J. (1986). Cognitive task analysis. In E. Hollnagel, G. Mancini, & D. Woods (Eds.), Intelligent decision support in process environments (pp.175-196). Berlin, Germany: SpringerVerlag.

Sigmon, R. L. (1994). Serving to learn, learning to serve: Linking service with learning. Washington, DC: Council of the Independent Colleges.

山口洋典・河井亨.（2016）　サービス・ラーニングによる集団的な教育実践における学習評価と実践評価のあり方．京都大学高等教育研究, 22, 43-54.

Yamaguchi, H., Kimura, T. & Kawai, T. (2017). Transcend counter-productivity in Japanese students' reflection through description workshop: how to cultivate the habit of articulated Learning. IARSLCE2017 ; Galway, Ireland. 15/9/2017.

Yamaguchi, H., Jensen, M., & Feilberg, C. Discussion on Methodology to Go Up and Down Learning Stepladder Properly: From a Comparative Study of Supervision in PBL and Relationship Building in Service Learning. Conference Proceedings of PBL2018 International Conference: PBL for Next Generation. 10(25), 1-12.

【注】

[1] Kolmos（1996）による類型に基づくならば、「Subject Project」（p.143）である。

[2] 発表内容はプロシーディングスとして刊行（Yamaguchi et al., 2018）されているので、参照されたい。



JR 茨木駅近くの接骨院が私の仕事場だ。

開業して22年目になる。めったに休院することはない。

ただ、2月は久々に休院することになった。

父の葬儀のためだ。

2月17日土曜日、羽生結弓選手、宇野昌磨選手の男子フィギュア金・銀獲得を喜んでいたら、母から、父の具合が良くないという電話が入った。

郷里の京都府綾部市で、母が父を介護していた。

最近、口から食物をとることができなくなっていた。

前の日、医師と母が、延命措置はしないが、水分の点滴だけはすることに決めたばかりだった。

医師によると、水分補給だけでも、1カ月くらいは持つこともあるという。

父が脳梗塞で倒れて18年になる。長い闘病生活だったので、1カ月くらいは持つような気がしていた。

しかし、施設に駆けつけると、ほとんど意識はなく、声をかけてもわずかに反応する程度だった。

呼吸は、チェーン・ストークス呼吸になっていた。

翌18日、呼吸は徐々に弱まって、昼過ぎに、父は静かに息を引き取った。82歳だった。

その後、葬儀社の人と打ち合わせをして、死亡届を出し、火葬場の予約をした。

夜中に茨木に戻る車の中で、小平奈緒選手が女子スピードスケート500mで金メダルをとったというニュースがラジオで流れた。

月曜日は、午前中仕事をしながら、予約の入っていた患者さんに、臨時休院の電話をかけ続けた。休院の張り紙をしたり、留守電を録音したりし、午後からは通夜のために郷里にもどった。
通夜と夜とぎをし、告別式、火葬、初七日を済ませ、いったん茨木に戻って水曜日の午前は接骨院を開け、午後から綾部のお寺さんに出向いて、四十九日のお願いをした。
茨木に戻る車の中で、今度は女子パシュートの決勝の中継をしていた。金メダルが取れた瞬間はうれしかったが、どこか遠くの世界の出来事のように感じられた。
２０１８年の冬は、オリンピックと父の死が重なって、記憶に残る冬になりそうだ。
葬儀の時、強く感じたのは、１８年間お世話になった医療、介護などの対人援助職の皆さんや、両親の知人やご近所の方への感謝の気持ちだった。
家族葬でしますと言っているのに、たくさんの方が弔問して下さり、感謝の気持ちで涙が止まらなかった。
その後も、もろもろの手続きが続き、気がつけば対人援助学マガジンの締め切りが近づいていた。
投稿は無理だと思って、団先生に休ませて下さいとメールを送って、ご了承をいただいた。
ところが、２５日に東京マラソンで、設楽悠太選手が１６年ぶりに日本記録を塗り替えるという快挙をなしとげた。
患者さんと「設楽選手がやってくれると思っていたんですよ」と会話をして思い出した――対人援助学マガジンの３１号の追記を院内新聞に書いていたことを。
そこで急遽、この追記を「接骨院に心理学を入れてみた３－２」として投稿させていただくことにした。
（以下、寺田接骨院新聞５８号　平成３０年１月５日から転載）

★接骨院に心理学を入れてみた③の追記★
A さんに教えてもらったのですが、ちょうどこの時期にテレビで放送されていた「陸王（りくおう）」は、箱根駅伝で今年も総合優勝した青山学院の原監督が監修していたそうです。
「陸王」の中では、マラソン選手の故障を防ぐために、靴底が薄くて軽いランニングシューズを開発する物語が描かれています。
「陸王」を観ていて疑問に感じたのが、選手の故障を少なくするためには、靴底が薄い靴よりも、ある程度厚みがあって、クッション性が高い靴がいいのではないかということです。
A さんにその疑問をぶつけてみたら、「レースのときは、靴底が薄いほうがスピードが出ていいのではないか」という答えでした。
確かに、短距離の選手がはいているのは、靴底が薄い靴ばかりです。スピードが出れば、選手の負担は減るかもしれません。
「陸王」では、「けがをしないためには、ミッドフット走法を身につけなければならない」という話が何度も出てきます。

「ミッドフット走法をするために、靴底の薄い靴が必要だということなのだろうか？？？」------私にそんな疑問を残したまま、「陸王」は終わってしまいました。

皆さんは、今年の箱根駅伝のテレビ放送をご覧になりましたか。
私はチラッと観ただけなのでわからないのですが、ランニングシューズのことは放送で触れられていたでしょうか？　もしご存知でしたら、ぜひ私にも教えて下さい。
「陸王」では、こはぜ屋対アトランティスというシューズメーカーのし烈な戦いが描かれていましたが、これと同じようなシューズメーカーの戦いが、箱根駅伝でも繰り広げられていたようです。
アディダス対ナイキの戦いです。
総合優勝の青山学院は、ミッドフット走法で薄い靴底のアディダスを使い、往路優勝の東洋大学は、フォアフット走法で厚い靴底のナイキを使いました。
（ミッドフット走法は足の真ん中・中足部で着地する走法。フォアフット走法はつま先で着地する走法）
こはぜ屋対アトランティスは、どちらが薄い靴底を作ることができるかという戦いでしたが、アディダス対ナイキは薄い靴底対厚い靴底の戦いです。
青山学院は箱根駅伝4連覇、王者の貫禄があり、アディダスの評価は下がらないでしょう。しかし、青山学院は前年度大学駅伝3冠をとった時ほどの勢いはなく、2017年度は箱根駅伝1冠のみ。キャプテンは故障でメンバーからはずれ、5区の選手も途中で故障しました。
対する東洋大は1、2年生が主体で今後が期待されるチーム。出雲駅伝を制した東海大もナイキを使う選手が増えているといいます。
ちなみに、昨年ハーフマラソンの日本記録を10年ぶりに塗り替えた設楽悠太選手（東洋大学→HONDA）も、ナイキの厚底シューズを使っていたそうです。
これからの日本選手の活躍と、シューズがどうなっていくかが楽しみです。



↑ナイキ　ヴェイパーフライ 4%

★追記の追記★
東京マラソンで、設楽選手はこれと同じようなタイプ（おそらく設楽選手特別仕様）の靴をはいていました。

テレビ番組のインタビューでも、日本新記録の要因を「練習方法と靴を変えたこと」と答えていました。
一気に厚底シューズ人気が高まるに違いありません。
箱根駅伝も、東洋大が青山学院の5連覇を阻止するのではないか、そんな予感がします。

現代社会を『関係性』という観点から考える

③　つながる・つなげる　~現代社会とボランティアについて~

更生保護官署職員（認定社会福祉士・認定精神保健福祉士）

三浦　恵子

1　はじめに

第２回目の連載では，「更生保護を支える人々」というタイトルで，「過ちを悔いる人を受け入れ，立ち直りを見守る社会」があってこそ，犯罪に非行をした人の社会復帰は実現すること，つまり「更生保護を支える人々」が核となり，地域社会の人々の理解を求め，立ち直りを支える社会をつくっていくということが今般の刑事政策上の重要な課題となっていること，そして保護司や更生保護女性会，BBS 会，協力雇用主，更生保護施設等について，「更生保護を支える人々」と題して書かせていただきました。

「更生保護」について全くご存じなかった方は，これほどまでに多くの民間ボランティアの人々が刑事施策に関わっていることについて，驚かれたのではないのでしょうか。

奉職直後の私も恥ずかしながらそれと大差ない状態でした。勿論入職にあたって様々に文献を当たったりし，知識として「知っている」状態ではありましたが，実際にそのことが体感できたのは，奉職１年目に，法務省保護局においてこうした民間ボランティアの方々の活動と密接に関わる部署に配置された時です。この時の経験が，その後の職業人としての在り方，それ ばかりか人生観を変えるような体験を重ねることになりました。

第３回目の連載では，第１，２回と続いた「更生保護のあらまし」的な解説からは少し離れて，現代社会におけるボランティアについて，その関係性という観点から考えていきたいと思います。ただ，ボランティアの在り方などについては既に良書が数多く出ておりますので，今回は私自身の体験をベースにした「思潮」的なものとお読みいただければ幸いです。

2　「ボランティア＝社会奉仕」という既成概念を打ち破られた経験

平成７年の阪神・淡路大震災が発生した際，多くのボランティアが活躍したことから，平成７年は「ボランティア元年」と称されています。「放っておけない」「自分にもできることがあるはず」という思いが多くの人を突き動かし，一気に「ボランティア」が身近な存在になった年でした。同時に，被災地におけるボランティアの受入れ方，被災地に出向くボランティアの在り方，ボランティアセンターの運営など，課題も明らかになり，実践や研究が重ねられるようになりました。

この時までは，「ボランティア」というと，「時間的・経済的に余裕がある人が行う尊い社会奉仕」というイメージがあったことは否定できず，「放っておけない」という思いを抱いたとしても，いざそれを行動に移すまでの心理的なハードルは決して低くはなかったと思われます。そうした中，平成４年，ネットワーキング論の騎手と評された工学博士金子郁容氏が世に問われ

た『ボランティア～もう一つの情報社会:』（平成４年　岩波新書）においては,「情報工学」という全く新しい観点からボランティアの在り方が示され，大きな反響を呼びました。発刊から８月で６刷を重ねた書物であり，私も勿論手に取りましたが，金子氏が論じられる「ボランティアとは，困難な状況に立たされた人に遭遇したとき，自分とその人の問題を切り離して考えるのではなく，相互依存性のタペストリーを通じて，自分自身も広い意味ではその問題の一部として存在しているのだという，相手へのかかわり方を自ら選択する人である。表現を変えるなら，相互依存性のタペストリーのなかで,『他人の問題』を切り取らない，傍観者でいないということである。」(『ボランティア　もうひとつの情報社会』１１１頁）という一文に衝撃を受けました。

まさにこの頃,私は「更生保護を支える人々」，つまり更生保護ボランティアに携わる人々と出会ったのです。刑事政策のアンカーと位置付けられている社会内処遇を支えて下さっている人々の実践活動の尊さをまさに肌身で実感する経験も数多くありました。更生保護ボランティアの人々の語りはまさに地域生活に密着した，生活感に根ざしたものであり，駆け出しだった私にとって示唆に富むものばかりでした。例えば，次のような言葉が実に気負いなく，自然に語られるのです。

「保護司をさせていただいて，多くのことを学ばせていただきました。得難い体験です。」

「ボランティアは笑顔で，むっつりした顔で行っては相手に負担をかけてしまいます。」

「日常生活の中の気付きや課題を大切にして活動を続けています。」

保護司や更生保護女性会などの刑事政策に関するボランティア活動は，他のボランティアとは異なる様々な配慮や気遣いも必要であり，活動を長く続けておられる人々からこうした言葉が語られることに，正直私は驚きを禁じ得ませんでした。「ボランティア＝社会奉仕」という，当時はまだ一般的でありながらも，潜在的なボランティア希望者にとって参加に向けての心理的ハードルを上げてしまいかねない概念を打ち破られた経験でした。「『他人の問題』として切り取らない，傍観者でいないという生き方」とはこのようなものなのかと，まさに目から鱗が落ちるような心持ちがしました。

先輩職員からも繰り返し「更生保護の仕事はこうしたボランティアの人々のお力で支えられている。保護観察官として処遇の第一線に立つ時も，こうしたボランティア団体の関係の業務を行う時も，そのことを絶対忘れないように。」と指導を受け，私は今もこの言葉を心に刻んでいます。

そして次項以下に述べるように，更生保護ボランティアに携わる人々との出会いがきっかけになり，「私も何かやってみたい。」という思いが募り，私自身もまた，業務の傍ら２０代前半から数々のボランティア活動に従事していくことになったのです。

３　私のボランティア事始め

私事になり恐縮ですが，私はある篤志家の方の育英基金の支援を得て大学を卒業しました。卒業後公僕として働くことを選んだのも，善意によって与えられた学びの機会で得たものを社会に還元したいという，今思えば大変青臭い，いかにも肩に力が入った動機が多少なりともありました。

その時に，前項で述べたように，既存のボランティア観を打ち破られるような経験をし，多くの刑事政策ボランティアの人々によって支えられている仕事に携わっている以上，私自身もボランティア活動を経験したいと考えるに至りました。ただ，意欲はあっても経験やスキルに乏しい私に何ができるのだろうか，という思いが一方でありました。

そうした思いを抱きながら日々を過ごし，あ

る薬物依存症の民間支援団体（ダルク関係）の設立１周年フォーラムに「これはあんたにとってきっとええ勉強になる。一緒に行かへんか。」と，先輩保護観察官から誘われたのは，奉職２年目の頃でした。その団体は，先輩保護観察官や福祉事務所のケースワーカー，精神保健福祉センターのスタッフなどが，当事者の方々と手を携えて設立準備委員会を組織し，コツコツと準備を重ねて設立にこぎ着けたものでした。一方私は保護観察官に補職されてまだ１年目，薬物依存症のケース処遇について悩んでいた時でした。このフォーラムに参加し，語られる当事者の体験談に圧倒されると同時に，当事者や支援者がフラットな関係で運営されている組織形態にも目を奪われました。フォーラムへの参加をきっかけとしてこの団体が主催する連続講座などにも参加するようになりましたが，ある日先輩保護観察官から「うちでは家族支援のセッションをやってるんやけど，ファシリテーター１人ではどうも手が足りへんのや。あんた，もしその気があるんやったら，ちょっと手伝ってみいへんか？」と声がかかりました。「本当でっか！うちみたいなもんでよかったらぜひ勉強させてください！！」と即答したのはいうまでもありません。保護観察官としても社会人としてもまだ駆け出し，特段のスキルもなくただただ熱意だけで始めた活動でしたが，近畿における依存症者家族支援の草分け的存在といわれたファシリテーターの方の実践を毎月間近で，正に目を皿のようにして体験し，息づかいの１つ１つを拾うようにして学ぶ機会に恵まれたことは本当に得がたい体験でした。回を重ねるうち，時にはファシリテーターのピンチヒッターを務めさせて頂くこともありました。ここで学んだ経験をベースにして，後に私は刑事司法に特化した家族支援のグループを立ち上げることになりました。

ここにボランティアの動機に関する興味深い調査結果があります。２０代と６０代では実はその動機に大きな違いがあるというものです。全社協「全国ボランティア活動実態調査」（平成２２年）によると，２０代では「社会勉強」がダントツのトップを占め，６０代では「地域や社会を改善したい」「社会に対する恩返し」がツートップとなっています。私もボランティアを始めたのは２０代前半，まさに「勉強させていただく」という気持ちでした。いうなれば学生を含め若手のボランティアは活動そのものを体験することから学びそして考えること，壮年以上の年齢層のボランティアはそれまでの人生経験やスキルを社会に還元することに，ボランティアの大きな意味のうちの１つがあると私は考えます。

仮にもし私が「ファシリテーターがもう１人必要だから，やってみない？」といきなり言われていたら，きっと躊躇していたことでしょう。声をかけていただいた先輩方の言葉やタイミングは本当に絶妙だったと今でも思います（なんやおもろい若手が参加するようになったなあ。運営には若い世代も必要やし，この若手なら声をかけたらすぐノってきよるで。いっそこのまま活動に引き込んでしまおか，という深い慮りがあったことを後で聞かされました・・・。）。先述したように，その後私は刑事司法に特化した家族支援のグループを立ち上げ，そこでファシリテーターを１５年余りにわたって務めた後，今はモバイル機器を活用し，場所を選ばず対応できる個別の家族相談を継続して行っています。ただ，どんなに経験を積んでも，「御家族に寄り添う」「御家族の言葉から学ぶ」ことを忘れてはならないと肝に銘じています。

この団体では，主として家族支援や出版・広報に関する分野を担当するボランティアスタッフとして少しずつ役割を任されるようになりましたが，業務だけではなかなか得られない次の４点のような貴重な体験をさせていただきました。

第１に薬物依存症当事者と支援者が共に手

を携えて歩むということです。事業の推進に関しては,毎月１度の会合において協議するほか,メーリングリストを活用して随時情報交換・協議を行っていました。特記すべき事項は，ここに薬物依存症の当事者の方も参加することで,従来の援助活動で見落とされてしまいがちであった「当事者としての視点」が盛り込まれていったことです。また，刑事政策に限らず，医療や保健福祉など多様な援助専門職がボランティアスタッフとして参加していることで，様々な視点からニーズを拾い上げ，その実現に向けてのネットワークをくみ上げていくことも経験することができました。この団体に限らず民間のボランティア団体が「先駆的な活動」や「新たなサービスの開拓」に強いと呼ばれる所以は,民間組織ならではのフットワークの軽さもさることながら,埋もれがちなニーズを受信する力,その必要性を社会に向けて発信する力，実現に向けて動く人的な繋がりの強さによるところが大きいと私は考えます。

第２に,「官民にわたる様々な諸活動が援助専門職を育てていく」ということです。回復を目指す薬物依存症当事者の方々と行動を共にすることで，人間の強さに対する尊厳や，回復への希望というものを体験として学ぶことができました。当事者と援助専門職の関係は非常にフラットで，法定期間が経過すれば関わることができない保護観察での援助関係とは異なり，長いスパンで回復の姿に接していくことができました。薬物依存症当事者や家族の方々から教えられることは非常に多く，時には「こんな時こそこのような支援が欲しかった。」という援助専門職への率直かつ切実な希望をお聴きする機会もありました。そこから得た「回復への希望を持ち続けること」「当事者や家族の方が必要とするニーズを汲み取る姿勢」などは，人間の可能性を信じて対象者に向き合う更生保護の仕事のなかでも生かさされていると感じています。

また，当事者ではない援助専門職が当事者の回復に関わっていく際には，必ずある種の「謙虚さ」が求められるということを幾度となく痛感しました。私を含め保護観察官や PSW など援助専門職は，それぞれの分野では専門家であらねばなりません。しかし決して万能ではないし，何よりも使用時の快感もクレイビング（薬物への渇望)時の辛さも体験として知りません。そのことを忘れず，謙虚に当事者の方や彼等が抱える問題に向かい合うことは，自分自身の処遇に向かう姿勢を振り返るために非常に有効だったと考えます。

第３に，関係機関との連携の在り方をまさに肌で学んだということが挙げられます。精神科医や生活保護 CW，PSW など多彩な援助専門職が参加され，彼らと「共に動く」経験を重ねることは，それぞれの機関の現状を知り，望ましい連携の在り方を学ぶかけがえのない機会でもありました。多くの方がいわゆる「ケースの丸投げ」で困った経験を持っておられ，それを間近に聴くことで，私自身がケアマネージメントの視点でケース処遇に取り組む姿勢を考えることができました。もちろん人的なネットワークが，保護観察の処遇に生かされた経験も一度や二度ではありません。

第４に，社会資源を開拓していく姿勢について学びを深め経験を重ねることができました。私がこの団体に参加した当時は，薬物依存症に関しては社会資源がまだまだ乏しい時代でした。しかしこの活動を通し，ただ「社会資源がない」と嘆くだけではなく，ニーズをキャッチすれば自ら社会資源をつくっていくというぐらいの意気込みが必要であるということを痛感しました。前述したように，民間組織ならではのフットワークの軽さ，ニーズに関する高い発信・受信能力を生かし，当事者や家族にとって必要だとメンバーがニーズを感じた時点で，理事会で発案し，智恵を集め，理事会でゴーサインが出ればその実現に向けて力を尽くしていくことを重ねることで，新たに構築された社会資源は少なく

ありません。私自身も，アクセスしやすい相談窓口の設置の必要性から毎週末の「薬物依存電話相談」を立ち上げ，家族のケアの必要性から薬物依存症当事者の家族の方のためのセッション「ファミリーサポート」を運営しながら，各種書籍出版を仲間とともに行ってきました。まさに「積極的に地域社会に打って出る」姿勢の大切さを学んだ時代であったといえます。

こうした活動は全て手弁当で，自宅で深夜にわたってコツコツ作業をすることもあれば，業務を終えてから仲間と集まって長時間議論したり，休日にイベントを企画することもありましたが，業務とは違ったまた違ったやり甲斐を体験することができたことは，決してお金や時間とは引き替えにできないものだと思います。何よりも，奉職１年目に触れた更生保護ボランティアの方々の言葉の意味が，更生保護ボランティアとは異なりますが，刑事政策の分野に近いボランティア活動を体験したことで，まさに体験を伴った重みとして実感できたことが，その後の私の人生にとって大きな意味があることであったと今でも思います。

４　「関係性」が新たな支援の展開につながる～ボランティアの強み

これは第２回の連載でも書かせていただいたエピソードですが，これは私が更生保護官署の担当官，つまり業務として関わりながら，ボランティアの「気付き」「フットワーク」が新たな支援の展開につながっていった事例です。この事例をもとに,「ボランティアが新たな支援を展開し地域を変えていく」ということを，本連載のテーマでもある「関係性」を軸に再考してみたいと思います。

ある地域で，更生保護の広報活動である“社会を明るくする運動”の行事の一環として，スポーツ大会を実施することになりました。保護観察所のほか開催地の保護司会や更生保護女性会，ＢＢＳ会をはじめとする更生保護ボランティア，地域の各種団体が集って準備委員会を立ち上げ，企画・立案を開始しました。この時私は担当官として準備委員会の運営に従事していました。

この準備委員会には，更生保護に協力してくださる団体の系列のある児童養護施設の施設長も参加されていました。協議の合間，この施設長から,「難しい生育環境を経て入所に至った児童・生徒のなかには基礎学力の遅れが目立つこと。」「特に中学校３年生については，何とか公立高校に進学させ施設で十分な自立へのケアをしてから社会に送り出してあげたい。」というお話がありました。これを聴いた地区のＢＢＳ会長から「うちの地区のＢＢＳ会員の中には学生も多いので，何とか力になりたい。」という申し出がありました。それ以後当該児童養護施設をＢＢＳ会員が定期的に訪問して学習支援を行うほか，施設の諸行事の運営にもボランティアとして参加することになりました。

スポーツ大会という１つのイベントの企画・立案・運営をきっかけに，その過程で地域社会における新たな支援が展開していった好事例です。特筆すべきは，準備委員会がただ「スポーツ大会の成功」だけを目的とせず，準備委員会の中での「出会い」「関係性」の中において，率直な問題提起が行われ，これに対してそこに参加しているメンバーが問題意識を共有し,「何かできないか」知恵を出し合ったことです。もし準備委員会が，あくまでも「スポーツ大会の成功」に特化してタイトな運営をしていれば，おそらく施設長からこのような話題が出されることもなかったかもしれませんし，準備委員会の雰囲気が相互に支え合う暖かいものでなければ，問題意識の共有もなされなかったかもしれません。しかし,「スポーツ大会の成功」についても尊重しつつ，スポーツ大会を通じて，地域社会のおける青少年の健全育成や関係機関の繋がりをつくっていこうという機運がこの準備委員会にはありました。ですからこのような問題

提起がなされ，これに対して皆ができることを考え，結果的に BBS の会長から「何とか力になりたい。」という申し出がなされたのだと考えます。

もちろんこの場だけで学習ボランティアの導入が即決したわけではなく，施設長は BBS 会長からの申し出を施設に持ち帰って慎重に検討され，BBS 会長もまた地区会に戻ってメンバーとどのように活動を展開するか話し合いをしました。保護観察所もこの学習支援導入がスムーズに進められるよう，両者の調整を行いました。一時の盛り上がりで支援に入ってもそれが続かなければ，一番傷付くのは子どもたちだということは関わる者全てが共有している問題意識でした。だからこそ，支援に入る前には保護観察所も関与しつつ施設側と BBS 会との綿密な協議が重ねられ，支援の方法や頻度，会員のローテーションが組み上げられ，実行に移されていきました。

これは，このスポーツ大会の準備委員会という場が，単に行事の成功だけを目指すだけに留まらず，行事の本来の目的である青少年の健全育成についてメンバー各自が問題意識を持って参加でき，メンバー相互のつながりや関係性を大切にしたいと思えるような雰囲気作りに配慮されていたことが，地域社会における新たな支援へと発展していった事例であると考えられます。

もちろん，「全ての児童養護施設で暮らす中学生に対する学習支援を行政として保障する」ことが実現できれば，公平性という観点１つをとっても非常に素晴らしいことだとは考えられます。しかし，そのための予算や人材の確保に要する手続を考えると，これほどまでにスピーディーな展開は望めなかったでしょう。相談を持ちかけられた時は，高校受験まであと８月余りというタイミングでした。まさに「待ったなし」で支援を必要とする子供達が目の前にいる状態でした。この事例の場合，準備委員会という場の関係性の中で，支援が必要な子どもたちがいるという課題を提示した施設長がおられ，それに呼応するように支援の申し出をした BBS 会長がおられたということが，まさにボランティアの特徴を示していると私は考えます。ボランティア論には優れた多くの先行研究がありますが，私は金子郁容氏が自署で論じられているように「目の前にある課題を自分たちと切り離すことなく，自分たちが何ができるか考える。」というところに，ボランティアの特徴や強みがあると考えます。

後日談ですが，このスポーツ大会は単年度では終わらず，その地域の社会を明るくする運動の定番行事として定着し，参加者のみならず協力者も年を追うごとに増えていきました。

また，BBS 会による学習支援も，保護観察対象者のみならず，児童養護施設などの児童福祉施設でも実施されるようになり，その機会も少しずつ広がっているように思われます。

そして私自身も，その後異動を重ねながら，いわゆる処遇部門以外の広報，民間活動支援の業務に従事する機会も少なくありませんでしたが，この時の経験を忘れず，ボランティアの強みを発揮できるような基盤整備や研修などを心がけています。

５　「地域社会を知る」ことの強み

更生保護ボランティア，特に保護司や更生保護女性会の持つ「強み」として，その「地域性」が挙げられます。地域社会で暮らす生活者としてその地域社会の事情に精通し，生活者の実感をベースにした「気付き」や地域社会の「課題」の発見に長けておられることは，異動を重ねることの多い保護観察官にはない貴重なものです。

ただし，いくら地域に長く住んでいたとしても，自分の仕事や家庭のこと「だけ」に目が向けられていれば，地域社会における「課題」はなかなか見えてきませんし，何か困ったことは「課題」ではなく「問題」として捉えられてし

まいがちです。同じ事象であっても，それを「課題」として捉えるか「問題」として捉えるかではその後の展開は大きく異なってくると私は考えます。

「課題」として捉えるのは，同じ地域社会の住民として，それを皆で解決しようという姿勢，自分自身にそれを引きつけて考える姿勢ですが，「問題」として捉えるのは，責任を追及し，問題の原因を排除することにもかねないと思われるからです。

私自身多くの異動を重ねながらも更生保護官署職員として業務を続けることができたのは，地域社会に精通しておられる保護司や更生保護女性会の皆さんに地域社会の事情や地域性を教えていただいたところが大きいと考えています。また，できうる限りその地域で開かれている隣接他業種の勉強会や職能団体の会合に出席し，自ら意識して地域を知ることやネットワークを広げることを心がけてきました。

そういった経験を重ねるうちに，地域社会が実は行政サービスや介護保険などの共助だけで成り立っているのではなく，住民相互の互助とも呼べる助け合い，様々なボランタリーな活動によって支えられていることがわかってきました。

そして私が自分の実家のある校区の社会福祉協議会に参加し活動を始めたのは３０代前半の頃でした。ちょうど母校から，保護観察官の経験を生かして学校である役割をしてみないかという声がかかったのです。そのお話をいただいてみて初めて，私は担当している地区なら校区を越えた校友関係や少年たちのたまり場，様々な社会資源に至るまで通じているという自負を持ちながらも，いざ自分が生活している地域社会についてはあまりにも無知だということに恥じ入りました。前項で記したボランティアも京阪神を中心とした広域的な活動をしているものでしたし，ホームレス支援などは地域を限定した活動でした。「子どもの頃あれだけ御世話になった地域で，たくさん知り合いもいてはるのに，仕事やいろんな活動やと色々動き回りながら，肝心要の自分の地域のことがお留守になってるやん。これではあかんわ。」という思いで，当初打診のあった学校でのお役目については，自営業を営み校区の隅々まで知っている知人にお願いし，私自身は校区の社会福祉協議会の活動に福祉委員として「混ぜてもらう」ことになりました。そうして実際の地域活動を始めてみると，普段の生活では接点がなかった中高生の親御さん世代の率直な意見に触れる機会もあり，業務とはまた違った意味で目を開かれる思いがしました。３０歳から始めた実母の在宅介護もペースがつかめて慣れてきた時期でもあり，社会福祉士などの資格を生かして地元の福祉施設の苦情解決第三者委員としての活動も開始しましたが，利用者さんや施設のスタッフの方々と交流することは，施設ケアや地域での施設の在り方などを考え，他の委員の方の見識にも触れることができる貴重な機会でした。何よりも，母の介護で平素御世話になっている地域に恩返しをしたいという気持ちが根底にあり，地域活動を始めたことで，多くの人とつながることができ，そのつながりに支えられて在宅介護が乗り切れたという面もあります。

そして，この体験を通して，対象者の処遇における地域アセスメントの重要性やインフォーマルケアの有無をしっかりと確認することの大切さを自らの体験で学んだともいえます。

６　おわりに

ボランティアについて筆を進めれば，奉職後体験した「阪神・淡路大震災」「東日本大震災」にまつわる多くの出来事など書き足りないことも多々ありますが，これはまた後の号に譲りたいと思います。

ただ，確実にいえるのは，刑事政策のアンカーと呼ばれ，地域社会への入口を担うとも呼ばれる更生保護の業務に従事をし，多くの更生保

護ボランティアの人々と出会い，それがきっかけで自らも自然とボランティアの世界に足を踏み入れる機会をいただけたことは，職業人としても社会人としても本当に得がたいものであったということです。世の中で起きている様々な事象について,『他人の問題』として切り取らないこと，我が身に引きつけて考えてみること，微力ではあっても出来ることはないか探してみること，もし出来ることがあれば誠意を持って「続けていく」ことを学ばせていただいたともいえます。そして，ただ自分の専門性に閉じこもるのではなく，社会にアンテナを張って生活していくことで，多くの課題と出会い，それを解決するために志を同じくする仲間とつながることができました。

昨秋，私は日本ボランティアコーディネーション協会が主催する研修会に参加し，ボランティアコーディネーション力検定２級の資格を取得しました。社会福祉協議会やボランティアセンターなど多様な現場から参加した方々とワークショップ形式で学びを深めたことで，ボランティアの在り方について，自らも実践や学びを重ねつつ考えていくことが，私のこれからの課題の１つとなったと考えています。

参考文献

『ボランティア　もうひとつの情報社会』（著者：金子郁容：岩波新書　平成４年７月）

参考文献

「対人援助通訳の実践から」

第 3 回

飯田奈美子

1．はじめに

前回、前々回は、コミュニティ通訳研究をはじめるようになった理由とさまざまな通訳者役割についてのエピソードをお伝えしました。今回は、コミュニティ通訳の対象者である、専門家についてお話したいと思います。対人援助場面では、クライエントだけでなく、専門家も通訳対象者です。専門家はどのようにコミュニケーションをとり、支援を行っているのでしょうか。

今回は、京都市国際交流協会（行政通訳相談事業[1]）が京都市の保健センターで働く母子保健担当の保健師に行ったアンケート調査[2]をもとに、外国人クライエントとのコミュニケーションと支援についてどのように考えているかをご紹介します。

2．9 割以上の保健師が外国人等利用者の担当経験あり

調査では、京都市内の 15 の保健センター（現子どもはぐくみ室）の母子保健担当の保健師にアンケートを配布し 8 割以上の回答を得ることができました。母子保健を担当している保健師の経験年数は、1 年～5 年が最も多く、全体の 6 割近くになります。また、年齢は 20 歳代が最も多く（約 5 割）、比較的若く、経験年数の浅い保健師が保健センターで母子保健を担当していることがわかりました。そして、外国人等利用者[3]を過去現在担当したことがある保健師は、9 割以上いることがわかりました。現在担当している保健師は 8 割にものぼります。また担当していなくても、母子健康手帳の交付や健診時、転入手続きや不妊治療手続きなどの窓口業務、BCG 予防接種や HIV 検査などで外国人等利用者に対応するとの回答があり、多くの保健師が外国人等利用者の対応をしています。

日本語ができない外国人等利用者とのコミュニケーション方法（選択肢質問）としては、「京都市国際交流協会行政通訳相談員の通訳（派遣・電話）」の利用が最も多いのですが、次に「筆談・身振り手振り」、その次に「外国人等利用者の家族・友人の通訳」となっています。保健師が外国語を話す、また他部署の外国語の話す職員に通訳してもらう、スマートフォンアプリや電子辞書を用

いるなどの回答もありました。

保健師の多くは多言語版の「母子健康手帳」を利用していますが、それ以外に、英語・
中国語に翻訳された問診票を使用していることもわかりました。これは、一部の保健センターが独自に作成したもので、全保健センターには準備されていません。さらに、一部の保健師は支援に必要な資料の多言語版をインターネットから独自に取得して活用していることもわかりました。

また、保健師の 6 割以上が外国人等利用者に対応する際に独自の工夫をしているとの回答がありました。「挨拶など簡単な外国語を使用する（選択肢項目）」や「スマートフォンアプリの翻訳機能（選択肢項目）」を活用することが最も多く、保健師が直接、外国人等利用者とコミュニケーションをとろうとする意志があることがわかり、積極的に外国人等利用者に対して支援を行おうとする姿勢が伺える結果になっています。また、自由記述では、図や絵を使って説明するや、簡単な日本語で話す、ゆっくり話す、対象者の文化宗教、価値観を尊重するという回答もあり、対象者に配慮したコミュニケーションを行おうとしていることもわかりました。

保健師が外国人等利用者とのコミュニケーション方法では、筆談・身振りやスマートフォンアプリを用いてものも多くあるのですが、やはりもっとも多いのは通訳者を介したコミュニケーションになっています。

現在、京都市国際交流協会では、京都市の母子保健に関するすべての事業に通訳派遣を行っています。また、英語・中国語各週 2 日ずつ、電話での通訳サービスを行っており、新生児訪問や乳幼児健診の案内やその後のフォローアップの確認電話など、トリオフォンを使って通訳サービスを提供しています。

しかし、保健センターに通訳者が常駐しておらず、電話通訳サービスも各言語週 2 日と限られていることから、いつでも通訳を介したコミュニケーションをとれるようにはなっていません。そのため、電話通訳サービスがない曜日に保健センターに外国人等が来所される場合、通訳サービスを利用できないので、日本語ができる家族や友人、時には大学のチューターに同行してもらい、保健師と当該外国人等利用者との会話を通訳してもらうことがあります。これらの人々に同行してもらい、簡単な会話を通訳してもらうことには問題はないのですが、支援や指導を行う際の通訳には向いていないということが、調査結果で判明しました。

外国人等利用者の家族・友人、大学チューターなどに通訳をしてもらう問題点について、保健師に回答を求めたところ（選択肢質問）、「専門用語や制度がわからない（選択肢項目）」が最も多くありました。自由記述においても、「正しく伝わっているかわからない。通訳者が誤って伝えたり、ニュアンスが変わったりする。」や「家族や友人自身も日本語でのコミュニケーションが困難な場合がある」といった回答があり、専門的な訓練を受けていない者が通訳をする場合には通訳レベルの問題があることが指摘されました。また、「家族・友人等ばかりが話をして、本人に話の内容がつたわっているかわからない（選択肢項目）」という回答が 2 番目に多く、「本人の本音が聞き出しにくい」「通訳者が自己判断して、こちらの意図が伝えて

もらえないことがある」との自由記述回答もあり、通訳訓練を受けていない人が通訳をする場合は、外国人等利用者と保健師双方の思い、考え、意図がきちんと伝わっていないことがあることがわかりました。これらの調査結果から、専門用語や制度がわかり通訳できるレベル、要通訳者双方の思いや考え、意図をきちんと伝えられる能力をもっている通訳者が求められていることがわかりました。

そして、このような調査結果は、保健師の支援内容に深くかかわっており、支援においてコミュニケーションがとても重要で、満足した支援を行うには、保健師と連携できる通訳者の存在が必要であることもわかりました。

3. 7 割近くに保健師が外国人等の子育て支援に満足していないと回答

「外国人等利用者の子育て支援について満足な支援ができていると感じますか（選択肢質問）」という質問に対して、「満足していない」に 7 割近く回答がありました。その理由として、「自由に会話できない（選択肢項目）」が最も多かったのですが、2 番目に多い理由に、「言葉が伝わっていても、内容（意図）まで理解されているかわからない（選択肢項目）」がありました。これは、言葉ができるものが通訳すればそれでいいというのではなく、保健師の支援内容や制度をよく理解した通訳者が内容（意図）までをきちんと対象者に理解できるように通訳していく必要があることを示唆するものです。このことは、支援内容理解し、保健師と連携できる通訳者が必要だということを表していると考えます。なぜそのような通訳者が必要かというと、保健師は様々な対象者を支援しており、それらの対象者には問題を抱えた世帯もあることが大きく影響しています。

「どのような問題を抱えた外国人等利用者支援したことがあるか（選択肢質問）」という質問に「経済的困窮（選択肢項目）」が最も多かったのですが、「虐待（選択肢項目）」や「DV（選択肢項目）」、「子どもの障害（選択肢項目）」などの問題を抱えている世帯の支援もされていることがわかりました。様々な問題を抱えている世帯には各世帯の状況にあった支援を行わなければならず、より深くコミュニケーションをとり、支援をしていく必要があります。そのためには保健師の支援内容を理解し、意図をきちんと読み取り伝えることができる通訳者が必要になります。しかし、このような通訳は、だれにでもできるわけではなく、通訳者が制度や支援方法についての知識を持っており、さらに、保健師とともに連携しあえる体制がないと行うことはできません。京都市で行っている通訳サービスでは、専門性のある通訳者の養成を行い、保健師との連携ができる体制作りをおこなっています。しかし、予算の関係で限られた曜日でしかサービス提供をすることができていません。保健師が満足した支援を行うためには、専門的な訓練を受けた通訳者が常時必要なのですが、現状ではできていません。

適切な支援を行うには、対象者とのコミュニケーションがとても重要になります。しかし、さまざまな対人援助場面において、日本語のできないクライエントがサービスを受けようとするとき、対人援助の専門家は、クライエントに対し日本語のできる人

を連れてくるようにと指示することが往々にしてあります。日本語が話せない対象者に通訳を付けることは、専門家の責任において行うべきことです。適切な支援には専門性のある通訳者が必要だからです。コミュニケーションの重要性を深く認識し、どのようなコミュニケーションをとっていくべきかを専門職の責任として考えていってもらいたいです。

最後に、言葉が通じないことや文化の違いにより支援を行うことの困難さについての保健師の回答を紹介します。自由にコミュニケーションがとれない不自由な中、限られた情報しかない中、保健師たちは精一杯対象者にあった支援をしようとしています。

4. 言葉が通じないことや文化の違いによる支援の難しさ

外国人等利用者支援においてコミュニケーションで困ったことや文化や習慣がちがうことでの困難なことに自由記述で回答してもらいました。

① 制度や支援内容を理解してもらえない

外国人等の出身国によって、新生児訪問や乳幼児健診などが実施されてないところもあり、それらの支援の意義について理解されず、訪問拒否や健診不参加になるケースがあります。新生児訪問の場合、病院で行われる 1 か月健診と時期が重なることから、1 か月健診とどのように異なるかを保護者が理解できず、さらに、生後 1 か月は子育てが大変な時期である上に、母親の健康状態も不安定であるために訪問をうけなければならない理由がわからず拒否されることがあります。その他の母子保健支援においても、制度内容や必要性がきちんと理解されているかについて保健師は不安に思っていることがわかりました。

また、保健師の役割や支援内容についても理解がされていないと危惧している状況が浮かびあがりました。例えば、新生児訪問時には、エジンバラ産後うつ症質問票を行うのですが、エジンバラテストの目的がわからず、いきなり質問項目を聞かれると、なぜそのような質問をするのか外国人等利用者に理解されないことがあり、外国人等利用者に対してどこまでどのようにやればいいかということに保健師は不安を感じています。

② しつけや子育て習慣の違い

外国人等利用者の文化や子育て習慣が異なることで支援に困ったことについて、質問したところ、歯磨きや入浴についての考え方が異なることにより支援が難しいとの回答がありました。日本では歯磨きの開始時期は、最初の歯が生え始める 6 ヵ月～1 歳くらいに歯磨きの習慣をつけさせていきます。しかし、外国人等利用者の場合は大人も歯磨き習慣があまりないこともあるため、歯磨きの重要性を理解しておらず、歯磨きを乳児期から行わず、3 歳児健診で虫歯が見つかることが比較的多いです。日本では、入浴や歯磨きは親が子供に行うべき世話だと考えられているので、それがあまりされていないとネグレクトではないかと疑われることがあります。保健師には、本当にネグレクトで歯磨きや入浴ができていないのか、文化・習慣によるものなのかの判断がつきにくいようです。また、離乳食の開始時期に

おいても、外国人等利者の出身文化では、日本と比べて半年ほど遅い場合もあり、子供が体重増加不良であったとき文化によるものなのか、ネグレクトなのかの判断がつかなかったとの記述もありました。このような場合にどこまでどのように指導をしていけばいいかに悩んでいることも報告されました。

③ 遅刻や突然のキャンセル

外国人等利用者の遅刻や突然のキャンセルが支援を行う上で大きな問題と保健師が感じていることもわかりました。外国人等利用者は、母子保健支援の目的や重要性についての理解がないため、必ずしも受診しなければならないという認識がなかったりします。また、外国人等の中には、宗教や文化的理由から、受診ができなかったり、支援を受けずにいたりするケースもあります。例えば、イスラム教ではラマダンがあり、この時期は外出が困難になるため、健診や訪問ができないこともあります。また、中国では春節の時期に長期間帰国する世帯も多いです。そのため、継続して支援が行えないことがあり、保健師は支援が必要なのか疑問に思うこともあります。

④ 出身国の文化やサービスについての質問に答えられない

保健師は、外国人等利用者から子育て方法や子育てに必要な情報について求められたときに、対象者の出身国の文化や子育て方法についての知識がなく、適切な情報提供、支援ができないことに悩んでいることがわかりました。イスラム教の保護者から、ハラール食品（特にミルク）についての問合せに答えられずに困ったとの例がありました。イスラム教では、日本で一般的に市販されている粉ミルクが使用できません。ハラール承認を受けている粉ミルクが最も良いのですが、日本では一般流通しておらず（とても高額での販売のみ）、代替のミルクの使用を考えなければなりません。代替ミルクとしてライスミルクやビーンスタークを使用している人もいますが、厳格な信者の場合は、正式なハラール承認の粉ミルクを求める場合があり、それが手に入るまでミルクの使用を遅らせるというケースもありました。離乳食など宗教よっては使用できない食品もあり、その人の状況に合わせた指導や支援をしていかなければならないのですが、指導を行うための情報が不足しており、また、食文化や考え方が異なるので、離乳食の進め方（間食や食事のマナー等も含む）について、どこまでどのように指導を行えばいいか悩んでいることもわかりました。

さらに、保健師は、地域に知り合いがいない外国人ママに、近くの外国人ママを紹介したいと考えているが、どのようにすればいいかわからないとの回答がありました。保健師は孤独な子育てをしている外国人等利用者に対して気を配っており、日本人の親のように子育てしている親同士の交流を行っていくことを支援していきたいと考えているようです。しかし、どのようなコミュニティがあるかわからず、どのような支援をしたらいいかわからずこまっている現状が、調査結果によってわかりました。

以上で保健師に対する調査結果について概観しました。調査結果で、保健師は外国人等利用者の支援に十分な支援ができていな

いという結果がありましたが、このように感じていることは、さらにもっとよい支援をしていきたいと思っていることの裏返しだと思います。そのような保健師の思いに対して、通訳者も様々な思いをもって保健師を支え、対象者の福利のために貢献したいと考えて通訳実践を行っています。次回は、通訳者に対して行った調査結果について報告を行います。

---

[1] 行政通訳相談事業は、京都市から委託をうけ、京都市国際交流協会が事業運営を行っている。英語・中国語の通訳相談員が電話で通訳・相談を行い、行政からの派遣依頼に対して、通訳派遣を行っている。英語の電話通訳相談は火・木、中国語は水・金に対応している。行政からの派遣は、保健センターの母子保健が最も多く、その他には福祉事務所の生活保護相談、発達相談所の発達検査などにも派遣を行っている。

[2] この調査は、行政通訳・相談事業 10 周年記念調査として、外国人等利用者、保健師、通訳者三者に母子保健支援時のコミュニケーションについてアンケート調査を実施したものである。調査期間は 2016 年 8 月～12 月詳細は、下記サイトを参照。
http://www.kcif.or.jp/HP/jigyo/sodan/jp/gyosei/houkokusho.html

[3] 外国籍市民や外国にルーツのある日本人で、日本語にスムーズなコミュニケーションをとることができない人を指す。

マイクロ・アグレッションと私たち

～分断から動き出す交流～　2

朴　希沙（Kisa Paku）

前回は、「してもの会」の「泥水すする木」の物語を紹介しながら、私や「してもの会」のメンバーがマイクロ・アグレッションという新しい差別の概念に出会った経緯を紹介させてもらいました。今回は、前回のふりかえりをした後、マイクロ・アグレッションのイントロダクションをしてみたいと思います。

・はじめに　～前回のふりかえり～

前回ご紹介したように、在日コリアンのためのサポートグループ「それが一人のためだとしても（以下、してもの会）」では、主に在日コリアン（以下、在日）参加者の悩みをシェアしたり、「べてるの家」の当事者研究の方法を用いてそれぞれの困りごとについて「研究」したりしていました。

その中で在日の悩みは、①個人的な事情や欲望と②日本社会や日本人との間に生じている葛藤というふたつの背景が、複雑に絡み合って生じていることが分かってきました。そこで生まれたメタファーのひとつが、「泥水すする木」です（興味のある方は前号を参照してください）。

在日の個人的な事情や欲望と、日本社会や日本人との間に生じている葛藤とが、どのように複雑に絡み合いながら在日の悩みを惹起し、グループ活動の中で統合されていったのか――そのプロセス自体興味深いものでしたが、それはまた次号以降に、タイミングを見て書きたいと思います（日本質的心理学会『質的心理学研究』18 号に投稿した「『してもの会』における Respectful Racial Dialogue の実践」でもそのプロセスを詳しく記述していますので、興味のある方はそちらも参照してもらえればと思います）。

今回注目したいのは、在日が抱えている

日本人や日本社会との葛藤が徐々に明らかになるにつれて、グループ内でも多くの話し合いや交流が生まれたことです。在日のメンバーが、今までは黙っていた日本社会に対する違和感や辛かった体験を口にし始めると、日本人参加者の間には動揺が走りました。「してもの会」に参加していた日本人は、基本的に在日といい関係を結びたいと考えている人たちでしたが、時にその日本人とのやりとりの中でも、葛藤や対立が水面下で生じること分かってきたからです。「自分も、在日にとっては“岩”（在日のつながりを阻むもの）のひとつなのかもしれない」。この認識をめぐって、してもの会では様々な対立・そして交流が展開されていきます（これを、「分断から動き出す交流」と名づけています）。

・なぜマイクロ・アグレッションに着目したのか

ここで明らかになったことは、属性や立場の違いが、些細なやりとりや交流に影響をもたらすということでした。「してもの会」で取り上げられる悩みは一見大したことのない、日常的なものです。ところがそこに、日本人との葛藤や対立が織り交じっているのです。

日本人と在日が一緒に在日の悩みをシェアするということは、その葛藤や対立もシェアするということでした。それは、パーソナリティだけでなく立場や属性の違いがやりとりに与える微妙な影響に、自覚的になっていくプロセスだったともいえます。そして「してもの会」ではそのあいまいな対立や葛藤をむしろ積極的にとりあげて、「交流にいかす」種にしていました（そのキーに、当事者研究という営みがあります。当事者研究の考え方をうまく取り入れることで、「加害」「被害」を個人に還元することなく、「場の課題」「交流の源」にいかすことができるのです。これについてもまた次号以降で^^）。

マイクロ・アグレッションは、あからさまで露骨な旧来型の差別とは特徴が異なります。それは、とても日常的で、無意識的で、些細な攻撃として、多くの場合やりとりの中で伝えられます。マイクロ・アグレッションの研究者である Sue も、「“人種差別はよくないよね”と言っている良識的な人も、時にマイクロ・アグレッションをしてしまう」ことを指摘しています。本人は全く悪気がなく、むしろよかれと思って言っていることでも、相手を傷つけている場合があるわけです。在日個々人の悩みを起点に、そういった些細な日常のやりとりに注目する中で、私たちは次第にマイクロ・アグレッションという概念につながっていきました。

・マイクロ・アグレッション：イントロダクション①

さて、ここでマイクロ・アグレッションがどんなものかを感じていただくために、ある事例を紹介したいと思います。これは、現在「マイクロ・アグレッション翻訳会」で翻訳出版活動に取り組んでいる、Sue 著『Microaggressions in Everyday Life：Race, Gender, and Sexual Orientation』に

載っていたものです。

－事例①：カトリーヌのケース

この事例では、カトリーヌという成人女性が登場します。彼女は、ある会社の就職面接を受けに行っていました。事例自体は面接に向かう電車の中から始まっているのですが、今回は就職の面接場面のみを取り上げて紹介したいと思います。

…カトリーヌを面接している間、面接官たちはとてもくだけた様子で、リラックスしているようだった。しかしその間、カトリーヌはあることに気づいていた。面接官が男性社員のことは「○○さん」と苗字で呼んでいるのに対し、女性社員のことは「○○ちゃん」と下の名前で呼んでいることを。面接官は、何度かカトリーヌのことを「キャシー」と愛称で呼んだ。カトリーヌは、面接官に「カトリーヌと呼んでください」と言おうかと思ったが、雇い主になるかもしれない人と仲違いしたくはなかった。彼女は、絶対にその面接に受かって職に就きたいと思っていたからだ。

面接中、カトリーヌがその役職の採用基準について尋ねた時、面接官はこんなジョークを言った。

「君は一体、なんでそんなに働きたいんだい？君ならいつでもイイ男を見つけられるのに」

カトリーヌが笑わず真剣な顔でいると、面接官は急いでこう付け足した。

「私は、最もふさわしい人物がこの職に採用されるべきだと思っているよ。私たちはすべての男性と女性を平等に扱っている。事実、私は社員が男性であるか女性であるかなんて、考えたことすらない。人間はただ人間であり、誰でも平等に雇用され成功する機会を持っているのさ」

カトリーヌはその返答をとても不快に感じた。そして、自分は採用されないであろうことを悟りながら、面接会場を後にした。

『Microaggressions in Everyday Life：Race, Gender, and Sexual Orientation』　第１章より

上記の短い事例について、みなさんはどのようなことを感じられたでしょうか。「人間は男であろうが女であろうが、誰でも平等に雇用され成功する機会を持っている」と言ったこの面接官との面接の後、なぜカトリーヌは「自分は採用されないだろう」と結論付けたのでしょう。

この結論に対して、「極端すぎる」と感じる人もいるかもしれません。しかし大切なことは、なぜカトリーヌがそのように強く確信したかを考えることだと、Sue は言います。

男性のことは「○○さん」と呼び、女性のことは「○○ちゃん」と呼ぶ面接官が発言した「最もふさわしい人が採用されるべき」という言葉は、カトリーヌにどのように響いたでしょうか。

マイクロ・アグレッションという用語は、Chester Pierce によって、1970 年代に初めて使われました。Pierce は論文の中で、日常的にアメリカの黒人に向けられる、形容しづらい、しばしば無意識的に行われる中傷や侮辱を言い表そうとしました(Pierce, Carew, Pierce-Gonzalez, & Willis, 1978)。

現在は、①明示的に相手の社会的に弱い立場としての属性を用いてこきおろす

Microassault（マイクロ・アサルト）、②相手の社会的・文化的アイデンティティを無礼に扱う Microinsult（マイクロ・インサルト）、③社会的に弱い立場の人々の経験や感情などを否認し無価値なものとして扱う Microinvalidation（マイクロ・インバリデーション）の 3 種類に分類されています。

これからまた回を追って紹介していこうと思いますが、マイクロ・アグレッションは社会の中で軽んじられたグループに属する人々が、恒常的に、そして継続的に経験していることです。どんなマイクロ・アグレッションも、1 度だけなら影響は小さいでしょうが、生涯にわたって継続的に経験することによって影響が蓄積し、有害な結果が生じることがあります。

例えば面接官との短い一連のやりとりは、カトリーヌの仕事を見つけたいという要求はつまらないもので、面接官はカトリーヌを将来有望な人として真剣には見ていないことを伝えています。しかし面接官には、その自覚はないかもしれません。またカトリーヌも、自分が不快に感じたわけを言葉にしづらいかもしれません。そしてもしこれで不採用になった後、面接での出来事を誰かに話したら「気にしすぎだよ」「何をそんなに怒ってるの？」などと言われるかもしれません（これが、相手の社会的経験やその時の感情を否定するマイクロ・インバリデーションです）。こういった一連の出来事全体が、カトリーヌを動揺させ、混乱や葛藤を引き起こすでしょう。

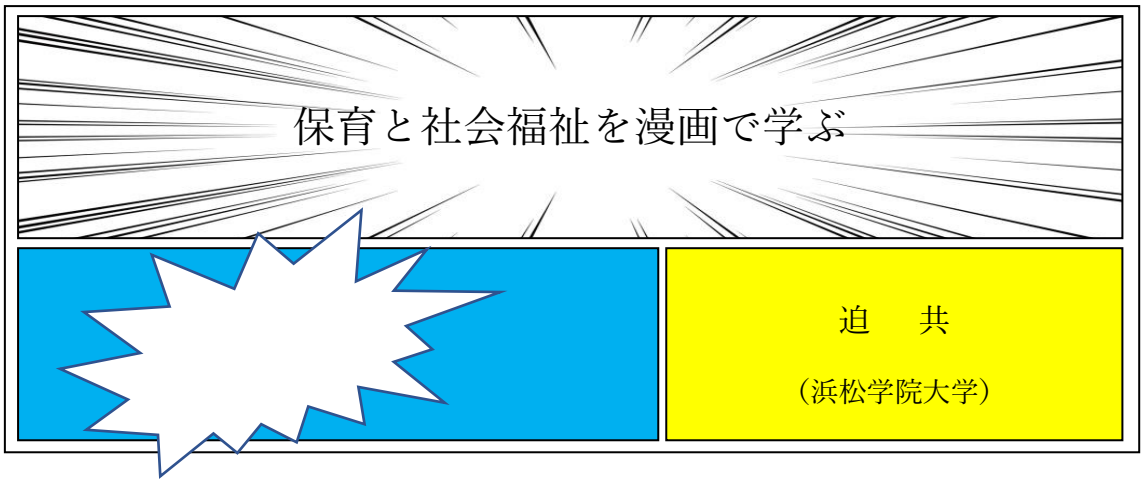
以上、今回は簡単にマイクロ・アグレッションのイントロダクションをさせてもらいました。次回は、マイクロ・アグレッションについてさらに詳しく述べ、日本の現状についても触れたいと思います。

・・・続く

【参考文献】

Pierce, C., Carew, J., Pierce-Gonzalez, D., & Willis, D. (1978). An experiment in racism: TV
commercials. In C. Pierce (Ed.), Television and education (pp. 62– 88). Beverly Hills, CA: Sage.

Sue, D.W.(2010). Microaggressions in Everyday Life: Race, Gender, and Sexual Orientation.
Hoboken, N.J.: John Wiley & Sons.



筆者は保育園の園長や保育関係のライターを経て、保育者を養成する大学の教員をしています。専門は保育と社会福祉。授業では「できるかぎり分かりやすい説明」を心がけていますが、保育原理のような理論的な科目や社会福祉関連科目を教える際には毎回、苦労がありました。

理論や原論系の科目は学生の生活実感から遠いようです。たとえば社会保障についていくら噛み砕いて説明しても「わからん」というつぶやきが聞こえ、ときに教室は談話室と化していました。

筆者は「うん、難しいよなぁ。でもこういうことって、君らが仕事をして家族を支えていく際には、大事なことなんだよ」と、つぶやくばかりでした。

ニュース動画やワイドショー的な話題も取り上げながら説明をすると、そのときだけは静かになります。しかし抽象的な制度の説明に移ると、また学生の集中はとぎれてしまいます。その繰り返しから筆者が編み出した工夫のひとつが「漫画を教材に使う」ということでした。

筆者の授業では、パワーポイントの資料をプロジェクターで投影して講義を行っています。その一部にデジタルデータ化した漫画をさしこみ、登場人物の台詞や感情を追い、「どうしてこう思うんだろうね？」と学生にグループワークなどで考えさせながら、関連する社会福祉制度や概念を説明しています。

筆者が実際に行った例では「社会的養護内容」の科目で、児童養護施設で育つ子どもの内面理解などに漫画を活用しました。その具体的内容を紹介する前に、「漫画を授業に使うことに問題はないのか」という疑問に、ひとまず筆者なりの考えを書いておきます。

まず内容について。多くの漫画は教材として作られてはいないので、現実にはありえないデフォルメされた表現が含まれます。当然、注意が必要です。特に絵の印象は記憶に残りやすいので、内容を精査して使うことが求められます。

下手をすると、学生の記憶に残るのは印象的なワンシーンのみ、ということがあります。現実にも起こりうるエピソードを通して、概念や制度を説明する、あるいは現場ではこういう問題が実際にある、という説明のために使用するという目的がズレてしまうとおかしなことになります。

仮にも「漫画を見させていれば学生が静かになるから」というような理由で、授業内容の大半を漫画に費やすと、「あの先生の授業はずっと漫画を読んでいるらしい」と学校内外からお咎めを受けることになります。

続いて著作権に関する問題です。公益社団法人著作権情報センターに確認したところ、一般に販売されている著作物を教材として授業に使用することは、教育機関の授業プロセスで必要な範囲であれば認められています。その際、道義的には著作権者の許諾が求められますが、法制度上は断りのない使用でも問題はないということです。

「授業で漫画を使う」ということへの疑問は、筆者が知る範囲ではこの二点に大きく集約されると考えます。他にもこんな問題があるが、というご指摘がありましたら、筆者までご連絡をお願いします。

以下、筆者が「社会的養護内容」で使用した漫画を紹介します。

○『いつか見た青い空』りさり著、新書館、2011 年

自らも児童養護施設で育った漫画家、りさり。彼女が描く児童養護施設の子どもたちの姿はみずみずしく、躍動感にあふれています。施設では朝から晩まで同年代の子どもたちが集団生活をしています。学校（幼稚園）と家庭を行き来する生活ではなく、いつも友達と一緒の、学校生活がずっと続くような日常生活です。

子どもたちが生活する施設は、カトリックの教会が運営しており、シスターが子どもたちの日常生活を援助します。汚い言葉を使うと、口を洗うために石鹸での歯磨きを命じられます（欧米では子どものしつけによくされるおしおきです）。

家族で生活していない子どもたちには「きょうだい」の意味が分かりません。「同じ親から生まれたから兄弟・姉妹」ということは、集団生活が日常であると見えてこないのです。ただの「なかよし」とはちがう、特別な「きょうだい」になるにはどうすればいいの？　と考えたさりは、妹分のしおりちゃんと相談して「さりねえちゃん」と呼ばれるようになります。ある日、しおりちゃんに面会に来た母親が、自分の母親ではないことに気づき、さりははじめて「きょうだい」の意味が分かります（「姉妹になりたい」より）。

本書には逆のパターンもあります。あんずちゃんとさくらちゃん姉妹が、母親の関心をめぐって争う「ふたりぼっち」。母親のことをすっかり忘れて仲良くしていた姉妹は小学生になります。突然面会にやってきた母親。姉のあんずちゃんはお母さんを覚えており、すぐにじゃれつきますが、妹のさくらちゃんは小さいときに母親と離れたためにすっかり記憶を失っています。

母親を独り占めしたいあんずちゃんと、普段のようにお姉ちゃんと遊びたいさくらちゃんの感情のすれ違いから、ついにトラブルが起こり、あんずちゃんは「さくらちゃんが邪魔ばかりする」と感じます。姉妹の心に生まれた葛藤。それはお母さんが面会に来なければ起こらなかったのかもしれません。

このすれ違いの背後には、年長のあんずちゃんだけに残っている「母親との絆」が描かれています。あんずちゃんは母親が精神を病んでしまったために施設に保護されたことを覚えていますが、さくらちゃんは物心つく前だったために覚えていないのです。ではさくらちゃんの絆はどこに向かったのでしょうか？

愛着の絆とそのつまづきについて考えるきっかけにはとてもよい作品です。同じ著者による続編ともいうべき『君と歌った愛の歌』（新書館、2014）もおすすめです。

※　本連載へのご意見、ご感想などをお聞かせください。

sako@hgu.ac.jp　迫　共（さことも や）

『余地』

～相談業務を楽しむ方法～

杉江　太朗

はじめに　～自己紹介～

皆さま初めまして。私は、社会人をする傍らで、2017 年 3 月に応用人間科学研究科対人援助学領域を修了しました。現在も入学前と変わらず、とある地方自治体管轄の児童相談所で働いています。

本マガジンの団士郎編集長とは、毎年どこかで開催される『児童相談所と近接領域における家族療法・家族援助の実際』という研修会や『京都国際社会福祉センター』で開講されている家族療法の講座などを通してお近づきさせて頂いたことに始まって、その見識をさらに吸収すべく、「定年退職前に何とか！」と大学院に入学し、それ以外にも様々な形で非常にお世話になってきました。

今回、その団士郎編集長に直談判をして、恐縮をしながらではありますが、対人援助学マガジンという枠組みを利用させて頂き、日ごろ業務に邁進する中で感じていることを言語化したいとお伝えし、今回執筆させていただくことになりました。感謝申し上げます。

団編集長のみならず、川崎二三彦先生、早借一男先生など、多数の児相経験者が執筆を重ねられる媒体で小童に何が書けるのかと自分自身に問いかけながら続けていきたいと思う所存でございます。

『18 歳』　～大人？子ども？～

修士論文では『18 歳』をテーマに執筆しました。児童福祉法上、児童は 18 歳までと定められています。そのため、児童福祉施設の利用に関しては、原則 18 歳までとなります。と言いながら、18 歳で自立を強いることの無謀さもあって、20 歳まで延長が可能であったのが、近年 22 歳まで利用できるようになりました。これは、18 歳ではまだ自立が出来ないというように国が判断したからでしょう。

その一方で選挙権が 18 歳から与えられる、20 歳未満を未成年者としていたものを、18 歳未満に見直す動きがあるなど、18 歳を大人への仲間入りと見なすような国の動向も見られます。

さて、18 歳は子どもなのでしょうか、大人なのでしょうか。少なくとも矛盾を孕んだ、場合に応じて都合の良いように判断される年齢であると言えるのではな

いでしょうか。

私はその『18 歳』を巡る攻防に巻き込まれながら自立を目指す児童と関わる多くの機会がありました。その中でも、特に印象に残った一人の児童を取り上げ、その児童に関わった援助者にインタビューを行い、その時々に援助者の中で何が起きていたのか、どのような意図が働いていたのか調査を行いました。その中で、自分自身『偶然』だと思っていたことが、『偶然ではなかった』事実に気付き、そこには援助者の子どもを思う気持ちが存在し、その気持ちは決して一過性のものではなく、確実にその人に根付いているものであり、またそのようなプロセスが確実に子どもの夢を現実にしてきたことがあることがわかりました。同時に、児童相談所で働く自分自身の大きな原動力になっていることにも気付きました。

『余地』　～私が児相を希望する理由～

とはいっても児相の職場は、良いことだけではありません。子どもの権利を巡って、保護者と対立をすることもあれば、関係機関の方々とも意見をぶつけ合うようなこともあります。また公務員という8:30～17:15 の枠組みの中だけでは、業務が完結できず、土日はもちろん、24 時間の対応も求められます。

そのようなこともあってか、児相の職員は他の部署への異動を希望し、また児相以外で働く職員は異動を希望しないという人気のない職場になっているという噂を耳にします。

私自身は、この仕事を続けたいと思う一方で、それを口にすることの勇気が中々持てないでいました。実際に続けることへの不安もあったのだと思います。

しかし、大学院での 2 年間を過ごしてみて、最初は『転職に向けて～』と噂通りの異動を希望している、疲れている自分を見せていたのですが、（内面の自分は違いました・・・。）卒業をする頃、これは、修士論文の中でも書いたのですが、『この仕事を続けたい』と誤魔化さずに話を出来るようなりました。

しかし、そこには条件も加わりました。それは『修論で書いたような仕事が出来る余地がある限り、（この仕事を続けたい）』ということです。

児童相談所に求められる役割は、この近年、大きく変化してきたと言われます。そもそも児童相談所は戦後、浮浪児対策から始まって、時代の流れとともに、非行、障害、不登校などの相談を経て、今では虐待の対応が優先されるようになりました。

昔は、不登校の子どもたちとサイクリングやキャンプに出掛けたというエピソードも聞きます。（注：対人援助学マガジンの第３号、第４号、団士郎先生の『こども旅　不登校児の琵琶湖一周サイクリング』をご覧ください。）今ではそのようなことを行っている（正確に言うと行え

る）児童相談所はないと思います。

これは、昔が良かったなんて回想をしているわけではありません。変化を拒むものはやがて衰退していくものだと思っています。しかし、それ以上に、社会から求められる役割の変化が大きくなってしまい、その変化に耐えうるだけの職場の枠組み自体の変化が追いついていないように感じてしまいます。

その変化の追いつかなさに呑み込まれてしまうことは、疲弊を生んでしまいます。

私は修論を通して、児童相談所にもまだ修論に書いたような仕事が出来る『余地』が残っているのだと伝えたいと思っていました。その気持ちは今でも変わっていません。

しかし、世間の児童相談所を見る目はますます厳しくなり、国の動向を見ても、ますます虐待対応の司法化が強化され、児童相談所の「相談機能」を衰退させる方向に進んでいるように思えてしまいます。

決して虐待対応をしなくて良いというわけではありません。虐待は防がなければいけない使命だと思っています。しかし、虐待という言葉のみが独り歩きしてしまい、今まで児童相談所が大切にしてきた『子どものための相談』が後回しになっているのではないでしょうか。

『展望』　～マガジンを利用して～

私自身にとっては、修論を書くという作業や大学院に通うということ自体が大きな『余地』となっていました。業務に支障が出ることのないように最大限の努力と調整は行っていましたが、不思議なことに、時間的な余裕は決してないはずなのに、精神的な余裕は今よりもあったと感じています。

『余地』は決して、仕事の中にだけに見つけるものではないと思います。仕事から少し距離を置くことで見えてくるたくさんのことがあります。そのことは仕事にまったく無関係のものではなく、どこかに仕事に繋がる要素を秘めていると私は考えています。

私は、この対人援助学マガジンの中で、私自身の『余地』を言語化するとともに、児童相談所の社会から求められる役割が変化しても、その中で大切にしていきたいと思っていることを示していきたいと考えています。他の連載されている方と比べるとまだまだ未熟者であることは重々承知しています。その中で、少しでもお役に立てることがありましたら、またお読み下さい。なお個人が特定できる情報については、一切除外して書いていきます。今後ともよろしくお願いします。

編集後記

編集長（ダン　シロウ）

いつものように、慌ただしく過ごしている。三月末で、足かけ18年在職した立命館大学大学院　応用人間科学研究科を定年退職になる。

スケジュールを見ていると、その後がゆっくりした生活になるなんてことは全くないので、基本、今と大差ないだろう。久しぶりに、五十才で京都府を早期希望定年退職した頃のことを思い出した。

先日、大学院の創志館で退職記念講演会を開いてもらった。その話の中でこの対人援助学マガジンについて触れた。私にとって、編集長を務めていることは誇りだ。それは仕事ではなく、使命だと思っているからだ。

今の時代に多くの対人援助職の方達が、ご自分の仕事や問題意識について、市民社会にしらしめるお手伝いという社会貢献。一人でも多くの執筆者がこの世界で認知されて、さらにそれぞれの使命を果たしていかれるようにサポートすること。

これは七十才を超えた自分にとって、実に具合の良い生きがいである。八年前、この創刊を企画した時、こんなことを考えていたわけではない。続けて発行する決意はあったが、それが何を意味するものになるかなど、深く考えなかった。それがこんな存在になって今ある。世界は面白い。まだまだ、何か新たなことがあるに違いない。

*

今号からもまた、新たに二名の新連載がある。都合で休載の方もあるが、細く長く、継続のつもりです。幾久しく、どうぞよろしく。

編集員（チバ　アキオ）

★　ある家族が喫茶店に楽しそうに入っていく。男の子は父に肩車をされている。女の子は誰よりも先にお店に向かい、他の家族が後ろについてきているのを振り返り「早くおいで！」と言わんばかり。一番後ろに母がついていく。その後ろには赤いフォルクスワーゲンビートルが止まっている。その店は喫茶店「こんちぇると」。仙台市にある。店内にはそんな家族を描いた油絵が飾られているそうである。その様子をインターネットの食べログ的なもので観た。

今から 40 年前、私は 5 歳。その「こんちぇると」の向かいの家に住んでいた。「こんちぇるとのおじちゃん」によくかわいがってもらった。よくお店に行くと、席にあるコーヒーシュガー（ザラメの砂糖、茶色くてがりがりしている）を食べていたのを覚えている。その時、おじちゃんには子どもさんがおられた。日曜日にいく「こんちぇると」では「お兄ちゃん、まだ 2 階で寝ているから、起こしてきて！」と冗談で話しておられたのを覚えている。母に聞くと、母がいないときには私と妹を預かってくれていたりしたそうだ。

その油絵は、写真をアップした人によると 1970 年代のテイスト！という感じで描写されていた。…ん？！これ、当時の千葉家では？！家族構成も、車種もその色も当時の千葉家。そんな店が 40 年後もある。数年前、父と母は久しぶりに訪れている。当時 2 階で寝ていた息子さんがお店を継いでいるそうだ。この油絵の存在を父母は知らなかったそうである。真相は、千葉家がモデルではないかもしれない。それでも、そうかもしれないと思っただけでも豊かな気持ちになった。あの時、確かに千葉家は仙台にいた。とにかくお店に行かないといけない。また、楽しみができた。

★　マガジン連載中の齋藤清二先生は「東日本・家族応援プロジェクト 2017」報告の講評で「物語は新しくても、大昔のことを語ることができるのです。過去は物語とともに成立するのです」（『はてしない物語』ミヒャエル・エンデ　上田・佐藤訳）という一文を引用された。「対人援助学マガジン」という「社会的装置」は時代も記録する。このマガジンが確実に未来への可能性を広げるための今になっていることを再確認した。40 年前の「油絵」がもたらした 2017 年の千葉に起こった物語。「こんちぇると」にいくことで物語がまた始まる。

大谷たかし（オオタニ　タカシ）

先月の 25 日、立命館大学において対人援助学マガジン編集長である団士郎先生の退職記念シンポジウムがあり、家族で参加した。語られたことから、感じたこと、

考えたことは多いが、一番心に残ったキーワードは「継続」だった。

新商品、流行、新しい資格等々、世の中は「ブーム」と言われるものが次々起きる。しかしながらその多くは、次のブームの波にさらわれ、誰にも気に留められないまま、廃れたり、忘れられたりされていく。景気がいい時に一枚かませてもらったら、ちょっといい思いができるかも…という動機づけで始める営みは、ブームの沈静化とともに、継続への力を失うだろう。

自分自身を省みれば、決して何かを続けることが得意な人間ではない。飽きっぽいし、集中力や根気を欠くし、新奇な刺激に目を奪われたりもする。いわゆる根性論とは、まったく相いれない。そんな中で、数は少ないが、続けてこられたこともある。このマガジンの執筆・編集も、そのひとつである。「継続」するものの背景に、継続のための「仕組み」があるのだとしたら。まもなく 40 歳の区切りを迎える我が身を思い、これまでそのような「仕組み」に支えられてやってこられた幸せを感じるとともに、自分が今いる場所で、小さくとも何かにつながる「仕掛け」を作れたら…そんな気持ちが芽生えてきている。

■ご意見・ご感想■

マガジンに対するご意見ご感想は

danufufu@osk.3web.ne.jp

マガジン編集部

604-0933 京都市中京区山本町４３８

ランブラス二条御幸町４０２　仕事場 D・A・N

対人援助学マガジン

通巻32号

第8巻　第四号

２０１８年０３月１５日発行

http://humanservices.jp/

第33号は2018年6月15日
発刊の予定です。
原稿締切2018年5月25日！

常に新規執筆者を求めていますし、お誘いすることもありますが、執筆依頼はしていません。自身の生活スケジュールに本誌「連載」を持ち、継続的に、自分の専門分野の今日記録を発信したいという方からのエントリーを待っています。

連載誌ですが必ず何回以上と決めているわけではありません。必要な回数（ずっと・・・というのもありです。多くの方達が連載8年目を迎えています）を、書いていただけるよう設定します。ご希望の方、編集長まで執筆企画をお知らせ下さい。

執筆資格は学会員であること。したがって書いていただく方には、対人援助学会への入会をお願いします。まだ登場していない、対人援助領域からの積極的参加を求めます。

対人援助学会事務局

〒603-5877　京都市北区等持院北町 56-1
立命館大学大学院応用人間科学研究科内
TEL:075-465-8375 FAX:075-465-8364

対人援助学会事務担当

入会・退会・変更届

〒540-0021　大阪市中央区大手通 2-4-1
リファレンス内
TEL/FAX 学会専用:06-6910-0103

表紙の言葉

子どもが減って、家族の結束は強くなり、なかなか出ていかない。やっと結婚したと思ったら、揉めて戻った実家の親同士がバトルに。こんなケースをいくつも担当した。その一方で、児童虐待を世論はあおりにあおっている。どちらも日本の現状には違いないが、さて、日本社会の未来を左右するのは、どちらの問題だろう。

少数でも、あってはならないことはその通りだ。一方、数多く見られるからといって、自己責任論で放置して良いわけのない事もある。

家族は面白くて大変だ。

（２０１８／０３／１５）